
アカシックドミネーター

丸尾 ナオキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカシックドミネーター

【Nコード】

N9899W

【作者名】

丸尾 ナオキ

【あらすじ】

新作MMORPG「アカシックドミネーター」リアルマネー。クエスト達成者には賞金まで付けられて一躍その知名度を上げるが、ゲームの中にまさかの集団トリップ!? ゲーム世界で死ねば現実でも死ぬというお約束の展開の中、普通の大学生（ゲーム内では魔法使いの少女）の主人公は果たして生き延びることが出来るのか!? （ファンタジーかつライトなサスペンス風のお話です。短めのストーリーですが、ご感想や誤字脱字の指摘大歓迎です）

オープニングは大事ですね

「デュラハンだ！」

「後ろからとかそんなのアリかよ!？」

水滴と僅かな足音のみが響いて響いていた洞窟に突如として、不気味な轟音が鳴り響く。病的なまでに逞しい体と、不気味な黒い目を響かせる黒毛の馬に股がる、禍々しい装飾の鎧を着込んだ騎士。手に構えるランスは真っ赤に染まっており、これまで数多の侵入者を仕留めて来たという勲章になっていた。全長3mはあろうかと言う巨大な悪魔に立ち向かうのは小さな4人の戦士達。

かち合う金属音、所々に飛び交う火柱。彼らは一步も引くことが無かった、やがて火柱が馬の足元を掠め、僅かにバランスを崩した所を、戦士の剣が彼の者の首を貫く。唸り声を上げながらランスを振り回すが、その腕ももう一人の戦士に斬り落とされる。

「止めだ！」

戦士が首に斬りつけた剣を振り上げもう一度、首に斬りつける。

今度は首が跳ね跳び軽い金属音を鳴らしながら地面を転がりまわる。

「よし！」

「よし、じゃない！ シエル、首を逃がすな！」

「わかってるよ！ フレイムレーザー！」

それまで後方から援護していた、一回り小さい人間の杖からより収束した熱線が放たれる。その光線は転がった首を逃がすことなく捉え、すぐに鉄の兜を赤白く染め上げる。やがて物々しい断末魔が響き渡り、洞窟内に再び静寂が訪れた。

「まったく…… デュラハンは元々首が取れてるもんですよ？」

「ありや、そうだったの？ 恥ずかしい。『止めだー！』なんて」

若い男戦士は笑いながら剣の血を拭く。

隣にいた法衣に身を包んだ男が何やら呪文を唱えると、仲間の擦り傷はみるみる塞がっていく。

「よし！ 特に被害も無いし、再度出発だ！」

地底深くに眠るお宝を求めて、命知らずの4人の冒険者は今日も行く。

陽気な性格のリーダー、戦士YASU。

チーム1の力持ちながら癒し系でもある、獣戦士Pon太。

貴重な回復役でチームのブレイン的存在、僧侶まるちー。

そして、パーティーの可愛い紅一点、魔法少女シエル。

今日も四人は命がけの探索を行っていた。でも、もうこんなの慣れっこだ。みんながこの状況を楽しんでいる。まるで死の淵こそが生いのの充足を満たすと言いたげに。冒険者とはこうでなくてはやってられないのだ。

たった、一人を除いて。

「上からだYASUウーっ!!!」

少女の甲高い絶叫が洞窟に響き渡る。YASUは瞬時に右方に飛びのき、その斬撃をすんでのところでかわす。

長い爪を持った不気味な魔物は、口惜しそうに仕留め損ねた獲物を睨んでいた。

「いてて…… 助かったぜ、シエル」

「今度は上からガーゴイルか！ 向こうも頭使って来てるよ！」

「流石に深層は手強いモンスターが多いですね」

冒険者たちは笑う。強敵を前にして、その状況を楽しむ。

「みんな！ 油断しないで！ 死んだら何にもならないよ！」

一人、少女の悲痛ともいえる声が木霊する。

「怖いのか？ シエル」

「まあ、小さい女の子だし」

「とにかく前衛は任せろ！ シエルは距離を取って後方から援護を！」

人と魔獣の声が反響し、洞窟の中は一転修羅場と化す。

「増援だ！」

「ガーゴイルが2、3……4体!？」

次々に表れては容赦なく侵入者に襲いかかる魔物たち。

「シエルさん！ 2人が引き付けているうちに一網打尽に！」

まるちーの言葉に頷き、少女は魔法の詠唱を始める。

（死なせるか……!）

味方は強い。数の多いガーゴイル相手に互角以上に戦っている。しかし敵もやるもので人数差を利用したヒットアンドアウェイの戦法を取り、互いに決定打を打てずにいた。

戦士だけのパーティーなら長期戦必至だが、こんな時のための魔法使いなのだ。シエルの詠唱が終わりに近づく、それを確認したまるちーが味方に合図を送る。ガーゴイル達が気づいた時には既に手遅れ。自分達は距離を取っていたつもりだったが、実際はその逆。二人の戦士によって効果範囲内まで完璧におびき寄せられていたのだ。

「ファイヤーウォール！」

ガーゴイル達の周りを文字通り炎の壁が取り囲む。壁は次第に狭まって行き、やがてガーゴイル達を包みこむ。

「ギャアアアーツ！」

燃え盛る魔物たちを見て、味方が歓声を上げる。だがシエルは油断することなく、さらに気合を入れて魔力を集中させる。ガーゴイル達は既に動きを止めているが、それでもなお炎は燃え盛るばかりであった。

「シエルさん。もうその辺で十分です。これ以上は魔力の無駄ですよ」

まるちーの声で我に帰ったシエルは魔力を切る。既に魔物の肉体は存在せず、黒焦げた骨が残っているだけであった。脂汗をかいて息を荒らげる少女を見てまるちーは心配そうに声をかけた。

「おい！　また増えたよ！」

間髪いれずに叫んだPon太の剣の先には更なる魔物の群れ。数は10匹… いや、もっといる。

「ここが山場…かな？　シエル、まだ行けるか？」

「大丈夫……！」

飛びかかって来る魔物の先陣に再び二人の戦士が立ち向かう。シエルは今度は一点集中型の魔法の詠唱を始めた。敵がまだ狭い通路にいるうちならこれで一網打尽に出来る。

「くそっ！ 流石にそろそろきついで！」

「シエルは？」

少女の周りに大きな魔法陣が完成し、その拡散と共に味方はその場を跳んで離れる。異常に気付いた魔物たちが一斉にシエルに向かって襲いかかる。

（「俺」だってまだ…… 死にたくねえんだよ！）

魔物の爪が今にもシエルの腕を斬り裂こうとした時、彼女の杖から鋭い閃光が伸びた。

オープニングは大事ですね（後書き）

投稿後3ヶ月以上経ってからのようやくの追記（というか注意事項）

←

- ・この物語は主人公チート物ではありません。
- ・TS要素が含まれますが特にストーリーに影響を及ぼす事はありません。
- ・デスゲーム要素はありません（デス〇ート要素はあるけど）。
- ・キャラクターごとの個性はわざと無くしています。
- ・設定は全く作りこんでいないので、細かいことを気にしたら負けです。
- ・まことに残念ながら、可愛い女の子は登場しません。

まとめ…頭を空っぽにして楽しんでいただければ幸いです。

1話 何となくそのゲームが気になったんです

大学一年の夏。俺は特に何をするでもなく、だらだらとネット三昧を続けていた。趣味と言えればせいぜい読書とゲームくらいだが、バイトも特にやっていない俺には自由に使える金はあまりない。で、無料のネットゲばかりやっているのだが…

「はあゝあ、もうこのゲームも潮時か……」

巷のネットゲはどこも無料無料と言っているが、本当に楽しみたいのなら課金しろと言う所が大半だ。というか最近のはもはや課金前提のゲームバランスになっている気がする。たかだか学生の身分の俺にはちと辛い。

……いや、払えないことも無いんだけどさ。ネットゲなんて長く保ったとしても精々数年程度。据え置きของเกมに比べて面白いかと聞かれると首をかしげてしまうようなものに果たして金をつぎ込んで良いものか。そんな葛藤が常にあるものだ。

結局はいつもほどほどにやって退会して、また新しいのってサイクルになるんだけどね。その時だって何気なく広告に目を通してしまったんだ。

「新世代のネットゲーム『アカシックドミネーター』? ……まあ、いかにも厨臭そうな名前だな。10人協力プレイとか、凄いだろうけどパソコンのスペック的に大丈夫か?」

最近のは名前すら似ているものが多くて混乱することがある。つか、もうちょつと捻ってくれよ製作者。

『本稼働に先駆けて、応募者の中から抽選でβ版をプレイすることが出来ます』って…… 要はテストプレイヤーってことだろ?

まったく、上手い具合に経費削減してますね。まあどうせ暇だし無料だし、一応応募しておきましょう。フリーメールのアドレスだけでいいのなら特に問題なしと。

3日後。

「メール? 『あなたはβ版のプレイヤーに選ばれました』 って、この前のネットゲのテストプレイの奴か。随分早いんだな」

単に応募者が少なかっただけだったりして。まあいいか。

さてさて、Webサイトからゲームをダウンロードし、ゲーム開始。

まずはキャラ登録。

性別は…… 女で行こう。ネカマ楽しいもんね。名前はシエルっと。女キャラを作るときはいつもこの名前だ。単に語感がいいだけで特に深い意味は無い。

次は職業。

近距離型のファイター。遠距離型のアーチャー。攻撃魔法のソーサラー。回復魔法のプリースト。ここら辺は鉄板か。後はシーフ、ドクター、トレーダー、アルケミスト、クリエイター、ファーマー…… なんだこりゃ。無駄に職業多くないか?

ドラ○エとかF○みたいにいっぱい職業作りたかったんだろうが、

明らかに地雷臭がしてきたぞ。なんか色々固有スキルとかあるみたいだけど。大体回復役はプリーストがいるのにドクターとかいらないだろ。せめてどっちにまよろよ。

うーん。どうせテストプレイなんだろうし、適当にソーサラーで女の子だしな。

アバターは緑髪のおかっぱ頭に、いかにも魔女っぽい帽子と服、そして古びた木の杖を持った少女だ。俺は好みだけど逆にありきたりすぎる気もするなあ。

ゲーム内容かというと、これもよくある話でまずは冒険者ギルドに登録し、各地のクエストをどんどんこなしていくといったものだ。ゲーム画面は日本人好みの2D。戦闘にはアクション要素があつて、位置取りも重要で戦略的要素が高く、なかなか面白い…のだが、結構難易度が高い。

始めてから2時間。既に3回死んでいる。どうやらパーティーを組むこと前提のバランスになっているようだ。単に調整できてないだけかもしれないが。

早くもソロプレイに限界を感じた俺は適当なパーティーを探すことにした。これがネトゲの醍醐味であり、最も煩わしいところなんだよな。町に戻ってみると早くもパーティー募集のチャットが飛び交っていた。アクション要素が強いとはいえ、感想はみんな同じか。抽選で選んでる割には結構人はいるみたいだな。

どれどれ、お客様の中に私とパーティーを組んでくれる方はいらっしゃいませんか？ 出来ればファイターの方ー

うん。なんだかんだで楽しんでいたんだよ。この時は。

2話 結構面白かったんですよ

まるちー「すまん、俺は明日早いからそろそろ抜けるわー」

YASU「おう、お疲れー」

シエル「回復役が抜けるときついね。今日は解散にする？」

Pon太「うん、そうしょー」

β版の稼働から一週間。俺達は主に4人でパーティーを組んでいた。まだ少ししかやっていないがパーティーバランスは割といいと思う。

まるちーはプリーストで貴重な回復役なのだが、リアル社会人っぽく結構早い時間に抜けることが多い。

YASUはリーダー格のファイター。ネット上だというのに細かい気配りが出来る人で、最初に俺をパーティーに誘ってくれたのもこの人だ。

Pon太も同じくファイターなのだが、彼(女?)は何故かアバターが獣人になっている。何か弄ったとかではなく最初からそうだったらしい。どうやらこのゲームでは初期アバターはランダムに決定されるみたいだ。今のところ変更できる機能はない。おそらく正式稼働版で課金することで色々弄れるようになるってところだろう。最後に、画面上は紅一点のソーサラー、シエル。つまり俺。中身は男って…… 薄々みんな勘付いてるだろーな。

YASU「じゃあ自分も今日は抜けますね。それでは」

Pon太「シエルさんはどうする？」

シエル「私はしばらく個人ショップを見て回ります」

個人ショップというのは、他のプレイヤーに自分の武器や道具を自由に売ることのできる機能だ。時々クエスト用の重要アイテムまで売ってたりするので意外と侮れない。

Pon太「そうかー。僕の友達が新しく始めたんで、今度暇があったらこっちのパーティーにも来てくれないかな？」

シエル「まだ募集やってたんですか？ テストプレイみたいなものなのに」

Pon太「そう言えばそうだよー 抽選って言ってる割にはどなたでもウェルカムって感じ」

シエル「運営のことですからよく分かりませんね」

Pon太「シエルさんは、本稼働になっても続けるつもり？」

シエル「課金しないと詰まるといったことが無い限りは」

Pon太「実はβ版からのプレイヤーは本稼働時に色々特典があるらしいよ。特殊クエストとかもあるみたい」

シエル「それは初耳ですね」

Pon太「僕もまた聞きただけなんだけどね。それじゃ、仲間

から呼び出ししかかってるから。時間あったらよろしく!」

シエル「はい、それじゃまた」

テストプレイの方には色々特典ね…… まあ別にそこまで珍しいことでもないだろうけど。初めて聞いた情報ではある。攻略サイトや某巨大掲示板もよくチェックしてるけど見たこと無かったし。今夜中にでも出るのかな?

それからしばらく俺は個人ショップを見て回っていた。その中でちょうどクエスト達成に必要なアイテムである精霊石がまとめ売りされていたので、それを見て悩んでいた。

くそ、俺が欲しいのは後8個なんだ。20個でまとめ売りなんて残酷すぎる。精霊石が取れるダンジョンは魔法耐性が高い敵ばかりだから、単騎だと余裕で全滅の恐れがある。個人のクエストのために他の人を連れ回すのは申し訳ないし。

5000G…… 高いなあ。これは完全に俺達ソーサラーの足元を見ていやがる。というか金が足りない。あと943G足りない。今から単騎駆けしてくるか? でも一人でクリアできる程度のダンジョンじゃ、金溜めんのにどれだけ時間がかかることやら…… ちくしょ

ん? おっと、チャットコールだ。

Gilly「ちょっといいかな? 今、時間ある?」

シエル「はい、大丈夫ですけど。どうしました?」

Gillyさん……? 見た所職業はシーフか、珍しいな。

早いうちに出来た攻略サイトを色々見て回っているが、このゲームは鉄板の職業、つまりファイター、アーチャー、ソーサラー、プリーストの4職以外は初心者は手を出さない方が無難とまで書かれている。

理由は戦闘能力がこの4種に比べて圧倒的に低いこと。初期段階の固有スキルは見たところ面白そうなのが揃っているのだが、それをまともに使いこなせるレベルになるまでが大変らしい。前半はともかく、中盤以降は戦闘面で完全にお荷物になるため、転職システムが後に実装されるであろう……。という期待まで書いてある始末。シーフも素早さは高いが攻撃力が低過ぎて敵が倒せない、との悲痛な叫びが掲示板に書かれてあった。実際、ゲーム上でもこの鉄板4種以外の職業はほとんど見かけない。

Gilly「ちょっと協力してほしいクエストがあるんだけど。いいかな？」

シエル「私に出来ることでしたら、内容にもよりますけど」

Gilly「これなんだけど」

そうやって彼が提示したクエストを見て俺は自分の目を疑った。だが、この時のGillyさんとの出会いが後の俺の運命を決定づけたと言っても過言ではない。

3話 それはある意味運命の出会いでした

【クエスト】

『サンマイト遺跡深層（地下50F）にある「ミュールの赤石」をゲットせよ!』

（攻略のヒント）

「ミュールの赤石」の前には強力なボス、ワイバーンが立ちはだかる。炎耐性の装備は必須だろう。また40Fに続いて状態異常攻撃を仕掛けてくる敵も多いので要注意だ!

シエル「いや、無理ですってこれ! 私全然レベル足りてませんか!」

サンマイト遺跡というのは割と序盤からお世話になるダンジョンだ。俺も何度も通ったことがある。遺跡自体は果てしなく下の階層まで続いているらしく、レベルⅡ攻略出来る階層というのが今のところ知られている大体のバランスである。

ちなみに今の俺のレベルは16。この前パーティー4人の力を合わせて何とか20Fのボスを倒して、みんなで画面越しに祝杯をあげたばかりだ。うん、50Fとか普通に考えて無理。

そう言うGillyさんのレベルは……31。俺よりはやりこんでいるみたいだが、それでも全然足りない。ましてや戦闘能力の低いシーフでは。むしろよくここまで育てたものだ。

シエル「他にレベル高い方がパーティーにいらっしゃるんですか？」

Gilly「いや、俺一人。ちょうど単騎のソーサラーを探してたところ」

シエル「どう考えてもクリアできる気がしないんですけど。遺跡50F制覇とか、掲示板で普通に自慢出来るレベルですよ？」

Gilly「まあ聞けよ。まともにはクリアしないし、ワイバーンとやらと戦う必要もない」

彼の戦略はこうだ。シーフの特殊スキル「戦闘回避」を駆使して、ミュールの赤石だけ取って帰る…… というもの。なるほど、確かにクリア条件は「赤石の獲得」だから、無理してボスと戦う必要も無いということだ。彼はこの方法を駆使して既に40Fまでは単騎でクリアしたらしい。クエスト達成でボーナス経験値を獲得できるから、彼のレベルはそれで上がったものだろう。すげえ、本当の話ならもはやプロの領域。ボス回避なんて誰が考え付くんだ。

シエル「それに何で私が必要なんですか？」

Gilly「流石に50Fともなってくると、戦闘回避だけではきつくてな。攪乱要因を探していたところ」

シエル「攪乱、ですか」

Gilly「ああ、まだ稼働したてだからレベル50近い奴なんて

ほとんどいないし」

シエル「いないことはないでしょうけど」

Gilly「シーフは戦闘でははっきり言って足手まといにしかないからな。パーティーに加えてくれる奴がいらないんだよ」

確かに、シーフは攻撃力低いし、他に戦闘に役に立つような能力は見つかっていない。レベル30まで上げた彼の言の限りではおそらく存在すらないのだろう。初期の特殊能力『鍵開け』は一見魅力的だが、鍵のかかった宝箱はあまり見かけないし、入っている物も（序盤のダンジョンでは）そこまで大した代物ではない。

なので掲示板でもボロクソに言われていたのだが……なるほど、単騎での低レベル攻略向けの職業だったのか。パイオニアマジパネエツす。

シエル「でも攪乱って……できますかね？」

Gilly「そのレベルだともう広範囲魔法は覚えてるだろう？
ファイヤウォール だったら大丈夫。作戦はちゃんと練ってある。なあに、失敗しても経験値がちょっと減るだけ。成功したら互いにガッポリだ。悪くない話だろ？」

流石は盗賊。口も上手い。このゲームの序盤はパーティーを組んでないとほとんど死にゲーとまで言われるバランスだったため、いまさらクエスト失敗なんて気にもならないし。

シエル「わかりました。協力しましょう。今からでも行くんですか？」

Gilly「おう。助かったぜ！ そんな準備が出来たらすぐにも遺跡の前に来てくれ。それとアイテム欄は可能な限り空けておいてくれよ。回復アイテムもいらないぞ。どうせ敵の攻撃くらったら即死だしな！」

なんと物騒な。だが、これはこれで楽しくなってきたぞ。

俺の頭の中で若かりし頃の記憶が蘇って来る。小さい頃はレベル上げとか面倒くさくて、とにかく無闇に突撃していたものだ。低レベルでのギリギリのボス戦。あれこそが本来のRPGの楽しみではなかったろうか。最近はやっと詰まると攻略サイトに頼ったりして…… 今思えば本当に損してるよなあ。先が見えない展開を開拓するのがゲームの楽しみだろうに。ネタバレされると面白さは半減、いやそれ以下だ。

だからこそ、彼の話に乗ってみたくなったのだ。まだ日本中の誰もが知らない作戦。提案した本人も知らない成功率。少なくとも何度かは失敗しているみたいだし。これから二人で新しい遊びを開拓してくのだ。

くうく　たまらない。男の子だねえ！（アバターは少女だけど）
これぞRPG！　これぞゲーム！　アイテム整理をしながら俺の
テンションはかなり上がっていた。

ほんと一人暮らしで良かったと思う。

3話 それはある意味運命の出会いでした（後書き）

一話当たりの字数の乱れは自重しません

4話 でも同時に世の中の怖さを知りました（前書き）

文字数が前回の倍だなんてよくある話です

4話 でも同時に世の中の怖さを知りました

俺は不要アイテムを売っぱらい、彼の言った通り可能な限りアイテム欄を空けて来た。ソーサラーは元々あまり荷物持てないけど。もう午前1時半過ぎだと言うのに、遺跡の前には結構人がいた。レベル30越えの人は結構いるんだな。40過ぎもちよくちよく見る。いやゝみんないい感じに廃人ですな。

Harida (Lv. 42) 「今から40Fに挑むのでパーティー募集中です」

うっへ、どんどん周りに人が集まってる。このゲームのパーティーの最大人数は10人だけど、当初から危惧されていた通りパソコンや通信のスペックが追いつかない人が多いようだ。アクション要素があるだけに戦闘時のラグや回線落ちはかなり痛い。だから普通はみんな4〜6人くらいで組んでいる。

ばる (Lv. 38) 「今日こそクリア目指しましょう！」

レーベン (Lv. 40) 「石化回復アイテムたっぷり持って来ましたよ」

うえー 石化とかあのかよ。みんなレベル40前後なのにクリア出来てないってどんだけ。あれを本当に単騎で行けんのか？

そう言うGillyさんはと…いたいた。

Gilly 「よしよし。来てくれたな。アイテム欄はちゃんと空けて来たか？」

シエル「はい、言われたとおりに限界まで減らしました。回復一つ持ってません。これって深層アイテムを回収するためですか？」

Gilly「いや、悪いがダンジョン内のアイテムは基本全無視で頼む。モンスターに気づかれるし、40F以降はアイテム自体がトラップって時もあるからだ。俺は前々回それでやられた」

シエル「ということは、目標は例の赤石だけですか？」

Gilly「ああ、詳しい話は中でしょう」

サンマイト遺跡は10F毎のフロアボスを倒すと、近道が出来るようになっていく。つまり20Fのボスを倒したら、一度町に戻っても次は21Fからチャレンジできるとのことだ。でも次の近道が使えるのは30Fのボスを倒すまで。一回の挑戦ごとに10フロアを突破する必要がある。低層の敵は面倒くさいだけだし、当然ともいえる仕様である。

……うわー 本当に40階までショートカット出来ちゃったよ。マジでここまでクリアしたんだなこの人。

Gilly「よし、ここから先は敵と戦おうなんて思っちゃいけない」

シエル「私は4人がかりで20Fがやっとでしたからね」

Gilly「パーティーは？」

シエル「ファイター2人にプリースト、それと私。レベルはみんな同じくらいです」

Gilly「まあ普通にプレイしたらそんなもんだろうな。俺がシ
ーフの能力に気づいたのもたまたまだし」

シエル「ところでアイテム欄を空けたのは何のためですか？」

Gilly「これを持ってほしいからさ」

『Gillyはシエルに「煙幕花火」を渡した!』

なにになに？ これを使うことで一定時間相手の足止めが可能です、
かなるほど、戦闘回避にはもってこいのアイテムだ。だけどこん
なアイテム見たこと無いぞ。店はおろか掲示板にも攻略サイトにも
載っていない。

Gilly「これは今のところ超レアアイテムだ。悪いが攻略サイ
トとかにも書かないでくれ」

シエル「何ですか？」

Gilly「実はこれ合成で作れるアイテムなんだが、これを作っ
て売ってボロ稼ぎしている奴がいてさ。そいつから口止めされてい
るんだ」

そういえば職業にクリエイターとかもあったな。自分と同じこと
をやられて、商売敵を作るのを防ぐためか。せこいなー。

シエル「でも、入る前に渡した方がもっと数持てるんじゃないんで
すか？」

Gilly「実は前にこれを持ち逃げされたことがあってだな。あの時は俺もこっぴどく怒られたもんだ」

ネットゲだと言うのに…… 恐ろしや。何もネットの世界で盗みなんてしなくても… リアル人生よりかはよっぽどイージーなんだし。

Gilly「その後、アサシンスーツ渡されてプレイヤーキラーさせられたからな」

シエル「うわあ……」

このゲームはダンジョン内部ならばプレイヤーキラー（味方殺し）行為も可能だ。ただし一回でもやるとプレイヤーネームが真っ赤に表示され、おまけに掲示板にも危険人物リストとして晒されるので、ほとんどみんなやらない。メリットは他プレイヤーからアイテムを奪えることくらい。とてもじゃないがリターンに対してリスクが大きすぎる。

で、このアサシンスーツ。これも攻略サイトによるとこれも入手を確認したのが数人しかないほどの超激レアアイテムらしい。装備時に自分のプレイヤーネームと職業を偽装することができ、PK行為をしても名前が赤く染まらないというものだ。こんなもの作るなんてPK行為を推奨でもしてんのか？ 運営よ。

Gilly「それと隠し効果か単なるバグかは解からないが、偽装した名前と同一のプレイヤーがいた時にそいつに罪を被せることが出来る。俺はパクった奴の名前を使って高レベルの味方を後ろから刈りまくって、そいつをIDと個人情報晒しまで追い込んだ」

怖え。マジで怖え。ネットゲ舐めてました、すみません。

Gilly「だからお前もそんなことは無いようにしてくれよ？
こっちだって好きでやったわけじゃないんだからな？　すぐく後味
悪かったんだから」

シエル「その話聞いてやる人なんていませんよ……」

Gilly「もちろんこの話も他言無用だ」

シエル「当然です」

まさか虚構の世界で世の中の恐ろしさを知ることになるうとは。
この人には大人しく付いていこう。俺は心の中で静かに誓った。敵
に回すと恐ろしいが、味方だと頼もしい人だ。多分。

4話 でも同時に世の中の怖さを知りました（後書き）

「煙幕花火」。知っている人は知っているチートアイテムの代名詞。私も昔よくお世話になりました。「アサシンスーツ」は今後の展開で重要になってきます。しかしこんなアイテム作るなんてほんと何考えてんだ運営（笑）

5話 低レベル攻略。それは男のロマン。(前書き)

・シエル(♀)

職業…ソーサラー(ソーサレス)

L v. 16 HP 217 SP 252

・Gilly(♂)

職業…シーフ

L v. 31 HP 778 SP 87

サンマイト遺跡42Fに生息するモンスターの平均HP…1000
前後

5話 低レベル攻略。それは男のロマン。

サンマイト遺跡42F―

幸いにして未だに敵との交戦を全て避けている。低レベルのソーサラーという足手まといがいるというのにGillyさんのルート取りは完全に仕上がっていた。

41Fで煙幕花火を2つ使用。出来れば1つで済ませたかったと言っていたので少し申し訳ない。予定のうちには入っていたようだが。これからは俺もさらに慎重に移動していかなければならない。

ちなみ装備も一部変えられた。まず脚装備を「地下足袋」に。魔女っ子が地下足袋で。防御力も低い序盤も序盤の装備だが、どうやら隠し効果で敵に気づかれにくくなるらしい。一体どうやって気づいたんだ。

そしてアクセサリ装備で「ぼってんマスク」。特に能力値の変化は見当たらず、攻略サイトにも単なるアバター用の装飾装備とされている。だが彼によると、これも敵に気づかれにくくなる特殊効果があるらしい。本当かよ。だからどうやって知ったんだ。Gillyさんでもしかして製作側の人間ですか？

Gilly「よし、ここが第一の難関だ」

先を行くGillyさんが足を止めた先には狭い通路。その先にはメデューサっぽいモンスターが寝ている。こちらが下手に近づかない限り目を覚まさないようだが。

Gilly「ここは煙幕花火を使っても、先の方まで届かないからな。道が狭いから相手が『詰まって』強行突破も出来ないし。前回

までは最低でも3つ必要だった」

シエル「今回の算段は？」

G i l l y「ロングレンジLフレイムレーザーがあるだろ？ レベル15で覚えるやつ。あれを通路にぶちかましてくれ」

シエル「出来ますけど、その後は？」

G i l l y「すぐに死角の壁に張り付いてギリギリまでやり過ぎす。気づかれたら俺が煙幕花火を使って強行突破だ。奥にいる奴を限界までおびき寄せるようにしたい」

なーる。Lフレイムレーザーは詠唱時間が長い割に威力が低いので正直扱いづらかったのだが…… そんな使い方もあるのね。

G i l l y「詠唱が近過ぎても敵は起きるからな…… えっと、この位置だ。ここからならギリギリ奥まで届く」

自分の使用キャラでもないのに何でここまで把握してるんだろうこの人。相当調べこんでいるようだ。

G i l l y「ようし、やってくれ！」

シエル「了解！ Lフレイムレーザー！」

14！ 9！ 13！ 12！ 14！ 16！

悲しいくらいに非力なダメージ値が画面を埋め尽くす。 うん、
まともに戦ったらまず勝てません！ 無理です！

目を覚ましたモンスター達が一斉に通路の先の部屋を目がけて飛び込んでくる、部屋の真ん中まで進んで、壁に張り付いている人間を見つけて襲いかかろうとした瞬間！

Gilly「行くぞ！」

画面一杯に白いスモークが覆いかぶさる。一定時間とはいえ敵も味方も判別が付かなくなる代物だ。俺も感覚を頼りにキャラを動かして通路を進んで行く。途中何度か引っかけりを感じたが、深く考えないようにしよう。狭く長い通路の先は…… 階段！

Gilly「こいつは重畳だ。次もよろしく頼むぜ、相棒！」

シエル「うっす！」

本来ならば次のエリアに進む階段の前には扉があり、敵を全滅させないと開かない、もしくは敵のどれかが鍵を落とす仕組みになっているのだが、そこはシーフの特殊スキル「熟練鍵開け」で突破する。Gilly先輩マジパネェっす。

なんだろう、凄い一体感を感じる。今俺達に風が吹いている。確かに。

来てるぜ、コイツは。

画面移動のローディングの合間に（現実世界の）俺は手元のペットボトルのお茶を一口含む。キャ○ツ太郎を箸でつまんで口に放り込み、手汗をウェットティッシュで拭いた。

「キてるぜ……」

暗い部屋の中で低く、重く、一言つぶやく。
一人暮らしじゃないとあやうく家族に心配されるところであった。

5話 低レベル攻略。それは男のロマン。(後書き)

今更気づきましたが、女性はソーサラーではなくソーサレスですね
orz

まあ、中身は男なんだしこまけえことはいいんだよ！(汗)

6話 風…… なんだろう吹いている確実に……（前書き）

・サイクロンライノー（サイっぽいの） HP 2500

（備考）……とにかく固くて手強いモンスターだ。奴の突撃はガードすらも無効化する。しかし遠距離の攻撃手段を持たないので、上手く距離を取って戦えば安全に倒せる。氷属性が弱点なので魔法で一網打尽にするのもいいぞ！

・ヴェクシーイーグル（鳥っぽいの） HP 1100

（備考）……攻撃範囲の広い衝撃波が非常に厄介。威力自体は低いが足止めされるので、ひるんだ隙に他のモンスターにということにならないように速攻で倒したい。幸いにして防御力や魔法耐性は低い。アーチャーやソーサラーはこいつを優先的に攻撃するといいぞ！

6話 風…… なんだろう吹いている確実に……

ふと思った。

Gillyさんの名前ってギリースーツから来てるんじゃないだろうか。その内「ステンバイ……」とか言いだしそうで怖い。いや、少なくとも俺は期待している。それくらいの鮮やかなスニーキングっぷりだったのだ。蛇もびっくりである。

そんなこんなでサンマイト遺跡49F。

Gilly「これが最後の難関だ」

うーむ、今度はそう来たか。

だだっ広い部屋にモンスターがぎゅうぎゅう詰め。落ち着いて考えると、かなりへんてこりんと言うか、シユールというか……とにかく現実的にはあり得ない構図だ。ゲームとはいえモンスターたちもこんな部屋で雑魚寝なんて辛かろうに。

普通に来るんだったら、この部屋は敵味方入り乱れたカオスな戦場と化するだろう。しかし今は事情が違う。俺達二人を単なる一兵卒とするならば、目の前には大量の呂布がいるのだ。まさしく三国逆無双状態。

シエル「これは結構先まで続いているんですか？」

Gilly「ああ、それとスモークかけても広範囲攻撃を狙ってくる奴がいてだな。左から二番目の鳥みたいなやつ。それを何とかして確実に事を進めたい」

あの鳥の魔物が…… 先にもいると考えるとよさそうだ。相手に攻撃させずに、常に先手を打って煙幕で攪乱していくべきか。攻撃当たると即死だし。

今回の探索でお世話になりっぱなしの煙幕花火はというと…… 実は結構残っている。俺が持つてる分でも後8個。残りはこの階合わせて2フロアだけだし。もしかして結構余る？ それともここから一気に使う羽目になるのか。

Gillyさんとの打ち合わせが始まる。俺がファイヤーウォール^{ワイド}を覚えていないことに気づいて、少し焦っていたようだが、すぐさま作戦を修正。

こう来て、こう動いて、こうやって…… おいおい、いけるのかこれ……？

Gilly「焦って操作ミスするなよ。それじゃ行くぞ！」

まずは俺がぶつとい顎を持ったサイのようなモンスターに向けてファイヤーウォールを放つ。ダメージはもう見るに耐えがたい。これで3体起きるが、俺自身は入口の死角にすぐに移動するために、相手は一瞬姿を見失う。

それと同時にGillyさんがモンスターの体で行く手を塞ぐ所まで忍び足で切り込む。サイ達はそっちに気を取られて襲いかかるうとする。こいつらは格闘しかできないので、ある程度接近させた所でわざとGillyさんが物音を立てて周囲のモンスターを起す。そこへ煙幕花火。

画面上のサイのいたスペースがちょうど空く。そして後ろから煙幕をかすめながら俺がLフレームレーザーを撃つ。煙幕から逸れた

敵は今度は俺の方に向かって、スモークのかかっている画面上方を移動しようとする。そこへ煙幕の中からGillyさんが一発。漏れなく敵をスモークの中に閉じ込める。

俺が再びフレイムレーザーを撃ち、ダメージ値が出た場所を頼りに俺達は魔物たちの間をすり抜ける。以下その繰り返し。スモークの中では魔法の詠唱が出来ないので、毎回ギリギリ一人分スペースを空けて煙幕を張ってくれる。流石は煙幕花火全一のGilly先生だ。

そして魔物の群れ、というか壁を突破する。翼くんばりの全員抜きだ。

俺が階段へと続く扉に着いた時には既にGillyさんが鍵開けを行っていた。まだかまだかと待つうちに煙幕が途切れ、あり得ない数のモンスターが後ろから迫ってくる。

そこへハチリ、と勝利の音が鳴り響く。鳥が何かブレスみたいなのを吐いてきたけど、こちらを捉える寸前で画面は切り替わる。

ディスプレイにLoading……と表示された瞬間、俺はリアルにガッツポーズをして「いよっしゃあ！」と叫んでいた。……壁ドンされた。隣の部屋の人ごめんなさい。

しかし、もう手汗がヤバイ。心臓の動悸もいい意味でヤバイ。脳汁ダッラダラ。

来た…… 来たぞー！ 遺跡地下50F！ レベル16でクリア出来るとかマジありえねえ！

画面にサンマイト遺跡50Fと表示された時に、俺は今自分が前人未到の頂にいることを実感する。……おしっ！ こうなったら、

最後まで油断せず、何が何でもクリアするぞ！

Gilly「よくやった。この階ははっきり言って楽勝だ。後は俺に任せろ」

シエル「本当ですか？ お茶飲んでてもいいですか？」

Gilly「ああ、そこでゆっくりしていてくれ」

冗談半分で言ったのに…… Gillyあんちゃんマジでええ人や。

Gilly「じゃあ、行ってくる。くれぐれも変な物音は立てないでくれよ」

シエル「行ってらっしゃい。お氣をつけて」

俺は椅子にだらしくもたれかかる。ペットボトルを祝杯の如く掲げ、とっておきの酢こんぶを開けて夜中に一人祝う。明日、じゃなかった今夜のパーティのみんなの反応が楽しみだ。

Gillyさん大丈夫かなー 確かに下一ヶタ0の階層はボス部屋となっていて階段を上った先の何も無い小部屋とボスのいる大部屋があるだけだ。10Fと20Fはそうだった。攻略サイトに載っている分では30Fも同様らしい。

と、言うことは50階も同様って言うのも可能性として十分。ボスの隣を上手くすり抜けて宝を取るだけだと考えれば、これまでのダンジョン攻略より遥かに簡単だろう。そうなると完全にボスのワイバーンさんが涙目だな。まともに戦ったらどれだけ苦戦することやら。

Gilly「終わったぞ、さあ帰ろう」

シエル「お疲れ様です。ってあれ？ 何で今来た道を？」

Gilly「何言ってるんだよ。帰るまでがクエストだぞ」

シエル「だってボス倒したら、自動的に町まで…」

Gilly「倒していないからな」

……冗談きついですが、兄貴。

7話　なんだかすごいことになっちゃったぞ

サンマイト遺跡40F。

シエル「死ぬかと思いました……」

Gilly「お疲れさん！　赤石を遺跡の前の兵士に渡せばクエスト達成だ！」

煙幕花火の数はギリギリだった。むしろちょっと足りなかった。足りない部分は勇気で補い、俺達は今来た道に戻り計20階を走破したのだ。ボス戦回避できるからシーフって楽だな、なんて少しでも思っでごめんなさい。非常に心臓に悪い1時間でした。

シエル「道に戻るとか最初に言ってくださいよ……」

Gilly「言わなかったっけ？」

シエル「ログ見てください」

Gilly「まあまあ結果オーライと言うことで」

俺達は40Fからショートカットを使い、遺跡の入り口まで難なく戻る。「ミュールの赤石」を兵士に手渡すとクエスト達成の文字が俺の画面にも流れる。

何より経験値ボーナスがすごい。ノーダメージボーナス、ノーミスポーナス……　こんなの取れるの最初のダンジョンくらいだよ。なんだよノーキルボーナスって、聞いたこと無いぞ。誰も気づかな

いし、やろうとしないっつーの。

……うわあ、レベルが22まで上がってやんの。ナンテコッタイ。新しいクエストもいくつか開放。けどしばらくはお世話にならないそうさ。

Gilly「流石にパーフェクツスニーキングボーナスはきつかったか。これからまた戦略を練り直さんとなあ」

要は魔物に一匹も気づかれずにつて奴ですか。でもこの人だったらやりかねない。今回も俺が大分足引っ張っていた感じだし。

Gilly「ほれ、報酬の半分だ。煙幕花火の分をしょっぱかせて貰ってるけどな」

『Gillyはシエルに20万Gを渡した!』

半端ないな。今までの総獲得Gを余裕でぶちぎってるし。確かクエスト報酬は50万Gだった気がするけど、俺は実際この人に便乗しただけだし、これだけ貰えるだけでも僥倖だ。

一度限りのクエストも、クリアしていないメンバーがいればそれに便乗して参加することが出来る。まあ高いレベルになるとみんなでクリアしないと進めないから、新しく始めた人用の救済システムだと思っていたのだが。この分だと、これからも遺跡40〜50階層にはお世話になるだろうな。結構先の話になるけど。

Gilly「じゃあ、俺はこの辺で。また面白そうなクエスト見つけたら誘うよ」

シエル「よろしくお願いします! 今日には本当にお世話になりました」

た！」

Gilly「おう、煙幕花火の事は内緒にしてくれよ。んじゃまたな」

そう言っただけはそのままログアウトする。俺はしばらくの間、キ―ボードから手を離し心地よい脱力感に身を委ねていた。……あ、さっきの人たちだ。

Harida「ドラゴナイトは計算外だったな」

レーベン「ボスだけいきなり火属性とか、製作者ドSすぎる……」

夕風「途中までは状態異常攻撃の敵がメインだったんでしょ？」

櫛坊主「ドラゴナイトは魔法がほとんど聞かねえんだよ。ファイターの数がいないと無理」

レーベン「雑魚にはソーサラー必須だけど、ボス戦になると途端に空気になったな」

れんちえふ「つかアーチャーも空気じゃね？」

櫛坊主「いや雑魚戦には間違いなくいるだろJK」

夕風「今から攻略サイトに書きこんできますノシ」

櫛坊主「編集員乙」

レーベン「先駆者は大変だぜまったく」

Harida「40Fの壁は厚いな…… いよいよ10人協力プレイを開放する時が来たか……」

ぱる「ADSLの俺に酷な事言わないでくれ……（・ω・）」

……ほんと、凄いいことやっちゃたんだ俺ら。たかがゲームの世界だって？ 現実にも生きていてもこんな充実感なかなかねえよ。

とにかく今日は疲れた。夜中3時半か…… 目も痛いもう寝よう。

俺はログアウトしてパソコンの電源を落としそのまま眠りにつく。

あ、歯磨かなきゃ…… いいや、面倒くさい。

とにかく今日も平和な就寝を。

8話　そういうことに興味はなかったんだけど

8月下旬。

世間では小中学生が夏休みの宿題の処理に追われひーこらしているというのに、俺は大学の長い長い夏休みを満喫していた。

他者からの目なんて気にしません！　半ニート生活最高！

一応大学には毎日通っている。

学食と日中の暑さを乗り切るために図書館のクーラーを利用するためだ。

授業の無い日の学食は静かで涼しくて、下手な飲食店よりも居心地がいい。ちよくちよくサークルの集まりかなんかで来ているリア充グループを見かけるが、そんなの気にならないし、向こうも特に気にしないだろう。

俺は安くてそれなりに栄養バランスの整った定食をのんびりと食べていた。量は少し少ないけど、運動も特にしていないしちようどいいくらいだろう。数か月の間、一日これ二食で過ごしたら4キロも痩せた。体調もいいし、食生活って大事だな。

「よう高瀬、盆前以来だな」

目の前の席に座って来たのは、同じ学科の伊藤だ。俺にだってリア友くらいいる。洒落っ気のない髪型に服装、顔もふつー。つまりは俺と同じ人種だ。違うのはこいつの方が視力がいいということぐらいだ。眼鏡なしで日常を過ごせるなんて羨ましい限りだぜ。

それと高瀬ってのは俺の名前。高瀬悠一。19歳。それ以外に説明することが無い。

「夏休み何やってるー？」

「げーむ。ねとげ」

「つくづく俺とお前は同類だな、高瀬」

似た者同士、考えてることは同じってことですかい。伊藤はさらにやけて、テーブル越しに顔を少し近づける。

「なあ、『アカシックスドミネーター』ってゲーム知ってるか？」

「今やってる」

「さすがだな。……もしかして、お前も賞金狙ってたとかする？」

「賞金？ 初耳だな」

出かける前にも一応公式サイトとか攻略掲示板とかチェックして来たんだけどな。そんな事は露にも……今朝は、昨日Pon太さんが言っていたβ版からのプレイヤーに与えられる特典って話題で持ち切りになっていくくらいだ。

「ちょうど今日の正午に出た情報だ。β版のプレイヤー募集は今日の夕方5時で打ち切り。んで、本稼働に先駆けて明日から2週間の間に現プレイヤー達に特殊クエストが与えられるらしい。その達成者に……」

「賞金ね…… どうせゲーム内でだろ？」

「リアルマネーらしいぜ」

「ほんとかよ。どこ情報？」

「信用できる筋ってしか書かれてないから、確かじゃないんだけどさ。さっきから掲示板で滅茶苦茶盛り上がってるぜ。今サーバーが重すぎてまともにプレイできないから、学食来たところなんだ」

うつそ臭いなあ。それにみんな釣られ過ぎ。日本人って本当にこういうのに弱いよなあ。普通に楽しんでプレイしている人たちに迷惑かけないでほしいぜまったく。

「なんか最後に見た時は登録者が3万越え行きそうって言われてたぜ」

「今夜は入るの止めようかな…… お前は狙ってるの？ 賞金」

「もちろん、折角のチャンスだからな。言っとくけど賞金目当てで始めたわけじゃないぜ？ 始めたの5日前だし。誰だって好きなことで金貰えるなら狙ってみたくなっちゃうだろ？」

「俺はのんびりやらせてもらうよ。上には上がいるんだし。無駄な消耗はしたくないよ」

昨日のGillyさんのことを思い出していた。あの人は狙ってくだらうか、賞金とやらを。実際どんなクエストが出るかわからないけど、あれだけ上手いプレイヤーを見てしまったんだ。上の世界を除いてしまったんだ。俺の様な一般人にはとても届くレベルじゃないよ。

「何にせよ詳細は明日の午後発表だからな。暇だったら協力してくれよ」

「まあクエストの内容次第だな」

「さんきゅ！ あ、それじゃCNキャラクターネーム教えてくれ」

「シエルだ。カタカナ3文字。職業はソーサラーでレベルは今んとこ22」

「シエルだな。俺のCNは如月 由真だ。漢字は検索してすぐわかる。職業はアーチャー。レベル25だ。見つけられた声かけてくれよ！」

「おう、んじゃ後で」

そう言うのと、伊藤はとっとと席を立ち食器を下げに行く。…あれ？ 俺より後に食い始めたんじゃなかったっけ…… まあいいか。

如月 由真ね…… はて、どこかで聞いたことある名前だな。

その後、家に帰ってその名前を検索してみる。

……今断然注目！ の大型新人AV女優の名前だった。おまけに年が一緒だったのが、余計に俺を複雑な気分にした。ネットの世界とはいえ、もう少し自重した方がいいと思うよ、伊藤くん。

8話 そういうことに興味はなかったんだけど（後書き）

そろそろ簡単な登場人物のまとめでも作ります

9話 何となく怖かったんです

結局、昨日はロクにプレイできなかった。

公式発表ではないけど、掲示板での話によるとプレイヤー3万越えは確実。本稼働前のゲームにしては異常な盛り上がりを見せていると、他所でも話題になっていた。

やはり話題の中心は賞金である。そもそも本当にリアルマネーなのか、賞金の額すらも明らかにっていないが、レベル1でもゲット出来るチャンスがあると公式での触れ込みに皆が釣られているようであった。

おかげで古参（つつても1週間程度だけど）プレイヤーは大迷惑。操作説明すらまともに読めないにわか共が集まって来て、掲示板も調べれば10秒以内で解かる程度の質問で埋め尽くされる。CNもメンヘラ臭いのばっかだし、今度みんなで実際に会って作戦会議開きませんか？なんて、明らかに出会い目的のプレイヤーも続出していた。

夜6時から12時にかけて、俺はサーバーに接続することすら出来なかった。俺と組んでる人たちも同様に苦労しているようであった。

YASUさんはその人の良さが災いして、初心者質問攻めにあったあげく、素人パーティーに加えられ、システムを把握していない味方から何度も殺されそうになったらしい。

Pon太さんも「まさかこんなことになるなんて…」と困惑していた。先日からゲームを始めた彼の友人も所在なさそうにしていた。

彼が持っていた情報は「β版プレイヤーには本稼働時に特典」という噂だけだったため、本当に賞金がつくなんて予想だになかったであろう。一応パーティーの一員として慰めの言葉はかけておいた。

まるちーさんはログインすら出来ていないようであった。あの人は単に仕事が忙しいということもあるのだろうが。

詳しくはわからないが、恐らくG i l l yさんも似たような状態だろう。

伊藤の奴は名前で検索かけたらヒットしたので、チャット登録して一声かけた。本当に一声。その後すぐ抜けた。

面白い物が廃れていくまでのサイクルというコピペを以前に見たことがあるが、まさにそれである。面白い物は多くの人に知られてはいけけない、下手に流行らせちゃいけないのだ。人の波が娯楽を潰す。

……とまあ、昨晚はこんな事情で完全にやる気が失せてしまい。早々に床についた。それにしても如月由真ちゃんって中々可愛いな。今後ともお世話になるかもしれない。

そして翌日の正午過ぎ。

いつものように学食で一人飯を食っていると、昨日と同じく伊藤が声をかけて来た。その顔はなんというか、もう9月近いというのに未だに残る残暑にやられたんですか、と言いたくなるくらいに青ざめている気がした。理由は解かるけど。

「よ」

「ん」

「見た？」

「見た」

「どう思う？」

「嘘臭い、と言いたところだが、ああも発表して嘘でしたーじゃ済まされないだろうしな。本当……なんじゃねーの？」

「にしても、なんだよ『賞金一千万円』って……」

正直俺もディスプレイの前で10秒間固まった。公式サイトは激重だった。この話は様々なサイトに飛び火し、ネット上のニュースでも取り上げられた。無料のネットゲームでこれだけ破格の賞金がつくのは前代未聞なのだ。運営側のコメントは『わが社のゲームの知名度を上げるために企画しました』の一点張り。確かにゴールデントイムのテレビCMとかはそれくらい行くし、最近是对費用効果も怪しくなってきた。良くも悪くも有名になるということは企業側の戦略としては成功の部類に入るのだろう。

「賞金を受け取れるのって一人なのかなあ？」

「金銭的にはそうだと思うけどな。みんなで山分けするにしても十分な金額だし……」

「だとしたらやっぱり俺はパス。変なトラブルが起きそうだからな」

俺の両親は割と放任的であったが、金の恐ろしさについてはガキのころからしっかりと叩きこんでくれた。世の中金だけじゃない。でも金が原因で殺されたり、恨まれたり、苦しんだりしている奴は世の中に腐るほどいる。

現に今、楽して稼ぎたいと欲に塗れた人間達が大量に押し寄せてきているのだ。ギャンブルとは違い自分にはリスクは無いので、みな気軽に始めることだろう。そのほんの軽い気持ちで金もうけしようとする姿勢が最も危険なのだ。

「確かに、賞金ゲット出来たらみんなで焼き肉、なんてもんじゃないからな……お前がそう思うのも仕方ないか……ま、気が変わったらいつでも声かけてくれよ。うちのパーティーリーダーは信用できる人だと思うしさ」

「……ああ」

伊藤はそのまま飯も食わずに帰って行った。俺はどこも見なくてもなく、そのままゆっくりご飯を噛んでいた。

『金に関しては真っ当に稼げ』か。

バイトも何もせずにゲーム三昧の俺が偉そうに言える台詞じゃないけどな。

「ねーねー 杏子は今レベルいくつー？」

「私はやっと8いったところだよ。っていうかさーこのゲーム難しすぎない？」

「それなりのお金かかってるからねー みんな必死だよ」

「でもいくらなんでもシーフ弱すぎない？ 盗賊の癖に他の人からアイテム盗めないとか」

「レベル1でも取れる可能性があるらしいから別にダンジョン入らなくていいんじゃない？ やりこんでる人と友達になる方がよっぽど確実だよ」

「あったまいいー！ おっさんだったらちよつと誘惑したらコロつといくかもしれないし」

……頼むから止めてくれよ、素直にゲームを楽しませてくれ。

10話 単なる宝探しに思えたのですが

【スペシャルクエスト】

『この世界のどこかにある「A・R・クリスタル」を探し出せ!』

（攻略のヒント）

A・R・クリスタルはダンジョンの中にあるとは限らないぞ!

君の目と足と耳、そして直感…… 持てる感覚を全て使ってこの世界を探しまわるのだ!

「A・R・クリスタル、ねえ……」

もう夜中の10時だというのに相変わらず人が多すぎてログインが出来ない。参加人数増やすんだったら、もう少しサーバー増強しとけよ運営。俺が今見ているクエストの画面は他のプレイヤーがキヤプチャーして別のサイトに上げたものだ。

攻略、雑談掲示板の方も満員御礼。いい加減、金目当ての新参と、本当にゲームを楽しんでいる側の古参用に分けようぜ、という声が上がリ、スレッド消費も落ちてきたほうだ。だが本当にリアルマネーが、しかも1000万円の大金が入るかもあって古参

スレの方もこのスペシャルクエストの話題で沸騰している。

……実を言うと、俺もこのスペシャルクエストに全く興味が無いわけではない。ただ、賞金目当てで瞳をぎらつかせているような連中と関わりたくないだけだ。運良くこのA・R・クリスタルとやらを見つけたらそりゃ飛んで喜ぶだろうよ。賞金もありがたく頂戴する。まず無いと思うけどさ。

宝探しをさせるにしても、せめてもう少し謎解き要素があれば楽しめるんだろうけどな。生憎解けるように出来ている謎が無い。推理の余地が一切見当たらないのだ。全てがアバウト。

「レベル1でも入手出来る」「ダンジョンの中にあるとは限らない」、プレイヤーの多くはこの言葉が手掛かりにならないかと必死に考えている。だが俺に言わせればこんなのはヒントになんてならない、そう断言できる。

後はA・R・クリスタルという名前くらいか。でもタイトルのA・R・って「アカシックレコード」の略だよな？ 掲示板でもほとんどの人がそう言っているし。因果律云々とかいかにも厨二病患者が好みそうな単語だから、作り手もそんなに深く考えずに、客寄せの言葉としてつけただけだと思っていたが……

「あゝ もどかしい」

パソコンの前から離れ、俺は冷蔵庫の中の麦茶を取り出して飲む。ログインまでの時間をクエストの情報収集と謎解きに使おうと思っていたのだが。この様子ではどうにもこうにも。つかゲーム本編をやらせてくれ。

……つと電話、伊藤からか。

「もしもし？」

『おう高瀬、確かお前ソーサラーだったよな』

「そうだけど」

『ファイヤーウォールWってもう覚えてる？』

「ああ、ついこの前覚えさせたけど」

『そうか！ 頼みがあるんだけどこれからうちのパーティーに来てくれないか？ ちよつとダンジョン攻略に付き合ってほしいんだ』

「クリスタル探してないんなら構わないけど… 今サーバーが重すぎてログイン出来ずにいるんだが」

『マジかー…… あー とりあえず11時半に集合ってなってるから、その時までにログイン出来ればいいからさ。出来なかったらまたメールでもくれないか？』

「ああ、わかった。人に空きが出るのを祈るのみだな」

……ふう。簡単に約束しちゃったけど、肝心の俺の方のパーティーのことを忘れてた。

まあ、今の状況ならみんなが集まることも難しいだろうし。YA SUさんもPon太さんも他にパーティー組んでるしな。大丈夫だろう。えーっと？ あと一時間ちよつとか。ログイン試してみるか。

『メインサーバーとの接続に失敗しました』

……コンビニで駄菓子でも買ってこよう。

10話 単なる宝探しに思えたのですが（後書き）

ファイヤーウォール^{ワイド}W

……ソーサラーが習得できる範囲攻撃魔法。

初期のファイヤーウォールに比べて、効果範囲が倍近くに広がっている。

複数の敵にはもちろん、素早い敵、当り判定の小さな敵、ボス戦における足止めなど、用途が広く非常に便利な魔法。

ソーサラーなら絶対に覚えておくと、攻略掲示板にも書かれているほど。

11話 ゲームの中でも人脈は重要です

午後11時13分。ログイン成功。

他のパーティーメンバーの状況も見ただけど町にはいないようだしログイン出来てないか、ダンジョン行ってるかだな。ようし、心置きなく行きましょう。

In モナドの酒場

シエル(Lv. 22 ソーサラー) 「本当に私なんかが参加して大丈夫なんですか？」

×ぽん(Lv. 35 プリースト) 「ちょうどソーサラーの人が来れなくなっただけでこっちとしても助かりますよ」

Aselia(Lv. 38 ファイター) 「ファイヤーウォールWがあればなんとかなる！(キリッ)」

……うん、想像以上にレベル高いぞこのパーティー。レベル30越えの人は少なくとも賞金目当てで入って来た新参ではないだろうし、寧ろかなりやり込んでる部類だ。このゲームはレベル10が一つの壁になっているからな。町で見かけるキャラの約3分の1以上がレベル10以下だ。伊藤くん、君をちょっと誤解していたようだ。反省します。

如月由真（Lv. 32 アーチャー）「そう言えばサイトさんは？」

サイトさんという人はこのパーティーのリーダー格。既にレベル50に手が届きかけており、仲間内からもう化け物通り越して廃人だと言われている。

×ぽん「ソロで挑むクエストあるから先にそっち行ってくるって言うってたけど」

A s e l i a 「相変わらずだな、あの人は」

サイトさん…… また一人、規格外の人と組むわけか。とか何とか言ってるけど他3人も相当強い部類だぞ。さっきから何度も他の人から話しかけられている。

どうやら新参用の攻略掲示板でゲーム序盤に手取り早くレベルを上げるコツが議論されていたらしい。で、そこから伝播したのが、レベルの高い人をパーティーに迎える、もしくはくっ付いて行く、という方法だ。このゲームはダンジョン内であれば敵を倒した時の経験値はパーティ全員に与えられるので、始めから難易度の高いダンジョンで、レベル高い人に戦いを任せておけば苦せずして大量に経験値を稼ぐことが出来るわけだ。当然その話を聞いた金目当ての豚共が馬鹿の一つ覚えのように実践するわけで。

元々このゲームはその難易度の高さで序盤に投げ出す人も多く、このままの調整だとマニアにしかウケないぞと、稼働初期から言われているくらいバランスなのだ。しかも本稼働まで課金システム

は実装されないらしい。そのことが初心者により自重出来なくさせた。

おかげさまで俺も彼らと合流するまでに何度もパーティーのお誘いを受けた。レベル20代も結構高い部類に入るからな。もちろん全無視。お断りします(AA略)

古参用掲示板には、少なくともクエスト期間終了までは、レベルが10以下、もしくは自分とレベルが10以上離れている奴から声をかけられても一切相手にするなとまで書かれている。全ての人がそうだとは思わないが、昼間のビッチ共のような奴らが多くいることは確かなのだ。

Aselia「あー さっきから新参どもがうぜー」

如月由真「これも金の力ですかねー」

シエル「これだけレベルが離れた人に対して、パーティに加えてくさいとか普通言えませんか…… 話しかけるのも怖いのに……」

×ぽん「禁止されている行為では無いですけど、本来は自重するはずですからね」

足手まといにしかないって解かり切っているなら、そこに暗黙の了解が生まれる。本来は俺がこの輪の中にいるのもおこがましいくらいなのだ。ファイヤーウォールWが使えるのと、メンバーの如月(＝伊藤)のリア友だからたまたま入れて貰っているのに。

なんでゲームの中でまで、人の醜さを見せつけられなければならないのだ。

サイト（Lv. 50 ファイター）「おまたせー！」

×ぽん「とうとう50の大台に乗っちゃったよこの人！」

Aselia「廃人乙！」

如月由真「早速行きましょう！ リア友のソーサラーも連れてきました！」

シエル「足引っ張るかもしれないけどよろしくお願いします！」

サイト「よろしく！」

久々のフルメンバーでのダンジョンだ。あれ？ 昨日出来なかっただけか？ まあいいや。Gillyさんの時のような刺激に満ち溢れたものにはならないだろうけど、これはこれで十分に楽しいのだ。……そう言えばGillyさん、今何やってるかのなあ。

11話 ゲームの中でも人脈は重要です（後書き）

登場人物増えてきましたね…（汗）

次の次くらいに簡単なキャラまとめ作ります。

12話 その時既に始まっていたのです

「うーん、いいのかこれで？」

午前4時半。俺はシエルのステータスを見ながら妙な罪悪感に苛まれていた。

ただ今のレベル…… 29。一体全体どうしてこうなった。5時間程度のプレイでレベルが7も上がるって…… 先日のGillyさんと組んだ時以上だ。

まあ結論から言うと俺は金魚の糞の如く高レベルのプレイヤーに付いて行ったのだ。そう、つい先程まであんなに嫌っていた金目当ての豚共と同じような行為を…… いや、違う。これは不可抗力だ。他の人もノリノリだったじゃないか。誘って来たのは向こうからだ。うん、俺は違う。あんな奴らとは違う。

始めに、俺は伊藤^{シエル}（如月由真）、×ぼんさん、Aseliaさん、そしてサイトさんの5人で、天上回廊というマップに挑んでいた。攻略掲示板によるとこの平均攻略レベルは40くらいだと書かれていたが、サイトさんの見事な采配と他のメンバー自身の圧倒的な強さによってあれよあれよという間にクリアしてしまった。

このダンジョンの難敵は空を飛びまわるグラービートル。そしてアロンスライムだ。アロンスライムは粘着液を飛ばし、それを浴びた者の動きを一定時間止める。それを避けたとしてもその粘着液が地面に張り付く。その上を通っても一定時間移動が出来なくなるのだ。

じゃあ、それを避けて上手く立ちまわればいいじゃん、と俺も最

初思ったが実際にその惨状を目の当たりにして反省した。無理、あんなの無理。

スライムちゃん多過ぎ、ハッスルし過ぎ、体液飛ばし過ぎ、そこに空中を自在に飛び回るグラービートルの大軍。一度でも粘着液に足を取られれば、グラービートルの容赦ないバックアタック（ダメージ1・5倍）の連打が待ち受けている。互いに単体ではそこまで強くないのだが、組み合わせるとハメ殺しされてしまうという、これまた鬼畜ステージなのだ。

でもファイヤーウォールWがあれば別、攻略レベルが10ぐらい下がるらしい（サイトさん談）。粘着液を無効化し、空を飛ぶ敵の足止めにもなる。無理ゲーが一転してヌルゲーとなる瞬間を俺は目の当たりにした。でも数が多すぎて、全ての敵に使うためには結局レベル30台後半のSPが必要になるんだけど。しかし、そこはサイトさん。俺のために大量にSP回復アイテムを用意しておいてくれた。金額にして4000G。ありがてえ、ありがてえ。

そのボスですか？ 魔法全然効かないので俺は終始空気でした。ちゃんちゃん。

で、そこをクリアした時にはレベル26。これでもかなり上がった方だと思う。今日はこれで解散…… かと思ったら、サイトさんの方からもう一つ行っとく？ との提案が。

サイトさんの別の仲間が10人協力プレイの動画を取ってネットに上げたいらしく、その面子として来て欲しいとのことだ。伊藤の奴も初めて知ったらしく、結局俺達は深夜特有の妙なテンションでそのままホイホイと付いて行ってしまったのだ。

そして今に至る。

「うん…… 仕方ない。みんな楽しんでたし、おーるおーけーさ」

みんなと解散した後、10分ほど俺は自分自身の正当化に時間を費やしていた。

いいのさ、これはちゃんとゲームそのものを楽しんだ結果なのだから。

「よし…… 寝よ!」

外を見ると空が微妙に明るくなっている。酷い生活リズムだなこりゃ。

でも、最近何だか凄く充実しているな。ゲームだけど。

これも大学時代にしか出来ない事さ。そうだ、きっと。

受験の時と違って睡魔も心地よい。ゲームして飯食って寝る。最高の生活じゃないか。

そのまま、俺は夢の世界へと堕ちて行った。

……そう、この時はまだ、寝ることに何の心配もいらなかった。

12話 その時既に始まっていたのです（後書き）

そろそろ話が動き出します

【番外編】 一旦まとめようか（前書き）

これまでの内容をまとめてみました。

凄く長くなっちゃいましたが（汗）

読み飛ばしても構いませんし、初見の方はこれで大体内容が解かると思います。

【番外編】 一旦まとめようか

・アカシックドミネーター

【概要】

新作のMMORPG。現在は一定期間中に募集したプレイヤーのみでのβ版が稼働している。

2Dグラフィックではあるが、その分操作性やレスポンスが良く、多彩なアクション性、深い戦略性を兼ね備えている。その代わりゲーム自体の難易度はかなり高めに設定されており、特に序盤は「これ何て死にゲー？」と思うこと請け合いである。ダンジョンやクエストもパーティーを組まないとクリア出来ないバランスであり、プレイヤー自身のコミユ力も必要とされる。

【職業について】

ゲーム開始時に職業を設定することが出来る。途中での変更は今のところ出来ない。

非常に豊富な種類の職業があるが、実際の所まともに運用できるのはファイター、アーチャー、ソーサラー、プリーストの4種のみ。それ以外の職業は戦闘においてまるで使い物にならず、まともにレベルを上げることすら出来ない。(後述のプレイヤー、Gillyのような例外もいるが) そのためβ版のプレイヤーの9割以上は上記4種の職業のどれかである。

これに関しては恐らく本稼働版で調整(その他の職業のステ強化、もしくは転職システム)が入ると予想されている。

【プレイにおいて】

プレイヤーは他のプレイヤーと自由にパーティーを組むことが出来る(もちろん相手の承諾が必要)。一度組んだ相手はフレンドリストに登録され、ログイン状況の確認、別マップからのチャットを

送ることもできる。クランなどはまだ実装されていない。

ダンジョン探索においては、最大10人まで協力プレイが可能：なのだが、パソコンのスペックや回線速度の関係で、ラグも起こり易い。そのため大半のプレイヤーは4〜6人くらいでパーティを組んでいる。

【期間中の特殊クエスト】

β版プレイヤーの募集締め切りと同時に発表された特殊クエスト。内容は、期間内に世界のどこかにあるイベントアイテム『A・R・クリスタル』を探し出すというものである。そしてそれを達成したプレイヤーには1000万円の賞金が与えられる。

この破格の賞金と、公式サイト側の「レベル1でも入手できる」といった触れ込みのおかげで、新規プレイヤーが激増。試験稼働ともいえるβ版にも関わらず、参加者は3万人を超えている（公式発表）。

このような前代見門のキャンペーンに対して様々な憶測と危惧が飛び交っているが、運営側からは「ゲームの宣伝のために行っている」としかコメントされていない。

【現在の状況は…】

賞金目当ての新規プレイヤーが大量参入して来たためか、ゲームサーバーのほうに常時負荷がかかっており、人の多い時間帯（休日の日中、もしくは午後6〜12時）はログインすることすら難しい。またネットゲームに慣れていない輩も多く、全体的なプレイマナーの悪化も訴えられている。

課金アイテムがまだ実装されていないため、本稼働までは公平な条件でプレイすることが出来るが、それが逆にマナーの悪いプレイヤーをのさばらせているという意見もある。

また、稼働したてのゲームであるため、全容はほとんど明らかになっっておらず、攻略法やゲーム内のデータは有志達による攻略揭示

板や、個人攻略サイトなどでしか調べることが出来ない。

【登場人物】

アバター名がメインです。

・シエル（高瀬悠一）

：主人公。暇な大学生。ゲーム上ではソーサラー（ソーサレス）の少女。炎系魔法専門。

・Gilly

：シーフ（♂）。職業の特性に早くから気づき低レベル攻略をやつてのけるパネェ人。主人公の心の師。

・如月由真（伊藤弘樹）

：アーチャー（♀）。主人公の大学の友人。アバター名は売り出し中のAV女優から。

・サイト

：ファイター（♂）。現時点でトップクラスの実力を持ち、仲間内からも廃人と評される。如月のパーティーのリーダー的存在。

・YASU

：ファイター（♂）。主人公の初期パーティーのリーダー的存在。面倒見のいい人。

・P o n 太

∴ファイター（♂）。主人公の初期パーティーの一人。この他にリア友ともパーティーを組んでいる。

・まるちー

∴プリースト（♂）。主人公の初期パーティーの一人。最近は仕事に忙しいらしくあまりログイン出来ていない。

・A s e l i a

∴ファイター（♀）。如月のパーティーの一人。

・×ぼん

∴プリースト（♂）。如月のパーティーの一人。

・にいにい

∴ソーサラー（♀）。如月のパーティーの一人。

・G i l l y の知り合い（アバター名不詳）

∴クリエイター（性別不明）。他にクリエイターを育てているプレイヤーがいないのをいいことに、合成のみでしか手に入らないアイテムを作っては高額で売りつけている人。性格はあまりよくなさそう。

・夕風

∴プリースト（♀）。攻略サイトの管理人。

【番外編】 一旦まとめようか（後書き）

キャラ多いなあ…

その内増えたり減ったりします。

13話 嫌な予感はしていました

目を覚ますと見たことの無い大地が広がっていた。一体どうして？
あ！ 何か可愛い女の子が襲われている、助けなきゃ！ でもどうやって？

すると俺の手には激しい電流が宿っていた。これは…… 使えるか？

くらえー！ どかーん！

「助けて頂きありがとうございます！ 今の雷は…… まさかあなたが伝説の勇者様？」

勇者……？ 俺が……？

「私達の世界を救ってください！」

こんな美少女の頼みごとなら断れない。

現実世界に退屈していた俺の異世界での生活が始まった！

………

………

…

（なーんか最近多いなー こういうの）

この日は貫禄の昼12時起き。ビバ大学の夏休み。

今日は月曜だし、ゲームのほうも昼間の方が人いないけど、連日この暑さだとパソコンにもかなり負担がかかる。昼間にクーラーつ

けっぱは電気代がヤバイし。

そういうわけで、学食で飯を食った後、冷房の効いた図書館で持参のラノベ（古本屋で200円）を読む毎日。ラノベに飽きたなら、適当な雑誌や新聞でも読めばよい。ゲームはできないけどパソコンも好きに使える。流石は大学の図書館やで。節約はこうやってするんですよ奥さん。

そんなこんなで家に帰るのは午後6時半。晩飯も学食でとったの後はネットゲタイムだ。プレイ人数のピークは8時くらいだって掲示板にも書いてあったから今ならまだ……うし、ログイン成功。

ログイン早々チャットコールつと。おっ？ まるちーさんだ。

まるちー（Lv. 17） 「シエルさん、久しぶりー」

シエル（Lv. 29） 「と言っても3日程度ですけど。今日は早いですね」

まるちー 「仕事が早く終わったんで。寧ろ最近夜中が重すぎない？」

シエル 「例のクエストのせいかな、8時から12時まではキツイですねー。早めか遅めにログインしないと、入ることすら出来ませんよ」

まるちーさんのレベルが全く上がってない所を見ると、ここ数日本当にログイン出来ていなかったようだ。いつも10時くらいにログインして1時前には抜けてたもんな。社会人って大変だ。

まるちー 「それにしても、ちょっと見ないうちにシエルさんはだいぶやりこんだようだねー やっぱ例の賞金とか狙ってる？」

シエル「私なんかじゃとても無理ですよ… 強い人にパーティー誘われたからレベルだけ上がっちゃいましたけど、上には果てしなくいるって思い知らされましたから」

まるち「確かにねー レベル1でも入手できるって公式に書いてあったけど、実際は時間と人脈がものを言うだろうしねー」

シエル「手がかりとかヒントとかも全く無いし。獲得者がいないとその内ヒント増えたりするんでしょうか？」

まるち「どうだろう。もしかしたら該当者なしで済ませるかもしれないし」

ああ、その手があったか。そもそも運営が「A・R・クリスタル」とやらを本当に置いてあるのかも怪しい。そりゃそうだよな。クエスト達成条件なんて運営の匙加減でどうにでもなるんだ。あゝあ、となると益々このキャンペーンがアホらしくなってきたぞ。

シエル「これはのんびりゲームを楽しんだ者勝ちかもしれませんね」

まるち「そうだね。ゲームは無料だし、宝くじ感覚で一攫千金を夢見ている人が多いけど、消費する手間と時間は決して只じゃないよ。そう考えると宝くじの方がまだマシさ」

社会人が言うとなんか説得力あるよなあ。時間を大量に浪費して存在すらしない可能性のある宝を探すよりも、普通に働いてその分だけ金を稼いだほうがよっぽど効率がいい。人間やっぱ地道に行か

んとな。

YASU (Lv. 19) 「二人ともちょうどいいところに！」

Pon太 (Lv. 22) 「いいタイミングで4人揃いましたね」

まるちー「今日はついてるな。今からどこか行ったりする？」

YASU「二人がいなかったら他の方を誘おうとしていたんです」

Pon太「でもこんな早い時間に揃うなんて珍しいですね。前回から色々ありましたから」

シエル「やっぱりこの4人が一番落ち着きますね」

しかしレベルに関しては俺が完全に浮いてしまっているな。

この後4時間程、4人で（少なくとも俺は）まったりとダンジョン攻略を楽しんだ。流石に高いレベルに質の高い装備があるから戦闘が余裕過ぎたが、そんなのは置いとこう。仲いい人とやるのもゲームの楽しみの一つだ。しかも、ついに俺もレベル30の大台にいったしまったぞ。何だか悪いなあ。

11時頃にまるちーさんが明日も早いからとログアウト。パーティーも今日はこの辺で、と解散した。本稼働まではしばらくこんな調子だろうから、次回は会えたら組みましようということに。

俺も今日は早めに切り上げるかな……その前に個人シヨップでも見て回ろうっと。

つと、またチャットコールか。最近知り合い増えたからなあ。いいことだけど。

しかもサイトさんからだ。

シエル「こんばんは。昨日はどうもお世話になりました」

サイト（Lv. 51）「急にすまないね。ちょっと頼みがあるんだけど」

シエル「また何かクエストですか？」

サイト「いや、如月さんのことなんだけど。彼の連絡先とか知ってるかな？」

シエル「知ってますけど、どうかしましたか？」

サイト「珍しく彼がログインしてなかったんでさ。今日予定していたクエストだけど、明日の同じ時間に延期になったって、彼に伝えてくれないかな？」

へーそりゃ珍しい。まあアイツにはアイツの用事もあるのだろうし。しかし、この人もメンバーのリア友にゲームの予定を伝えさせるなんて相当な入れ込みようだな。

シエル「構いませんよ、今から電話してもいいですし」

サイト「すまないね。彼個人の事情もあるし、ゲームに束縛するの
もどうかと思うけど」

一応自覚はあるんだ。しかし、伊藤（＝如月）の奴も随分と頼り
にされているんだな。

サイト「ところでシエルさん。最近変わったことはなかった？」

シエル「どうしたんですか？ 急に」

サイト「無いならそれでいいんだけど」

シエル「はい、別に変な事は全然」

サイト「それならいいんだ。君も学生だろうけど、あまり体に無茶
かけるなよ。俺も人のこと言えないけどさ」

シエル「サイトさんも大学生なんですか？」

サイト「一応な。じゃあ、俺はちょっと人待たせてるから。また今
度」

シエル「はい、如月に伝えときますね」

サイトさんも学生なのか。まあこんな廃人プレイが出来るのは夏
休み中の大学生かニートくらいなもんだけどさ。さて、一応伊藤の
奴に電話してみるか……

『ただ今電話に出ることが出来ません。御用件のある方は……』

寝てんのかな？　じゃあメールで送っとくか。

14話 一体何が起こったのやら（前書き）

今回はちょっぴりえっちなシーンがあります。☆（ゝω・）Vキヤ
ピ

14話 一体何が起こったのやら

「……さん。…エル…さん！」

……ん。若い男の声。誰だ？ 聞いたことのない声だし。

おう、体が何か揺さぶられている。それに頬のあたりにひんやりとした感触。

何だ俺、いつのまにか机の上で寝ていたのか？

「シエルさん！ 起きてくださいよ！」

ぼんやりとした視界の向こうには3人の人影。

……ってあれ？ ここ俺の部屋じゃないの？

「あ……！？ え……！？ ええっ！？」

「どうしたんですか？ シエルさん。まだ寝ぼけてるんですか？」

目の前には銀色の甲冑に身を包んだ若い男。誰……？ いや、見たことがある。

「あの……YASU……さん？」

「はい、どうしました？」

男は軽く笑いをこらえながらこちらを見ている。

……っていか何でYASUさんのキャラが目の前にいるんだよ！？

いやいや待て、ということは……？

右手には犬の顔にふさふさの体毛の剣士。左手には法衣に身を包んだ男。

「Pon太さんに……まるちーさん？」

「はいはい」

「どうしちゃったんですか？ シエルさん？」

え……あ……な、何が何だか分からない。どうなってるんだ……？
おい、もしかして今の俺って。

「シエルさん。帽子踏んづけちゃってるよ」

「大丈夫ですか？ これから晶霊の洞窟に向かうってうのに。顔でも洗ってきたら？」

「そ、そうします……」

足元にずり落ちていたのは魔導士の三角帽子。地面に立ってみて解かるが視点が妙に低い。むしろ、さっきから俺の声が違う。完全に女の子の声だ。

もしかして今の俺って…… シエルになっているのか！？

何だよこの悪い夢は…… と、とにかくまずは顔を…… トイレ

どこだ…… 寧ろここどこだ……

あーいや、見たことあるぞ。店の内装といい、このテーブルの配置といい、あの筋肉モリモリモリマッチョマンのアッチ系のマスターといい…… 良く来たことがある。

ここはモナドの酒場だ。ってことはゲームの世界？ 何この使い古された展開！？

「ちょっとお嬢ちゃん、そっちは男子トイレよ」

「!？ す、すみません……」

ボタン。

トイレの中は外界と完全に隔絶されたパーソナルスペース。ここで頭の中を整理しよう。

そう言えばゲームの中ではトイレの中とは入れなかったっけ。なんかここだけ妙に現代的なんだな、水洗式だし。普通に水道あるし。

……うん、鏡を見て確信した。今の俺は完全にシエルだ。こうして見るとやっぱり可愛いな。

お兄さまー だーいすき！ にゃんにゃん。キラッ☆

……やっとなる場合か。

とにかく一体何なんだこれは。いつの間にか俺がシエルと同化している。これは夢なのか？ とりあえず顔に冷水をぶっかけてやろう。

バシヤバシヤ……

変化なし。

頬を思いっきりつねってやろう。

ぷにぷに、ふにふに。

幼女の頬ってこんなに柔らかいんだく 現実でやったら間違いく捕まるけどな。

「じゃねえええーっ!!?」

!?! 覚めないぞ、全然夢から覚めないぞ! 下! 下はどうなってる

……ああく 男の勲章が綺麗さっぱり無くなっております。つん
つるてんだ! うわー これが女の子の割れ目? すっげー こう
なってるんだ。ココにアレが入るんだ! ヘー!

すっかりRー18な気分を満喫していた俺はドアのノックの音で
我に帰る。

「お嬢ちゃん? 随分長いけど大丈夫?」

「あ、はい。大丈夫です!」

いかんいかんいかんいかん。夢だからって遊んでる場合じゃない。いやでも、覚めない夢は夢じゃないわけで…… 単に俺がゲームの世界にトリップしたと考えればそれで説明が付くわけで……

「付いてない！ 全然付いてない！！」

よし、ノリ突っ込み完了。私は冷静だ。とりあえずこれだけやって夢から覚めないんならどうしようもない。もう少しこの状況に身を任せるとうしよう。

「シエルさん、もう目は覚めましたか？」

「あ、はい。もう大丈夫です。お騒がせしました」

いや、覚めてないんですけどね。とりあえずはあなた達に付いて行きます。

俺達4人は酒場を出る。外は思っていた通りゲームの中そのものの風景が広がっていた。ヨーロッパの古い町並みを思わせるレンガ造りの家。車一つ通っていないただっ広い通り。馬車や馬は通っているけど。そして、皆思い思いの装備に身を包んだ冒険者たち。

これは…… とんでもないことになっちゃったぞ。

夢で終わって…… くないのかな。

14話 一体何が起こったのやら（後書き）

はい、ここでまさかの異世界トリップ。

しかしR—15タグを付ける基準って何なんでしょうか。

15話 夢にしてはリアル過ぎませんか？

晶霊の洞窟、地下14F。

魔力が秘めれた岩石によって僅かに照らされる薄暗い洞窟に、住処を荒らす侵入者を排除しようと、モンスター達の異様な叫び声が木霊していた。

「シエルさん！ 先制攻撃で！」

「りよ、了解！ ファイヤーウォール！」

『ギャワファーツ！！！！』

文字通り壁の如く立ち上がった火柱の列が、暗黒へと堕ちた妖精たちを焼き尽くす。その奥からはモンスターの第二陣、リザードマンの群れが迫って来る。

「よし、ここからは任せろ！」

YASUさんとPon太さんが前衛に飛び出し、無骨な剣と鎧で武装したりザードマン達と激しい斬り合いが始まる。味方が前に出ている時はファイヤーウォールは使えない。フレイムレーザーのスナイプで後方援護に勤めるとしよう。

……ここまで偉く自然な流れで進んだが、なーにやってんだろーな俺。

これは夢だ。中々覚めない夢だ。だったら、なるようにしかならないだろう。俺は深く考えるのを止め、周りのノリに身を任せることにしたのだ。

右も左も解からない異世界に飛ばされたのならともかく、ここはゲームの中の世界だ。世界観も、知り合いの仲間も、自分の能力も良く知っている。今やっているのは「晶霊の洞窟に突如立ち込めた瘴気の謎を解明せよ」という依頼、つまりクエストだ。

基本はゲームと一緒だ。雑魚敵を倒しながら洞窟を進んで行き、ボスを倒せば終了。普段はパソコンの上でやってることを実際に体感している状態だと思えば、この異常な展開に慣れるのにそう時間はかからなかった。実際に体動かすから結構疲れるけどさ。魔法って奴も何度も撃っていると軽く息切れを起こす。

「何か新しく来たぞ！」

「いったっ……！ 吸血コウモリだ！」

前の二人が頑張ったおかげでリザードマンも粗方倒したが、今度はさらに騒ぎを聞きつけたのか吸血コウモリの群れ。ファイヤーウォールで一掃したいところだが、二人を巻き込むわけにもいかんしな。素早い空中の動きに翻弄されて、位置取りを考えるとどころじやなさそうだし。……こいつを使ってみますか。

俺はウィザードロッドを眼前に構え、軽く呼吸を整える。狙いは…広がっているけど、要は二人に当たらなければいい話だ。

「二人ともあんまし動かないでね！」

声が届いたかわからないが、とりあえず忠告。俺が念というか気合というか、とにかくそんな感じの物を込めるとロッドの先の赤い

宝石に火の粉が回転しながら収束していく。まるで綿菓子を作っている気分になりながら、軽くロッドを回してゆく。次第にロッドの先端には真っ赤な綿飴というか、丸い棒キャンディーのような火の玉が形成されていく。

「フレイムレーザー……ラピッドッ！」

自転する火の球から削れるようにして閃光の筋が次々に飛び出す。コウモリ達も危険を察知して始めの何本かは交わしたようだが、幾重にも飛んでくる炎の矢に対して徐々に対応しきれなくなり、犠牲者が出始める。「口径」こそは小さいがその分貫通力は高い。炎の矢はコウモリたちの羽、体、脳天を撃ち抜き、さらにその後方にいる者も貫く。まるで機銃を掃射している気分。炎の綿飴がロッドから全てほどかれた時には、コウモリの大半は地面へと墜落し、残った者も戦士たちの追撃を受けて息の根を止められていた。

「ふう……」

「うっひよ、すごいなシエル」

「おかげで助かりました」

しかしあれだけ撃っておいてなんだけど、コウモリ相手に機銃って普通に効率悪いよな。ファイヤーボールブラスト（簡単に言うとな火の玉の雨）とかの方がああいいう相手にいいんだろうけど。あんましスキルポイント消費したくないんだよなあ。普段はファイヤーウォールで十分だし。

ソーサラーは習得することの出来る魔法の種類こそ豊富であれ、実際に使えるのはその一部だ。だから覚える魔法は出来るだけ無駄の無い物を厳選していきたいところ。俺が炎系の魔法しか持ってな

いのもそのためだ。

まるちーさんの回復魔法でみんなの準備が整った所で、一際多い轟音が洞窟を包む。

奥の暗闇の中からぎろりと光る目玉が6つ。敵は3体……？ いや、1体……

ケルベロスって奴か！　なんかすごい禍々しいオーラ出てるし。

「……！　こいつがこの洞窟の瘴気の原因か！」

「みんな、とりあえず距離を……」

先程の反省から先にファイヤーウォールをかまそうと思った瞬間、自分の横にふわりと生温かい風が通る。あまりに一瞬の出来事だったので、視覚や痛覚が追いつかず現状を理解するのが僅かに遅れる。

そして遅れて来る衝撃。左手の感覚が無くなる。

視覚がようやく現状を捉える、それを見て混乱していた痛覚がまともに機能する。

（見なきゃ……よかった……？）

俺の左腕の上腕三頭筋辺りが、その、引きちぎられ。骨も、見えちゃったりして。

「え、あ、うああああつああー……ッ！？」

やはりこれは夢。

夢であってほしいと全身全霊を込めて願った瞬間だった。

15話 夢にしてはリアル過ぎませんか？（後書き）

戦闘描写がもっとうまくなりたい（迫真）

16話 激流に身を任せるってレベルじゃ

もう既に痛いという単語すら口から出ない。人間は死ぬような激痛を味わっている時はただ叫ぶことしか出来ないということが身に染みて解かった。解かりたくも無かったけど！

俺はその場に膝から崩れ落ちていた。左肩付近の筋肉が半分くらい無くなっている。そこから血がもうドバドバ出てるけど、手で押さえても全く止まる気配がない。強く押さえたら押さえたで更なる激痛が俺を襲う。

「マルチー！ シエルを……！」

「うああっ!？」

次に悲鳴を上げたのは まるちーさんか？ くそ！ 一体何だっ
てんだ!？ おいファイター二人何とかしてください！ そんな所
に突っ立てる場合か！

「速い!？」

「後衛^{バックス}の二人を狙ってくるなんて！ ……伏せろ！」

伏せろって誰に対して!？ でもとりあえず俺も伏せます！

今度は後頭部をかすめるように風が切り、魔導士の帽子が飛ばされる。目の前に転げ落ちた帽子は唾の一部がパツクリと切れていた。顔を上げると前方5mくらいのところで、先程の禍々しい瘴気を放つケルベロスが振り向いて、ドス黒い瞳をギラつかせながら、涎を

垂らしてこちらを威嚇していた。向かって右の頭は音を鳴らしながら未だに赤黒い肉を噛んでいる。

まるちーさんは……？ 倒れているけど…… 遠くからなので死んでいるのか気絶しているだけなのか解からない。そもそも……そんなの確認している余裕すら無い。

『グウウウウ！』

『ピチャ、クチャ……』

くそ、ケルベロスってこんなに素早いのかよ…… 頭が……ボートとしてくる…… 出血のせいかな…… 体に力が入らない……

すぐさま俺達のフォローに入ろうとファイター二人が横からケルベロスを斬りつけようとする。しかし剣は空を切るのみ。気づいた時には、全く正反対の方向まで距離を取られている。Pon太さんが俺の前に立ってカバーしてくれているみたいだが、YASUさん一人では奴を捉える事が出来ない。

あの速さでは剣や矢ではまともな有効打を与えることが出来ない。
だが、足止めに広範囲の魔法ファイヤーウォールを使おうとしても……

『ガアッ！』

再び側面から神速の如く飛びかかり、俺に襲いかかる。反射的にその場を跳びのいたが、今度は奴の鉤爪に脰の肉がバツサリと引き裂かれてしまい、着地のバランスが取れずに地面を転げ回る。畜生！ これじゃあ立ち上がることも出来ない！

向こうとしてもソーサラーは天敵なのだろう。だから優先的に潰す。魔法を使わせる暇も与えてくれない。最初にソーサラーを潰すと味方はそいつのカバーにも回らなければならない。その分攻め手が限定されてしまうのだ。

こうなってしまうえば相手の完全に思惑通り。後はファイター達の動きに気を付けながら、その素早さを生かした一撃離脱の戦いに持ちこめばよいわけだ。

「こんな…… 化け犬野郎に……」

人間4人が完全に手玉に取られるなんて。何か手は……

「この野郎！ ちょこまかと！」

YASUさんとPon太さんが必死に剣を振り回して相手を捉えようとするが、圧倒的なスピードに翻弄され全くカスリすらしない。ケルベロスは俺に動きが無いと見ると、ファイターの二人に狙いを絞って、その鋭い鉤爪と頑強な牙で攻撃を仕掛ける。フレイムレザーではとても狙えない速さだし、何より二人に攻撃をしつつも3つの頭のどれかが常に俺の動きを見張っているようだ。変な素振りを見せようものならすぐにこちらに襲いかかって来るのであろう。

完全にジリ貧の展開だ……

4人で挑んでも全滅なんてこのゲームの中では良くあったことだ。だが、この夢なのかよく分からない世界では、実際に痛みを味わうことになる。死んだ後町に戻されて生き返ることが出来るとしても、死ぬまでに何をやられるかわかったもんじやない。参ったしても向こうが手加減してくれそうにないし、体食われそうだし…… というか一々グロい。血生臭い。

何か無いか…… 俺の魔法…… わざとこっちを狙わせて近距離で叩きこむか？ フレイムレーザーならギリギリ間に合うかどうか。……これじゃあ本当にマンガだな。

ウィザードロッドはさっき落としたしこいつで仕留められるかどうか解からないが…… 少なくともこの一発を外したら間違いない。次は即死だ。魔力を集中させた時点ですぐに相手は気づくであろう。

だから、頃合いを、タイミングを、ギリギリのところまで…… 来るなよ…… こっちに気づくなよ……！ 向こうの反応が最も遅れる体勢になる時を待つんだ。まだ二人に注意が行っているうちに……

ゲームの中だったらこのギリギリが一番楽しいはずなんだけどな……

生憎俺にそんな性分は無かったようで。……今だ！

「フレイム……！」

銃を形作った右手の人差指に魔力が集中する。当然相手もこちらに気づき、恐ろしい速さで方向転換し、突撃して来る。動きは捉えられずとも最短で来るのなら直線を通る！

「レーザー！」

俺の指から赤い閃光が放たれ、本当に銃でも撃ったかのように反動で腕が跳ね上がる。

その鋭い軌跡の中に……生命の姿は無かった。

(よ、避けられた!? どこ、に?)

俺の視界前方360°。に奴の姿は無い、ということは…

「上だ!」

YASUさんの声。

上… 跳んだのか…!!? 俺を狙って、来る…なら。

「……ラピッドオツ!」

狙いを付けてる余裕なんてない。反動で上を向いたままの指に魔力を込めて撃ちまくる。僅かに悲鳴にも似た唸りが聞こえたと思つた瞬間、俺の目の前に蜂の巣にされた化け物が落ちて来る。胴体からモロに落ちたし、かなりの重傷を負わせたのだろう。

コウモリ相手には長時間の掃射のために魔力を集中させたけど、本来はこれが(フレイムレーザー)ラピッドの正しい用途。チャージ時間が滅茶苦茶短いので、接近戦で非常に使える魔法だ。攻略サイトでもオススメされている。最初に撃ったのは威力が欲しかったから普通のレーザーだったんだけどさ。とっさの判断が間に合っ助かった。

『グ、ウウウ……!』

まだ生きているのか! ……いや、二本の首は倒れたままだ。最後の一頭が何とかして一矢報いようと必死に体をばたつかせる。

「手こずらせやがって……」

俺の指から放たれた細い閃光が最後の一頭の脳天を貫く。三つ首の化け物は今度こそ動かなくなり、それと同時に洞窟の中の重苦しい空気が消える。

魔物の瘴気から解放された洞窟は、本来の心地よい魔力の波動を取り戻していた。岩場がやんわりとした優しい光を放ち、俺達の戦いを労ってくれているようだ。

「……終わりましたね」

「シエルさんがいなかったらどうなっていたことか……」

ほんとだよ、全く。

……あれ？ 何か痛い。左腕が凄く痛い。そうだ、派手に噛みちぎられたんだっけ。

「いぎやああああー！ーっ！！」

戦いの終焉と共に脳内の興奮性伝達物質の分泌が終了。ちーん。むしろ空気読めよ俺の脳！

「マルチーさんは？」

「うーん、いたた… あれ？ みなさんご無事だったんですか？」

「早く治してええー！ 死ぬーっ！！」

「動くとますます出血が……！」

もう嫌だ！ 痛い！ 左腕が使い物にならなくなったらどうする気だ！

で？ 結局これって夢じゃないの？ 覚める気配が1ナノも無いんですけど！

こんだけ腕を痛めて現実ではどんな状態になっているのかも逆に気になるけどさ！

いや、本当に……ゲームの中の世界にトリップしてしまったのか……？

17話 この時、始まりを知りました

回復魔法とやらは凄いものだ。現実世界ならすぐにでも病院に突っ込まれて緊急手術を行うような重症でも、ものの数分で治してみせた。そのあと洞窟の精霊さんがなんかお礼とか言ってきて無事クエスト終了。俺達はすっかり暗くなった夜の町に戻り解散した。

これから自分は一体どうなってしまうのか。ずっとこのまま魔法使いシエルとして生きなければならないのか。そんな不安に駆られつつ、俺は宿屋に入って床に付いた。

—そして翌日。

「注文はー？」

「Bランチで……」

………

……

大学の学食なう。

………

……

もしかして↓ 夢だった？

目が覚めた矢先に入って来たのはいつもの見慣れた天井。見慣れた光景。見慣れた部屋。布団、いつもの俺の顔。……いや、いいんだよ？ 人間ありのままの自分が一番さ！

もちろん自分の体には何の異常も無いし、夢の痕跡が落ちていたと言うことも一切無い。朝一番にゲームにログインしてみたが、シエルのステータスはそのままであった。4人で晶霊の洞窟をクリアしたなんてログも残っていない。

……とにかく、とてつもなく生々しい夢だった。ゲームの中の世界にトリップする夢など最近のラノベの読み過ぎであろうか。今度はなんか別の、もっと真面目な評論っぽい本とか買おうかなあ。

食堂の光景も相変わらずだ。12時ともなると、授業がある日は座る椅子も無いほどの大盛況ぶりだというのに、長期休暇中の現在は人もまばら。いやー相変わらず落ち着くわ。

ん？ あそこのテーブルに座っているのは同じクラスの……内山、だっけ？ 男4人に女子3人。体格もいいし髪型もチャラいし、リア充だなあ。他のは知らない顔だし、サークルの集まりだろうか。まあいいや、元々そんなに話すほど仲良くないし放つところ……つて、何で近づいて来るんだよ。

「おい高瀬！ 聞いたか！？ 伊藤の話！」

今時の女子にいかにもウケそうなすっきりとしたクセの無い顔立ちなだけに、その表情が彼の感情をストレートに表している。何焦ってるんだろこいつ。

「伊藤って……あの伊藤？ あいつがどうかしたの？」

「死んだってさ…… 今朝あいつの家の中から遺体で見つかったそうだ……！」

………

……は？

いや、え？

「さっき伊藤と同じマンションに住んでいる矢野から連絡あつてさ、これから学科のみんなにも回そうと思っていたんだけど……」

「いや、おい、伊藤が死んだって…… 何で!？」

「詳しくは俺も知らねえよ。矢野からちよくちよくメール来てるけど、とりあえず事件とかではないらしいみたいでさ」

「伊藤のマンションの場所わかるか!？」

俺は内山に詰め寄る。彼はえらく困惑しているようだが、普段はクラスの中でも空気な存在の俺が、こんなに声を荒げているのだから当然と言えば当然か。

「ど、どうしたんだよ…… そんなに気になるのか？ まあ、お前は伊藤と仲良さそうだったしな……」

「あ、いや、実は昨日あいつに電話したんだけど出なかったからさ……それで気になって……」

「そうか……それだったら、搬送先の病院に行って事情を聞いて来てくれないか？ 警察とかも向かったみたいだし。俺はクラスのみんなに連絡送ってからすぐに追いつくからさ」

そういえば内山の奴は学科のクラスの中でも委員長的存在であった。リア充でしかもまとめ役だなんて、いやリア充だからこそまとめ役なのだろうが。こういう時の彼の冷静な判断には舌を巻くばかりである。現場の方は矢野がいるしな。

「わかった。俺はそっちに行く。で、搬送先の病院は――？」

胸騒ぎがしたのだ。サイトさんの妙な言葉といい、昨日の電話のことといい、そしてあの奇妙な夢の事といい。だけど、関連性はあってほしくなかった。病院に向かって自転車を全速力でこぎながら俺は、『この胸騒ぎは全て気のせいであってほしい』、そう願っていた。

……………

「脳梗塞……ですか？」

病院の窓口にいた警察官に事情を説明し、俺達と一緒に医者の説明を聞いていた。

「詳しくは解剖しないと解からないでしょうが…… 病死ですね。外傷が一切見当たらなかったのでレントゲンとスキャンを取ってみたんですが、ほらここの所が」

医師はレントゲン写真を見せて淡々と答える。頭部、脳の所に大きな黒い部分が出来ており、明らかにそれが死因っぽそうだということが素人目にも解かる。

「あの、本人が死んでいた時はどんな状況だったんでしょうか？」

俺は警察官に尋ねる。

「マンションの管理人さんが家賃を払ってないとかで、今朝彼の部屋を尋ねたそうで、その時にはもう。部屋に争った形跡も無いし、遺体は薄布団を着たまま眠っているように死んでいたようだけど」

「……死んでからどれくらい経っているんですか？ 昨日そいつに電話したんですけど出なかったんで……」

「詳しい時間はまだ出せないけど、死後一日は確実に経っていますね」

医者は表情を変えることなく答えた。その後も俺は警察から色々話を聞かれたが、現場や遺体から考えて事件性は無いと判断された。遅れて内山を含めクラスメイトが何人かやって来たが、警察官が遺族や学校側への連絡はこちらでやっておくから、君たちはもう戻りなさいと言われ、ほどなく解散。

集まった人の中には女子もいた。伊藤も俺と同じくクラスではそこまで目立たない存在であったが、しばらくの間共に授業を受けていた人物が急死したとなるとやはり気になったりするのだろうか。

単に野次馬根性だったり……　ってこれじゃ俺が捻くれているだけか。

家に帰ってもゲームにログインする気は起きない。あいつが死んだばかりの時について理由もあるけど、それ以上に何か嫌な予感が俺の頭の中を漂い続けていたからだ。…でも、どの道今夜はサイトさんに事情を伝えるために入らなきゃいけないか……

何となく普段はほぼゲーム専用と化しているテレビを付けてみる。そのテレビゲームすら最近はやらないが。夕方の特に何の面白味のない地元のニュースをぼんやりと見ていた。

『まだまだ厳しい残暑が続いておりますが、この時期こそ体に注意してください。特に脱水症状から引き起こされる脳梗塞！　決してお年寄りだけの病気じゃありません！』

『先日は市内の20代の主婦と30代の男性が脳梗塞で死亡するという痛ましい事例も起きました。しかもそのどちらも朝、眠ったまま死んでいたというのです。専門家の意見によりますと、寝ている時の発汗は脱水状態を引き起こし易く……』

18話 徐々に異変が表れました

【クエスト】

『晶霊の洞窟に立ち込める瘴気の謎』

……

……

……

(BOSS) ケルベロス

攻略法…このゲームではお約束の初見殺しのボス。動きが滅茶苦茶速くて、通常攻撃が非常に当て辛い。おまけにHPと防御力の低いキャラクターを優先的に狙ってくるため、ボス戦開始時にソーサラーが瞬殺なんて事態も珍しくない。実は移動には一定のパターンがあるようで下記の図を参考にして立ち回れば、あまり被害を受けずに勝利できる。

………

本当に攻略サイトの管理人さん、それと先駆者たちには乙と言わざるを得ない。

一応このサイトの掲示板の方にもソーサラーのフレームレーザーラピッドがケルベロス相手に結構使えましたよって書きこんでおう。

……違う。本題はそこじゃない。昨晚のあれが夢だったの言うのなら何故その中にこれが出て来たのか、ということだ。俺はこのページは見たことがない。始めからネタバレすると面白くないので、まだ挑戦していないダンジョンのボスが何だとか攻略法はどうだとかは元々全く見ていないのだ。

夢っていう奴は原則自分の頭の中にある物しか出てこないはずだ。たまーに、夢の中でまだ発売していない漫画の新作が登場したりもするが、そういうのは大抵読めないようになっていく。一度夢の中で無理やりページを開いてみたら中は真っ白だった、ということでもえらく憤慨したこともある。

じゃあ、あの夢は一体何だったんだ。

午後10時、ゲームにログイン。実は6時から1時間おきに入っては出てを繰り返していたのだが、いつ入ってもサイトさん、もしくはA s e l i aさんや×ぽんさんがログインしていなかったのだ。とりあえず彼らには事情を伝えなければと思っていたが、こんな時に入っていないなんて……

不吉な予感が脳裏をよぎる。単なる思い込みかもしれないというのに。いや、普通に考えてそっちの可能性の方が高いというのに。伊藤はたまたま死んだだけ。その可能性は否定できない。寧ろゲームが死に関係しているなんて話よりよっぽど現実味を帯びているじゃないか。はは、何考えているんだろ、俺。マンガの読み過ぎだ。

Y A S U「こんばんは。シエルさん」

シエル「こんばんは。それとすみません。今日はすぐ抜けないとい

けないんです」

YASU「何か用事ですか。まあ今日はみなさんも揃っていないようですよ」

シエル「YASUさん。昨日何か変わったことはありませんでしたか？」

昨日と同じだ。俺はサイトさんと全く同じ質問をしていた。

だってそうとしか聞けないじゃないか。ゲームの中に入った夢とか、アホ臭くて。

YASU「私は別に何も。変わったことといえば、今日になってサーバーが快適になったことくらいですね。8時に入ったのに軽い軽い」

シエル「そうですか。運営が対処してくれたんですね」

YASUさんには何も無いのか…… いや、彼も言うのが恥ずかしいってだけで……

YASU「もしかして変わったことって例の掲示板での噂ですか？」

シエル「掲示板ってどこのですか？ 私は攻略のやつしか見てないんですけど」

YASU「昨日から変なスレッドが立っているんですよ。『このゲームはヤバイ』とか、『ゲームのキャラクターになった夢を見た』とか」

俺は息を飲み込んで即座にゲーム掲示板の一覧を開く。だがそんなタイトルものは一切無い。あるのはいつもの新参、古参用の攻略、質問用スレ、適当な雑談スレ、職業ごとのスレ、キャラ萌え……

シエル「すみません。詳しいスレタイ教えてくれませんか？」

YASU「もう消されたのかな？　かなり荒れてましたからね」

シエル「そうですか。お騒がせしました」

YASU「シエルさんもそういうお話とか好きなんですか？」

シエル「友達がこんな噂があるって言って来たから…　単なる荒らしとかならないんです」

YASU「他の所のゲーム板とかでは随分このゲームが叩かれているみたいですからね。ありもしない大金で乞食共を釣っているとかで。その多くは登録が間に合わなくてプレイできない人たちみたいですが」

シエル「僻みで変なスレ立てまくって、荒らしているんですかね」

YASU「そういうところでしょうね」

「違う」

俺はディスプレイの前で呟く。書き込みこそしなかったが。

『ゲームのキャラクターになった夢を見た』

荒らすならもっと別の言い方があるだろうに。他にもいるんだ。おそらくサイトさん達も同じような目に……

単なる不吉な思い込みだと思っていたものがだんだん現実味を帯びてくる。ゲーム攻略掲示板は公式側公認として設立されている。向こうがこの事情を知ってしようがいまいが、ゲームそのもののマインナスになる発言をされるのであれば、即刻削除されるのは納得がいく。

だったら…… もっと別の所だ。最大手の総合掲示板とかだったらどうだろうか。あそこならスレッドの数も半端ないし、削除人の目も行きわたり難いんじゃないだろうか。

俺はゲームを抜け、このゲームに関する情報を載せているありとあらゆる所を巡った。この言われも得ぬ不安を何とかして誰かと共有したいと言う衝動に駆られて。

18話 徐々に異変が表れました（後書き）

ネット用語とかあまり書かない方がいいんですけど。
要望があつたら注釈入れます。

19話 ここでOPに繋がります(前書き)

本当は避けたかった説明回。でも仕方ないね。

19話 ここでOPに繋がります

「今日もお疲れー」

『かんぱーい!』

「……乾杯」

俺はネット上の様々な所を巡り、最終的に一つの地へ辿りついた。
日本最大級の某電子掲示板の中でも秘境、一般人お断りの異界の地、その名も「オカルト板」。まともな神経をしている奴は見えてはいけないうちと散々外で言われてきただけに、そこに入るのにはちよっぴり勇気が必要だった。実際に入って数分ほど後悔の嵐、だがその中でようやく俺の探し求めていた言葉があった。

この「アカシックドミネーター」というゲームについての黒い噂。知らないうちにゲームの中の世界に入っていたとの文章。そこでの体験。もう出血しまくり、手足とか吹っ飛びまくり、二度とあんな体験はしたくない、など。

途中から元々の住民が面白がって、これは呪いだとか、安易にアカシックレコードとかいう単語を使ったからだとか、おめえここ（頭）大丈夫か？ などと、茶々を入れる文章が続いていた。そっから先は……まともな神経の持ち主には苦痛しか感じなかった。

やはり自分と同じ体験をした人物がいる。

仲間がいるかもしれないと知って一筋の希望を持った。だが、そこから先は？ 自分と同じ目にあった奴がいるとしてこれから何を

すればいい？ コンタクトを取ろうにも匿名掲示板だし。

他のWebサイトでは「ゲームの評判を落としたくて変な噂を流している連中がいる」「構ってちゃんの荒らしは無視の方向で」「むしろ賞金のライバル減らしじゃね？」「大体ゲームの中にトリックとか完全にガキの発想じゃん。俺だったらもっと上手い方法考えるわ」「最近ネットに消防、厨房増えすぎ、ネット利用の年齢制限をしろ」などなど。全く取りつく瀬も無い。

結局夜中の3時まで粘ったが、サイトさん達は表れなかった。唯一話を通じそうな人たちとも会えず終いだっただ。俺も睡魔には勝てず若干の不安を抱きながら床に付いた。もちろん寝る前は念のために水分補給をしつかりと。

で、

「シエルさん…… 何か浮かない顔してますねー」

「何か考えごと？」

「まあ…… そんなところです」

ご覧の有り様だよ！

やっぱり夢じゃねよこれ！ 夢かもしれないけどおかしいだろ絶対！

気がついたら再びこの世界にいて、またもやシエルになっていて、そして例の如くパーティー仲間の3人に引っ張られてダンジョンへ

GO！　またもやお約束の如く手強いモンスターが表れて、最終的にはガーゴイルの群れ！　昨日と同じように至近距離からのフレイムレーザー狙ったんだけど、今回は間に合ったのか間に合っていないのか。いや、敵の脳天はふっ飛ばしましたよ？　でも俺を狙って来た奴の腕の勢いは止まらず、俺の手首に直撃、そのままポロリ。昨日に引き続き、俺は両手を吹っ飛ばされると言う、現実世界ではなかなか滅多に無い体験をすることが出来ました。ちゃんちゃん。両手は今ではぴったり元通り、回復魔法あればもう外科医いらなくね？　そんなこんなで、今日は早めに依頼が終わったので仲間と一緒にモナドの酒場で飲んでいるのだが……

「ははーん、さてはお前だけジュースだから拗ねてるな？　お前も飲んでみるか？」

YASUさんが赤ら顔で俺に酒を進めようとしてくる。完全にオヤジだ。確かにメンバーの中では俺は群を抜いて最年少だけどさ、肉体的には。こんなロリロリな少女の体じゃ、話す時に一々上を見上げないといけないし、運動能力も落ちてるし。高い所の物に手が届かないわ、そしてそんな俺の様子をニヤニヤしながら見つめる周囲の男どもの視線のキモいこと！　あと女言葉を使い続けないといけないのが地味に辛い。書き込むのと違ってどうしても素が出るもん。実際に女声だからいいけど、性同一性障害の人ってこんな感じなのかな。ちよっと甘く見てたわ。段々自分自身も気持ち悪くなってくる。

しかし2度この世界に来て見て、新たに気づいたことがいくつかある。正確には違和感を覚える所が何箇所もある。

まず気になるのは何故他のパーティーメンバーは俺の様に意識が同化していないのか、ということ。実際しているけど単に言わない

だけという可能性も捨てきれなくはないが。しかし、他の人のしゃべり方、ひいては性格が微妙に違うのだ。YASUさんはチャット上では礼儀正しく細かい気配りの出来る人だ、しかしこっちの世界ではこんな風に俺に対してオヤジ臭い絡みを見せたり、言葉使いも少し悪い。対してまるちーさんはチャット上では割とぶっきらぼうな話し方だけど、こっちの世界ではいかにも聖職者って感じの物腰丁寧な人だ。キャラになり切って中身の性格も変わる…ってことはないだろう。そもそもこのゲームのアバターに性格などの詳細な設定などない。

気になること2点目。世界観が全体的に妙に日本的。ゲーム画面上は表示されないが、料理はこちらの世界、というか日本人にあった味付けだと思う。使っている材料もそこまで物珍しいと感じず何の違和感も無く食べることが出来る。ゲーム中では入れないトイレも水洗式。ファンタジーの世界なのに変なところで科学が発展している。

そして何よりも一番気になるのは、ゲームに比べて遥かにモブキヤラ、つまり一般人が多いこと。実際に人が多く住んで、町が出来ているという点に関してはこれが正しい姿なのだろうが、その多くが日本人の顔をしていると言うことであった。最初来た時は夢だと決めつけていたから何とも思わなかったが、街並みはヨーロッパ風なのに住んでいるのは日本人だというのはどうにもおかしい。別に他のアジア系の人と混同しているわけではない。中国、韓国、モンゴル、インド、ベトナム、タイ…… 詳しく国籍まで言い当てることは出来ずとも「日本人以外の人」ということならば大体見分けることが出来る。町を歩いている人の大半はほぼ間違いなく日本人だ。「ゲームで表示されるモブキヤラ」は大抵欧米風味な顔だけに、妙な違和感を覚えずにはいられない。

（はあ…… でも違和感を覚えたところで今のところはどうしようも無いんだよなあ……）

今ここで、ここはゲームの中の世界だ！ と声高に叫んだところで何になるだろう。自分と同じ境遇の人物が他にいるという可能性はどのくらいだ？ 下手したらこの世界でもキチ○イ扱いされてしまうだろうし。

（とりあえずは今日のクエストも無事に終わったし後は夢が覚めるのを待つばかりか…… 昨日もそうだったし帰れないことはないだろう、多分）

俺はローストチキンを齧りながら柑橘系のジュースでぐいっと流し込む。……女の子だからすぐにお腹いっぱいになっちゃうよ。飯自体は美味しいのに、もったいない。

仲間達は酒が入って勝手に盛り上がっちゃてるし、適当に飯食いながら周囲の観察でもするか…… 何か色々手掛かりが得られれば……

その時店の玄関の鐘が鳴り響き、新たな客の来店を告げる。酒場は繁盛しており客の出入りは引っ切り無しに起こっているため、一々そんなことを気にする客は誰一人としていない……が。

知っている顔だった。俺は思わず目を見開いて瞬きをした。

かつて会った時とは装備が多少変わっているが、その風貌は間違いない。彼であった。痩せ形の体格、バンダナで覆った頭、全身が身軽な装備で武器も腰の短刀らしき物しかない。あんな職業を選ぶ人はほとんどいない。

俺は久しぶりの再会の喜びと、この世界での遭遇による驚きも手伝って思わず声を上げてしまった。

19話 ここでOPに繋がります(後書き)

兄貴が久しぶりの登場です。

20話 やっぱりこういう時に

「Gillyさん！」

酒場に入って「いらっしやいませ」より先に自分の名前を呼ばれたので、彼もすぐにこちらに気づいてくれた。

「ん……？ シエルか。久しぶりだな」

「この前はお世話になりました！」

「お前もかなりレベルを上げたようだな」

後ろでやり取りを見ていた仲間たちも、彼が気になったのかのそのそと近づいて来る。

「シーフとは……珍しいですね。あなたの話はシエルさんからも聞いてますけど」

「確かシエルと二人でサンマイト遺跡の50Fを走破したんだって？ そこまで強そうには見えないけど……」

酒も入っているPon太さんの少し失礼な物言いにも、彼は軽く笑って返した。

「そりやそうだ。戦闘に関してはてんで駄目だし、正直言ってこの嬢ちゃんにも勝てる気はしない。あくまで俺は…泥棒だからな」

「堂々と言うねー この人ー」

謙遜無しに自分は弱いですって言うてるのに、何でこんなに格好いいんだろう。みんなも彼に興味を持ったようだが、Gillyさんはそれを拒むかの如く顔をカウンター席の方に向けると軽く方をすくめる。

「どうやら満員の様だな」

「あのー 良ければ私達と……」

「それには及ばない。軽くつまんでとっとと帰るつもりだったからな」

Gillyさんは踵を返し入口の方に向かう。人（こんな美少女）の誘いをこうもあっさりと断ってしまうとは…… 根っからの一匹狼なのだろうか。

「Gillyさん…… 今も一人でダンジョンに挑んでるんですか？」

「ああ、この前はサンマイト遺跡の60Fまで行ったところだ」

それまで自分たちの話題で盛りがっていた他の客たちも、彼の言葉が聞こえたのか僅かにどよめき始める。「マジか？」「ありえないだろ」。他の冒険者たちもシーフに対して抱いている偏見、先入観を口にする。無理も無いけど。

「パーティーとかは？ 誰かと組まないんですか？」

「シーフはロクな戦力にならないって前にも言っただろ？ 悪いが

俺は自分のための力しか持っていないんだ」

相変わらずこの人は一人が無茶な冒険を続けているのか… ゲームの中だったらそれでもいいだろう。死んだって経験値とアイテムが減るくらいで何度も生き返ることが出来る。しかし今この世界では…… 蘇生なんて出来るのか？ いや、出来たとしても、毎回モンスター達によって惨い目に遭わされるかもしれないのに…

「Gillyさん、無茶はしないでください。こんなところで死んでしまったら何にもなりませんから」

自分でも訳の解からない気休めの言葉であった。冒険者は無茶をしてナンボ、命を削ってナンボ、そんな空気がここに、この世界にはある。というよりゲームそのものの雰囲気がそうであった。解かつてはいるが、気遣わずにはいられない。

「ああ、そうするさ。お前も気を付けろよ」

意外な返事。そう言うとGillyさんは右手の人差し指で自分のこめかみの少し上あたりを2、3度突く。

「ココを、やられたくなかったらな」

この時の俺はどんな形相だったのだろうか、少なくとも周りの客はあんぐりと口を開けていたような気がするけど。凄まじい勢いで魔女っ子が店を出ようとするシーフの男の腕を掴んだ。まるでスリでもやられたかの如く。確かに一体何なんだとは思うわな。

「どうした……？」

「Gillyさん…… 今、何て……!?!」

「お前も勘付いているのか、シエル」

「じゃあGillyさんもがっ……!?!」

すると彼はすぐに俺の口を押さえつけ、服の首根っこを掴む

「おい、女の子に何するんだ!」

「悪いな。少し借りていくぞ」

後ろから仲間達が、ひいては他の客が俺を助けようと(?)一斉に席を立つが、当の俺が必死に手を横に振り「大丈夫、大丈夫」との合図を伝える。そのまま俺は口を押さえつけられたまま彼に引きずられ、店の外まで出てからようやく解放される。

「ぶふあっ…… ど、どうしたんですか? Gillyさん……」

「あまりこのことを周りの連中に知らせない方がいい」

「な、なんで……?」

「……町の外で話すでしょう」

俺達は酒場を離れ、人気の少ない町の郊外に向かう。ダンジョンまでの通り道なので人がいないわけでもないが、周りが身を隠す場所の無い更地なので話を人に聞かれることも無いだろう。俺達は適当な芝生の上に向き合うように座り、話を始めた。

21話 どこまで知ってるんですか？

「……で、シエル。お前はどこまで掴んでいる？」

先に尋ねて来たのはGillyさんであった。俺は今知っている、少なくともおおよその確証が得られている事柄を彼に話した。

？ゲームの中の世界は夢幻……なのかもしれないが確実に存在し、自分達は何らかの原因で連れて来られ自分の作ったキャラクターと同化している。だが、全ての人がそうではないっぽい。

？この中に入るのは寝ている時？ 昼寝とかでも入れるのかは解からない。

？このゲームの中で怪我を負っても、現実世界には持ちこさない？
だが、死ぬとどうなるかは解からない。

？現実世界で目覚めると解放される？

？おそらくこのゲームが原因で現実死んでいる人がいる。

「こんなところですかね…… まだ確証が得られてないことばかりですが……」

「このゲームが原因で現実死に人が死んでいる、というのはどうしてそう思った？」

俺は友人の伊藤の事について話した。年齢20にも満たないのに、朝眠ったまま脳梗塞で死んでいたこと。彼が死んだ日に、市内で似たような死に方をした人達（それも若者）が2人もいること。そして彼と組んでいた人たちが、前日にこの現象の存在をほのめかすようなことを尋ねて来たこと……など。この夢の内容といい、単なる偶然とは思えなかったのだ。

「なるほど…… で？ こうなったのは何回目だ？ いつからお前もこんな風になった？」

「2回目です。1度目は単なる夢だと思っていたんですけど…… 流石に同じ夢を、記憶をそのまま引きついであってことになっちゃ……」

「と、いうことは昨日…… 月曜の夜に初めて入り、そして今、火曜日の夜に2回目のトリップ……ってわけか？」

「はい、そうです」

Gillyさんは軽く腕組みをして「ふむ」と考え込む。

「今のが何か？」

「実は俺がここに来たのは3回目だ。つまりは日曜の夜からだな。そして俺が調べた限りでは、この現象は日曜の夜から始まっている。お前はその時は何も無かったんだよな？」

「……はい」

と、いうことは、昨日のサイトさんの発言もつじつまが合うな。この現象が日曜から始まったと言うのなら、彼らや伊藤もその日の

晩に同じ夢を見て……翌日心配になって俺に尋ねて来たということだ。ゲームの世界に入ったなんて話、普通信用しないしな。

「となると、何で俺は日曜日ここに連れて来られなかったって話になりますね」

「シエル…… お前男か？」

「あ？ え、いや、その。中身は……そうです」

「まあ、そんなことはどうでもいい。とにかくお前の話で大体の仮説は出来た」

あーあ、つい『俺』なんて一人称使ってしまった。長年の癖を直すのはやっぱり無理ですよ。性別的にも。いやいや、今はそんなことよりもGillyさんの仮説とやらだ。

「今の時点で俺が集めた情報を踏まえて、まず1つ。どうやらこの世界で死ぬと現実世界でも死ぬらしい。絶対、とは言えないがほぼ9割がたな」

「マジっすか……」

「他に取りこまれた奴らの話も盗み聞きしての結論だ。一目目はこの世界に取り込まれた連中の中でモンスターに殺された奴が翌日からログインもしくなったらしい。翌日、この世界にも存在しなくなっている。おまけに月曜の朝から火曜にかけて脳梗塞による若者の死者が続出している。不自然なくらいにな」

確かにそれは絶対…… とは言えないが真実味を帯びている。と

いうか他の所でも若い人が脳梗塞で死にまくっている時点ではほぼ限りなくクロに近いんじゃないのか。

「マスコミや警察は取り上げたりしないんですか？」

「事件性はないからな。どれもこれも朝眠ったまま…… まあ現代人の不養生に対して注意喚起をする程度に留まるくらいだろう」

だよな。朝眠ったまま死ぬ、眠ってから死ぬということによって、死者の共通点がこのゲームのプレイヤーだと気づいてくれる可能性も期待できないし……

「2つ目。この世界に取りこまれるには何らかの条件があるみたいだ」

「条件、ですか。ランダムって可能性は？」

「それも否定できない。だが、今まで俺が見た同じ境遇の奴らにはいくつか共通点がある。……シエル。お前はこのゲームを始めて何日だ？ それと今のレベルは？」

「11日目：ですね。レベルは30です」

「お前の友人の伊藤って奴は？」

「詳しい日数は解かりませんが、始めたのは俺より遅かったはず…… プレイ時間は俺より長いと思いますけど。カウントされてないので何とも。レベルは最後、日曜日が終わった時点で見た時は35でした」

「……ここに取り込まれているのは全員高レベルのプレイヤーだ。俺が見た分では、レベルは今のところお前が最低だな。少なくとも30以上」

「れ、レベルですか？」

待てよ。確か日曜日の時点では俺はレベル29。しかし、月曜日には30に上がった。なるほど、これだとぴったりだ。それだったらレベル30未満の俺の他の仲間が取り込まれていないことにも合点がいく。

「ってことはレベルが低いと、こっちには連れて来られない。死ぬ危険性がないってことなんですか？」

「これも確証こそ無いがな。だがもし、レベルの低い奴までこっちに來ていたらもっと派手に死人が出ているだろうよ」

このゲームのプレイヤー人数はおよそ3万人ちょい…… 難易度はかなり高いし、全滅した経験の無いプレイヤーはまずいないだろう。ってことは、下手したらかなりの大惨事になるんじゃないかこれ!?

21話 どこまで知ってるんですか？（後書き）

推理回……というか会話回。

しかし順序踏もうとすると時間かかるな！

22話 俺が何か出来たりしない？

ゲームが原因で人が大量に死ぬ？　だが、世間や警察はそんな話誰も信じてはくれないであろう。当事者でない限りこんな漫画みたいな展開は……

「何とかしてこれを止めることは出来ないんですか？」

「……」

Gillyさんは何も答えない。目を瞑って何かを考えてはいるようだが。

「シエル、お前はこの現象はなぜ起きていると思う？」

「なぜって言われても……　何て答えればいいか……」

「この現象は自然に起こっている物なのか、それとも誰かが人為的に起こしている物なのか……　お前はどっちだと思う？」

止めるにしても原因を、というわけか。自然に起こるって、異世界にトリップする自然現象とかたまったもんじゃない。誰かが人為的に起こしている……　こっちの方が可能性は高くないか？　異世界召喚モノとか大概そうだし。漫画とは違うけどさ。

しかし、誰かが何かのために何らかの方法でこの現象を起こしている、となると色々つじつまが合う部分が出て来るぞ。レベル30以上でこの世界に連れて来られるとか、明らかに人間が調整したようなものだ。それに、この現象が始まったのは日曜の夜。日曜……日曜って確か……

「賞金一千万円のスペシャルクエスト！　　ってことは……！」

「そう考えるのが妥当、だよな」

偶然にしては出来過ぎてる。無料のネットゲームで一千万の賞金という胡散臭い話もそうだ。まさかこうなることを知っていて、というか最初からそれが目的で？

「ゲームの製作者が何かの理由で俺達をこっちに連れて来ているんですか!？」

「……」

……あれ？　何で無言で考え込んだGillyさん。結構筋の通った推理だと思ったんだけど。

「……確かに、その仮説は筋が通っているが」

「Gillyさんは違うと？」

「否定は出来ない。だが全て仮定で固めた意見だ。他の可能性もまだまだ捨てきれないってわけさ」

うーん、ゲーム製作者以外の人の可能性ねえ……　現時点では謎が多すぎるし、犯人を決め付けるのもどうかというわけか？　また別の第三者によって引き起こされた事態……

「だが、少なくとも他の奴らのほとんどはお前と同じ結論に至っている。さらには『A・R・クリスタル』とやらがこっちの世界に存

在するのかもしれないって話も出てるしな」

「確かにその可能性も！……いや、それだと公式の『レベル1でもゲット出来る』なんて触れ込みが嘘になるな……でもその話も絶対ってわけでもないし……」

「とにかく現時点で結論付けるのは早すぎる。原因の根本を突き止めるにしても、もう少し情報が欲しいってわけさ。とりあえず今一番重要なのは自分の身の安全を確保することだな」

Gillyさんの言う通りかもしれない。目標があやふやなのに下手に固定観念に囚われて動き回っても、かえって自分の身を危険に晒すだけだ。

身の安全の確保か。今出来ることといえば、こっちの世界に来た時はダンジョン探索を控えることぐらいだな。そして、レベル30以上でこっちに取り込まれるということは、仲間内にもしばらくゲームのプレイを止めるように言っておくべきか？ 理由は何て伝えようか…

「一応明日、一部の奴らが運営側にこのゲームを止めさせるように直談判するつもりらしい。出来ればの話だな」

「やっぱりそれは難しそうですか？」

「向こうがこの事態を知っていようがいまいが、まともに取り合うと思うか？」

「だよなあ。どちらにしてもゲームを止めるなんて出来っこないし……ん、止める？」

「Gillyさん。もしかしたら、このゲームを退会すれば全てが済む話じゃ!？」

「既に試している奴がいる。今はその結果待ちだ。どうも嫌な予感がするがな……」

取り返しのつかない行動をするにはまだ早い、か。俺なんかが考え付く対応策は全て取られているっぼいな。

「とりあえず今は下手に動かない方がいい。周りの出方を見て、それから次の行動を取る。状況が状況だ。多少の犠牲は目を瞑るしかない」

「他の人が危険な目にあっても見捨てるべき、なんですか？」

「周りだってお前の命を優先するとは限らんだろ。自分が生き残るために人と組むことはあっても、みんなで生き残るために危険になるのを承知で組んだりはするなってことさ。俺達は映画のヒーローじゃないんだ」

自分が絶対に生き残って勝利する主役ってわけじゃない、か。そりゃそうだな。Gillyさんの言ってることは正しい。おそらく彼も自分が生き残るために俺と組もうとしているわけだ。どっちかが死んでも仕方ない、両方生き残ればそれでよしってか。現実もそんなもんだよなあ。

「他の奴と組むのは構わないが、仲間が多すぎると生じるしがらみって奴もある。孤独から来る不安や善意に駆られるのはいいが、ほどほどにしとけよ」

そこまで言うとなGillyさんはその場を立ち上がった。

「俺はこれからもう少し情報を集めてみる。お前も何か解かったことがあれば知らせてくれ。また明日、ここで落ち合おう」

「了解です」

「……っと、言い忘れたがゲームは普段通りやっても大丈夫みたいだ。もちろん全滅してもなんともない。俺自身が試した」

「気をつけるのはこの世界にいるときだけでいいってことですね？」

「ああ。それとゲーム内の数値がこっちに反映されるみたいだな。起きている間に色々準備しておくといいだろう」

「……なるほど、わかりました。ありがとうございます」

「じゃあな」

Gillyさんは後ろを向いたまま軽く手を上げると、そのまま町の方角へ立ち去って行った。流石はシーフ、もう姿が見えなくなっていた。

俺は帽子を被り直し、これからどうするかを考える。とりあえずは今のまま、まだ意識が取り込まれていないパーティーと組んでおくか。ダンジョン探索は仮病でも使って控えるでしょう。とにかく彼の言う通り、判断材料が整うまでは大人しくしておいたほうが良さそうだ。もう夜も遅いし、町に帰って宿に泊まろう。これで現実世界に戻れたら、帰る方法がある程度確立出来るしな。

しかし、Gillyさん。あの冷静な判断力といい、現実では一

体何やってる人なんだろう。でもゲーマーなのは確かだしなあ。あまり考えないことにしよう、かな。

22話 俺が何か出来たりしない？ (後書き)

会話が多いとレイアウトに悩むなあ…

23話 やれるだけのことはやっておかないと

「注文はー？」

「Bランチで」

いつもの学生食堂。大学の夏休みはまだまだ長い。

今回もなんとか無事に帰ってこれたな。ずっとゲームの中の世界に取り込まれるというわけではなくて一安心。だがあれが夢でないことは確定。毎晩あんな状態になるのかと思うと、夜寝るのが怖くなって仕方がない。かと言って周りに相談できる人もいないしなあ。

仲間が欲しくなる。同じ境遇の仲間が。

しかし、サイトさん達とは未だに会うことが出来ないし、YAS Uさん達パーティーのメンバーを巻き込むわけにもいかない。現状で頼れるのはGillyさんだけだ。今夜、彼が持ってくる情報に期待することしか出来ない。他力本願だけど。

逆に俺が今出来ることと言ったら、自分のキャラの強化と、仲間のプレイを止めさせることくらいだな。でも彼らには何て言えばよいのか……。全く正反対のことだし。

「ねえ、聞きました？ 今朝……」

「あらあ、怖いわね……」

「また派閥内で争いが起こるのね…… とつと政權変わった方がいいんじゃないかしら……」

おーい、食堂のおばちゃんたち。世間話は俺に飯をついでからにしてくれー

しかしなんだろう。派閥とか政權とか。政治の話？

「あつ、学生さん、ごめんなさい。待たせちゃって」

もう50代後半のベテランのおばちゃんが慌ててご飯と味噌汁をつぐ。笑顔交じりのため、反省の色があるのかはやや疑わしい。毎日通ってるし、すっかり顔見知りになってるせいもあるのだろう。

「何かあったんですか？」

「あら、学生さん今朝のニュース見てないの？ 野口首相が意識不明の重体になってね、ついさっき亡くなったって」

……！？

「就任してまだ一ヶ月も経ってないってのにねえ…… この国はどうなるのかしら」

「え、あの……！ 死因とか解かりますか！？」

おばちゃんは何故そんなことを尋ねるのかと、不思議そうに俺を見る。

「総理は何で亡くなったんだっけー？」

「心臓発作みたいよー？ ニュースによると」

「あ、そ、そうですか……」

いかんいかん。流石に総理大臣がネットゲームなんてやらんだろう。ちよつと過敏になり過ぎているようだ。総理の年も年だしなあ。心臓発作なんて起こっても不思議じゃないし…… うん。

「はい、おまたせ」

「あ、どうも」

「そうそう。最近は脳梗塞とかも流行ってるらしいわよ。しかも若い人に。あなたも気をつけなさいよ。水分補給はしっかりとね」

「はは…… 気を付けます」

食堂のおばちゃんまでが知っているということは、もう既に結構な数が亡くなっているということか……？ ここ数日で若い人ばかりが朝寝たまま脳梗塞で死亡なんて、明らかに不可解だもんな。だが、そこからこのゲームのことに繋がるのかという…… 期待できない。

元々そこまで量の多くない定食の筈が、今日は中々喉を通らなかった。自分が死ぬかもしれない状況に身を置いているのだ。なんか病気とかと違って実感湧かないのが余計に怖い。これが全て夢であればいいのにも思う。

……これから親に電話しよう。

……

……

家までの帰り道、道端で新聞の号外が配られていた。『野口総理急逝！ 後任は井沢氏か後原氏が有力か？』という、でかでかとした見出しが目を引く。ついこの間まで、新総理は誰かとか散々話題になっていたというのに、決まった途端にこれだ。本当にこの国の政治は大丈夫か？ 国会とかまともに機能してんのかよ。いつもいつも権力争いのニュースばかりで、肝心の行政に関する話題はない。頼むから今の景気何とかしてくれよ。それがあんならの仕事じゃないのか？ 国民の税金で食ってるんだからさ、頼むぜまったく。

って、今こんなことを考えてもしょうもないか。まずは自分の命が最優先だ。

俺は号外の新聞をバッグに押し込め、家路へと急ぐ。

家へ帰るなり、即パソコンの電源をオン。そしてゲームにログイン。俺も俺で酷い生活してるよな。今となっては生き残るためだから仕方ないけどさ。

さて、まずは知り合いのログイン状況を確認。誰か…… 誰かいなか……？

……いた！ ×ぽんさん！ よかった、無事だったんだ！ 早速チャットコールを送ろう。伊藤のことも伝えなきゃならないしな。

×ぽん（Lv. 39） 「シエルさん！ ちょうどよかった。聞きたいことがあるんだけど」

シエル（Lv. 30） 「如月の事ですね？」

×ぽん 「あいつは無事か？」

シエル 「月曜の朝、亡くなりました。脑梗塞で」

×ぽん 「やっぱり駄目だったか……」

シエル 「事情はもう尋ねる必要もないですね？」

×ぽん 「君もあのおかしな夢を？」

シエル 「はい。サイトさん達は無事ですか？」

×ぽん 「ああ、サイトもAseliaも何とか生きている」

シエル 「それはよかった」

×ぽん 「事情を知っているのなら話が早い。俺達に協力してくれないか？ 仲間多い方がいい」

互いに怒涛のチャットであったが、ここに来て俺の手が止まる。昨日のGillyさんの言葉を思い出したのだ。

— 仲間を作るのはいいが、それによって生じる弊害もある。まだ謎が多い段階では、誰かの犠牲が教訓になって自分が助かることもありうる……

……確かに、これも現実的な意見だ。けど、今ここで下手に断ると、かえって疑いの目で見られるんじゃないだろうか。この人たちも日曜の夜からゲームの中の世界に入っているはずだ。人数が多い分、それだけ多くの情報を持っているだろうし。

シエル「もちろんです。今は少しでも情報が欲しいので」

×ぽん「ありがとう。それじゃ今夜、向こうの世界の宿屋『アートマー』に来てくれないか？ 俺達はずっとそこにいるから」

シエル「わかりました」

Gillyさんのことをこの人達に話すべきか悩む。非常に頼りになる人だが、あまり人と組みたがろうとしなさそうだしなあ。とりあえず今夜はまだ言わないでおくか。

Gillyさんと詳しい時間の約束をしていないのは失敗だったかな。でも向こうの時間の経過なんて解かないし。サイトさん達は宿にずっといるって言うてるし、先にそっちから行ってみよう。

仲間を作ることによって生まれるしがらみか……
あまりあって
はほしくないけど……

23話 やれるだけのことはやっておかないと（後書き）

本作に出てくる政治家や団体は、実在する物とは一切関係ありません。

ええ、関係ありませんとも。

24話 手を組むべきだとは思いますが

「よし、今日はヤーウエの森に行くでしょう！」

「「おー！」」

「あの、すみません。私はパスで……」

火に水を注ぐ発言だと言うことは重々に理解している。というか、ソーサラーの俺がいないとみんなが探索出来ないことも。だが仕方あるまい。己の命は何物にも代えがたい。

今日も気づけばモナドの酒場の前。しかしこの世界に来る毎にここに連れて来られるような。ゲーム内でもいつも待ち合わせに使っているせいだろうか？ まあいい。問題はこの仲間たちからどうやって抜け出すかだな。

「どうしたんだシエル。今日は行けないって」

「今日はちょっと気分が悪くて……」

THE・仮病。古典的な手段だが、一番手っ取り早い言い訳だ。気分が悪そーな顔を必死に形作ってみる。どうだ、こんな状態の女の子を危険な冒険には連れていけまい。

「風邪でも引いたんですか？ 軽い病気なら私が治しますよ」

空気読んでくれよまるちーさん。ていうか何？ プリーストって

風邪とかも治せんのか？　ますます医者という存在が涙目じゃないか。

「いや……　その……　回復魔法で治るものじゃないかなー……
なんて……」

俺が次なる手は、と困り込んでいると、YASUさんが何かに気づいたかのように手をポンと叩き、少しにやついた顔になる。おいおい、何だ？　嫌な予感がするぞ。

「マルチー　多分あれだよ。あの日」

「あの日？」

「ああ、シエルさんもそんな年頃だしね」

隣で見ていたPon太さんまで、何か納得したかのように腕を組んでうんうんと頷く。

あの日？　あの日ってなんだ。何で申し訳なさそうな目で見るんだまるちーさん。そして、何で微笑ましい目で見るんだYASUさんにPon太さん。

「女の子は大変だよなあ」

……ああ、あの日ですね！　女の子の日！　その手があったか！　女子って体育の時間の時にもやたら見学してたもんなあ。高校時代の話だけど、あの中には絶対わざとサボっている奴もいるだろと思ってたもんだ。……いかん、これ以上は女性の方から叩かれる。

「あの、だから今日は……！」

「解かったからそんな顔真っ赤にしなくても」

してねえよ。つーかYASUさん微妙にキメェよ。女の子の視点に立って解かったが、こういう時の男の視線って本当に気持ち悪い。こんな風に見られていたとは。これから気を付けよう。

「とにかく今日は宿屋でゆっくり休みます……」

「お大事にー」

結果オーライ……か？ とりあえずは離脱成功。毎回ダンジョンに行く度に、手足とかふっ飛ばされてたら命がいくつあっても足りないっつーの。毎晩あんな目にあっていると、その内自分の中で慣れてきそうなのもつと怖い。

今日はいいけど明日は何て言って抜けようか…… いや、また明日考えよう。っと、Gillyさんとの約束もあるけど、味方にこういった手前先にサイトさん達の所に向かうとしよう。

さて、俺はそこそこに急ぎつつ、宿屋『アートマー』へ。

現バージョンは試験版だということで、やたら部屋数の多い宿屋でしかないのだが、その内課金制でクラン用の個室としての役割を果たすようになるだろうと言われている。体力の即時回復に、クラン共有の大型倉庫などの便利機能が期待されている。

まあ、あくまでもプレイヤー達の予想だ。それに課金となると俺には縁が無い。

おっと、そーいや部屋の番号知らないな。フロントに聞いてみよう。

「サイト様御一行ですか…… 310号室にお泊りですね」

ゲーム上ではこの人、「宿屋アートマーへようこそ！ お泊まりは〇〇ゴールドになります（以下選択支）」くらいしか台詞無いのに。こっちの世界では充実した仕事生活を送ってそうだ。しかもゲームと違って、宿の中では多くのスタッフが働いている。何故か全員日本人顔。これも気になるころだなあ。

建物自体も木造と漆喰の造りが何とも言えないレトロな雰囲気を感じさせている。現実世界では隠れ家的宿（笑）とか銘打たれて宣伝されてそうだ。歩く度に床が少しきしんでいるような音も味があるし。地震大国の日本では難しい造りだ。

310号室……あったあった。3階は団体様用の客室で俺もあまり行ったことはない。利用するにしても個人用の2階の部屋だったしな。

「こんにちはー！ シエルですけどー！」

3度ノックして名前を告げると、中から鍵の開く音がある。ドアが開けられると、そこに立っていたのはサイトさんだった。3日も経っていないのに随分懐かしく感じる。

「よかった、話には聞いていたけど君も無事だったか」

「無事ってほどには…… 何度か死にそうな目に会ったし。それに伊藤…… 如月の奴だって」

「彼に関してはその…… すまない。俺達がこの世界の事をあまり深く考えて無かったばかりに……」

俺としては互いの無事を喜ぼうとするつもりだったのが、サイトさんはかなり申し訳なさそうな表情をしている。この世界のことか。きっと伊藤の死に責任を感じているのかもしれない。だが、問題はこの状況なのだ。右も左も解からない初日に命を落としたとなればこの人達を責めるわけにもいかない。

「サイト、謝るにしても立ち話は何だろー？」

部屋の奥から男口調の女性の声が聞こえてくる。

「ああ、悪い。さ、とりあえずは中に……」

誘われるがままに俺は中に入る。この世界での頼れる仲間がいるという希望は、胸中に留めていたGillyさんの嗜めを忘れさせていた。

25話 それがベストと言うのなら

3階の部屋の内装は、いかにも欧風と表現出来るような木造建築様式となっている。正直2階の部屋を広くしただけなのだが、やっぱり実際に入ってみると高級感溢れる造りのように感じる。広々とした部屋のリビングの一角には約1m四方の木製テーブルがあり、それを囲むようにソファが置かれている。俺はサイトさんに促され適当な席に座った。

部屋の中にいたのは顔見知りのサイトさん、×ぼんさん、Aseliaさん。そして今回初対面となる、このパーティー本来のソーサラー役のいにいさんだ。

「はいこれ。良く解かんないけど紅茶っぽい飲み物よ」

席に座るなり、にいにいさんが俺に茶を注いでくれる。同じ女性アバターのソーサラーではあるが、三角帽にぱっつんショートのかにも魔女っ子な感じの俺とは異なり、にいにいさんは赤髪ロングヘアーの大人びた女性の容姿をしている。好みは人によりけりだとは思うが。

「何にせよ、仲間が増えるといいもんだな。こっちも人手が欲しいしよ」

Aseliaさんが奥のベッドの方で、寝転びながら何やら本を読んでいる。おそらく俺と同じで中身は男なのだろうが、折角の青髪の美人女騎士のアバターが色々と台無しだ。

「Aseliaさん、一応体は女性なんですからその格好はちよっ

と……」

「ゲームの中なんだし気にするもんじゃねーだろ」

「サービスするのは結構ですけど、乱暴されても知りませんよ？」

Aseliaさんの女性の体らしからぬ無防備な体勢に、×ぽんさんとにいにいさんが苦言を呈す。そういえば、この体であんなことやこんなことも出来ちゃうのだろうか。いや、今の俺はいたいけな少女の体だ。つまりはやられる側。嫌だ、絶対に嫌だぞ。男にやられるなんて。童貞より先に処女を散らすなんてまっぴらごめんだ。……でもまあ、G行為くらいはいいかなあ。折角女の子の体になったんだし、やらないともったいない気さえする。今度トイレとか風呂とか、一人の時にやれないだろうか……

「あの…シエルさんは、どっちなの？ 男？ 女？」

にいにいさんの問いに思わず紅茶っぽい飲み物（味はほぼ紅茶）を吹きだしそうになる。やっぱりそれ聞かれるのか…… ゲーム内での体の性別はバラバラだとはいえ、中身がちゃんと意識持つてゐるからな……

「中の人は男です。何かすみません」

「ええー シエルさんもー？」

「まあそんなとこだろうと思ったけど。残念だったねー にいにいさん」

困ったように溜息をつくにいにいさんを尻目に、Aseliaさ

んはベツトの上で笑う。

「結局本物の女は私だけか……」

「あ、にいにいさんってリアルでも女性なんですか……」

あー そうなると確かに気の毒だ。女1人に男4人。これはちょっと不安になるかも。肉体的には女3人、男2人だけど。乱暴を働くにしても…… 結構いいシチュエーションになるかもしれない。

「女性プレイヤー結構いるって聞いたんだけどなあ……」

「現実云々の話は抜きにしようよ。それよりもこれからの事を話しあわなきゃ……」

いいまとめだ、×ぽんさん。プリーストは大体こんな感じなのか。そうそう、俺がここに来たのは自分の身を安全にするためと、少しでもこの世界に関する情報を得るためなのだ。途中で煩惱が混じったので、話が変な方向へ向かってしまった。

「それじゃあ、俺……あ……やっぱ俺の方から知ってることを話しますね。情報量はそっちの方が多いでしょうし」

「ああ、それは助かるよ」

もう中身は男って言っちゃったし、一人称も俺でいいや。

とりあえず俺は自分がこの世界について知っている限りの事を話す。昨日のGillyさんから聞いた仮説、俺自身の考えなどなど。ひとしきり話し終わった俺の目に飛び込んできたのは、皆が一様に目を丸くして口をぽかんと開けている表情であった。

「あ、あの…… 一応これで以上ですけど…… 何か……？」

「いや、その…… 教えてあげられることあんましないなーって……」

にいにいさんが苦笑いしながら、お茶のお代わりを注いでくれる。気を利かせてくれる人だ。アバターと相まって可愛い。現実世界ではどんな人なんだろう。

「こっちの世界に取り込まれる条件とかあまり考えてなかったな。レベルか……」

「確かに、僕たちの他に取り込まれているのが確認出来た人たちは、みんな古参の人たちでしたね」

「ああ、それにレベルが関係しているとなると、古参メンバーの中で夕風さんだけが取り込まれてないことも頷ける。確か彼はまだレベル20台だったはず……」

おいおい。何だか話が予想外の方向に転がってないか？ こちらが情報を貰うつもりだったのに。いいんだけどさ。

「シエルさん、これだけの情報は一人で集めたんですか？」

バスケとかやってそうな感じの爽やかな風貌をした、赤髪の青年剣士アバターのサイトさんが真剣な目でこちらを見て来る。ゲーム上だと気の抜けた感じの人だっただけに、そのギャップにやや戸惑いそうになる。

「いや、他に俺の知り合いでこっちの世界に取り込まれた人がいて、情報の大半はその人から……」

「その人の名前は？」

「Gillyさんって人です。シーフの」

「Gilly……？ 誰か知ってるか？」

皆一斉に首を横に振る。つかマジかよ。

一応彼と知り合いになった経緯も皆に話したが、今度はまた違った雰囲気での話に聞き入っているようであった。

いや、何でもみんなそんなに真剣なの？ もしかして話しちゃいけないことだったか？

「高レベルのシーフなんて聞いたことないぜ」

「シーフってそんな使い方あるんだ……」

「シエルさん、今からじゃなくてもいいから彼に会うことは出来るかい？ ぜひ彼にも協力してほしいんだ」

……うわ、参ったなあ。

ソロプレイヤーを信条としてるっぽい人だとは思っていたが、ここまで知られていなかったとは。確かに知れば興味持つわな。他の人の口から聞けばなおさらだ。

今日会うことを話すべきだろうか？ 彼はあまり仲間を作りたいくない感じだったけど……

俺の独断でみんなの仲間に入れるのはどうなのだろう。

迷う。

26話 仲間が増えちゃいるんだけど

「それはちょっと難しいです……」

しまった、ちょっと長く考えすぎたかな…… かえってみんなの不信感を煽ってしまったかもしれない。

「どうしてだい？」

当然の如くサイトさんも食いつく。うん、当然の反応だな。

「彼はその、あまり人と組みたくなさそうな感じなんです。それに次はいつ会えるかも解かんないし」

「ふーん……？」

うわ、すごい妙なというか、疑わしい顔をしてるよみんな。やっぱりG i l l yさんのことは言わない方が良かったか？

「いいんじゃないんですか？ それは個人の問題でしょうし。その内会えたら誘うことにしましょう」

×ぼんさんが話題を止める。つくづく場をまとめるのが上手い人だ。内心はどう思っているのか解からないが。他のみんなは軽く頷くだけであまり納得しているように見えない。

「ま…… どこにいるのかも知らないなら仕方ないよな。少なくともシエルさんは協力してくれるんだろうし」

「はい。俺は是非とも」

俺が即答すると、周りの緊張が僅かに緩んだ気がした。今まで立ちっぱなしだったサイトさんもソファーに腰を下ろす。

「じゃあ、今度は今の俺達のことを話そうかな」

「お願いします」

にいにいさんが席を立ち今度はどこからか電気ポットを持って来て、他の二人にも茶を注いであげる。だから妙な所でテクノロジが発達しているよな、この世界。ゲームの中だからそこは御都合主義…… という事でいいのか？

「今の俺達の仲間の数だが、総勢で30人くらいってところだ。当然他にもこの世界に取り込まれている奴らはいるだろうが、今のところ合流出来ているのはこれだけだ」

「30人ですか。多いような少ないような……」

「中には大勢で組むのを嫌って、それまでのパーティーだけで探索を続ける輩もいるからなー そのGillyって人も大凡そんなクチだろう」

A seliaさん…… 先程の俺への対応のフォローのつもりなのだろうか。

「でも、何でもみんなで協力しようとしなくていいんでしょうか。常に命の危険があるわけだし。単独や少人数での行動にはあまりメリットが無いような気もするんですが……」

ここで自分自身の正直な疑問をぶつけてみることにする。その理由の一つはGillyさんから聞いているが、彼らがそのことに對してどう思っているのかも少し気になったのだ。

「君もさっき言った通り、賞金一千万円の特殊クエスト……『A・R・クリスタル』がこの世界に存在していると思っっている人たちが結構いるんだよ」

「それを狙うために？ たかだか一千万円じゃないですか。自分の命に比べたら……」

「私もそこまでして欲しいのかな……って思うけどね。でも賞金だけじゃなくてね、この世界を楽しんでいる人達がいるのも事実なのよ。だってほら、現実と違って色々凄い力を持つてるじゃない。冒険者ってだけでハクが付くから、異性だって口説き放題だし」

「どうなんだろう。本当に楽しめるのかこの世界？ 女を口説くにしても死んだらどうにもならないんだぞ。考え方があまりにも刹那的すぎやしないか。」

「みんな現実から逃げたがってるんだよ。どっちか選べたっていったら当然充実した方を選択するだろう？ 現実では自分の命を賭けて得られるものなんて、たかが知れているしね」

サイトさん、こっちに来てから言っていることが全体的に暗いよ……

でも、そう言われちゃうとな。俺はまだ大学の一年だからいいけど、進学や就職に失敗した人達とかは本当に毎日が辛そうだよなあ。もちろん仕事している人たちは言うまでも無い。自分が享受する現

状への不満、そして将来への見えない不安…… 現実社会では自分の辛苦からどれだけの対価が生まれるのだろうか。今の俺にはまだ解からない。

「言うなればこの集まった30人というのは、まだ現実というものに未練がある人達ってことです」

「そうなんだよなー 俺も……なんだよなあ」

×ぼんさんの例えは結構的を射ているのかもしれない。俺は今まで現実に絶望するほどの苦難を味わって来たわけじゃないしな。受験勉強もそんなに頑張ったつもりはない。逆に言えばそれだけ当たり障りのない、つまらない人生を送って来たということなんだけど。それとサイトさん。さっきから負のオーラ出しまくりだよ。大丈夫か？

「……サイトさんは置いといて、とにかく、この集まりで協力して何とかこの現象を食い止める方法を探しているんです」

「食い止めるって…… 何か方法があるんですか？」

「それがさっぱりだから今こうしてこの世界について調べているんだよ」

ああ、なるほど。A s e l i aさんがさっきから本を読んでいるのはそのためか。体勢はともかくとして。

「もちろん現実世界からの行動も色々試してみてるのよ。でも他の人に話しても信じてくれないし、直接運営に取り合っても相手にされないし……」

「一度みんなで製作会社に乗り込んでゲームを中止させようって話もあったんだが、速攻で通報されて提案者が書類送検にあったしね。現実には証拠が存在しないから外部から働きかけるのがほぼ無理な状況なんだ」

だからゲームの中から何とか出来ないかと試みているわけか……しかし、そんなこと本当に可能なのだろうか？

「A・R・クリスタルさえ見つければ、こんなふざけた現象も止まるかもしれないって話も出ている。それでダンジョン探索に精を出す人たちも……」

「みなさんはどう思っているんですか？」

「確証の無い話に命は賭けられない……かな」

良く言えば慎重。悪く言えば臆病、か。でもまあ、当然だな。

「だから今はとにかく安全策を取っている。この世界に来たらダンジョンなどには向かわない。モンスターとの戦闘も出来るだけ避ける。情報収集も基本的に町中だ。ゲーム画面に比べると人は腐るほどいるからな。実際に中に入ってみるとこの世界もめちゃくちゃ広いし。少しでも人の手を借りたい状況だよ」

「となると、今はみんなで手分けして世界を回っている状況というわけですね？」

「そういうこと。その都度こちらの世界で全員が集まらなくてもいいように、新しく発見したことがあったら、攻略サイトの専用掲示

板に書き込んでいる。パスワード制のな」

ここでも掲示板か。しかもよりによって攻略サイトの。

「管理人の夕風さんを説得して専用の奴を作ってもらったんだ。他のSNSじゃやり難くてな。警察沙汰にもなったから、どこから目を付けられているかわかんないし」

それが大勢の一般の人が利用するSNSは避けた理由か。個人で作ったWebサイトなら、監視の目も届かないだろうということか。

しかし、警察沙汰にまでなったのは初耳だった。こんな状況になったのだから何が何でもゲームを止めようとする気持ちは解かるが……焦って動いたせいで、その当人にとっては更に事態が悪くなってしまった良い事例だ。

こんな異常事態だからこそ、冷静な状況判断と慎重な行動を心がけないといけない。……こう考えられるのも犠牲者という名の先駆者がいるからなんだよな。昨日のGillyさんの発言を心で理解出来たが、同時に俺を後ろめたい気持ちにさせる。

26話 仲間が増えちゃいるんだけど(後書き)

少しずつ1話あたりの文字数が増えてくるというマジック。

27話 こんな仲間で大丈夫でしょうか

「掲示板のパスワードは半角で『y u g i r i』だ。これは絶対に現実世界、ゲーム画面上でも人に教えないでくれ。この世界の中でしか伝えてはいけない」

もう表向きには出せない話題だし、これは当然の措置だな。

この掲示板は新しい情報を投稿する場でもありながら、各人の生存報告も兼ねている。これは毎日絶対に行うこと。洒落にすらなっていない本当の意味の生存報告なのだ。書き込まなかったら死んだと見なされる。

「教えてあげられることはこれくらいだな。他に何か聞きたいことがある？」

「えっと…… 皆さんはこれからどうするつもりですか？」

「まあ…… 各々に分かれて町で情報収集かなあ。のんびりしたいなら、ここで寛いでいいけど」

×ぼんさんはやや決まりが悪い表情になる。つーか、いいのか？ そんなゆるくしちやって。さっきまでの真剣な雰囲気はどこへやら。

「人に直接迷惑がかかるようなことをしなければ、何をしても特に咎めることはないよ。俺達にそんな権利も無いしね」

「はあ……」

と言うことは、別にやりたい放題やってもいいわけね。怠けちゃってもそこまで怒られないと。足を棒のようにして情報集めするのも個人の意思ってわけか。

迅速な問題解決のためには、統率力のあるリーダーとキッチリとした規則があったほうが、効率はいい気がするけどなあ。この人達の考えもあるんだろうし意見しないでおくけど。

「それとシエルさん、ちよつといいかな」

「何でしょうか？」

サイトさんが再び神妙な顔つきになる。

「如月さんのことなんだけど……彼の家族とかには会った？」

正直、伊藤の奴とそこまで仲が良い関係かといわれるとな。友人であることには間違いないけど、あいつの家族構成とかも知らないし。そこまで深く踏み入った関係ではない。まだ知り合って長くもないし、このくらいの付き合いの方が互いに気楽だからと思っている節はある。

「病院に運ばれて説明を受けただけで、家族には会ってません。後は警察とかに任せてますし」

「サイト、まだ気にしてるのか？」

奥の方から Aseliaさんの不快そうな声が聞こえてくる。彼が気にしてるのって、伊藤の奴が死んだことに関してか。

「仕方ないですよ。こんな状況じゃ……」

サイトさんは首をゆっくり横に振る。

「いや、違うんだ。君とは多分違って、俺達は5人まとめてこの世界に連れてこられたんだ。始めのうちは、夢かもしれないけどみんなしてゲームの中に入れたと浮かれていてね。そして調子に乗って探索に行ったら……」

伊藤がやられたというわけか。

「それだけじゃない。俺達はここをゲームの延長だと思って、結果的にあいつを見殺しにした。あの時真っ先に助けに向かっていれば、彼は死なずに済んだかもしれないのに…… 本当に、すまなかった……」

「サイトさん、俺に謝られたってどうしようもないし、あなた達を恨むなんてのも筋違いもいいところです。それよりも、みんなで今の状況を何とかする方法を探しましょう」

頭を下げるサイトさんに少し強めの口調で言ってみる。

伊藤が死んでも別に悲しいとか泣くほど辛いとは思っていない。それよりも自分の命をまず何とかしたいから。自分でも薄情な奴だとは思う。身近な人が死んだけど、全く実感が湧かないのが正直な所だ。流石にこれは人に言えないけど。

×ぼんさんもサイトさんの肩に手を置く。

「……ああ、ありがとう」

まだ割り切れていないとわかる表情だ。優しい人ではあるんだろう。だが、人の死を引きずるとロクな目に合わないってのは世の常だから何とかしてほしいな。

「とにかく、気に病まなくていいですよ。……俺はこれから町へ行って情報を集めて来ます。宿もこの2階の部屋を使いますから」

「ああ、俺達はずっとこの部屋を使うから、何か急な用事があったらここに来てくれ。でも、情報交換は出来るだけ現実の掲示板でやったほうがいいかな。そっちの方が効率いいからね。全員に伝わるし」

「はい、そうしますね」

俺はそう言って彼らに見送られながら部屋を出る。

さて、これから…… Gillyさんに会いに行くか。約束の場所にまだ来てなかったら、適当に町をぶらつこう。部屋を借りて一人であんなことやこんなことをやってもいい。

何だかんだ言って仲間が増えたことで、この世界に対する不安はかなり軽減された。彼らの言う通り、町で大人しくしておけば死ぬ確率はぐっと少なくなるのだろう。それ以外は…… ゲームの世界なのだ。

俺はフロントで2階の適当な部屋を借りる。部屋番を伝えるのは後でいいだろう。

それにしても普通に仕事してくれる宿屋の主人だなあ。不自然さが全く無い。

外は既に陽が傾きかけていた。

ゲーム画面上では単なる飾りでしかない民家も、この世界では各々が立派な役割を果たしている。重たそうな荷物を担いで運ぶ男。夕飯の準備をする女性、道の真ん中で玉蹴りをして遊ぶ子供たち。この世界にはこの世界の人の暮らしが確かにある。みんな日本人顔がなのが気になるけど。

……そして俺はふと足を止める。

目の前の前の雑貨屋で、若い男が女の子達と話しながら陳列棚の整理をやっていた。普段なら「リア充もげろ」とか言いたくなる光景ではあるが、俺はその男を一目見た瞬間に我が目を疑う。あの整髪料で軽く立たせた暗い茶色の髪。長身痩躯の体型に女性受けしそうな爽やかなマスク。あれは、間違いなく――

「内山!？」

思わず俺は声を出しながら近づいてしまい、周囲の視線を一手に浴びる。だが彼は特に気にしていない様子で、営業スマイルを崩さぬままこちらに話しかける。

「何だいお嬢ちゃん？ お使いかい？」

容姿だけじゃない。声、あと多分性格まで同じクラスの内山そっくりだ。

「あの、あなたのお名前は!？」

「ん? ナオトだけど」

ナオト…… 確か内山直人…… だったな。あいつのフルネームは。こんな偶然があるのか?

「内山、俺だ。同じクラスの高瀬だけど、わかるか?」

「……変なこと言う子だなあ」

内山そっくりのナオトという男はあからさまに戸惑っている様子だ。俺がこんな外見だからか? いや、それでも高瀬という名前を聞けば何かしらの反応があっという間ははずだ。

「何なの、この子?」

「女の子が俺って言うのは良くないよ」

店先の女の子たちも俺の事を不思議そうな目で見る。よく見るとこの達もどこかで見たことあるぞ。もちろん現実世界でだ。一体どういうことなんだ?

でも流石に居た堪れなくなったので、俺は軽く謝ってその場を跳び出す。

例の町の郊外に向かって走りつつも、俺の頭の中は新たな疑問で錯綜していた。この世界のモブキャラが皆日本人に見えるだけでなく、現実世界に瓜二つの人間も存在する。容姿も名前も性格も同じだなんて、たまたまで済ませていい問題なのか? もしかしてあいつもこのゲームをやっているのだろうか。

いやいや、待てよ。だったらゲームの中のアバターの姿で入っている筈だ。取り込まれていない人のアバターは確かに存在するわけだし……となると、あのナオトという男は一体何だったのだろうか？　もしかして現実世界の人がそのままモブキャラになってるか？　どちらにせよ、これはみんなに教えるべきだろうな。

28話 これが恐れるべきものでした

新たな疑問を抱えつつ、俺は待ち合わせの場所に辿りつく。

空は薄暗くなっているけど、まだGillyさんは来ていないようだ。昨日は結構遅い時間に会ったし、もう少し後になって来てみるかな。今から町に戻って情報収集に勤めるか。酒場はパーティーのみんながいるかもしれないので避けよう。となると、どこに行くべきか……

俺は一つ試してみたいことを思いつき、町の道具屋に向かう。夜の町を歩いている人は冒険者が多い。皆「この世界」でのクエストを終えて一杯引っかけにやって来ているのであろう。逆にこの時間帯は、日本人のモブキャラは割と少ない感じがする。

道具屋の中はゲーム画面とは比較にならないほどの品物で埋め尽くされていた。店の広さは体感的にゲーム上での3倍、品数はそれ以上に感じる。見たことのない道具も沢山あって、品定め時間もかかる。この中に『A・R・クリスタル』があれば本当に笑い物だ。

「お嬢ちゃんも好きだねえ。そんなガラクタの山をじっくり見ちゃってさ」

自分の店の売り物をガラクタ扱いはどうなのよ、道具屋の主人ハンスさん（42）。確かにこの店はゲームでも役に立つかどうか微妙なアイテムばかり取り扱っているんだが。薬屋は別にあるし。

「もしかしてお嬢ちゃんも『赤いクリスタル』とやらを探しているのかい？」

その言葉を聞いてはつとする。考えることは皆同じなのだろうか。少なくとも『A・R・クリスタル』の話題は、意識が取り込まれていないパーティーの仲間からは出なかった。ゲーム画面ではあれだけ盛り上がっている話なのに。リアルマネーだからこっちの世界の人には興味無いのだろうか。

「そういう人が以前にも来たんですか？」

「う、ん？ 最近になってちょこちょこ増えたなあ…… ウチの店の客は元々モノ作りを生業としていた人がほとんどで、冒険者…… しかも戦士や嬢ちゃんのような魔法使いの客は珍しいんだよなあ。みんな口々に『真っ赤なクリスタルはないですか？』って聞くし」

こんな状態になってもやっぱり気になるんだろうな。ゲームの中に自分の理想があるとは言え、現実世界でも生きていかなければならない。一千万円もあれば、現実での暮らしもぐっと楽になるだろう。質をあまり問わないのなら尚更だ。

……俺がここに来たのは、そのことを確かめるためでもある。この世界にその『アイテム』があるという可能性。この世界での行動で賞金が手に入る可能性を調べるため。

「おじさん。これとこれと…… これをください」

「お、おう。まいど。魔法使いのお嬢ちゃんがこんなもの買うなんて珍しいな。えーっと、全部で5400Gだな」

「はい」

俺が購入したのは「龍のあばら骨（8本）」、「森クジラの髭」、「謎の塊（サンマイト遺跡産）」。どれこれも用途不明だが、一応ゲーム上にも存在する。おそらく合成用の素材なんだろうけど、ソーサラーの俺にはまず縁の無いアイテムである。だが、これでいい。

結構時間も潰せたし、もう一度待ち合わせ場所に向かおう。そう思って店を出た瞬間に人とぶつかってしまう。しまった、自分の実験に気を取られて、周りを見て無かった。

「あ…… すみません」

「……気をつけな」

白銀の鎧に身を包み、神秘的な輝きを持つ銀髪の男。一言で言うとかっこ強そうだな。男はこちらを軽く一瞥すると、そのまま道具屋の中に入って行く。今の俺だから解かるけど、装備からも強い魔力的な力を感じた。サイトさんも戦士^{フレイター}としては相当強い部類に入るんだろうけど、この人はそれ以上なんじゃないのか？ 出ているオーラが全く違った。

ということは、この人も取り込まれた人なんだろうか。話しかけ…… ないほうがいいのかな？ 人と組むのを嫌がっている人もいるらしいしな。ダンジョン帰りなのか血の匂いもするし。当然なんだろうけど、あまり好きで嗅げる匂いじゃない。

話しかけるのはあからさまにうろたえている人達だけにしよう。

さて、再び町の郊外の草原に到着。何故かこの世界にも存在する

時計で時刻を確認するともう夜の11時半。良い子は寝る時間だ。でも俺は悪い子、機会があったらこの体であんなことやこんなことを…… グヘヘ、なんて考えているくらいだからな。

ダンジョン帰りの人たちもちよくちよく見かけるけど、あまり俺の事を気にしてはいないようだ。装備からしてもまだ低いレベルの人達なんだろう。……もしも、意識が取り込まれていない人たちが死んだら一体どうなってしまっただろう。これも気になる所だな。実証はしたくないけどさ。

しかしGillyさん…… いつ来るんだろうな。

ふぁ…… 眠い。

いかん、ここで眠ったら現実で起きてしまう。変な話だが過去二回、現実で目が覚めたのはこの時なのだ。時間経過もありうるのだろうか。とにかく寝てしまったらGillyさんには会えなくなる。ここは何としても睡魔に勝たなくては、いや寧ろ負けなくては言うべきか？ 現実基準で考えて。

うとうと。

こっくりこっくり。

コーヒーとか眠○打破が欲しい。昼にあんだけ紅茶っぽいもの飲んだのに。カフェインレスだったのだろうか。しかし眠ることでの世界から抜けることができるのなら、睡眠薬の様なものがあれば緊急脱出が可能なのかも……。これも……。試して……。みたい……

.....

.....
ぐう。

.....

つんつん。

.....

つんつん。

だ〜れ〜？

「お嬢ちゃん、こんな所で寝ると風邪ひくよ？」

女性の声だ。ぼんやり目を開けると声のイメージ通りの茶髪のショートヘアーのアーチャー。装備的にはまだ取り込まれているようには見えない。

「うう、どうも……」

いかんなあ。今日はもう諦めるべきか……

「それと、さっき男の人からこの手紙を渡すように頼まれたんだけど」

ふえ？ 手紙？ 男の人ってまさか。

「もしかして、頭にバンダナ撒いたシーフの……」

「知り合いだったの？ なら良かったわ。てっきりラブレターかと思っただけど」

アバターの年の差的に犯罪だよそりゃ。アーチャーのお姉さんは俺に手紙を渡すと、そのまま町の方へ歩いて去ってしまった。

どれどれ、手紙の方は…… G i l l y って書いてあるのが見えるな。周囲は満天の星空と遠くの町の民家の光によって僅かに照らされており、文字が何とか読めるくらいの灯りはある。肝心の中身の方は……と。

『シエルへ

まずはこの手紙を読む前に周りに人がいないか確認しろ』

肩がすくみ上がる思いで、俺は辺りをキョロキョロと見渡す。……うん、誰もいない、かな。身を隠すにもだだっ広い平原だし、大丈夫だろう。いきなりこんなこと書かれるとこえーわ。宿に戻ってもいいけど、本文は短いしすぐに読んでしまおう。

『なぜこんな手紙を渡したかというと、お前が跡をつけられていたからだ』

跡？ マジで！？ つーか一体誰が！？

『こちらでも色々と重大な事が解かったが話は明日にする。武器屋「アニメス」の裏で待ち合わせだ。装備は変えてこい。それと明日のニュースは良く見ておくことだな』

……うーむ。何と言うか…… やっぱり色々凄い人だな、Gillyさん。周りがよく見えていると言うか。対応が柔軟過ぎる。しかしニュースって一体何があるのだろうか。

『最後に言っておくが、お前に協力しているのは、お前が俺の事を知っているからだ。あまり他の奴に俺の名前を出さないようにしてほしい。それじゃあな』

まさかサイトさん達に会っていたのを知ってるのかな、この人。もう盗賊を越えて、スパイのレベルだ。少なくとも敵に回したくない。彼の忠告には素直に従うとしよう。

しかし、Gillyさんは何故そうまでして人と組みたがらないのだろう。俺に協力するのは自分の存在を知っているから…… 早々に口止めを狙ったことだろうか。彼の考えていることは良く解からない。クリスタルを狙っているわけでも、この世界を楽しんでいるとも考えられない。純粹に助かろうと思うのなら些か人を警戒し過ぎではないだろうか。

だが彼の言う通りなら、何かしらの理由で俺をつけまわしている奴もいるということだ。おそらくは同じくこの世界に取り込まれた人間。そのことも気になる。出方を窺うにしても、つけるべき人はもっと他にいるはずだ。何だかどんどん無駄に疑問が増えて行っている気がするな……

俺は今ひとつスッキリしないままの頭で、宿屋へ戻ることにした。

28話 これが恐れるべきものでした(後書き)

ここまで来ると一話当たりの文字数はどうでも良くなって来る不思議。

最後の方には6000字近く行きそうで怖い

(追記) 行きました

29話 世の中が混乱してきました

現実世界に3度目の帰還。これは大丈夫、確定しているって解かっていても、朝起きた瞬間に過剰にほっとしてしまう自分がいる。そして親に何となく電話してしまう。別段話すことも無く、すぐに切ってしまうのだが、どうにもこうにも落ち着かないのだ。

次はゲームにログインして状態の確認。

昨晚の実験の首尾は…… ある程度思っていた通りだ。

「龍のあばら骨」「森クジラの髭」「謎の塊」……そんなものは持っていない。所持金も全く変化していない。これが意味することは『ゲームの世界の中での買い物や行動には、ゲームのステータスには反映しない』ということだ。最初の晶霊の洞窟のことも考えると、ほぼそう考えて良いだろう。

と、言うことはつまり『ゲームの世界の中でA・R・クリスタルは存在しない』という、可能性が濃厚になってこないだろうか。だってゲームの中で手に入れたって、現実世界のゲーム上では存在しないんだから。

Gillyさんの言葉を借りるとこれもまだ仮説の段階で、事件の首謀者がいるとしたらそんな調整は好きに出来るので、この話が絶対とは言いい切れないだろうが。

でも、「絶対」ではないだけで「大体」はそうなのだ。このことをみんなに教えれば、クリスタルを巡っての不毛な意地の張り合いが少しは緩和されるんじゃないだろうか。

攻略サイトの専用掲示板にも行ってみよう。パスワードを入力しログイン。アバター名前と性別、職業の記入を求められ、それから

真っ先に出て来たのは生存報告のボタン。うーん、物々しい。一応ポチっとな。

なるほど、この掲示板に入れる人の名簿もあるのか。生存報告の欄に日付と○が何個か。ボタンを押したら○が付く仕組みだな。まだ何人か付いていないけど、まだ朝早いしな。今日は珍しく早起きしてしまった。

更に進んで行くと、この現象についての概要と疑問点が詳しくまとめられている。ほとんどは自分も知っている内容だ。モブキャラにやたら日本人が多い、しかも現実世界に存在している人に良く似たキャラも多数いることも解かっている。中には有名人そっくりの人を見かけたという報告もある。これが一体何を意味するのかは今のところ不明だ。

俺の先程の実験についてもある程度書かれてあった。無駄骨だったとちよつと後悔したが、自分でも確かめられたので良しとしよう。しかし、ゲームの中の世界ならその行動は残る…… だって？ ということは、また向こう側に行ったら意味不明のアイテムはちゃんと所持しているということか。ややこしいな。

んーつと、それ以外には特に目ぼしい情報は無いな。今のところはこれだけだ。シエルのレベル上げは昼飯食った後にでもやるとしよう。寝起きにゲーム画面はちと辛い。

……そういえば、Gillyさんがニュースをチェックしておけって言ってたな。一体何があるのやら。連日、若者が脳梗塞で死にまくっていることにいい加減にマスコミが注目し出して、捜査のメスが入ったとかだろうか。

まずはYA○○○でいいかな、適当に…… 速報？

『次期大臣候補の井沢氏と後原氏が今朝未明死亡！！　その他にも
民政党の幹部が次々に倒れる！』

おいおい、いやいや。なーんじゃそりゃ。

思わずテレビもつけてみる。

『……これは悲しむと言うより、唾然としてしまう事態です。今朝
だけで与党議員だけでなく、国務大臣が3人も亡くなってしまいうな
ど……　政界は混乱の真っ只中です』

『……死因は全て病死となっていますが、ここまで行く又何者かの
陰謀すら感じますね。国家を転覆させようとする輩の……』

『……官房長官！　死因は病死となっていますが詳しい病名は解か
っているのですか！？』

『……日本政府には迅速な対応を』

チャンネルを一通り回り、事態の概要は十分すぎるほど理解出来
たのでテレビを消す。マスコミに詳しい情報は期待していない。こ
ういうときはネットの方が早い。

今日のニュースについて調べて30秒後、眠気が吹っ飛ぶほどに
目を見張った。

政治家だけではない。何かと黒い噂のある芸能人、服役中の凶悪犯罪者、ネットで嫌われているブラック企業の会社の社長など、所謂『有名人』たちが今朝発見されただけで総勢54人。次々に『病死』しているのだ。

『天罰k t k r』

『売国奴とヤクザがガンガン粛清されてるぞ！ 日本の夜明けの始まりだな』

『これはリアルで新世界の神が降りてきたかもしれん。いいぞもつとやれ！』

『殺して欲しい奴リストまとめて拡散しようぜ！』

匿名掲示板では大賑わい。匿名だからこそ好き放題言えるというものもあるが、確かに死んだ人たちは皆生前（ネット上で）あまりいい噂を聞かない人たちばかりだ。寧ろ俺だって死ねばいいのにか思っていました。はい。

だが、こうもものの見事に一掃されてしまうと喜びというより、テレビで言われている通り呆然とするしかない。一体何が起こったんだ？ まさか本当に名前を書くだけで人を殺せるノートの使い手でも表れたのだろうか。

……じゃ、ないよな。これがG i l l yさんの言っていた重大な事って奴か？ 他には特には話題のニュースは無いし、これだけ一辺に政治家が死んだのだから別のニュースなんて毛ほどの価値も無いだろう。ったく、ほんの一週間前はクジラが海岸に打ち上げられ

ていただけて大騒ぎしていたってのに…… 電話だ。

「はい、もしもし？」

『おう高瀬。今から時間あるか？』

声の主は内山だった。別に何て事無いはずなのに、妙に胸がどきりとなる。ゲームの中の世界にいた内山そっくりの男の声とあまりにも似ていた……。いや、間違いなく同じものだったから。

「ああ、特には用事はないけど……」

『伊藤の両親が今朝から、あいつの部屋を片付けにこっち来ててさ。よかったら手伝ってくれないか？』

「ああ、そんな事くらいだったら…… 今からでもいいのか？」

『おう、助かるよ。じゃあ、待ち合わせ場所は――』

別にお前は伊藤と特に親しかったわけじゃないだろうに。こういう所が人間性の差なのだろうか。性格のいいリア充も考えものだ。見ているこっちが余計な思えてくる。……まあ、これは自己責任なんだが。長い時間パソコンに張り付いているだけじゃないけな
いんだろうな。

俺は皺の付いたシャツを羽織り、財布と携帯を持って外に出た。



現場にいたのは伊藤の両親と姉に加え、内山と矢野と同じクラスの奴があともう2人。遺体の腐敗臭はそこまで無かったようで、部屋の片づけは淡々と進められていた。

伊藤の両親は俺が来ると「本当によくして頂いて……」と、悲痛な顔を隠しきれないまま頭を下げて礼を言う。変わり果てた姿になる前に遺体が発見されたため、ちゃんとした息子の死に顔を見れてよかったとも話していた。内山が言うには今回は本当に運がよかったのこと。孤独死で遺体が長時間放置された時ほど悲惨なものはないらしい。

ワンルームを8人で片づけるとそこまで時間はかからず（寧ろ人多すぎだったので、交代で休んでいた）、昼前には綺麗さっぱり荷物がまとめられた。何かお礼をしたいと母親が言ったが、内山がよれには及ばないと断り、俺達はそのまま解散した。

この残暑の中働いてそれをボランティアに変えてしまおうとは、まったく虫唾が走るくらいに性格のいい奴だ。でも一人がこう言うっちゃうと周りのみんなも逆らえない。結局向こうとしても心苦しさに耐えきれなかったようで、小遣いは渡されてしまったが。

日中の熱を流すかのように、俺は町中を自転車で走る。他のみんなは一緒に飯食いに行こうと言っていたが、おそらく唯一事情を知るであろう俺は、そんな雰囲気能耐えられる気がしない。

周りは皆伊藤の死因を病死だと思っている。彼の両親も若くして息子を失い、悲しみや怒りのやり場も見つけられずにいるのだろう。人の過失による死亡ならともかく、病気なら誰も責める事が出来ない。この残酷な運命を噛み締めながら余生を過ごしていくのだろう。

自分の中でふつつつとやり切れない怒りが生まれているのを感じた。

誰かが故意にこんな事態を生んで、自分もそれに巻き込まれる可能性があるとすると、早々に犯人を見つけ出してぶちのめしたくなる。伊藤の死よりもこっちが問題だ。

でも、それではいけないのだ。明確な犯人が解からぬまま、自分も死ぬ危険があるからこそ、ここは頭を冷やして慎重に動かないといけない。

大した価値のある人間かどうかは知らないが、ともかく今は自分の命が惜しい。

自分に力が無いと分かっているからこそ、身を呈して誰かの命を救おうとは考えてはいけない。自己中になれ。他人の勝手に食われてやる道理はない。

そうと決まれば早速家に帰って対策を練ろう。今はゲームをすることしか出来ない。幸い俺には心強い味方もいることだしな。

今日は学食は止めよう。頭をクールにするためにはジャンクフードが一番だ。

昼食はハンバーガーにした。

30話 それがメリットだとも? (前書き)

またもやエロシーン注意。

30話 それがメリットだとしても？

今日も今日とてゲームの世界。

今回は運よく仲間と合流することなく、すぐさま宿屋へと向かう。酒場の中で目が覚めると言うのも変な感じだが。まあいい、ラツキーくらいに思っておこう。

Gillyさんとの待ち合わせは時間指定こそしていないが、おそらくこの世界基準での夜だろう。それまでに適当に時間を潰しておくか。この世界で出来ることといったら情報集め程度くらいだからな。

日中はとにかくシエルを鍛えた。レベル上げには掲示板のメンバーも協力してくれたので、おかげさまで今のレベルは35。新しい魔法も欲しい所だが、結構限られてくるしなあ。反発する属性の魔法を覚えるとやや威力が落ちるという点も難しい。今度にいいさんに相談してみるか。

そしてレベルが30に達していないメンバーたちには、近々運営から低レベルのプレイヤーの救護策として、何か特典を付けるみたいだと嘘を言っておいた。本当に適当な嘘だが、これ以上にいい案が思い浮かばない。赤の他人にゲームを止めさせるって中々難しい。もしもこっちの世界に来てしまったら……その時はその時だ。ちゃんとしたコミニティも出来ているので、彼らなら事情を説明すれば大人しくしてくれるだろう。

で、だ。

今日はやることはやったのだ。やれるだけのことはやったのだ。

後はGillyさんと会うことぐらいだろうか。しかも昨日俺が付
け回されていたとなると、下手に外を出歩くのもあまりよくない。
昼間はじっと部屋に籠ってくのが得策だ。どうせこの世界での行動
は反映されないだし、間違っではないはず。

うん、暇潰しなら何をやっても構わないさ。人に迷惑かかるわけ
でも無し。

と、いうわけで、今からシエルちゃんの体を存分に堪能したいと
思います。

当然の権利だ。G行為限定だというのが悔やまれるが。
出来ることなら俺がシエルとやりたいわ。

この容姿ならこっちの世界の人間もメロメロ、寧ろブヒブヒだろ
うが、もちろん男とやるのはNG。可憐な少女の純潔は死守が基本。
さて、如何にしてこの穢れを知らぬ少女の肉体を、ひいひいあへ
あへ言わせてやろうか。言うのは自分だけど。そう思うとなんか悲
しい。

でも折角じゃないか！ まず始めはやっぱ風呂だよな！ 御丁寧
に個室にはシャワーまで付いていやがるぜ。こいつを利用しない手
は無い。それに案の定残っていた謎アイテムもあるしな。「龍のあ
ばら骨」を使って何か独創的なプレイは出来ないものか。

……いや、待てよ。前が駄目でも後ろはありかもしれん。自らの
純潔を必死に守り続けつつも（中略）何とも儚い乙女。いいね、何
とも燃えるし萌えるシチュエーションだ。俺が童貞ってことには変
わりないのだが。……ああ、駄目だ駄目だ。こんな自虐的になっ
ては。やるんだったらひと思いにやるしかない！

いざ行かん！　まだ見知らぬ夢の桃源郷の地へ！

（この間の出来事は読者のご想像にお任せします）

夢の中で夢心地のような一時を過ごし、俺は出かける準備を整えていた。現実世界で夢精していないことを祈る。しかし、女の子の感じ方って男とは大分違うんだなあ。始めの方はかなり違和感を覚えた。脳のつくり云々とは聞くが、肉体転移というのがこんなに刺激的なものであったとは。そりゃAVとかエロゲにもなるのがわかる。体にもまだ余韻が残っているし。顔は未だににやけているんだろうが、この体だとそれすらも可愛い。

さて、キモいことはこのくらいにして。そろそろ真面目モードに切り替えよう。装備は皮の帽子に短刀つと、あとは伊達眼鏡。ソーサリー用の装備をほとんど外し、変装は完璧なはずだ。外からではとてもソーサリーには見えないはず。うし、行くか。

夜の町を少女が一人行く。襲って来そうな奴がいたら、速攻でラピッドを叩きこもう。ウィザードロードが無くても殺傷力がある物は一応撃てる。

俺は人通りの多い道を選んで歩いた。途中でパーティーの仲間とも会ったが、誰一人として俺に気づかない。変装の効果は抜群のよ

うだ。さらに人混みの多い道を歩くことで更に人を巻くという寸法だ。途中で防具屋に入り服と帽子をさらに着替える。頭にバンダナを巻き傍から見ると女シーフの样にも見えるな。念を押しに押して通常の3倍の道のりを通り、俺は武器屋「アニムス」の裏手へ。もちろん一ヶ所に留まらず、ぐるぐる動き回る。

「今日は随分念を押したようだな」

思わぬ方向から声がかかる。つーかよりもよって上からかよ。眼前にふわりと人が飛び下りて来る。

「今日は付けられて…… ないですかね？」

「大丈夫のようだ」

Gillyさんはいつもの格好だった。本職だけに見つからない自身はあるのだろう。建物の上を跳び乗って行くとか、テンプレ通りの怪盗だ。

「今日のニュースは見たか？」

「有名人や政界の大物がガンガン死にまくっているという奴ですか……」

Gillyさんは軽く頷く。

「で、この状況を見て…… 俺が昨日教えようとしたことは解かるな？」

「はい、もう大体予想ついてます」

あまりにも不自然すぎる『病死』の多発。それにこの世界の疑問を重ねれば自ずと答えが浮かび上がって来る。

「精神が取り込まれた俺達だけじゃなくて、ゲームプレイヤーで無い人はそのままの姿でこちらに……何て言うか投影っていうんですかね？ コピーが送られているというか……そしてこの世界の人達と現実世界の人達の命は繋がっている……」

「ん、まあ、大体そんな所だな。俺達はこの世界に来てから死ぬリスクだけではなく、人を違う世界から殺せるということんでもない力まで持たされたみたいだ」

Gillyさんは両手を上げて肩をすくめて見せる。

彼は軽く鼻で笑っているが、この世界の事を知れば知るほど危険な事態になっていることがわかる。こっちではモンスターとやり合える剣技とか……広範囲を焼き尽くす魔法とか……とにかく人なんて簡単に殺せるんだ。これじゃあ完全犯罪を大安売りしているようなもんじゃないか。

「さて、どうする？ こっちの世界からならムカツク野郎も殺したい放題だ。汚職まみれの政治家、悪徳業者、暴力団、生活保護ニート……世の中のウジなんて腐るほどいる。現実では一億人のうちの一票の選挙権しか持たない人間でも、幾分か世の中を変えることが出来る、な」

「……やるつもりですか？」

「お前はどうかと聞いている」

「やりませんよ…… 何の罪も無い人を巻き込まないとは限らない……」

こちらの世界に持ち込めるのは現実の記憶だけだ、メモ一つ持ち込むことが出来ない。世の中の悪人どもの顔と名前が全部割れているわけじゃないし、そしてそれを全て正確に記憶し殺害できると思えない。そっくりさんだったら洒落にならんしな。

「それに…… この状況が『人』によって持たされたものなら尚更です」

「慎重なのか臆病なのか…… どちらにせよちゃんと頭は回っているようだな。まずは、その大本を何とかしないと行動は出来ない」

「どうやら G i l l y さんは俺と同感みたいだ。悪い反応には感じられない。」

「じゃあ、問題はどれだけの人間がこの事実を知っていたかだ」

「みんなも薄々勘付いている人もいたかもしれませんが、おそらく今日のニュースを見て確信してるでしょうね」

「そうだな。だが考慮すべきはそのことを人に教える前にあんな粛清めいたことをやってのける奴がいる、ということだ。俺みたいに実験的に一人殺るくらいならともかくな」

おいおい。

「誰か殺したんですか!？」

「ああ、外国人団体からの違法献金疑惑のある議員…… 疑惑つつてもほとんどクロだがな。あまりにも特徴のある顔だったんで、サクッと」

Gillyさんは自分の首を切るようなジェスチャーをする。

「本当はそいつが死んだニュースを見せてお前にこのことを伝えようと考えていたんだが、思いのほか同業者がいたようで」

まさか大臣含め50人以上も殺されるとは思わなかった、というわけか。これじゃあ議員一人死んだところで全く驚かない。しかし、相手が悪人(?)とはいえよく平然と殺せたものだ。

「で、だ。そこまで解かっているのを前提にしての忠告。お前や俺が何もしなくても、誰かがこの世界を利用して殺人を犯すだろう」

「悪人を狙って殺している辺り、本人はよかれと思ってやってるんじゃないけど」

本当に死のノートの世界だなこりゃ。

「それにこれは俺の勘だが、一昨日の総理大臣を殺した奴が昨日になって大量に殺人をやったんだと思う」

「同一犯……? どうしてそう思うんです?」

「都合良く条件にあった人間を一晚であれだけ殺れるなんて、この世界の仕組みを理解してないと無理な話だろう。俺が昨日殺した議員だって、歩いていてたまたま出会っただけだ。一人殺って確信し、翌日に計画的な犯行を行った、と考えるのが結構自然なところだな。もちろん労力的に一人とは限らない、寧ろ複数でやった可能性が高い」

仮説ではあるんだろうが、この人が言うと言得力あるんだよな。

しかし訳の解からない力を使って殺人だなんて……これは人の考え方にもよるのかね。

「あの、それじゃあ忠告というのは？」

「ああ、この調子だと殺人はしばらく続くだろう。警察も捜査のしようがないしな。だから少なくとも殺されるのが悪人だけであるうちは……黙認しておけ。くれぐれも止めさせようなんて考えは起こさない方がいい」

「対象がヤクザとか悪徳政治家なら無理に止めるつもりはありません。でも無関係な人が殺されるのも黙って見ているのは……」

彼の言いたいことは解かる。俺だって相手が滅茶苦茶強かったら、自分の命欲しさに黙って逃げるかもしれない。ここは、まあ、自分の中に僅かに残された正義感というか。犯人の良識を信じて、そうならならぬことを願うしかない。

「……モラルや信条なんて、一度^{たが}箍が外れれば案外脆いものさ。もしも無関係な奴を殺すことに慣れてしまったら、いや自分の中で正当化させちまったら、こっちでも何か対策をとるしかない」

自分の顔にリアルに冷や汗が流れるのを感じた。
初めての体験だった。こんなに冷たいもんなんだ。

30話 それがメリットだとも？（後書き）

こんなジャンルの話なの？　って思っている人もいるかもしれません
んが、
こんなジャンルの話です。

31話 良識を持っていてください

「俺からはこんなところだ。次はお前の番だが……」

手持ちの情報でこの人の知らない事があるかどうかは解からないが、とりあえず知っているだけの事は伝えよう。こっちに取り込まれた人が集まる掲示板については伏せておくことにする。ついさっきポロッと単語を出してしまったが、単なる攻略掲示板のメンバーだと考えてくれるだろう。

この通りあまり期待はしていなかったが、『A・R・クリスタル』はこの世界には無い可能性が高いという話には割と食いついてくれたようだった。

「なるほどな…… こんな現象を引き起こしている奴の匙加減でどうにでもなるとはいえ、その可能性は高いな」

「そもそも、そんな物存在しないってこともありえます。賞金云々だって、単なるプレイヤーをより多く誘う売り文句でしか」

Gillyさんはまたも腕を組んで何かを考えているようだ。

「そうなる、ますますこの事態を起こしているのはゲームの製作者ということになってしまいが……」

「俺は正直その線が一番濃厚だと思いますけど。方法や動機こそ全く解かりませんが、色々辻褄は合います」

ゲームを支配する、管理・運営できる、プレイヤーのレベルでこの世界に取り込まれる物を調整できる、というのなら、もう黒幕は

製作者しか考えられない。ゲームを止めさせようとする活動を潰すのも運営側なら何等不自然でない行動だ。世間も信じようとしないので、証拠隠滅だって簡単。

「確かにお前の言う通りだ。黒幕はゲームの製作者、俺も9割方そうだと思っているんだが……」

「何か疑問でも？」

「……いや、その動機って奴が気になってな。こんな事態が引き起されたのも、そいつらの御望みどおりなのか……」

どうなんだろう。確かに、もはやゲームのバーチャル体験で済むレベルじゃなくなっている。この調子だと国家転覆だって狙えてしまいうくらいだ。こんなものを何も知らない一般人にやらせてどうするつもりなのだろうか。異世界から人を殺すなら自分たちでやった方が早いし余計に見つかからないだろう。自分が死ぬというリスクを考えてのものだろうか。

かと言って、仮に黒幕が製作者以外となると、余計に訳が解からなくなるし。

「じゃあ、仮に製作者が黒幕だったとしよう。この現象を食い止めるためには、現実から叩いていくのが最も効果的だと思うんだが」

「でも、証拠も何も無いんですよ…… 現に止めさせようとした人達が警察沙汰を起こしちゃって、向こうもかなりピリピリしているでしょうし」

「方法ならいくらでもあるさ。例えば『こっちの世界』から製作者どもを殺すとか。もし向こうがそれを見越して強力なキャラを作

っていたら…… そうだな、関係者を人質にとるとかな。現実とこちら側両方から」

よくもまあ、こんな風に物騒なことを思いつくなあ。

既に一人殺っているし、この人もある意味で籠が外れているのかもしれない。

「強攻策ならいつだってとれる。だったらその可能性もあるのに、何故こういった仕組みにしているのかということだ。こっちの世界での行動が死ぬ死はない以外に反映されないのも、元々から殺人をするように仕向けるためなのか……」

そう言われてみると、この出来事については色々穴があるというか…… この世界の存在を複数の人間に知られるとなると、そこにリスクが生じる。自分たちの手ではなく人の手で殺させることによって罪を逃れるつもりなのだろうか。でも殺人幫助はまず避けられないだろうし、殺した人間に罪を負わせるにしてもこのゲームとの因果関係を明らかにしないといけない。そうすると必然的に自分たちにも優先が行くことは避けられないわけで…… ああもう、考えれば考えるほどややこしくなってきたぞ。

「結局、動機は本人たちに聞くしかないんじゃないですか？」

「それも確証あつての物種だな。中途半端な証拠だと知らばつくれるだろうし、仮に製作者が黒幕でなかったら取り返しのつかないことになる。強行策は真犯人を明らかにして、確実にこの現象を止めることが出来るという保証が無い限りは取れない」

製作者を殺してもこの現象が止まらなかったら…… 確かに洒落にならん。今この時の俺達の命だって常に握られていないとも限ら

ないのだ。動くんなら全てを、いやなくとも真犯人を明らかにしてからが最も安全、か。基本っちゃ基本だけど。疑わしきを罰することが出来ないのは痛いな。

「やっぱり、今出来ることは情報集めだけですか……」

「だな。他に良識のありそうな仲間がいたらそう言ってやることだ」
解決に向けては全く進展していないんだな。足元を固め道を広ぐしただけだ。自分の命もリアルにかかっているし、まだまだ地道に進むしかなさそうだ。

「そうそう、それとこのゲームを自分の意志でやめられるかどうかについてだが……」

「確か退会した人がいるんですけどっけ？」

「無駄だったようだ。画面上はキャラを消せてもこっちは残る。強化出来ない分、更に絶望的な状況だろうな。そいつは昨日、頭抱えて震えてたよ」

それはお気の毒に。

だがこうなってしまった以上、もう逃げることも出来ないってことだ。唐突に強大な力とリスクを与えられ、自分自身は力の行使を拒否することが出来てもその惨状を見届けなくてはならない。実際の異世界召喚なんてチートモノじゃない限り、ロクでもないもんだな。

「とにかく、この世界を利用して何かを為そうなんて奴には極力関

わらないことだな。お前だって出来ればこれ以上何も起きずに終わって欲しいんだろう？」

「少なくとも自分が死ぬのと人殺しは勘弁ですね。現実で友達が死んだんで、見ていてあまり気持ちのいいものじゃないって分かりましたし」

伊藤の死が俺の中の何かを踏み留ませた気もする。流石に親兄弟にあんな死に目は見せられない。自分の命を守ることの重要性が少しは実感できた。もちろん人を殺すことも。正直悪人個人は知ったこっちゃないが、余計な罪を背負って生きたくはないし。

「既に一人殺した俺が言うのもなんだが、それもそうだな。だが、そうじゃない考えの人間だって世の中には星の数ほどいる。だから、下手に関わるなよ」

口の上ではそう言っているが、Gillyさんは実際どう思っているんだろう。少なくとも自分には悪人とはいえ人を殺したことに対する『気負い』というものが彼から全く感じられない。自分の命を守る上での実験とは言え、こうも簡単に人の命を奪えるのも……
……いや、下手に考えるのはよそう。今のところ、この人は頼りになる味方なんだ。いざとなったら互いに利用し合うというのも、暗黙の了解が成り立っている気がする。上手いんだろうな、そこらへんの人付き合いが。

次に会う時間と場所はGillyさんの判断に任せることにした。彼がクエスト受領のための冒険者ギルドに手紙を送って、待ち合わせ場所を決めるという方式だ。俺が小まめに見に行く必要があるが、そこまで大した手間では無い。互いに居場所を知られないという点ではちゃんと配慮されている。

「Gillyさん、最後に一つ聞いていいですか？」

「どうした？」

「どうして俺以外に人と組もうとしないんです？」

Gillyさんは鼻で笑った。

「誰も組んでいるのがお前だけとは言っていないぞ。それに、人前に晒さない理由だってこの前言ったはずだが？」

そう言うとは彼は振りかえることも無く、夜の町に消えて行った。彼は彼で気になる所が多い人なんだが、下手な詮索はするなつてことなのかな。

……何か理由があるのなら全てが終わってから聞こう。

夜の町は行きよりも幾分人は減っているようであった。多くの人はもう寝静まっている時間帯なのだろうか。俺も宿屋に真っ直ぐ戻るかな。

と思つて、しばらく歩いてた途端に道の先で何やら人だかりだ。その多くは冒険者ではない。日本人のモブキャラだ。何だろう、民家の周りに集まっているようだけど。

「酷いなこりゃ……」

「やったのは冒険者だって？」

「こんな荒らし方は普通の人は出来ないよ……」

俺も気になってその人だけに交ざると、後ろから冒険者ギルド直轄の警備隊の人達がやって来て、野次馬に道を空けるように怒鳴っていた。

「一体何があったんですか？」

「いやね、ここの一家が強盗に襲われたんだってよ。家族全員皆殺しさ」

思い当たる節があり過ぎてそれ以降の言葉に詰まる。

「最近になって急に増えたわよね…… 殺し方もどうやら冒険者みたいだっていうじゃない？」

「昨日なんて丘の上の屋敷の御主人が縦から真っ二つになってたんだろ？」

「二丁目の金貸しも黒焦げ死体になってたっていうしさ……」

「やだ、怖い…… 冒険者には町を出て行ってほしいわ……」

「しっ！ 誰に聞かれているか分かんないんだぞ……！」

変装しておいてよかったな。いつもの格好だったたら、無言で立ち去られたのかも。

町の人間を手には掛けるようなクエストなんて当然ありはしない。
そういった輩を退治するクエストだって。

これも他の人にとっては正義だというのだろうか。

理解は出来るが同調はしたくないな。

31話 良識を持っています（後書き）

サスペンスというのはホラーに含まれるんでしょうかね。

32話 殺る気満々じゃないですか

『悠一、ちゃんとご飯は食べてる?』

「ああ、ほとんど学食だけど。栄養バランスはいいはずだから」

『でも最近よく電話するわね。最近若者の孤独死が増えてるって言うじゃない。やっぱりそのせいなの?』

「実は大学の友達もこの前それで死んでね……」

『それで頻繁に電話してくるようになったの…… 不安だったら帰ってきたら? まだ授業始まってないんでしょ?』

「ちょっとやる事が出来たからそっちには帰れないんだ。まあ電話がなかったら死んだと思ってよ。遺体発見は早い方が大家さんにも迷惑かけないし」

『もう! 滅多な事言わないの!』

俺の親は何だかんだで子供の命を心配してくれているようだ。当然なんだろうけどさ。最近はその当たり前すら出来てない親もいるもんで…… 今はどうでもいいか。

とにかく何時死ぬか解からない身だ。自分の両親に感謝の気持ちを伝えることを欠かさないようにしよう。

俺は4度目の帰還を果たし、早速掲示板で生存報告を行う。昨日もプレイヤーの犠牲者（少なくとも掲示板のメンバー）は出ていな

いようだ。よかったよかった。

この現象が起こるようになって早5日。流石に皆生き残る術が身に付いて来ているということか。単に町の中で大人しくすることなだけでござ。名簿を見ると新しいメンバーが6人も増えている。連れて来られる要因も『レベル30以上になること』がほぼ定説になりつつあるようだ。

… こんな調整だと、やはり黒幕は製作者だとは思えないのだが…
… 目星はついていても行動に移すことが出来ないのが歯がゆい。

管理人の夕風さんもレベルを20台に抑えゲームの世界に取り込まれていないものの、この事態を信じざるを得ない状況になっているようだ。ニュースになる前に今朝の死亡者の予告をした人がいたのである。どうやら彼はゲームの世界でその人物の死体を見たらしい。

非プレイヤーの一般人も向こうの世界で死んだら現実でも死ぬというのも、みんな昨日知ったみたいだ。向こうの世界がゲームの中なのか本当に異世界なのかよく分からない以上、下手な気は起こさないようにと注意喚起までしてある。

皆最低限の良識を持っている人達ばかりで、これまた本当によかった。

さて、あまり見たくはないが本日犠牲者はつと……

……今日もまた有名人だけで60人強。中には家族ごと病死した議員もいるらしい。

その肝心の病因とやらも公開されたが、心臓発作、心不全、肝硬変、脳溢血とばらばらであった。中には朝起きた時は何も症状がなかったのに突然急死した人物もいるらしい。これだと本当にあのゲームが原因なのかよく分からないが、ネット上では黒い噂の立って

いる人物だったので一応その範疇に入れられているらしい。

一応、国や警察も緊急対策本部を作ってはいるらしいが、一体何をどうやって調べるのだろうか。今公開されている分で分かっているのが、この事態が日本国内限定で起こっていることから犯人は日本人の可能性が高い、ということだ。だからどうしたって話だけだな。人為的に他人を病死させるなんてファンタジーもいいところ。そういう漫画が過去に連載されたから、そっちの線も調べているみたいだけ。

ネットの匿名掲示板での反響は、これまた更に加速していた。新世界の神が降りて来たと崇める人。殺して欲しい人をリスト化する人。ただこの事態を面白がっている人（これがおそらく9割ほど）などなど。

一部のWebサイトでは犯人特定のための推理考察を載せている所もあった。あまり期待せずに眺めていたが、意外と核心をついているのも多く結構参考になる。こっちとしても人が死ぬ原因、殺害方法は知っているのだが、殺した犯人自体は分からないのでこの情報はしばらくお世話になりそうだ。

このサイトの管理人が言うには

犯人の情報源は主にインターネット。厳密には信用している情報源がインターネットだということ。これは死んだ人物の傾向から推定できる。死亡した人物はテレビや雑誌ではあまり取り上げられていないが、ネット上では悪く言われている人物であること。逆にマスコミには悪く言われている人物はほとんど死んでいないことを見ると、ネットの情報を強く信じている傾向があると判断できる。

さらに思想はネット右翼…… かどうかは分からないがそれに準

ずるものを持っていること。死んだ人間が主に在日系、もしくは東アジアの特定の国を賞賛、支援するような発言を行っているような人間が多いこと。逆に在日を排斥するような発言をしているような人物に対しては、犯罪歴があっても殺していないと言う事。要は純日系のヤクザには手を出していないみたいだ。企業人も何人か死んでいるが、全てネット上で在日系だと噂される人物ばかりだ。

これらの事から、犯人は学生、もしくはニートの可能性が高いということだ。社会人の可能性が低いのは殺人の手間を考えての物である。また世の中を変えるにしても、政治に関わる人物を一辺に殺していることから、そっちの知識には疎い、つまりあまり考え無しに殺害しており、精神的に未熟というか浅はかなところがある：とまで書かれてある。

思想云々に突っ込む気は起こらないが、少なくとも学生かニートの可能性が高いというのは支持したいところだ。ネットゲームをこらだけやり込める人間だというのだから。主婦の可能性だって捨てきれないけどさ。

しかし、こんな事態が表立って知られるようになって2日目でもう世間は他殺という線を考えているんだな。少し感心した。これだけの騒動だし、漫画の影響も多少なりともあるんだろうけど。

だがこれを受けて、自分は標的にならないと勝手に安心してきってこの事件を面白がったり、問題解決ではなく、犯人の人格否定から入るような人達を見るのはあまりいい気分がしない。結局大半の人は自分は外野にいるから安全だという考えが元になっているから、そんな事をほいほい発言できるのだ。こっちがその気になればいつでも誰でも殺せるのに。当事者としてはかなり複雑な気分である。

周囲に全く期待できないというわけでは無くなったが、このネットゲームが原因だということに辿りつけるのは果たしていつになることやら。

でも気づかれたら気づかれたで、俺らも疑われる可能性があるんだよなあ。証拠も糞も無いけど、やってないというアリバイも無いし。下手したらプレイヤー全員連行という事態もありうる。それは勘弁してほしいところだ。となると、やはりこれは自分たちの手で解決するべきことなのだろうか……

自分が死ぬか、殺人犯の容疑をかけられる……

この最悪の2パターンだけは絶対に避けたい。

さてさて、どーすっぺ……

とりあえずは今日のレベル上げに付きあってくれる人を掲示板で募ろうか。まあどうせ他の人も同じことを考えているだろうから、それに便乗すればいい。

昼何時から何時まで、夜何時から〜といった具合に各人の都合に合わせて、常時募集がかかっている。ゲーム自体のクランとかフレンド機能が不完全なため、ここの掲示板がその役割を果たしているわけだ。

今日は昼1時からの部にするか。サイトさん、Aseliaさんにいいいさんなど顔なじみもいるようだしな。自分も参加しますってレスを……ポチっとな。

今のところ俺含め6人……パソコンのスペックもまあ大丈夫だろう。

俺のレスが画面に表示されると同時に、また新しいレスが下に表示される。一瞬、誰かと投稿がかぶったかな？　と思ったがそれは

A s e l i aさんのもの。

A s e l i a「なんかヤバいことになってるぞ！ 公式見てみろ！」

ヤバいこと……？ 公式サイト……？

『今日は特別に全プレイヤーに経験値3倍ボーナス！ 難解なダンジョンに苦戦しているその君！ このチャンスを見逃すな！』

『特殊クエスト「クリスタルの導き」を追加！ ダンジョンに挑戦した回数に応じて、クリスタルの発掘ポイントをいくつか提示させます。世界中に散らばる発掘ポイントのどこかに「A・R・クリスタル」は眠っているぞ！ 早い物勝ちだ！』

………

……

運営め。

ここに来て 一気に 殺る 気なのか？

サイト「まずいんじゃないのかこれ!？」

にいい「でも止めようがないよ?」

櫛坊主「公式の掲示板が物凄く盛り上がってるぞ。今日はプレイヤーが激増する予感」

くろね子「折角、最近は飽き始めた奴らが増えて来たのに」

A s e l i a「まさか俺達の対応を見て運営が本腰入れて来たとかじゃないよな?」

マジなのか……? 本当に俺達は向こうの世界でも監視されていて… ひたすら町に籠り続ける俺達に運営が業を煮やしたとしたら…

夕風(管理人)「みなさん、公式で凄いことになってますけどどうしますか?」

サイト「夕風さんは絶対にプレイしないでください。事情をある程度知っていて、かつゲームに取り込まれていない人は他にいませんから」

A s e l i a「明日は死人が増えそうだな畜生!」

冗談じゃないぜA s e l i aさん! まだ黒い疑惑のある悪人候補ならともかく、死ぬのは何の犯罪も犯してない一般人だ。それもほとんどが若者。こんなことあってたまるか!

れんちえふ「いや待て。これは逆にチャンスでもあるんじゃないのか？　今晚取り込まれた奴を一人でも多くこっちの仲間に引きずり込めば、運営共に対抗できるかもしれない」

サイト「頭数は増えますけど同時に多くの人を危険に晒すかもしれませんよ？」

くろね子「かと言ってこの状況は止めようがないだろ。→の意見は目的はともかく人命救助としては一番現実的だ」

櫛坊主「だったら向こうの世界で待ち構えて、うろたえている奴に片っぱしから声を掛けまくるしかないな。メンバー全員に拡散しよ
うぜ」

にいに「それと今の内に思いっきりレベルを上げといった方がいい
と思う」

れんちえふ「とにかく今は確実にやれることをやるぞ！」

……れんちえふさんの意見は一見正しい。

正しい……　が、大事な事を見落としている気がする。

向こうの世界に取り込まれた人達が下手にダンジョンなどに入ることによって、命の危険に晒される。これだけは絶対に避けたいし、彼が提案したように注意喚起することで防ぐことは出来るだろう。

だが、取り込まれた人達が向こうの世界に付いてどう思うのか？
問題なのだ。

おそらくかなりの御新規さんが流れてくるだろう。彼らが世界の
仕組みを知り、殺人願望が表層化する輩が出る可能性も無いことは
無いのだ。寧ろそれを一番警戒するべきではないだろうか。俺達は
まともだが、今晚連れて来られる輩も全員そうだとは限らない。

……考え過ぎだろうか。このことをみんなに言うべきでしょうか？
Gillyさん……

32話 殺る気満々じゃないですか（後書き）

「製作者」なのか「制作者」とするべきかで迷ってたり。

あと本作は作者の思想が当然の如く入っていますが、政治的な物や人種問題についての論調においては全てフィクションであることを強調します（迫真）

33話 これは不味い気が

薄らと開けた目に入って来るのはぼやけた光景。耳に入るのは大勢の人間の喧騒。肘にはいつものひんやりとした木の感触。前後に揺れ動く頭。

次第に微睡みから覚め、俺は夢の世界へ入る。

「……さん。…エル…さん！」

若い男の声…って、もう主は知っている。

「ああ… YASUさん。すみません、ちょっと寝てました…」

目の前には、最近は御無沙汰だけいつものパーティー。YASUさん、Pon太さん、まるちーさん。やっぱりこの四人が何だか落ち着くメンバーだ。今日もお変わりなく。

YASUさんとPon太さんがやたらと鬼気迫る表情をしていること以外は。

「シエルさん！ あなたはどうなんですか!?!」

「…どうしたんですか？ 二人とも」

「あなたも意識がキャラクターの中に入ったんですか!?!」

俺はまだ虚ろさの残る目でただ一人戸惑う、まるちーさんの顔を見る。

「さつきから二人とも変なんですよ。いきなりここはゲームの中の世界だとか、私はそうでないのかとか聞いて来て…」

なるほどねえ… 二人も、か。気が付くと三人分の視線を一手に引き受けている。

みんな俺の答えを待っているみたいだ。

「まあ… 詳しいことは『俺』も知らないっつーか、調べている途中なんですけど… 今分かってる事だけお話しますよ」

俺は今日になって取り込まれたであろう二人にこの世界について話した。結構内容が多いので時間がかかったが、彼らも所々で顔を顰めつつも大体理解してくれたようだ。それと彼らは十分信頼に足る、というか変な気を起こさないだろうと思ったので、現実世界の出来事と合わせて二つの世界の繋がりについても教えてあげた。ただ一人、未だに意識が取り込まれていないまるちーさんには冗談半分にしか聞こえないのだろうが。

そして案の定、唾然とするYASUさんとPon太さん。仕方ないね。

「シエルさんはもっと前からこんなことに？」

「俺はこれで五回目ですよ。今ではもう慣れたもんです」

俺は柄にも無く経験者の余裕をかます。あくまでもこっちに來たら死ぬリスクが格段に上がると教えた上で、彼らの不安を取り除いてあげようという配慮に基づいてだ。

取り込まれた初日は慣れない世界と体に戸惑ってしまうだろう。

そんな中で自分と同じような境遇、そしてこの世界のことをよく知っているガイド役の存在は何よりも心強い。そしてその分、精神も安定する。こっちとしても指示が送り易くなるのだ。

今となっては俺が必死にG i l l yさんを引きとめたのも懐かしい。まだ一週間も経ってないんだよな。ここ数日は時間が立つのが随分と遅く感じる。実際に睡眠時間を無くして活動しているようなもんだしな。

「と、とにかく、町の中にいれば安全なんだよね？」

獣人のP o n太さんが不安そうな目で尋ねて来る。さっきから妙にしゃべり方に違和感があるし、中の人は女性なのかな？

「少なくとも俺達は今までそうやって問題無く過ごしてきたので大丈夫ですよ。この後、同じく取り込まれた人達みんなが集まろうということになってるんですけど」

これは仲間内の一人、れんちえふさんの提案だ。今晚はゲーム世界へ精神トリップする人たちが続出すると予想されるため、終始仲間集めに従事してほしいとのこと。さらに新しい仲間をノツイミカールの町（要は今いる町）の中央広場に集めて、集会を開いて団結力を高めようというらしい。

まあ考えとしては悪くは無い。自分たちの仲間の規模を知っておけるし、これだけの味方がいるという一種の安心感も容易に覚える。さらに集団心理で変な気を起こす人を押さえる効果も狙っているらしい。ここら辺は日本人ならではだな。

「いやゝ 最初はどうなるかと思ったけど、シエルさんがいて本当に助かりましたよ」

これだけの話を聞いて少し安心して緊張が解けたのか、YASUさんがいつもの（チャット上の）和やかな雰囲気になる。PON太さんはやや不安も残っているようであったが、軽く頷いていた。ただ一人、まるちーさんは要領を得ない表情だった。しゃーない。

「私には何が何だかさっぱり： 現実世界とかゲームがどうだとか：」

「まるちーさん。世の中には知らなくていいことも沢山存在するんです。俺からしたら、まるちーさんの立場は物凄く羨ましいんですから」

俺は渋い声色（でも少女声）で、まるちーさんを無理やり納得させる。彼は終始首を傾げっぱなしであった。

今のところ命の危険の無いまるちーさんと別れ、俺達三人は町の広場へと向かう。ゲーム画面そのままの光景を目の当たりにした二人はしばしば足を止めていた。これは無理も無い。ゲームの中に入れるなんて、子供から大人まで共通している夢、妄想なのだから。

しかし昔のヨーロッパ風の街並みに、住んでるのはほとんど日本人だからな。毎回思うがこのアンバランスは何とかしてほしい。どうしてこのゲームの中にコピーされるのは日本人限定なのだろう。ヨーロッパの人とかを入れたほうがもっと雰囲気出るだろうに。単に容量の問題だろうか？ この町だけでも滅茶苦茶広いしな。

日本人のコピーが存在するということは、この世界も今の日本くらいの規模があると思ってい。一億ン千万は確実。ゲームの登場人物もいるからそれにちょこっと+αがあるくらいだ。もちろん冒険者たちの集う町・拠点はここだけでなく他にもある。この町が序盤からお世話になり、クエストの大半もここの冒険者ギルドから受

けるので、みんな利用しているだけだ。本稼働になったら色々追加が入るんだろうけど。

…そうすると、気になって来るのは現実世界の悪人を殺している奴らがどうやって、こっちの世界に存在するコピーを探し出して特定しているかだな。こっちには流石にネットとか使える端末の様な物は無いし… 一つの町にある程度集約されているとは言え、これだけの人数からお目当ての人間を探し出すなんて気が遠くなりそうだ。こちらの世界に来れるのは現実世界で寝ている時だけだから、いつまでも留まる事は俺の経験からいって不可能だし。時間的にはせいぜい12時間が限度か。その間にはぼポイントで50人以上を殺害しているということになるわけだけど。

うーん… 顔や性格以外にも何か共通点とかあるのかな？ そこから割り振れば…

Gillyさんはおそらく複数犯だと言ったけど、だとしたらその人数も気になる。この世界に取り込まれた人は、こちらでは確実に数を把握できないし。数人規模ならともかく、向こうも何十人もいるとしたら… あまりその先を考えたくないな。

「シエルさん。ちょっといいですか？」

歩きながらずっと考え込んでいたので、YASUさんの声に少しどきりとしてしまう。

「私もこの世界の事はまだよく信じられないんですけど、一つ気になったことがあって」

「何ですか？」

「方法は良く分かりませんが… こんな事態を生みだしている犯人がいるっておっしゃいましたよね？　そして今のところの最有力候補はゲームの製作者だということも」

「確信はないですけど、それが一番可能性が高いかと」

「『デバッガー』… とかはいいんですかね…？」

「実際にプレイして調整とかを行う人の事ですか？」

「はい。この現象が起こったのは6日前っておっしゃいましたし、試験稼働版でプレイヤーの反応を最終調整代わりに使うって話も出てますけど… 製作者側のデバッガーが全くいないとは思えないんですよ。実際にプレイヤーに交じってやっているという話もよく聞きますし」

デバッガーはアルバイトがほとんどだという話は聞くけど… でも製作側の人間だ。少なくとも製作者に近い人間だ。彼らならレベルも高いだろうし、こっちの世界に来ていることも十分に考えられる。

「状況が状況ですし、いたとしても簡単に見つけられないとは思いますが…」

「いや、でもいい線いってると思いますよ、YASUさん。みんなにも話してみます」

正直捕まえる方法とかはさっぱり思いつかないが、もし特定できれば何か情報を吐かせることも出来るだろう。いない可能性もあるだろうし、かなり難しいとは解かってるけど。このまま闇雲に情報

を集めるよりは…

「あっ…！」

「どうしました？ シエルさん」

「い、いや。何でも無いです！」

俺は一瞬どうしてみんなこの事に気づかなかったんだろうと思い、そして反省した。俺は本当に単に気づいてなかったただけなんだけど。多分他の人も何人かはその考えに至り、敢えて発言しなかったのではないだろうか。理由は今の俺だったら何となく解かる。

だとすると… この集会は大丈夫なのだろうか？ 一波乱起きそうな気がする。寧ろ何で今までそれが起きなかったのか不思議なくらいだ。他の人もちゃんと考えた上でのことだったんだ。G i l l Yさんに頼り、色々と分かっていたつもりになっていた自分を急に腹立たしく思う。

でも、今からじゃどうにも… こんな事態には慣れていない。

34話 これだけをまとめるには(前書き)

リアルが忙しくて更新遅れ気味

34話 これだけをまとめるには

「ようシエル。その人達は…」

広場でまず出迎えてくれたのは Aselia さんであった。傍から見ると凛とした美人女騎士だというのに、中の人の関係でややだらしなさが前面に出ている。仲間内からも男口調が勿体ない人物だと言われているくらいだ。でも男は男だし。

「俺がよく組んでいるパーティーの人達です」

三人で軽い自己紹介を行っているうちに、俺はぐると辺りを見渡す。中央広場はレトロな石畳の地面に、広場の真ん中には町の子供たちの遊び場と化している噴水と、いかにもゲームの中の広場のテンプレともいえるべき所である。広さも東京ドームくらいはありそうだ。東京ドーム行ったこと無いけど。

ゲーム内でも待ち合わせの場所としてよく使われているため、冒険者の姿も結構見かける。その中のどれだけが、こっちに意識を取り込まれた人なのやら。

「…今んとこ、今日の新人りはあんたら合わせて30人くらいかな」

ちょうど同じことを考えていた所に Aselia さんの言葉が耳に入る。

「30人ですか？ 今までのメンバーの同じくらいじゃないですか」

「しかも今の時点でだ。集会まではあと2時間以上あるし、もっと増えるだろうな。今20人くらいで町を回っている最中だしさ」

Aseiliaさんは噴水の淵に腰掛け早くも寛ぎ体勢に入る。周りをざっと見渡す限り顔見知りの人もいないし、この人が留守番つてどこか。単に人に声を掛けるのを面倒臭がっているだけかもしれないが。

「まあ時間までたっぷりあるし、そこら辺でのんびりしといて構わないぜ」

「では時間まで、私たちも他に取り込まれた人を探すのに協力させて貰えますか？」

責任感の強そうなYASUさんらしい台詞だが、Aseiliaさんは首を振って制止した。

「ゲーム画面だと見慣れてるかもしれないけど、初めてだと結構迷うぜこの町。広さが尋常じゃないからな。それにあんたらはまだ状況を上手く説明出来ないだろ？ 噴水の周りの奴らはみんな同じ新入りだしさ、そいつらと交流でも深めててくれよ」

単に俺がこの人のことを穿った見方をしているだけなのかもしれないが、新入りを気遣うようどこか適当な物言いのような。YASUさんとPON太さんは少し困ったような表情をするが、彼は意に介す様子は一切見せない。

「あ、シエル。お前とはこれから少し打ち合わせをしたいんだが」

「打ち合わせ？ はい、いいですけど…」

横目で二人が顔を見合わせて軽く頷く姿が見える。彼らもAse liaさんの意図を何となく了承したらしい。二人共、こちら辺は流石に大人だ。YASUさんとPon太さんは、この場を離れ噴水の周りに集まっている冒険者達に話しかけていた。

「ちっと印象悪くしたかな？」

離れた二人を見てAse liaさんが軽く苦笑いする。

「分かってて言ってたんですか…」

「まあいいさ、仲間はこれから腐るほど増える。お前の仲間とはいえ、誰も彼もと深く付き合うなんて面倒くさくてしょうがねえや」

それって、色々ダメな人の台詞だよAse liaさん。この人は根っからの性格が悪いとかじゃないんだろうけども… 多分。現状を考えて、他の人に悪印象を与えるのは得策では無い気もするが。

「それで？ あのと二人を遠ざけたってことは何か大事な話でも？」

「おう、話が早い。お前はこんなことになる前から知り合いだし、間違いなく『シロ』だから言えることなんだけどさ…」

シロって何だ。何だか物騒な気がしてきたぞ。

彼は二人が近くにいた時とは比べ物にならないくらいの真剣な表

情になり、ヌツとこちらが思わず身を引くくらいに顔を近づける。

「俺の仲間が殺された」

「えっ…!？」

耳元でぼそりと呟かれたのは、あまりにも唐突な上に色々と省きまくっている台詞。言わば核心を先に言っちゃうアメリカ的な？とにかく穏やかな事では無いのは確かだ。

「えっと… 殺されたって、誰が？ 誰に？」

俺は周りのことを考えて小声で尋ねた。A s e l i aさんも周囲にこの話が漏れないようにキョロキョロしながら話を続ける。こういう話は他に人がいない所でやった方がいいと思うのだが、それだと余計変に疑われるってことか？ 幸い噴水の音で声は少し通り難くなっている。

「お前は多分知らない奴だ。俺のこのゲーム始める前からのネット仲間だな。掲示板のメンバーには入っていないが、俺個人とはこっちに来てからも色々付き合いがあった。昨日までサイト達にも言うてなかったんだけどな」

「どうして俺達の仲間にならなかったんですか？」

「早いうちから他人があまり信用できなくなっていたせい、かな？ 多分。お前だってG i l l yとかいう訳解からん人がいるだろ。お互い様だ」

互い様…か？ 事情は色々違う気もするが。

「どうやって殺されたって知ったんですか？」

「昨晚4人で町を歩いている最中に殺された現場に出くわしたんだ」

「町中で殺されたってなら犯人は……」

「それは分からん。俺達が現場に付いた時は時既に遅しかったよ。右肩から左腰にかけて真っ二つ。そいつは鎧も着てたし、鋭利な切り口から見ても冒険者……恐らくはファイターであることはほぼ間違いないって言われてたな。……ああ、安心しろ。お前やGillyとかいう人は微塵も疑っちゃいない。現場は互いに剣で一線交えていた感じの惨状だったからな。ソーサリーやシーフはすぐに容疑者から外れる」

何とも複雑な心境だが、とりあえず俺と付き合いの長い人物の中に容疑者はいなくて少しほっとする。もちろん自分が疑われてないことも含めて。

しかし、剣で一戦交えた、か。何でそんな事態に？ こっちの世界で死ぬことは、現実でも死ぬことだ。初見でもない限り、自らの命を危険に晒すようなことは普通しないと思うが。

……いや、違うな。一つの仮定が当たれば当時の現場の状況を簡単に組み立てられる。

「……それは本当に冒険者がやったんですか？」

「少なくとも、そいつはレベル47のファイターだ。この町のモブや低レベルのキャラにそう簡単にやられるような奴じゃない」

「モンスターという線は…」

「これだけ大きな町、しかも町の真ん中の一角だけで起こったんだぜ？ モンスターならもっと大騒ぎになっているさ。それに被害者だってもっと出ているだろうし。人に化けられるモンスターでもいたら話しは別だけど」

確かに今のところそんなモンスターの存在は確認されていないし。それに人を襲うにしても町の内側でやるなんてそれこそ意味が分からない。変幻自在のモンスターとか考え出すとキリがないが、動機や周囲の状況を考えると人間の仕業だという結論に達してしまう。ちようどこの世界では謎の連続殺人事件真っ盛りだな。

「目撃者とかはいないんですか？」

「それらしき人を含めて殺されてる。まだ年端もいかない男の子とかな。おまけに近所で一家丸々殺害されたっていう事件があったらしくて、さらに医者の話ではそっちの方が先に殺されたみたいで…」

「…姿を見たから殺した」

「そう思うよな」

「はあ〜」とA seliaさんは遠い目をしながら溜息をつく。

気がつけば犯人が人でないという僅かな可能性に望みを託す自分がいる。あくまでも比較としてだが、知能犯のモンスターがやったという一辺倒の考えを持てたらどんなに気持ちが良いことか。

何のために人を殺す必要があるのか。今となってはその動機がある程度推測出来てしまうのが何とも虚しい。Gillyさんが言っていたな、人を殺すことに慣れてしまったらって。

一度やってしまうと歯止めが利かなくなる、か。

今の状況を考えればこんな考えを持った人間がいてもおかしくないのだ。いや、確実にいる。俺だってこっちの世界に取り込まれたのが自分だけだったなら、こっちから世の中の蛆共を成敗してやろうなんて行動を起こしたかもしれない。

でも他に同じ状況の人が、しかも大量にいたとなれば話は別。あまりにも簡単に完全犯罪を起こせる方法を複数の人が持っているということは、常に自分も命を狙われ続ける一人になるという事だ。犯人もそれが分かっているわけではないだろう。慣れると同時に引っ込みがつかなくなっているのかもしれない。

「でもどうしてそんなことを俺にだけ？ そんな重要な事だったら……」

「容疑者は腐るほどいる。新入りの奴にそんなこと話してみろ。即パニックになるぞ」

ああ、なるほど。一応この人なりに色々考えてはいるんだな。寧ろ俺をそこまで信用してくれてありがとうございます。

「今日の集会：下手な事を言い出す奴がいたら一気におじゃん、どころか、一転して最悪の状況になるんだ。だからお前には早いうちに釘指しと思うって」

「確かに、疑心暗鬼にでもなって味方同士でいざこざが起きるよう

になったら…」

「そゆこと。つーか、集会企画したれんちえふって奴ほんと空気読めねーよな。俺らのメンバー以外にそう思ってる奴絶対にいるっつーの」

ああもう少し見直したそばから、この人ぶっちゃけすぎ。でも気持ちちは分からんでもない。今まで味方と絡むのは少人数ずつだったからよいが、これだけ大人数になるとあまり伝えたくない情報を隠すのも難しい。相手の胸中も分かり難いし。

これまでの俺達は互いに100%信用しているというわけでもないが、つかず離れずの微妙な距離感を保っていたわけだ。探り合っているが、決して表には出さないという関係を壊さないようにしていた。

強固な結束は強い力を発揮できるが、その分崩れた時の代償も大きい。

「ということはAseliaさん。これはさっきのYASUさんの推理なんですがね…もしかしたらこの世界にはデバツガーとかもいるんじゃないかと」

「言、う、な、よ？　少なくとも集会中は」

やっぱりっすか。

34話 これだけをまとめるには（後書き）

そろそろ話を盛り上げたいなあ

35話 これは…最悪だ…

この世界基準で午後3時くらいの町の大広場。

広場の中心の噴水の周りには大量の冒険者たちが集まっていて、周囲のモブ一般人の注意を引いていた。冒険者というのは一応この世界の価値観では一般人の（僅かな畏怖も含めて）憧れでもある立場ではあるのだが、ここに来ている人達は皆周りを気にして落ち着かない。今日という日から、百戦錬磨の戦士も中身はただの一般人になっているのだから。

俺は後から来たサイトさん達とも合流し、集会の運営側の準備をしていた。具体的に言えば関係者の誘導とか。寧ろ部外者を遠ざける仕事の方が多かったが。だって総勢100人近いもんなあ。こんな真昼間から何事だと野次馬が集まるのも無理はない。

「シエルさんお疲れ様。はいこれ、差し入れよ」

後ろから声つと、この艶のある女性の声はにいにいさんだ。彼女は紙コップのような容器に入った飲み物を差し出してくれた。中身は…桜桃色の液体。一体何のジュースだろう。

「甘酸っぱくて結構いい感じよ。アセロラ？　みたいな感じ」

側面に付いているストローを取り（もう突っ込まない事にする）、軽く氷をかき混ぜながら飲んでみる。うん、何も聞かされずに飲むと表現に困るが、濃いめのアセロラドリンクという言葉が結構的を得ていると思う。この酸っぱさが先程からモヤモヤしている頭の中をいい感じにリフレッシュしてくれる。流石はリアル女性のいに

いさん。

「いやゝ美味しいです。ありがとうございます」

「どういたしまして」

少し前の方で喧騒が大きくなる。どうやら集会の発案者のれんちえふさんが前に立ったみたいだ。その他古参掲示板メンバー何人かで人数と名前の確認を取っており、数えやすいようにきちんと整列まで促している。何だか中高の時の体育を思い出すな。

「そういえばシエルさんもあの話聞いたんだよね……」

集団行動をぼんやり見ている横からにいにいさんが語りかけて来る。彼女の視線も同じく前を向いている。アバターは美人だが、美人って何となく感情が読みとり難い気がする。

「A s e l i aさんの言ってたあの殺：死体を見つけたって話ですか？」

「ええ、本当に酷かったわ…… A s e l i aの知り合いもそうだったけど、近くに倒れていた男の子なんて…… 女だから血を見るのは大丈夫だと思ってたけど、あの惨殺体はもう無理。未だに目に焼き付いてこの夢が覚めても頭の中から離れないの……」

いや、多分それは俺も無理だと思います。少年の惨殺体とか実際に見たらトラウマものだわ。それを会話に出せるだけ凄いのと思いますよにいにいさん。

「私さ…… 現実では俗に言う『喪女』ってやつだから、こっちに

来てからこんな美女になって、男の人から一杯声をかけてもらって、それを軽くあしらったりして： 前にも言ってたけど少し楽しんじやってたのよ。如月さんも死んだっていうのに：」

まあ俺だってこの体でG行為やってたくらいだし。外に出ると危険、町の中にいると安全、そう思えば現実の自分とは違うこの体で色々やってみる気持ちは分かる。

「ここはやっぱり現実とは違う所だから」

「そう。でもこの世界に入り込もうとすればするほど現実を思い知らされるのよね……」

取り込まれたのが一人、もしくはほんの少数ならそこはファンタジーとなる。だが、同じような境遇が何人も出てくると、たちまちそこには現実世界のルールが持ち込まれる。生まれて育った世界の文化、習慣、思想を急に変えることは出来ない。ずっとこのままではいられるなら話は別だが、毎日、しかも強制的に行き来しなければならぬ。頭の中から現実が消えることは絶対にない。

「俺も、やっぱり女の子にはなれないなって思いますよ。どうせだったらイケメンのAvatarのほうが、こっちの女性にモテモテでもっと楽しめたかなーって思うくらいです」

「それだところちの世界では楽しめるけど、朝起きて鏡の前の自分の顔を見た時の絶望感といったら」

「う……」

なるほど、これがこの人の言っている現実を思い知らされるって

奴か。変身願望はあくまでも願望で留まるべきなのだ。コスプレとかくらいで。一日の半分ずつを別の肉体、さらに都合良く変えた人格で過ごすとなると、どっちが本当の自分だか分からないようになる。もちろん、普通の人間なら劣っている方の自分を次第に認められなくなっていくだろう。そして自分の理想を詰め込んだキャラクターと同化していく。しかし、そこは決して現実では無い。

「結局、男の人が好きなのは『にいにい』であって、私自身じゃないのよねー」

こんな自虐的な嘲笑すらも絵になる彼女の整った顔が今日は酷く歪んで見えるような気がした。……いや、歪んでなんかいない。これが本来の人間という生き物の顔だ。美しいとか、可愛いとか、惚れるとか、そんな物を超越した暖かみ・安心感というか……これが本来のあるべき姿なのかもしれないとも思い知らされる。

「えー！ すいませーん！ ちょっと静かにお願いしまーす！」

辺りにツンデレ委員長風の良く通る声が響いた。黒髪ロングの姫カットの少女、あれはくろね子さんだっけか？ こっちで見たのは初めてだ。彼女（多分彼）の声と共に、辺りの喧騒は一斉に収まる。5列横隊に整然と並んだ姿恰好も様々な冒険者の姿。後方から見ているこちらにとっては偉く滑稽に見える。みんな日本人なんだなあ。

その後噴水の淵の上にれんちえふさんが昇り、一段高い所から集まった人達をぐりと見渡す。やや緊張した面持ちながら、よく通る声で新しく集った人達に現状と、この掲示板同盟（仮）のことについて話し始めた。もちろん、この世界と現実世界の繋がりに関しても。その時は更に真剣味が増しているようであった。

「……ですので、皆さんはくれぐれもこの仕組みを使って殺人などを起こさないようにしてください。少なくともこれは決して完全犯罪と呼べるものではありません。この事態を引き起こした何者かによって、私達の行動が監視されている可能性もあるのですから」

子供たちに念を押すかの如く、れんちえふさんは何度も悪事には一切手を貸さずにまずこの状況を何とかする方法を考えていこうと繰り返した。新入りの人達も表情こそこの位置からでは見えないが、特に私語もないので割と真剣に聞いているのだろう。

「……はい、私からは以上ですが、何か質問などはございませんか？」

説明が一通り終わり、れんちえふさんも一息ついていた所で、聴衆の中からずっと手が挙がるのが見えた。今の俺の身長が低いせいもあるのか、容姿は他の人に隠れてわからない。

「はい、なんでしょうか」

「俺達の行動が監視されてるかもしれないって言ってたけど、それだったらこの集会とかも見られてたりする可能性もあるんじゃないか？ 確認しとくけど、みんなで手を組めば絶対に安全が保障されるんだよね？」

男の人の声だったけど、少し語尾が震えているようにも思えた。

「はい、少なくとも今のところは。だけど絶対に安全とは保証できません。現実でも絶対に交通事故に遭わないってことは言いきれないでしょ？ 気を付ければある程度の安全は保障されますが」

「事故で死ぬくらいのリスクも当然あるわけですね？」

他の人が言葉の先を言う。それに対してれんちえふさんも黙って頷く。

すると今度は挙手もせず他所から声上がる。

「でも、実際に人を殺しまくっている奴もいるんだろ？ そいつらに命を狙われたりとかしねーのかよ？ 口封じとか言ってさ」

「それを防ぐために、大勢で同盟を組むわけです。向こうが何人いるか知りませんが、これだけの数がいれば迂闊に手出しできない。そういう状態を作りたいんです」

れんちえふさんは毅然とした態度で応じる。まあ言ってることも正しい。手出し出来ない、というのが自分達と同じ境遇である人しか適応されないのが痛い。

「でも逆に組んだせいで、闇討ちとかされたりしないの？」

「その可能性は……否定できません。しかし少人数で勝手な行動を取るよりは安全だと思いますが…… 現に今まで被害者もないわけですし」

隣でいよいよさんが声を洩らしながら複雑な表情をする。……ああ、れんちえふさんにはまだ言って無かったんだな。彼女達のパーティー限定か。大勢で組めば危険は減るだろうが、口封じで殺される可能性は大いにある。この事を言ってよいものかが悩みどころだ。

御新規さん達の中でややざわめきが起こってはいるが、手を組む

ことに否定的な声は聞こえない。彼らにとってはまだ右も左も分からない状況なので、とりあえずはみんなと一緒にいる方が安全だと結論付けたのだろう。俺が同じ状況だったらそうする。

そんな中でまた一つ手が挙がる。

「この状況を何とかする方法を考えるって言ってたけど、何か見込みとかあんの？」

「現在の所、製作者側にこのゲームを止めさせようって話は出ていますが……」

「それで本当に解決出来るのかよ？」

最後に手を挙げた男はやや反発気味というか、周りの人たちをあまり信用できないでいるような感じがした。少し口調も乱暴な感じだ。

「大体こういう状態を引き起こしているのが本当に製作者だとしたら、こんな大勢に決起されたら困るんじゃないのか？俺だったら、そうなる前に普通何とかしてあんたらのような連中を黙らせると思うけどな。監視されてるかもしれない……んだろ？」

男はさらに語句を強める。

「それによろ、あんたらこんな集会なんて開く手間があったら何でそうなる前に俺達がゲームをやるのを止めなかったんだよ」

「私達は色んな所でこのゲームを止めるように言っています。しかし、実際は警察沙汰にもなったりして上手く伝える事が出来なくて

： 当人にでもならない限りゲームの中に入るなんて話信じてくれませんか」

「俺はよくこのゲームの雑談掲示板とか利用するけどそんな話見たことなかったぞ？ お前ら本当に伝える気あんの？ 色んなサイトで拡散とか、町中でデモったりとか、もっと色々出来るじゃないか」

「それがゲームに対するいわれの無い誹謗中傷として片っぱしから処理されてしまうのが現状なんです。だからそのためにも大勢で協力することが必要なんです。大勢でゲーム差し止めの声を上げれば、世間も無視することは出来ないでしょう？」

「今の時点で世間に狂ってるって言われるのをビビってるやつらが、会社に抗議とか本当に出来んのかよ？ 人数ってせいぜい数十人から百人程度に増えるだけじゃないか。大して変わんねえよ」

不毛なやり取りはしばらく続いた。周りも茫然としてその様子を眺めている。

「何かあいつ感じわるー」

隣でにいにいさんが呆れたように呟く。

「一部正論も交じってますけど、要は単に煽ってるだけですもんね。ここで言う必要も無いし」

「現実だと絶対荒らしとかやってる奴よ」

煽りを入れている奴は文句を言っている割には新たな解決策を提示しようとする気配は無い。単に自分が巻き込まれた事に対する腹

いせをぶつけているような気がする。れんちえふさんのみんなをまとめるという行為は解決策にはなっていないかもしれないが、対応策としては簡単に批判出来るものではない。

「……私達に協力するかどうかはあなたの勝手です。強制する気はありません。ただ、皆さんの不安を無闇に煽らないでください」

「あんたらの言ってることとやってる事が一々矛盾してるからそれを指摘してやってるだけじゃねえか。それによ……」

男は一息おいて吐き捨てるように言った。

「あんたらの中、いや、この中にゲームの製作者が交じってる可能性とかもあるんじゃないのか？ レベルが上がればこっちに来れるんだろ？ 当然作り手もテストプレイとかやってるだろうしな、いない方が不思議だ。まさかそんな事も考えていなかったなんて言わないよな？」

「それは……！」

俺の位置から見える古参組の表情が一気に曇るのが見えた。駄目だ。これ以上言わせたら不味い。危険察知と人の不安を掻きたてることはまた別物。そういう事はある程度信頼関係が出来てからでない……

気が付けば聴衆のざわめきは消えていた。新規の人達は皆口をつぐんでいる。他の古参の人達も事態を収拾しようと動きを見せようとしていた。

(……?)

一瞬、俺の頭上から風を切る音がした。俺が上に気を取られていた瞬間、隣から聞こえたにいなさんの擦れた悲鳴で我に帰る。その直後、大きな水音が周囲に響く。

辺りは騒然となっていた。そしてれんちえふさんの姿も見えない。

「伏せろおおーっ！っ！」

A seliaさんの怒号が飛び、全員が一斉に身を屈める。俺の頭上からさらに風を切る音が何本も聞こえてくる。身を地に付けた瞬間、目の前ほんの3mという所の石畳を抉るように何かが突き刺さる。

これは…矢？ どこから飛んできた？ 後ろ？

「プロテクションフィールドッ！」

プリーストの誰かが、俺の少し後方に物理防壁を展開する。俺はすぐさまその魔法の「壁」で矢が弾かれる様を目の当たりにする。

「畜生！ どこから撃って来やがった！？」

A seliaさんとその他何人は武器を構え、戦闘態勢に入っていた。俺も物理防壁を信頼し、ウィザードロッドを構える。距離が分からないなら一応Lフレ임レーザーか？

……だが、次の矢はいくら待っても飛んでこない。こちらが位置を割り出す前に逃げられたのだろうか。

「テルミさん！ 一応まだ防壁は貼り続けてくれ！ いつ飛んでくるか分からない！」

「れんちえふは！？ 回復魔法で治せないのか？」

「……駄目です、効きません。即死……だと思えます」

「蘇生魔法とかねえのかよ！ くそっ！」

俺はおぼつかない足取りで噴水まで向かう。怯える人を掻きわけて行くと、その場で茫然と立ち尽くすサイトさんを見つける。彼の足下にはマントのような布を上半身に掛けられたれんちえふさんと思われる人物が横たわっていた。

「サイトさん…… れんちえふさんは……」

「鼻から、上が……」

彼はそれ以上言わなかった。でもそれだけで俺は十二分に理解出来た。

噴水の水の一部が赤く染まっている。更に水面に浮かぶ肉片のような物がその惨状を物語っていた。

35話　これは…最悪だ…（後書き）

更新間隔がちょっと空いてしまいました。

同時に字数もどんどん増えてます（笑）。

始めから読んでくれている人はもう気にしないよね！

36話 宣戦布告というやつですか（前書き）

投稿が遅れて本当にごめんなさい（焼き土下座）

36話 宣戦布告というやつですか

「ちょっと！ みんなどこに行くつもりですか！？」

周囲が騒然となっている中、くろね子さんの必死な声が聞こえてくる。

「俺は…抜けさせてもらいます。あんな風に狙われたんじゃないでしょう…」

「私も。組む方がかえって危険な気がしてきました…」

「……」

彼女（彼？）の質問に答えるのはまだいい方で、多くの人は無言で逃げるようにしてその場を去って行った。くろね子さんは口惜しそうに、文字通り地団太を踏む。ヘタレ属性の女の子は割と好みだが、今はそんな事を考えている場合ではない。

「こんな状況になることが撃って来た奴の狙いって…… こっちに来たばっかじゃそんなこと考えないか」

後ろからサイトさんが呟く声が聞こえる。彼は先程からかがみ込んで、虚ろな目でれんちえふさんの遺体をじっと見つめていた。

「おまけにこの中に製作者がいるかもしれないなんてぶちまけられたからなあ。おい、そろそろ防壁を解除するから、あんましばやばやするなよ」

A s e l i aさんがやって来てサイトさんの肩を叩く。サイトさんは遺体の前で手を合わせて軽く黙とうすると、立ちあがってA s e l i aさんに小さく「大丈夫だ」とだけ言う。

「……で？ そのことをぶちまけた本人は？」

「どさくさにまぎれて逃げられちゃったよ」

A s e l i aさんが肩をすくめる。だが、表情は少し暗いままだ。あまり好んでない人物とはいえ、目の前で悲惨な死に方を見せられたら誰だってそうなるのは当然だが。遺体は冒険者ギルドに連絡して引き取ってもらおうようにするとのこと。とりあえず俺達はすぐにここから引き上げたほうがよさそうだ。

幸いだったのは俺達が集まる掲示板のパスワードをみんなにまだ教えていなかった事。よってここから外れた人達はあの掲示板を除く事は出来ない。情報共有はあくまでも信頼の証でもあるのだ。悪く言えば互いが互いに監視出来る状態、それが掲示板メンバーであることの暗黙の了解でもあった。

「これからどうするんですか？」

「とりあえずどこかに避難して次の方法を考えましょう。それに、大勢でいる方が安全だと考える人はそのうちきつと出てくるはずですよ」

×ぼんさんも浮かない顔を解けずにいたが、気持ちは既に次のやるべき事に向かっているようだ。後ろの方で防壁を貼ってくれたテルミさんがこちらが軽く注意を促し、そして光の壁が消滅する。まづは、とつとこの場を離れたほうがよさそうだ。

「だな、避難場所は……ちょっと狭いけどいつものところにするか」

「了解です」

ちょっと狭い、いつものところⅡ宿屋アートマーだな。20人入れるかどうか分からないが、他の人も大部屋を借りてるので分けて入れようとのこと。その場を立ち去る前にざっと広場を見渡してみたが、冒険者と思われる人影は見当たらない。寧ろ俺達の他に人っ子一人いない。モブの見物人含め、もう既にみんな逃げ出した後か。

大勢の人が集まる場であんな惨事を見せつけたとなれば、かく乱効果は十分すぎるだろう。もしかしたら、この集まりにいちやもんをつけた人は矢を撃ってきた奴の仲間かもしれないし、あの煽りも俺達を互いに疑わせるためにうった芝居なのかもしれない。…今更こんな事を考えても後の祭り、か。

俺達はやや小走り気味に広場を離れ、町の中央通りに向かう。こならモブキャラの人通りも多いし、隠れる場所も多い。逆に闇討ちもやり易いかもしれないが、複数で適度に固まって動けばひとまずは安心だ。

「しかし、あんな簡単に殺ってくるとはな……」

周囲を警戒しつつも、Aseliaさんが眉間に皺を寄せながら苦々しく言葉を吐く。いつもは妙に楽天的かつ皮肉屋な人だが、流石に今回の出来事は堪えたらしい。

「おそらく、こっちで散々殺人とかやっている奴だろうな……もしくは俺達をこの世界に引きずり込んだ張本人か……」

サイトさんの意見には概ね同意する。これまで想定に留まっていた俺達に敵対する存在が、ついに明確になったのだ。これからは奴らに対しての対応も考えていかなければならない。少なくとも敵は俺達が大勢で組むのを望んでいない。となると、あまり頭数には自信が無いのか、それとも俺達を協力させずに何かさせたいのか……

「今考えても仕方ありませんよ。とりあえずは戻って一息ついてからにしましょう」

よくもまあ一人目の前で殺されたというのにこんな風に冷静でいられるものだ。自分含めて。現実世界で人が死ぬとやるせない気持ちになるが、こっちの世界だとしても現実味が薄れる。その反動で朝起きたらまた頭がモヤモヤするんだろうけど。

みんな同じことを思っているのだろう。

それ以降、俺達は宿に到着するまで終始無言になっていた。



ほぼ同時刻。

宿屋アトマーの一室にカーテンの隙間から外を覗き込む男がいた。銀色の甲冑に身を包み、黒い短髪の一見爽やかな剣士。彼は一通り外の状況を確認すると、緊張を解くかのように胸を撫で下ろし、窓から目を離して木製の椅子に座り込む。

「何だか……とんでもないことになりましたね……」

彼の目先にいたのは茶褐色の体毛に身を包んだ獣戦士。雄々しい体格とは裏腹に彼の体は縮こまり、ベッドに腰掛けながら軽く震えてすらいた。

「ごめんなさいYASUさん…… 私一人で逃げ出したりなんかして……」

獣戦士から出る声は、顔のイメージ通りに低く野太いものであったが、しゃべり方は弱々しく、そして女々しいものであった。そのあまりのアンバランスさに軽く戸惑いつつも、YASUは目の前の仲間を何とかしてなだめようとしていた。

「いえ、あの場から逃げたのはPon太さんだけでは無いですし。それに私だってあなたについて行く形になりましたからね。……あんなことが目の前で起こったら誰だって逃げ出したくなりますよ」

YASUは軽く笑ってみせるが、すぐに逆効果だと気づき、口を閉じる。

あの惨劇。

彼らの頭上を鋭い衝撃が走り、眼前に立っていた人物の額を直撃。矢は男の頭部を易々と通り抜け、辺りには赤黒い脳漿が飛び散り、男はそのまま物言わぬ肉塊と化してしまった。

この間わずか数十秒。しかし、彼らにはその時の映像がコマ送りで頭の中に焼き付けられていた。

「この世界で死んだら現実でも死ぬって……本当、でしょうか……？」

Pon太が震えるような声で言う。

「……私には分かりませんが、現実で怪死事件が起こっているのは事実ですし、この事が本当に原因なら全ての説明がきます。シエルさんも言ってることですし」

もしも、これがただの夢でこっちの世界でどんな悲惨な死に方を迎えたとしても、現実では何事も無かったかのように朝を迎える可能性も……それは淡い期待に過ぎなかった。

彼らは始めからいきなり情報を与えられ過ぎた。自分自身で身を持って知った情報がほとんど無い。現実で目が覚めたら元の世界に戻れるという救いのある話でさえ、完全に信用する事が出来ないでいるのだ。ただただ、今後の不安だけが彼らの頭を支配していた。

「Pon太さん、私は思うんですが……やはり今はシエルさん達と協力した方がいいと思います。あの集会を襲って来た人達の動機もまだ明らかではありませんし。またいつ襲って来るかも分かりませんからね」

「……組もうとしたから襲って来たんじゃないですか？」

「それだと逆に我々が組むのを恐れている、という捉え方も出来ません。明確な動機は解りませんが、このまま二人でいると安全という保証もないんですよ。だったら、まだこの世界に慣れている人達と一緒にいた方が……」

組んだ方がいいのか、そのままの方がいいのか。どちらとも言えない。今は不確かな考えを積み上げることしか出来ない。ただ信じられるのは目の前で起きる現実のみ。

「……そうですね。大勢とは言わないまでも、せめてシエルさんとは……」

Pon太は力なく答えるが、先程の震えたような声ではなかった。

「ええ、決して長い時間ではないですけど、今まで一緒にやって来た仲ですから」

Pon太の後押しを受けて、YASUの言葉にも勢いがこもる。ようやく彼本来の雰囲気に戻って来たようであった。

「よし！ そうと決まれば、早速でもシエルさんを探したい所ですが……」

「どうやって探すんですか？」

YASUは少し考えた後、すぐに何かをひらめいたかのように頷く。

「確か上の階は大人数で泊まれる部屋でしょ？ もししたら彼らもこの宿屋を利用するかもしれません。……いやゲーム内のこの町の宿屋はここだけですから可能性は結構高いですよ。入る時に名簿に名前を書きましたよね？ そこから割り出せるかもしれません」

「別の名前で泊まっていたら？ 現に私は偽名使いましたし……」

「あー…… ま、まあ、可能性は無きにしもあらずですよ！ 早速他の人のが見れるか調べて来ます！」

あくまでも前向きなYASUを見て、思わずPon太も笑みがこぼれる。

「本当に助かったわ、YASUさんがいてくれて…… 自分一人だったら、きっと今頃パニックでずっと震えてたと思います」

「Pon太さん、女性なんですよね？」

Pon太は少し陰しさの取れた顔でゆっくり頷く。

自分はまだ同じ男の体だからいいが、その獣の体、しかも♂の肉体では色々と不便というか、気持ちが悪いだろうとYASUは気の毒に思った。低く野太い声で女口調というのも滑稽であるが、それ以上に別の人間を演じるのが大変そうだと同情を禁じ得ない。

「でもYASUさんばかりに頼ってられないわ。私も、シエルさん達の言う通り朝になって元の世界に戻れたら、マスコミにこの事を伝えようと思うの」

「マスコミですか…… 確かに世間に変死事件が多発してるし、証拠が無くても話題に取り上げて貰えれば状況が変わってくると思いますが…… 信じて貰えるでしょうか？ そもそも既に他の皆さんがやられているみたいですし」

「報道側に知り合いがいるのよ。彼なら私の言う事がある程度信じてくれると思う。証拠は掴めなくてもゴシップにでもなれば……」

YASUは大きく頷く。

この事態を何とかするにしても、取り込まれた人間だけでは人数

が少なすぎる。まずは現実の世界の人達にこの状況を知ってもらえれば、「この世界に取り込まれていない味方」を作ることが出来るかもしれない。

「それは妙案ですよ」

「でも、まずは元の世界に戻らなきゃ……」

「そ、そうですね……」

現実世界での行動方針は決まったとはいえ、急に手持ち無沙汰になってしまいYASUは少し落ち着かなくなる。部屋は一人用にしては割と広いため窮屈感こそ無いが、男女がテレビも何も無い空間に二人というのは互いに少し気まずさを感じさせた。

やがて少し居たたまれなくなったのか、YASUは再び立ち上がり入り口の方に向かう。

「……ここで、このままじっと待っておくのもなんですし、今からフロントで客が確認出来ないか見てきます」

「大丈夫ですか？」

「宿の中を少し見て回るだけです。すぐに戻ってきます。あ、でも一応鍵は閉めてくださいね」

そう言って微笑みながらYASUは部屋を出て行く。

部屋に一人残されたPon太は、ドアの鍵を閉めた後、大きく息をつきベッドに倒れ込んだ。手や頬をいくら力任せにつねってみても、夢から覚める気配は一向にない。股をまさぐると、現実の自分

には無い物が付いていて強い戸惑いを覚える。こんなことを続けている訳にはいかないと、すぐに手を頭の後ろに回し、仰向けの姿勢でぼんやり天井を眺める。

（シエルさん達が言っていたように、本当にこの世界が原因で現実の人間が死んでいるとしたら…… 悪用する人が出るのは当然ね……でも私はそんなこと……）

Pon太は、いや、白岩由貴子はごく普通の専業主婦であった。幸い男運には恵まれ、給料のいい新聞社に勤める男と結婚する事が出来た。夫婦仲も割と円満、姑問題も特になく、小学生の息子も大人しい。彼女はそれなりに、だが、何か満たされない生活を送っていた。それを埋めるかの如く家事の合間に始めたネットゲームだが、いつの間にか彼女の生活の一部となっていた。30過ぎになってようやく日々の楽しみを見つけた矢先の出来事である。

（このことが外に漏れれば大騒ぎになるでしょうね。ちょうどあの人もほどほどに正義感はあるし。これで犯人がわかったら…… 表彰ものかしら？ いや、下手すれば私も変に疑われるかもしれないわね。どちらにせよ、ゲームで死ぬなんて馬鹿馬鹿しいわ……）

自分が折角見つけたささやかな楽しみ。面倒くさい御近所付き合いなど忘れ、素性を隠して外の人とふれあえる機会。それを邪魔するなんてとんでもない。ゲームの中の住人に慣れるなんてまるで夢のような話ではあるが。

そんなことを考えていると、部屋の戸をノックする音が聞こえる。

（誰！？）

P o n 太は思わず身構えて武器に手をかけた。

『P o n 太さん？ 私です』

ドアのノックの主はY A S Uであった。P o n 太は肩の力が一気に抜ける感覚を覚えた。

「Y A S Uさん、どうでした？」

Y A S Uはその問いに答える間も無く、ややばつの悪そうな表情を浮かべながら部屋の中に入って行く。何やら顔をキョロキョロさせて何かを探しているようにも見えた。

「一体でどうしたんですか？」

Y A S Uは屈んでベッドの下も探り、顎に手をかけて何やら考えるような仕草を見せる。

「下に行ったついでに何か買おうと思ったんですが、財布を忘れてしまったみたいで… どこに置いたかな… もしかして落としたのかも……」

「？ どんなのですか？ 私も探しますけど……」

P o n 太も布団をひっくり返して手伝おうとする。Y A S Uは生返事をしながら淡々と自分の荷物の中身を出していく。

「そういえばP o n 太さん…… 報道関係に知り合いがいるっておっしゃってましたけど、本当に信用なんてしてもらえますかね？ やっぱり少し難しそうな気がします……」

つい先程まで手を上げて賞賛していたのに、YASUは急に訝しげな口調になる。

「大丈夫ですよ。実は私の夫の事なんです。名前は出せませんが、とある新聞社の報道副部長で…… 最近の怪死事件のことも凄く気にしてたから、紙面には載せられなくても裏で調べて貰う事が出来るかも。向こうも今までお手上げ状態でしたし」

「なるほど」

瞬間、人の熱が消えたような声に、Pon太は違和感を覚えた。

彼女の本能が得体の知れないものを感じ取り、男の後ろ姿を凝視する。YASUは「あったあった」とゆっくりと財布らしき袋を取り出して、にこやかに振り向いて立ち上がる。その表情を見てやっぱり自分の気のせいかな？ と、ほっとした瞬間。

「……え？」

ふっ、と目の前の男の姿が消える。何拍か置いて自分の胸の衝撃に気づく。

「あ……？」

男は自分の目下にいた。彼が右手を引くと、赤黒い液体のついたナイフが彼女の眼前に晒される。そして、遅れて彼女の痛覚が起動する。

「う……！ あ、あ……？」

息が、吸えなくなる。

自分の胸から次々に血液が噴出し、思わず両手を当てる。

「夫の稼いだ金でこのうと生活し、自分はネトゲ三昧か。いーね、主婦って奴は」

目の前の男から、嫌悪感たっぷりの見下したような低い声が叩きつけられる。

「……？」

もはやそんな言葉すらも彼女の耳には届かなくなっていた。床に蹲ったまま、声すら出せない。息をしようにも気管に次々に血液が流れ込んできて空気をせき止める。口からも血が漏れ、乞うような目で男を見るが軽く足蹴りされる。

（な……ん、で……？）

「キメエんだよ、ババア」

今度は男の剣が彼女の脳天に振り下ろされ、部屋の中に鈍い音が響く。頭蓋骨に刀身が引っかかり、それを引き抜こうと変に動かし、更に頭部は醜く歪み脳の破片が引き裂かれたように辺りに散らばった。

「うえっ…… ま、まあ、現実では平和的に病気で死ぬだろうしな……」

男は足元の血まみれの剣をその辺に適当に放り投げ、血まみれの

服装のまま急いで部屋を出る。ちょうど廊下を通りすがっていた清掃員に何事かという目で見られたが、彼女を突き飛ばしそのまま便所へと駆けこんだ。



「あ……YASUさん？」

宿屋の受付でちょうど冒険者達が顔を合わせる。男はほっとした表情で、名前を読んだ魔法使いの少女を迎えた。

「シエルさん！ よかった！ ……あ、いや、すみません。勝手にあの場合から逃げ出したりして……」

申し訳なさそうにYASUは頭を下げる。冒険者の戦闘にいたXぼんもあの状況なら仕方ないと返す。

「本当に身勝手な頼みだとはわかっていますが、やっぱりあなた達に同行させてもらえませんか？」

Xぼんはシエルのほうを振り返ると、彼が頷くのを確認してYASUに握手を求める。

「やっぱりそーゆーもんなの？」

後ろにいたAseliaが小声でサイトに問いかけるが、彼も目を瞑りながら軽く頷いた。

「本当にありがとうございます。……こうしちゃいけない、実は Pon 太さんも一緒なんですよ。彼女も呼んで来なきゃ」

一行はまた少しずつ人が集まって来そうだと、やや複雑な気持ちの入り交じった安堵を覚えながら、彼の部屋へと向かった。

36話 宣戦布告というやつですか（後書き）

話の途中での人称変更はやりたくなかったのですが……orz
これが一人称主体の最大の欠点ですなあ……

【番外編2】 俺の知らない所で

それは衝撃的な集会襲撃事件の夜のこと。

アカシックドミネーターの世界における西部：ギャドラクの町。まだクエストもほとんど実装されておらず、冒険者達にはあまり馴染みのない町であった。

その住宅街の一角に古ぼけた小さな店がある。唯一真新しい看板には工房と書かれてあるが店主はほとんど店先におらず、本当に商売になっているのか疑しい。たまに夜遅くまで灯りをつけたまま店が空いている時があるらしいが、これは単に店主が消し忘れているだけだとか。近辺の住人からも少し変わった人が住んでいるともしばら世間話のタネになっている。

この日の晩は店先はちゃんと閉められており、何事もない平和な夜であった……が。

店の前に背の高い男が立っていた。体はやや痩せ形、服装から冒険者だと分かるがそれにしては軽装過ぎる。服飾装備において金属が占める面積は非常に少なく、また目立った武器のような物も持っているようには見えない。短い金髪の上にはバンダナを巻き、余計なものを一切晒さないその装備。判り易いくらいに盗賊であった。

辺りは人通りが少なく静まり返っており、店の前で何かを確認し、顎を掻いている男を見て咎めるような者はいない。傍から見たら今にも盗みに入ろうとする姿だというのに。

だが、そんな予想を裏切るかのように男は店のドアをノックする。軽く、ではない。ノックというよりは叩くという表現の方が近いかもしれない。木製のドアが鈍い音を鳴らすが、店主が出てくる気配

は一向に無い。こんなことを繰り返すこと10分。

男はとうとう痺れを切らしたのが腰に身につけている道具袋から、針金の様な物を取り出し、ドアの鍵穴に差し込む。流石は本職とも言うべきか、ものの数十秒もしないうちに鍵は開いた。

「入るぞー」

ピッキング行為をやっておきながら挨拶、おまけにドアを内側からノックしながら堂々と男は店の中に入って行く。

店の中は灯りが付いておらず、時折床に落ちているガラクタのよなものに男は何度か足を取られそうになる。だがすぐに目が慣れたようで、男は灯りを点けることもなく、家の中をひよいひよいと回って行く。部屋に入っても周りをキョロキョロ見渡すだけで、物を取ろうとする気配は感じられない。

やがて、僅かに光が漏れている地下への階段を見つける。男は軽く頷き足音一つ立てず、階段を下りていった。

「よう」

「……！ G i l l y か。よくここがわかったな……」

階段を下りた先は何やらガラクタの山。しかしその空間は下手すれば上の坪面積よりも広いかもしれない。ガラクタの奥には首に手ぬぐいを巻いた職人風の若い男が座っていた。

彼は突然の来訪者の顔を見ると少し肩を落とし、再び周辺に散らばっている工具を取り、目の前のガラクタをいじり始める。

「実際苦勞したぜ、あんたを見つけるのに5日もかかったしよ。ま

さか自分で工房開いているとはな。こんなシステムもこのゲームにはあるのか？」

「いや、これは俺がこっちの世界に来て譲り受けたものだ……」

Gillyは目だけで男の了解を確認し、適当に丈夫そうなガラクタの上に腰をかける。

「で？ 何の用だ」

「決まってるだろ。この世界についてだ。お前なら色々知ってそうだと思うてな」

Gillyは腰の道具袋から紙巻煙草を取り出し口にくわえる。

「止めてくれ。ここには引火性のブツもある」

「……そりゃ失礼」

既に手に取っていたマッチを袋に戻し、火の付いていない煙草をくわえたままでGillyは体勢を低めた。

「色々聞きたいと言ってたな。何で俺なんだ」

「そりゃなんてったって、あんた製作側の人間だろ？ ミノルさんよ」

ミノルと呼ばれた男は手を止め、そのまま手元のガラクタを見つめながら無言になる。

「戦闘では全く役に立たないクリエイターなんて職業をここまでレベル上げて、おまけにアイテムの内部修正値まで知ってる時点だなあー」

Gillyの視線が部屋の中を泳ぐ。

「……ふう、製作側の人間なのは認める。だが、俺はただのデバッグ作業のアルバイトだ。『会社側の人間』ではない。当然この現象についても何も聞かされていない」

「ふーん？　じゃあ会社の人間はこの事を知ってそうなのか？」

「既にバイトの何人かが申し出ている。だが向こうは知らぬ存ぜぬだ」

「……」

Gillyの視点が止まる。ミノルはGillyの手元を監視するようにじっと見つめる。

「ただ……俺と同じアルバイトの奴も何人か姿を消している……
ついでに、言うなら会社側のデバッガーもだ」

「同じ製作側でも容赦しないってか？」

「いや……そもそも作り手も本当に気づいてないという可能性もある」

Gillyもミノルの視線に気づき、煙草を口から飛ばし腕組む。

「デバッグの仕事って会社に泊まり込みとかでするんじゃないのか？」

「もちろん、現に俺はそうだ。だが、一般家庭のサーバー状態やプレイヤーの生の意見も聞くということで外部のバイトも何人かいる。今のところ、会社の中で死んだ人間はいない…… 会社側のデバッガーもちようど家に帰ってから急に出勤してこなくなったしな」

「んじゃ、内部で人間が死ねば向こうも信じてくれるってことだな」
次の瞬間、二人は己の「獲物」を構え互いに向け合う。

Gillyは小型のボウガン。ミノルは一見ガラクタのようだが、銃ともとれる代物。

「……冗談はよせ、Gilly」

「俺としては冗談のつもりなんだがな。ただし、返答によってはうっかり手が滑っちゃまうか、も」

シーフとクリエイター。互いに能力値は戦闘専門の4職業には遠く及ばない。互いの武器が発射されれば、ただでは済まないだろう。その事もまたお互いの承知の上であった。

「言っておくが、俺は本当に何も知らされていない。俺が死んだところで何か解決するとは思わない事だ」

「向こうが知っていようがいまいが『脅し』くらいにはなる」

Gillyは冷たくも重い声でそう言い放つ。彼のボウガンを握

る手は微塵の震えもなかった。それに対してミノルの獲物は銃口が定まらず、必死に狙いを捉えようとしているのが見え見えであった。

「……」

「……」

互いに無言。物音一つ無い地下室。

地下の湿気もあってか、ミノルの額と手は次第に汗ばみ始めていた。次第に息も隠しきれないほど荒くなっていき、銃のぶれも目に見えて大きくなっていく。Gillyの引き金を引く指と銃の狙い両方に気を向けねばならず、目の動きも落ち着かなくなっていく。

「冗談もほどほどにしないと…… 撃つぞ……! 本当に……!」

「そうか、じゃあ止める」

Gillyは鼻で笑いながらあっけらかんとボウガン下げる。数秒遅れてミノルも銃を下し、大きく息をつく。

「お前が何も知らないのは本当みたいだな。もし知っていたら、何の躊躇も無く俺を撃ってくるはずだ」

「まったく……!」

Gillyはミノルの足元にボウガンを放り投げる。それを見てミノルはまた一つ大きな溜息をつき頭を垂れる。

「お前がこっちの世界で他のプレイヤーに干渉しようとする気持ちはよく解かる。なんたってロクな戦闘手段がないからな」

「ああ…… 互いにな」

彼らがパーティーを組もうとしなかったのは、単に人を信用できなかったからだけではない。もしもの時、不測の事態が起きた時に身体能力の差で大きく後れを取るからである。誰かが裏切るにしろ、何者かに襲われるかにしろ、真っ先に狙われる、やられるのは自分だと考えた上での単独行動であった。

「知ってるか？ 今日、町の広場で100人規模の集会があったらしいぜ？ みんなで協力してこの状況をなんとかしようってな」

「小耳に挟んではいる」

「んで、何者かが集会の主催者を大勢の目の前でぶっ殺した、と」

「……そいつは初耳だ」

額と手の汗をぬぐいながらミノルは答える。

「そこで一つ尋ねたいんだが、製作側のデバッガーは何人いる？」

「社員が3人いたが、1人おそらく死んで今は2人。会社に泊まり込みのアルバイトは俺ともう1人…… 外のバイトは5〜6人くらいいたと思うが果たして何人生きている事やら……」

「そんだけいて未だにこの状況が知れ渡っていないのも変な感じだ

な」

製作側の人間は多くて10人程度。それだけの数がこの世界に來ているとなると、誰か1人くらいは進言、もしくは他のプレイヤーに名乗り出てもいいものである。

「社員の2人は他の仕事と兼任してるからレベルはそこまで高くない。恐らく30もいってないと思う」

「ってことは、今この状況を知っているのはバイトだけか？」

「俺と同じく寝泊まりしている奴は間違いなく取り込まれている。俺に必死に聞いてきたくらいだしな。俺は知らない振りを通しているが」

Gillyは再び腕を組んで考え込む。

「Gilly、そんな事を知ってどうする？ まさかこの現象を止めようとかするつもりか？」

「……出来たら、それが一番いいんだろうけど。俺自身はこの現象がどうやって引き起こされているかのほうが気になるけどな」

ミノルの問いに、Gillyは不敵な口調で答える。

「知った所で俺達のような連中が止められるなんて思わない事だ。現に止めたくない、止まって欲しくないと思う人間も表れ始めている……」

「こっちの世界から、現実の人間を殺している連中の事か？」

ミノルはゆっくり頷き、頭を宙に泳がせる。

「俺はこっちに來てから何だか余計に現実を見せつけられた感じだよ……」

「何だよ急に」

「結局、人の上に立って好き放題やってる人間も、下で苦しい生活を強いられて、不満を言っている人間も、本質的には何も変わらないってこと」

「……そうか？」

「同じだよ。能力や権力を持てば誰だって好き放題やる、逆に無かったら苦しんで不平不満や愚痴を口にする。人の立ち位置が変わろうとも世の中は何も変わらない。努力なんてものは、その立場を入れ変えるための物でしかない。世の中が変わるとかはその枠組みの中でしかありえないってさ」

「……」

「だから、俺個人はこんな世界もあっていいと思う。現実での弱者が強者に対して好き放題できる世界。現実では会社の部下を首を簡単に飛ばせる上司も、こっちの世界では部下に簡単に首を飛ばされる…… いや、もっと多くの人を取り込んで欲しいくらいだ。そして思い知って欲しい。自分達は、いつもこいつも同じ性分の人間だって事をさ」

「御託は結構だが、それもお前個人の一思想に過ぎない。そして、

他の人間がそれに付き合ってやる道理も無い」

「ま…… それもそうか……」

Gillyに批判されつつも、ミノルは自分の言いたい事を言い切ったのか妙に清々しそうな表情であった。

「まあ、お前がこの世界を何とかしたいなら出来る限りのことは協力するよ。俺だっていつ死ぬとも限らんわけだしな。但し、あくまでも出来る限りだ。この身を危険に晒すようなことは一切するつもりはない」

「それでいい、十分ありがてえよ。互いにこの世界では日蔭者同士、上辺だけでも仲良くやっていこうや」

Gillyも意地の悪い笑みを浮かべる。

「んじゃ、ついでにもう少し教えて欲しい事があるんだが」

ずい、とGillyが体を前に倒すと同時に、ミノルが手を前に出して制止する。

「それは構わないが、その前にこちらも一つ聞きたい」

「何だよ？」

「Gilly、お前こそ一体何者だ？」

そんなことか、と言わんばかりにGillyは鼻息をつく。

「別に。わざわざ言うようなもんでも。ただのゲーム好きだよ」

「『ただの』じゃ、ないだろ。さっきのボウガンを構えた時の全く震えを見せない手といい、そんな駆け引きを行える度胸といい……もし俺があそこで銃を撃ってたらどうするつもりだったんだ？」

「終わった事をいくら話しても仕方ないだろ？」

Gillyは両手を上げるが、それでもミノルは引き下がらなかった。

「いや、いくらこっちの体の方が身体能力が高いと言っても、精神はそのまま、中身は一般人なんだ。俺は高校時代ライフル射撃をやってたから解かる。精神のブレは何かを構えている時のような、体本来の重心が崩れた時に表に出てくるもんなんだ。『動かない時』なら特にな」

「なるほど、道理で震えている割には銃の構え自体はサマになっていたわけだ」

「話を逸らすな！　　というかそんな事を言ってる時点で……」

今にも投げつけんとばかりに工具を握り締めるミノルの姿を見て、はいはいとGillyは余裕を見せながらなだめる。

「ま、確かに俺は一般人じゃないかもしれんが……」

「少なくともそのメンタルはスポーツ選手とかのそれじゃないな。警察、軍人、はたまたはヤクザ……　何の経験も無しに、微塵の動揺を見せずに人と銃を向け会えるなんて一種の異常者だろ」

「はは、その可能性もあるかもな」

ミノルの物言いも別に気にしてないと言わんばかりに、Gillyは笑う。だが、すぐに顔付きが再度真面目なものになる。

「悪いがこの話はここまでだ。その侘びと情報提供の礼と言っちゃあ何だが、お前にも大事な話を教えてやろうと思う」

「……何だ？」

少し警戒色を出しながらもミノルは耳を傾ける。

「この現象はいつまでも続くもんじゃない。お前も下手な事をせずに大人しくしていたらそのうち抜け出せるだろうよ、多分」

「……どうしてそんなことが言える？」

Gillyは軽く勿体ぶりながら間を置いて答える。

「前例があるからな」

ミノルは思わず目を見開いて身を乗り出した。

【番外編2】 俺の知らない所で（後書き）

番外編その2。

Gillyさん主体のお話でした。

会話が多くなると途端に情景描写がおざなりになってしまいますね
……

どうでもいいですが、筆者も一応ライフル射撃経験者です。

立射限定ですけど、酷い時は心臓の鼓動で銃身ブレますからね。

37話 当事者として（前書き）

チキンカツと大根おろし&ポン酢って何であんなに合うんだろう。

37話 当事者として

現実世界へ5度目の帰還。そして例の如く学食なう。

「……」

このチキンカツ卵とじ、外食ならではのメニューだよな。少なくとも家では作らない。そういえば家でカツ丼ってあまり食わない気がする。なんかね、勿体ない感じがするんだよね。例えばトンカツってすっぱー贅沢な料理じゃん？ 実際贅沢かどうかはともかく、贅沢感というか、ジャンクっぽさ且つ高級感を兼ね備えた稀有な料理だと思うんだよね。ラーメンとかと違って。ラーメンはどこまで行ってもジャンクフードだから。あれに700円以上払える人の気が知れない。つかラーメンなんてどうでもいいや、今はカツの話だ。話を戻すが、トンカツの醍醐味の一つってやっぱり衣のサクサク感だと思うんだよ。でもカツ丼はそれを敢えて卵とダシで台無しにする。最大の武器を敢えて捨てる。例えるならサイコフレームを捨てたVガン○ム。シャアは倒せてもアクシズの落下を防ぐ事が出来ない。これでは物語を展開する上で致命的。たったあれだけの数のギラ・ドーガとGM？とジェガンで落下する小惑星を止められでもしたら、それこそ（。D。）ポカーンだわ。ニュータイプ要素を嫌って、エスパー的なものを全て排除しました（^^）って、余計つまんなくなるだけだから！ おっさんばかりのリアルな戦争物のガンダ○が見たいって、それ○ンダムじゃねーから！ そもそもモビルスーツの存在が一番非現実的なのに何抜かしてんだ、根本的なものを何もわかつちやいない、単に通ぶりたいだけのに糞ニワ

カガノタ共が。そんなに見たいなら、自分一人でネット上にでもシコシコ書いとけ。大体戦争を経験していない奴がリアルな戦争物なんて書けっこないだろうけどな。いかん、また話が逸れてしまった。そう、とにかく揚げものを卵でとじると言うのは、そのくらい果てしなくリスクな料理なんだ。

それはチキンカツにおいても同じ事。肉の価格の関係上、トンカツと比べると高級感は落ちるが、パン粉を付けた揚げ物の長所は何も変わらない。俺も一度家で揚げ物を作ってみた事があるが、二度とやらないと俺の心に決心させた。一人分を作るには消費量が多すぎる上に処分に困る油、飛び散る油で汚れまくる台所、後処理がもうすごい大変。作る時点でこれだけの難点を抱えているのだ。そう、つまりカツは多くの犠牲を払って作られた料理！ カレーと同じで少量生産には全く向いていないのだ。カレーと違ってあまり保存利かないしね。大量の油を使ったらならば、やっぱりその代償の結晶である衣を楽しむのが色々な方面に向けての筋だと思うんだよ俺は。つまりはこの目の前のチキンカツ卵とじというのにも……

「どうしたんだ高瀬？ 何だか最近、日に日に表情が固くなってないか？」

うるせえ、内山。人が必死に現実逃避している最中に茶々入れないでくれ。大体俺達は普段からそんな風に声を掛け合うような仲じゃないだろ。伊藤の一件があつたとはいえ。ほら、お前の後ろにいる取り巻きの女の子らが不思議そうな目で俺の事を見てるじゃないか。もう勘弁してくれ、色々と。

「まだ、伊藤の事が気になってるのか？」

「そんなんじゃないよ。まあそれも一部あるけど。今の社会情勢を

見て、ほんと人の人生って何なんだろうなーって考えてたところ」

流石に目の前の定食について必死に考察していたなんて言えない。

「人生は行き過ぎだとは思うが…… 確かに最近はこちらと、な……」

今日も死者の方は相変わらず。最近はマスコミすらも名前書くだけで相手を殺せるノートの線を本格的に疑ってきている。んなもんあるわけねーっつーの。漫画の読み過ぎだ。自分で作ったキャラクターの精神にトリップして、別の世界から相手を殺せるゲームはあるけどさ。

とにかく昨晚の出来事はもう思い出したくもない。目の前で人が何者かに狙撃されるわ。そして宿屋に避難しようとしてYASUさんと合流出来たまではよかったものの、Pon太さんは部屋の中で……

部屋が軽く荒らされたような形跡があったので、物取りを兼ねての犯行かとも思ったが、誰かが無理やり侵入しようとした形跡は一切無く、YASUさんの弁によると部屋のドアには鍵を閉めるように言っておいたし、しかも実際に閉まる音もしたとの事。Pon太さんも一応ファイターだし、何者かが侵入してきたら普通は多少なりとも抵抗はするだろうが、そんな跡も無し。しかも凶器に使われていたと思われるのはYASUさんの剣であった。終いにはその宿屋の使用人の女性が、YASUさんが血まみれの姿で部屋から出て来たとか言うし。

当然のことながらYASUさんをパーティーに加える事はしなかった。彼は最後まで自分は何も知らないと必死に訴えていたが、こ

れだけの状況証拠が揃っているのならば： いや、俺はYASUさんを疑いたくはない。少なくとも俺の知っている彼は礼儀正しくて面倒見の良い人なのだ。そんなことをするはずが無い。だが周りが、他のメンバーが、宿屋の主人すらもそれを許しはしなかった。そして彼はゲームの中だというのに、ギルド直下の警備隊によって連行されてしまった。

もう一体何が何だか。いや、何なの？

最近は睡眠もまともに取れている気がしない。時間そのものは十分でも、寝ている間の出来事があれだし。日に日に寝るのが怖くなって来る。向こうの世界に行くと常に姿の见えない敵に命を狙われ続けているのだ。現実でも胃が痛くなってくる。

「……高瀬？ どうしたんだ？」

あー…… 内なる怒りに浸り過ぎてたようだ。こんな中二臭い言葉を使うのもどうでもよくなってくる。もうあのゲームの中の現実から抜け出したい。あれなら、こっちの現実世界の方がまだマシだ。まだ幾分か自分の身の安全が保障されている。

「いや、もしこの状況を引き起こしている奴がいるかと思うとき……」

「そういうのは単なるお伽話か、漫画の中だけの出来事だと思ってたけどな。本当に存在するのもかも。例のノートとか」

内山も俺の隣の席に腰かけて話に乗って来る。

「もし、犯人って奴が存在するとしたら、今どんなことを考えてい

ると思う?」

「どうかな。考えようともしなかったし、考えたくもないな。いるとしたら本当に狂ってると思えないよ」

狂ってる、か。そりゃそうなんだろうけど。でも、まともに考えようとはしてなさそうだな。事情も知らないし、当然っちゃ当然だが。

俺は残りのお茶をぐいっと飲み干し、席を立つ。

「いや、変な事聞いちゃったな。俺、もう帰るわ……」

「ん? ああ、お疲れ」

内山の目に俺の顔はどう映っているのだろう。つーか、これだとまるで俺が犯人みたいじゃないか。ドラマとかだと確実にそうだ。もうフラグ立ってる。

俺は食器を返すと、内山達とは視線を合わせずにそのまま真っ直ぐ家に帰った。



帰ったらすぐにパソコンの電源をON。こんなのネットゲやる前からの日課だが、最近はやたらと重苦しく感じる。電源を入れる時、そして他のページを開くときも「……よしっ!」ってな感じで毎回気合いを入れなければならない。ゲームを始める時なんかはさらに顕著だ。何だか義務やノルマのように感じてしまい、実際ダンジョンに入る時やチャットの最中以外は5分おきに席を立っている。も

う何だか色々と本末転倒だ。

公式は…… 特に更新無し。今日は土曜だから会社も休みなのだろうか？

じゃあいつもの掲示板に…… あれ？

俺は画面に映し出されたエラー表示を見て、しばらくの間思考停止を起す。

『指定されたページが見つかりません』

……とうとうあれですか。潰された？ いやいや、ここの管理人さんはゲームに取り込まれていないはずだし、この掲示板は運営側にも知られてないはず。多分。攻略サイトの方は普通に運営されているし、これは一体…… とにかくもう色々滅茶苦茶だ。みんなやられたわけじゃないだろうし、ゲームにログインすればいるんだろうけど。ゲーム…… うう、重い。

休日という事もあって、昼間からそれなりの人がいる。オープンチャットで楽しそうに会話している人もちらほら。ああ羨ましい。……とりあえず仲間を探そう。

ゲームの中のノツイミカーラの町は今日も平和だ。向こうの世界で起こっている連続殺人事件はその片鱗すら見えない。モブキャラも決められた台詞だけを言わされるだけの平穏な人生を満喫している。

A s e l i a 「よう、遅かったなシエル。少し心配したぜ」

真っ先に声を掛けてきてくれたのはA s e l i aさんであった。
思わずリアルに安堵の溜息が出てしまう。

シエル「よかった！ 掲示板がなくなって、みんなどうしたんだろう
うと思ってたんですよ」

A s e l i a「昨日の一件でもう一度メンバーを立て直そうってな
ってな」

彼の話によると、今朝一番に管理人の夕凧さんに直接連絡して掲示板を閉鎖してもらったらしい。実は俺達掲示板メンバーの中に夕凧さんのリア友がいるのだが、そこはあえて誰にも知られないようにしている。下手に特定されて狙われたらそれこそ不味いしな。

んで、今晚場所を変えて、もう一度集まって対策を練ろうと言うらしいのだ。幸いにも俺は割と信用されているらしいのでこうして声も掛けて貰ったわけだ。他にも『信用出来る』知り合いを見かけたら教えてやってくれとのこと。

シエル「了解っす」

A s e l i a「ああ、それと昨日のヤスとかいうやつだけど。よくよく考えたら、結構オイシイ展開になってるのかもな。あいつ」

シエル「どうしてですか？」

A s e l i a「だってあの後連行されて、牢屋にでも入れられたんだろ？ だったら」

シエル「かえってそのほうが安全ってわけですか」

A s e l i a「そゆこと」

うーん…… どう、なんだろうか。人一人殺しといて、ただの懲役刑で済むのだったらともかく。少なくとも江戸時代とかだったら即討ち首獄門だろうし。向こうの世界の刑法はどうなっているのだろうか。

A s e l i a「とにかく、これ以上は変な事に関与できないだろ。さすがに脱走とかは出来んだろうし」

シエル「そもそも、彼はあんなことをするような人ではないと思いますが……」

A s e l i a「そりゃわからんよ」

まあ、たしかに俺が知っているのはゲームの文面上での彼だし。実際のYASUさんがどんなことを思っているのかは知る由も無いが。

A s e l i a「まあ、お前が気になるなら、何か言っておいたらどうだ？」

シエル「そうですね」

A s e l i a 「んじゃ。今日は2時から『焔の谷』に集まる事にな
ってるからな。よかったらお前も来いよ」

シエル「ありがとうございます」

A s e l i a さんはそれ以上深く追求してこなかった。本当に気
にしないのか？

……まあ、違うだろうな。おそらく彼と親しい俺を少し疑っての
事だろう。つまりは様子を窺おうっていうわけだ。もしかしたらゲ
ームの中で尾行されているかも知らんし。

それに、こんな風にタイミング良くチャットコール来てるしな。

Y A S U 「シエルさん。昨日のことなんですが」

やっぱり来たか、という感じだ。

シエル「何とも言えませんが……　とりあえずあまり気に病まない
ください」

Y A S U 「やっぱりあれは夢じゃなかったんですか？」

シエル「少なくとも現実に深く関与してはいます」

Y A S U 「じゃあP o n 太さんは？」

シエル「多分」

YASU「昨日の事は私は本当に何も知らないんです。部屋を出てからフロントまで降りて、そのままシエルさん達に会っただけなんです」

……たしかに。落ち着いて考えてみると、もしYASUさんが本当に殺人を犯したなら、あの結末はあまりにもお粗末すぎる。顔を見られておいてわざわざ現場に戻ってくるなんて。推理物だとかだと完璧に真犯人がいるフラグだな。お約束もいいところ。

シエル「少なくとも俺はYASUさんは無関係だと信じてますよ」

……でも、だとしたら犯人とやらは結構回りくどい事をやっている事になるな。

可能性としては……変装？ YASUさんに扮してあの部屋の鍵を中から開けさせ、Pon太さんを殺害。あの時の使用人は気が動転して彼がトイレの中に逃げ込んだ後は知らないと言っていたから、多分そこで変装を解いて、何食わぬ顔で現場を立ち去った……というのはどうだろうか。そもそも自分の顔を見られたのなら、使用人も殺害するだろうしな。わざわざ「血のついた手で突き飛ばす」くらいで留めているのがどうにも怪しい。

シエル「でも状況証拠が揃っているから、あそこからは救いだせそうにありませんね…… あの後はどうなったんですか？」

YASU「酷い尋問を受けました…… 他にも人を殺したんじゃないのかとか…… まさか今晚もあの続きがあるんですか？」

向こうの人は向こうの人で結構ピリピリしているみたいだ。それもちろん。監視カメラとかDNA鑑定とか、今の鑑識技術は流石に

無いだろうしな。見たものを疑うしかない。

シエル「おそらくは……」

YASU「尋問の後ずっと牢屋の中だったんです…」

シエル「拷問とかは？ 処刑とかの可能性はありそうですね？」

YASU「肉体的に酷い仕打ちは無かったんですけど、精神的には堪えました。取り調べの人の言葉が酷くて……」

だよなあ。人殺しがただの独房入りで済むはずがない。

警察官の誘導尋問とか…… 受けた事無いけど相当酷いって話も聞くしな。

シエル「でも、処刑される可能性がなくて、精神的に耐えられそうだったら、そのまま牢屋の中に入れられた方が安全かもしれません」

YASU「周りから狙われる心配が無いからですか？」

シエル「はい。でもヤバそうだったらすぐに言ってください。こちらでも向こうの人達を何とか説得してみるのです」

YASU「シエルさん達はもう何日もあんな体験をしてたんですね……」

シエル「俺の場合は、ちょっと違いますけどね」

YASUさんには悪いがここはこのまま牢に入ってもらうのが得

策だ。仮に出れたとしても、俺の仲間の信用を得る事が出来ないだろうし、どうしても無駄な溝が出来てしまう。かと言って一人放置しておくにもいけないし。俺にも変な疑いがかかる。

昨日の事件はツツコミどころがいくつがあるから、ギルドにもそのことを言って彼の処分を保留して貰えないだろうか。うん、そのところは今晚が勝負だな。

YASU「あの世界の話、本当に誰も信じてくれないんでしょうか？」

シエル「難しいとは思いますが……」

YASU「Pon太さんがいればもう少し何とかなったんでしょ
うが」

シエル「どうしてですか？」

YASU「彼女はマスコミに信頼できる知り合いがいるって
言っていましたから」

……なるほど。あれを止めさせたくない連中にとっては目ざわり
になったわけか。

かといってこうも簡単に人を殺せるなんて。中身は普通の人間な
のに。

俺と変わらない、単なる駄目なゲーマーだけのはずなのに。

Gillyさんの言葉が今一度頭の中に浮かんた。

37話 当事者として（後書き）

冒頭の談議は勢いだけで書きました。
削るかどうか小一時間迷いました。

あくまでも高瀬くんの意見です（強調）。

あと推理要素なんて難しい事は私には書けません（笑）。

38話 ここにいる自分は（前書き）

Q 「明日っていつですか？」

A 「今さ！」

……ごめんなさい（焼き土下座）

38話 ここにいる自分は

異世界トリップ、6回目。

In 宿屋アートマー310号室。

「新しい掲示板のパスワードはkaniya。誰かに教えるときは既存メンバーが2人、出来れば3人以上いる時が望ましいです、だと」

部屋の中にはいつものメンバーが集まって今後の対応について話し合っていた。サイトさん、Aseliaさん、×ぼんさん、にいにいさん、それと昨日から引き続き、くろね子さんだ。俺含め何とも華やか。この部屋には6人だけだが、宿屋の他の部屋にはあと10人ほど仲間がいる。これ以上広い部屋は無いし、会議室や食堂などの広い部屋も人の目が気になって込み入った話が出来ないからだ。ちなみに他の町の宿屋にもメンバーがいて、総勢約40〜50人が現在の（形式上）仲間の数。

これを多いと思うかどうかは敵の数次第なので何とも言えない。だが、私欲の為に人を容易く殺せるような奴がそんなに大勢で徒党を組めるとは思えないと、×ぼんさんの弁。それは一理あるかも。本人が自分がやっている事を私欲と自覚しておらず、自分は世の中の正義のためにやっているんだと思っているのならなおさらだ。こうして否定する者が存在し、それを闇討ちなんてする時点で既に正義に矛盾が生じている。このズレに気づく者が向こう側で一人でも現れたりでもすれば御の字。身内争いでも起きれば、一気に瓦解する。それは俺達にも言える事なのだが、こちらはあくまでも自分の身の安全を第一とする協力体制なのであり、悪く言えば消極的で大人しい人が多い。裏切ると言う行為に相当なメリットを感じない

限り、この結束は崩れる事はないだろう。多分。

うーん、それでもやっぱり少し人間不信気味になってるな、俺。

「……それと、奴らがどうやって目的の人間を探し出しているか解かったぜ」

話が収束に向かっていている時を見計らったかのように A s e l i a さんが話を切り出す。彼は足元の鞆から分厚い本を取り出した。A 3 サイズほどの大きさに茶色のハードカバー、現実ではあまり見る気のしない本だ。

「何ですかそれ」

「図鑑か何か？」

「ノンノン。実はだな……」

A s e l i a さんは結構重そうな本をひよい、とサイトさんの方に放り投げる。慌てて両手と胸でキャッチしたサイトさんは適当なページを開いて目を動かす。……しばらくして、みるみる表情が変わっていく。

「おいっ！ これって…… 住所録か!？」

「そ、現実世界の人間がこっちではどこにいるのかがまる分かりになる本だな。言わばタ〇ンページ」

俺と共に他のみんなも食いつくようにその本の周りに集まる。

……うわ、物の見事に日本語表記だ。名前は全部カタカナだけど。なるへそ、これを使って現実の殺したい相手を捜していたのか。個人情報も何もあったもんじゃないな。

「こんなもの一体どこで手に入れたんですか？」

「町のお役所」

……おい、公務員。仕事しろー 殺人犯に手ー貸してどーすんだー

「これってそんな簡単に手に入るもんなんですか？」

「んにゃ、数日前からちよこちよこ冒険者がこの住所録を貰いに来てるらしくてな。ちよいと時間食っちゃったけど」

……で、その矢先に町で冒険者らしき人物による連続殺人だもんな。少しは警戒してくれないと困るよ、お役人さん。

「じゃあA s e l l i aさんはどうやって手に入れたの？」

「女の武器」

「……ハニートラップ？」

「YES。美女ってマジチートだわー 人生エクストリームイメージーモードって奴？」

もう色々と駄目だこの町。いや、現実がかなり反映されてるだろ

うから、現実も駄目駄目だ。両世界とも大丈夫なのだろうか。ゆとの俺にですら心配される大人の人達って……

いや…… つーかこの人はこのために抱かれたのか？ おそろおそろ彼の方を見たが、他の人も同じことを考えていたようで、皆悪い意味で体を引きつつ上目使いになっていた。

「あー！ あー！ 今お前ら変なこと考えたな！？ 言っとくがちよっと誘惑しただけだぞ！ 別に掘られたわけじゃないからな？」

この人曰く、

トイレで誘惑

← 背中に手を回す

← 耳に息を吹きかける

← 顔に胸を軽く当てる（服着たままでよ？）

← 「あたしい、欲しいものがあるんですけどおー 持ってきてくれたらもつとサービスしちゃう（はあと）」

← 宿屋に住所録を持ってこさせる

← その後、ルパンダイブしてきた役人を記憶が飛ぶまで（頭部の形が変わるまで）ボコる

← 男を宿の外に放り投げる

←

一人シャワーを浴びて体を念入りに洗う

←

もちろん男の顔をくつつけた服は破棄

←

塩で身を清める

しかし現実でも結構ありそうな事だから困る。俺だって実際にこんな美人がいきなり誘惑してきたらちよつとは心が揺れ動くかもしれない。……いや、悪いが今時の彼女いない歴〓年齢の若者達を舐めてはいけないぞ！ 二次元には弱いが、現実の女への警戒心は半端じゃない。「こいつ何が目当てなんだ？」「これって何のドッキリ？」「三次元キモツ！」「病気が怖いのでちよつと」etc……そうそう簡単には誘惑されんだろうよ、よ！ 根っからの草食系（寧ろ草？）ならばこんなハニートラップなど。そもそも、そんな機会ないだろうけどな！
きつとお役人さんは色々中途半端な奴だったんだう、うん。

「その美貌を気軽に利用出来て羨ましい……」

「今のにいにいさんだって相当美人じゃん。もっと上手く使おうぜ？」

「戻った時の喪失感が半端ないのよ。その内現実でもやりかねなくて……」

にいにいさんは頭を抱えこむ。女性の方が己の武器は心得ているはずなんだがなあ……

「ともかく、それならばその役人達から住所録を貰った人物の特徴

を聞けば犯人が割り出せるんじゃないですか？」

おお、ここで×ぼんさんのナイスアイデア！ それだ！

「やったけど『冒険者なんてすぐに装備変えてるだろうし、顔もよく覚えてない』だと。名前も控えてないだとさ」

役人使えねえ。ほんと使えねえ。

うーむ、これだとまた振り出しに戻ったか。犯人側の手口が解かっただけだ。名前がカタカナ表記だと同姓同名も存在するだろうから、割と労力もあるだろうし。一度に殺れる数に限りがあるのも確定した。全員の名前と顔を記憶するのも結構大変だしな。いずれにせよ、犯人对策についてはまた考えないといけないわけで…

「ん……？」

突然、サイトさんが声を洩らす。一つの話題が終わり、部屋が静まり返っていたので、普段は気づかないような声まで拾ってしまう。

「どうしました？」

「いや、別に単なる偶然なのかもしれないけど……」

サイトさんは一度本を閉じる。

「俺の名前がここに載っている」

マジっすか。でもカタカナ表記だし同姓同名ってだけかも……

「名字はごくありふれてるんだが、名前は少し変わっていてな。偶然にしては……」

「マジかよ。確かにウチの親の名前っぽいのはあったけどさ」

A s e l i aさんもサイトさんから住所録を受け取りパラパラとページをめくる。

「もしかしてA s e l i aは実家暮らしか？」

「ん？ ああ」

「載ってるのは世帯主だけなのかも。他に一人暮らしの奴はいるか？」

意図せずとも俺が真っ先に手を上げてしまい、住所録を受け取る。

タカセユウイチ…… ある。あった。もう一人手を上げた、×ぼんさんも同様。

同姓同名なのかも知れないけど、これがもしかして自分自身だったら。精神がゲームキャラに取り込まれているのに、本人はちゃんと存在するのか……？

「ちょっと調べてみませんか？」

こっちに来てからしばらく消極的だったサイトさんが珍しくみんなに提案する。A s e l i aさんは構わないと言っているが、くろね子さんが真っ先に渋った。

「しかし今外をうろつくのは……」

これもごもつとも。自分が別に存在すると知った所で、これからの展開がどう好転するわけでもなし。無駄なリスクを避けたいとのこの人の意見にも同意できる。

「しかし、現に宿屋の中でも人は殺されているし、結局はどこにいても気を抜けばやられる可能性がある。みんなで固まって行けば、ある程度は凌げると思うが？ 上手くいけば返り討ちにすることだって出来る」

もちろんこれは俺の勝手な頼みだし樂觀的な意見を並べただけだけどな、とサイトさんは付け加えた。しばらくみんな考え込んでいたが、やがて以外にも×ぼんさんの方から賛成の声が上がる。

「このまま疑問を解消できずに、ずっと部屋に閉じこもるというのもなんですからね。この世界の事を知るという意味ではいいかと」

役に立つかどうかは実際に知ってから判断するといい。これがこの場での結論。早速俺達は住所を紙に写し、宿屋を出る。無論、外に出たら常に厳戒態勢だ。この前の様にどこから矢が飛んでくるかわからない。

まず最初に向かったのは言い出しっぺのサイトさんの住所だ。町の南西側まで向かうが、相変わらずこの町は広い。車とか自転車とかが欲しくなって来る。人口密度も凄いいし。これまでの情報によると、この世界の町ごとに関東、東北、関西……などと、現実世界の人が存在している区分が別れているらしい。この町は主に関東一帯。ゲームの中でも最大の町だけに移動も一苦労だ。

そしてお目当ての住所が見える所まで到着すると、サイトさんは「ここからは自分一人で行きたい」と言いだした。

「ま、現実の自分を見られるのは、な」

「俺達はここら辺から見張つときますよ」

彼の気持ちを組んで、俺達は周囲の警戒に勤める。幸いここには2階以上の高い建物は無いようで、家の密度もそこまで無い。2人、3人と別れて彼の住所付近を見張った。ほどなくしてサイトさんが浮かない顔で戻って来る。

「どうだった？」

「……まぎれも無い、俺自身だったよ」

「そうか……」

「じゃあ、こっちの世界にも現実の私達は別に存在するってこと？」

「みたいですね」

「こっちの方の自分が死んだらどうなるんでしょうか？」

「やっぱり…… 現実でも死ぬんじゃないんですか？」

んー…… ややこしい。護るべき対象が2つ？ でも逆に言えば、それは犯人グループも同じという事にならないか？ こっちのキャラクターは強くても現実の人間なら…… ってそれが簡単に分かれば苦労はないか。スーパーハッカー○でも無い限り。

「どうする？ これからシエルと×ぼんの見に行く？」

うゝむ…… もしかしたらこの光景も見張られているかも知れないわけで、最悪犯人がこの辺りの人間を手当たり次第に殺害すればサイトさんを殺害出来るかもしれないというわけだ。事の顛末が知れば、自分を見に行く行為ってのも結構なリスクになりうるわけか。ここはサイトさんには悪いけど。

「すみません。俺は事が分かれればそれでいいです……」

なんだかつくづく卑怯なキャラだなあ、俺。

「当然だろうね。実際近づいてみて、結構これってヤバくないかって感じたよ。その後カモフラがわりに色んな人を遠くから除いた」

何かモルモットにしちゃってごめんなさい、サイトさん。願わくはこの一帯の住人が狙われませんよう。今出来るのは祈ることくらいです。

「それじゃ、宿に戻りますか」

……あ、そうだ。すっかり忘れてた。

「すみません。途中で冒険者ギルドに寄ってもいいですか？」

「通り道だし俺は別に構わないけど」

A s e l i aさんがちらりと他の面々を除くが、みんなも特に反対する様子には見えない。

「昨日のY A S Uさんのことが気になって……」

「あー 昼間も言ってたなそーいや。まあ、様子を見るくらいならいいと思うけど。どうせ牢屋の中だろうし」

ギルドはこっちの世界では警察機関のような役割も果たしている。こっちはこっちで連続殺人事件のことでピリピリしているだろうし、返り途にちよっくらよる分には特にリスクは変わらないだろう。ギルド直轄の警備兵もちよくちよく見かけるし。周囲を警戒しながら出来るだけ人通りの多い道を歩けばわりかし安全……かな？

時間もこの世界換算で午後4時前だし、まだまだ外も明るい。また、周りを良く見たら、一般市民も少し辺りを警戒しているように見える。あんな事件が多発しているのなら当然か。逆に冒険者は色々とやり辛そうだ。

「この前の一件で俺達への威嚇を狙ったつもりだろうけど、かえって向こうもやり難くなったりしてな」

A s e l i aさんから苦笑いしながら呟くが、実際そんな感じがする。武器を持った冒険者は常に見張られている感じだ。やや息苦しいが、今はこっちの方が助かる。

ギルドには特に何の障害もなく辿りつく事が出来た。流石に建物の中で殺人は犯せんだろうと、俺達は警戒を解く。建物の中は以前立ち寄った時よりも慌ただしくなっていた。

受付の人に事を尋ねようにも、どこも人がたかっついていて近づけない。受付のお姉さん達はほんと大変そうだ。20分ほど待ってようやく空気が出来て、俺は茶色のサイドテールのお姉さん（一番好み）の席に通された。

「何か大変そうですね」

「解かってくれるの？ お嬢ちゃん、もう最近は市民からの苦情ばかりでまともな仕事も出来やしない！」

受付のお姉さんは疲れた顔を不満たっぷりに見せつける。

「それって冒険者と思われる人達が起こしている殺人事件のことですか？」

「ええ、というかほぼ冒険者ってのは確定ね。実際にウチでも何人か捕まえたわ」

「おお！ お役所と違って流石です。ってその中にはYASUさんも含まれてるんじゃない？」

「でも動機が訳解かんないのよね。別に金目当てって訳でもないしさ。みんな出来心だっていうし。何か最近冒険者達の中で流行ってるのかしら？ 殺すのはモンスターだけにして欲しいわ」

「捕まった冒険者達はどこにいるんですか？ 今日はその事を尋ねたくて来たんですけど」

お姉さんは不思議そうな顔をしながら指を真下に向ける。

「この地下」

「面会とか出来ますか？」

「知り合いとかいるの？」

「冤罪で捕まった人がいるんです」

「証拠は？」

「……ないです」

お姉さんは困った様な顔をしながら言う。

「それじゃあ駄目なのよ、お嬢ちゃん。面会すらさせて貰えないわ」

「じゃあ面会は出来なくてもいいです。今彼がどうなっているかはわかりますか？」

お姉さんはうーん、と唸りながら、席の横にある明治時代を彷彿とさせる電話らしき物（つか電話とかあったのか）の受話器を取り、何やら事を話す。

「お嬢ちゃんはギルドに登録しているのよね？ お名前は？」

「シエルです」

その後もいくつか質問を受けそれをお姉さんは淡々と受話器に向かって伝える。しばらくしてお姉さんは受話器を戻し、一息つく。

「えーっとね、結論からいうけどあなたの言うYASUさんは現在拘留中の身です。証拠不十分で何とも言えないから処刑や拷問刑にはならないと思うけど、現状で釈放されるのはまずないと思っていますわね」

「真犯人を見つけないと……ってことですか？」

お姉さんは軽く頷く。だが処刑されることは無いというのは一安心だ。その後、実際に現行犯で捕まった人達は即刻討ち首にあったと聞いてぞっとしたが、以前も冗談半分で言ったが、本当に首刎ねられるとは思わなんだ。

「こっちとしても殺人犯を駆逐してほしいのは山々だし、実際に冒険者たちに頼んではいるんだけど…… お嬢ちゃんはまだ小さいしあまり無理しないようにね」

「死なない程度に頑張ります」

中身は大学生ですが。まあ、まだまだガキではあるか。オトナって言葉が当てはまるのはやっぱり働いてからだよね、とこの歳になっ
て思う。

「それと、ちょうど今朝あなた宛てにシーフの方から手紙を預かってるわよ」

うおっ！ ……そうだそうだ。それもすっかり忘れてた。連絡はギルド通して行うって言ってたっけな。

「それってG i l l yって人ですか？」

「ええ、お知り合いのようね。はい」

「どうも」

封筒は以前に貰ったのと同じ。間違いなく彼のようにだな。昨日は

すっかり忘れてたし、タイミングぴったしだ。よかったよかった。
しかしこれをどこで読むのか。人前じゃ流石に無理だな。だが、
待ち合わせの連絡かもしれないから、出来れば早く読みたい。……
よし。

みんなと合流する前に、れつつ女子トイレ。

38話 ここにいる自分は（後書き）

長らくお待たせいたしました、またもや説明回でした。
そろそろ戦闘来るかな…？

39話 油断も隙ありません

『シエルへ

まだ何とか生きているか？ お前を見込んで話したい事がある。かなり重要な話だが、例の如く他の仲間には一切話さないでくれ。

待ち合わせは前と同じ武器屋アニムスの裏手。
時間はお前の都合のいい時を指定していい。
ギルドに伝言しておいてくれ。

Gilly

……この人の言う重要な話は本当に重要だからな。今晚にでも会いたいところだが、雰囲気的にここを抜け出すのは結構難しい。ここからの予定もはつきりしないし（どうせ部屋に籠るだけだろうけど）、ここは一度宿に戻ってよく確認してから時間を指定した方が確実だろうか。

そうと決まればそろそろみんなと合流するか。この手紙は……
超極小サイズのファイヤーボールで燃やす。うおオン、俺はまるで人間百円ライターだ。

……うん、何だか色んな方面の方々に向けてごめんなさいしたくなってきたぞ。どうかこのいたいけな少女のくぱあで勘弁してください。R-18小説じゃないので、細かい表現が出来ないのが残念

でなりません。

メタな話はここまでにして、とっとトイレを出よう。

しかしあのGillyさんが『俺を見込んで』なんてな。いや、交渉術も上手そうだしリップサービスってやつか？ でも今更だしなあ。

◇ ◇ ◇ ◇

「ようシエル。さっきの手紙は一体何だったんだ？」

Aseliaさんよう、本当にこの人も油断も隙もねえ。周りに他の人がいないのがせめてもの救いだ。

「例のGillyさんからの手紙です」

「ふーん？ 内容は？ 俺達には話せないか？」

痛い言い方するなあ。でも仕方ない。その通りなんです。

「で？ どうなんだ？」

「何がですか？」

「そのGillyって人はそこまで信用できる奴なのか？」

Aseliaさんはやたらとストレートに聞いて来る。その表情からは特に怒りとか俺を疑るといったものは感じず、純粹に興味が

あつて聞いているように見える。

「そうですね……信用できるかどうかは判りませんが、敵に回すと色んな意味で恐ろしいだろうけど、味方にいるとかなり頼もしい……と、思える人です」

「別に全幅の信頼を置いているわけじゃないんだな」

改めて思ったけど、なーんか違うんだな。やっぱり。

「でも結局そんな感じになっている節はありますけどね。彼が凄すぎる……っていうかこっちに来てても手際が鮮やかというか」

どこか場慣れしてるっていうか。判断力、思考力、行動力、色々。

「もしかしたらそいつ、製作者って奴かもな」

「……」

「どうした？ 意外と反応が鈍いんだな。自分でも結構な問題発言だったと思うけど」

「いや……実は俺もそう思っている節があるんです」

Gillyさんが製作者側の人間……それは十分にありうる。心の中では既に考えられていた事だ。思い返すと結構つじつまの合う分が出て来る。だが、所々で妙な引っかかりも覚えるのだ。製作者だとしたらなぜ？ と、思う所も多い。

「しかし……彼が製作者だとしたら何故シーフなんでしょか？俺達と戦闘する事になったらまず勝ち目はないはずじゃ」

「すばしっこいから偵察に向いていたりする、とか？逃げ足も速そうだし。あと製作者ならステータスなんていくらでも弄れるだろ」

「偵察だったら素直に俺達の仲間になったほうが効率はいいはずですよ。集団の輪の外にいる孤高のシーフなんて、わざわざ人に疑われるような要素をつける必要性がない」

「……やっぱり信頼してんじゃねえか」

違う。あなたの言う信頼とはどこか違うんだよA s e l i aさん。ああ、自分が上手く言葉に出来ないのがもどかしい。

「お、シエルさん。用は済んだのか？」

俺がまごついているうちに他のみんなが集まって来る。

「ま、せいぜい、頼もしい味方のままであることを祈るよ」

A s e l i aさんも空気を讀んだのか、最後にそう付け加えると、この場はこれ以上深く追求してこなかった。疑われてはいるのだろうが、まだマシな部類か。騒動さえ起こさなければ何とかかなるかな。なにはともあれ、ひとまず宿に戻りますか。

「そこの冒険者の方々！ ちょっと待ってください！」

建物を出ようとしたらこれだ。急に後ろから怒鳴るような男の声が聞こえ、俺達は一様にすくみ上がる。前を警戒していただけに。

「な、な、何ですか!？」

「何か俺達不味い事でもやった!？」

「いや、ギルドに登録している者はすぐに現場に向かって欲しいのです!」

どうやらギルドからの依頼クエストの方であつたようで、内心少しほつとする。つかこんな時のクエストって攻略サイトにあつたっけか？

「一体何が…」

「町の東部区画6丁目にモンスターの大量が押し寄せて来たんです! 今すぐ討伐に向かってください!」

おいしい…… こんな時に。別に急ぎの用事なんてないけどさ。しかしモンスターの大量って…… 人の多い町は襲ってこないはずじゃ。適度に冒険者（プレイヤー達）が狩っているし、監視とかもしつかりされてる（ということになってる）はずだが。

「……どうするよ!？」

「頼まれてるなら行くしかないだろ？ それに下手に市民に被害が出たら……」

現実でも死亡者続出…… つか! 流石に無差別は勘弁してほしい!

「よし！ とりあえず急ごう！」

「でも東部区画6丁目ってどこ？ ゲーム基準の右でいいの！？」

「えーっつと……」

緊急事態だというのに、すぐさまのギルドの人を呼び寄せて道を尋ねる冒険者達の図。結局ゲーム基準で良かったのだが、東部区画6丁目なんてゲーム中に出ない単語を出されてもこっちは混乱するだけだ。向こうはそんなこと知ったこっちゃないんだろうが。それにしても、さっき既に結構な距離を歩いたばっかだから、少女の細脚には流石に堪える。

モンスターの質も数も良く分からないとのことであつたが、現場に近づくに連れて事態の物々しさが明らかに becoming 。次第に大きくなってくる人々と人以外の悲鳴。遠くの建物からは黒い煙が上がり、大通りは家財道具を持って逃げる市民達で溢れかえって行く。つーか邪魔！ 逃げるのはいいけど落ち着け！ 先に俺達を現場に向かわせてくれ！ 現実の避難でもこんな感じなんだろうな、まったく！ まるでこれじゃ祭りの中の人混みを掻き分けていくような…… いてえっ！ いくらこっちの背が低いからって、少女にひざ蹴りかまして詫びも言わずに逃げんのか！？ 誘導員がちゃんというだけに、我先に我先にと逃げようとする民衆が憎たらしい。この人混みにフレイムレーザーでもぶち込みたくなってくる。

……あ、あれ？ みんなはどこだ？ はぐれた？ いや、こんな状況下で固まって移動するのも無理な話だとは思うけどさ！ 探している暇は……無いか。とにかく先に現場に向かおう。方角は空に上がる黒い煙に向かって行けばいい。

人の洪水に逆らいながらも何とか前に漕いで進み、もうどれだけの時間が経ったのやら。

急にぴたりと人ごみと喧騒が止み、次第に周囲から人の物とは思えない悲鳴が増えてくる。夢中になって走って（泳いで）いたので気づかなかったが、あちこちの家に火の手が上がっており、いくつかの建物は倒壊し始めていた。やっぱり氷系の魔法とか覚えておけばよかったかなあ。一酸化炭素を多分に含むであろう煙が厳しいが、道が広いのがせめてもの救いだ。道の真ん中を少し屈んで進めば、煙も吸わずに割と安全に移動出来る。早くみんなと合流しないと。

ドン。

右後方で何かが倒れたような音がする。建物の崩壊とは別のもっと小さな……

「う……」

それは手を伸ばしながら、ナメクジの如き遅さで地面を這いつつていた。しかしそれも僅かに残された体力。1mも進まないうちに手と顔が地面にへばりついたまま動かなくなる。その最後に描いたであろう軌跡には赤黒い血がべったりと塗りつけられていた。

俺は思わず近づいてその手首を取る。既に脈はない。

顔は……お爺さんか。

俺は軽く手を合わせて数秒ほど黙とうするとすぐに立ち上がる。

……さつきから自分が前に進むことしか考えて無くて意識の中に入ってこなかったが、家の煙と火の手の中にまぎれて少し前までは人間だったであろう物体がいくつか転がっている。

「……」

俺は唾を飲み込む。何だか無性に喉が渴いてきたのだ。……早くここを抜けなければ。

遺体を見ないように帽子を深く被りその場を駆けだす。大気がカラカラで熱い。とにかく喉が渴く。こんなことはとっとと終わらせて水を飲みたい。まったく、こんな歳頃の女の子には酷ってもんだろうが。次第に黒い煙の方向というより、僅かにでも涼しい場所を求めるかのように脚は動いていた。道端から人の呻き声が聞こえてくるような気がするが多分気のせい。うん、気のせい。俺は必死に心を逸らしつつ、空襲にでも遭ったかのような家並みを駆け抜ける。

「……!?!」

突然、目の前の地面を影が通り過ぎる。建物があるのか何か物が落ちて来たのかと思って正面を向いたが、前方には道路が続くのみ。駄目だ……もう、嫌な予感しかない。

間髪置かず、頭上でガラガラ声のモンスターの悲鳴が聞こえてくる。

「あっ……!! シエルさん上! 避けて!」

避けて、の声を聞きとる前に脊髓反射で俺は前方に飛び込む。軽く転がってさっきまでいた位置に視線を合わせると、一拍おいて眼前にキマイラらしき物体が落ちて来る。手足のぐにゃぐにゃ具合か

ら着地というより落下という有り様。体には一本の矢が貫通していた。

「大丈夫ですかー!？」

大通りの向こうから弓を持った黒髪ロングの少女が駆け寄って来る。

あー くらね子さん、どうもっす。そういやこの人アーチャーだっけか。

「真正面から来てたのに全然気づいてなかったんですか？」

……帽子深く被った結果がこれだよ！ 感傷に浸るなんてロクなものじゃねーや。もうここからは『異常な』世界なんだ。ホント戦場は地獄だぜ！

「と、とりあえずみんなは？」

「もう始まってますよ！ 敵の数が思ってたよりもヤバイです！むしろエグいです！」

そう言ってくらねさんが指差した空の先には…… 何あれ？
イナゴの大群？

「あのー あいつらのサイズは……」

「みんなこのくらい」

くらねさんが息も絶え絶えのキマイラの土手っ腹を蹴る。

「仲間も集まって来てるし、とにかくやんないと！」

き、気が遠くなりそうだ……

39話 油断も隙もありません（後書き）

久々に一話4000字で抑えられた気がします。

40話 唐突に死闘、でした（前書き）

唐突に戦闘シーン

40話 唐突に死闘、でした

そこはまさに戦場。紛うこと無き戦場。

近代の戦争とはまた違うものであるが。

血飛沫が舞い、肉片が飛び散り、人も、怪物も、同様に断末魔を上げる。

互いに訳も分らず命を散らす。

他の生き物の軌跡など全く意に介さないかの如く。

闇雲に、出鱈目に、生命が消費されていく。



「なあ、サイトお、お前剣道とかフェンシングとかの心得でもあんのか？」

Aseliaは赤く染め上がった青い長髪を束ね直しながら、足元に倒れた怪物の眼球を踏み潰す。もう周囲の戦闘も一段落付いたのか、小さな水音が彼の耳にしっかりと届いた。

「ない、高校の時はパソコン部だった。お前は？」

サイトは血の染色液など必要無い赤髪をなびかせながら、大剣を振り回して同時に3体のモンスターを首、胸、腰、と斬り分けていた。

「同じく。パソコン部なんて天国なところ無いから普通に帰宅部だったよ」

Aseliaも事が済むと、足元に突き刺したサーベルを手に取り背後から襲いかかったモンスターを袈裟切りにする。

「しかし、適当に剣振り回しているつもりでも……結構やれるもんだなあ」

「それが転生モノのお約束って奴じゃないのか？」

「だったら美女に転生するよりか、イケメンになって可愛い女の子達に囲まれるって方がよかったよ。それに中途半端に強いってのも勘弁だ。戦えはするけどしんどい。お前が羨ましいよ、まったく」

二人の足元に既に地面は見えなかった。どこを見渡してもモンスターの死体、死体、死体。段々足場が悪くなってきたいるのだが、御丁寧に死体を片づけている暇はない。周囲をぐるりと見渡し、モンスターの第三波が粗方片付いたことを確認すると、サイトも大剣を下して息をつく。

「俺は別にそういうのは望んでないんだけどなあ……」

「んだよ、現実のお前も結構イイスペックだったりするわけ？」

「そういうわけじゃない。ただ、俺が変わって欲しいと思ってたのは現実の世界の事であって、こんな異世界に飛ばされるなんて始めから願っちゃいないってこと」

サイトは町の外を遠い目で眺める。辺りは既に赤みがかっており、煌々と輝く夕日が遠くの山の奥に今沈みかけようとしていた。

「あいつらが変わってくれりゃな……」

それがA s e l i aに向けて言った言葉なのかははっきりしない。ただ、ひたすらに重く、淀んだ一言であった。

「余計なお世話かもしれないけど、人に変わってもらうのはあんまり期待しない方がいいぜ? 『人は変えられない、でも自分を変えることは出来る』とかどっかの偉い人も言ってるだろ?」

「そうさ、あいつらは俺を変えようとした。自分達の好きなように言いなりになるように。……俺は自分の力で変わりたかった、成長したかった。自分が望むように……それは悪い事じゃ無かったはずだ」

サイトの声は震えていた。それだけでなく肩も、目も、体全体が揺らめく夕日の如く。

「そんなに厄介な奴らなら……ぶちのめしゃーいいじゃねーか、こっちの世界から。お前がそこまで憎んでる奴らだったらよ」

A s e l i aも初めてサイトの怒りというものを感じた。ゲームのチャット上では決して見せることのなかった、彼の影の顔。こち

らの世界に来てからというものの、今ひとつ煮えたぎらない所の多かった彼の見える、初めての人間らしい生の感情。

柄にも無く真面目に意見を言ってしまったA s e l i aの気持ちを組み取りつつも、サイトは首を横に振る。

「足りないんだ、そんなんじゃ。死んだだけじゃ何も変わらない。あいつらも、俺も。……謝って欲しいんだよ、俺に。思いつき自分を恥じて欲しい。自分に非があったと心から認めてほしい。それだけで、いいんだ」

「難儀な奴だなあ…… お前も」

いかにも甘ったれた子供の台詞の样にも思えるサイトの言葉をA s e l i aは軽く流した……はずだった。

（だけど『自分の力で変わりたかった』なんて台詞が出る時点で、少なくとも俺よりか立派なんだろうけなあ……）

そもそも現実は一切の希望が見いだせずに毎日をダラダラ過ごしていたA s e l i aの心に、サイトの言葉は重く響いた気がした。

「第四波……だな」

夕日に覆いかぶさるかの如く黒点が表れ、次第にその形相が明確になってくる。よくもまあ、懲りもせずに次々と繰り出せるものだ。

「つたく、俺達なーんでこんなことやってんだろ」

唐突に異世界に飛ばされ、唐突に事件に巻き込まれ、唐突に自分達の命を掛けて町を、現実の人間と命がリンクしている市民を護る

事になっている。考えれば考えるほど馬鹿馬鹿しい。自分達はそんなの望んじやいない。ここで活躍して華々しく散っても、現実の世界で誰に褒められるわけでも、認められるわけでもない。どれもこれも全くといって主体性がない。ただ状況に流されるがまま。

「異世界召喚モノってそういうもんだろ」

運命に導かれるかの如く、一人のごく普通の人間が英雄となるまでの物語。そこに働く力は少なくとも主人公のものではない。いわば主人公は駒に過ぎない訳だ。それを動かす神の手があつてこそ主人公は主人公足り得る。

「いや、どっちかつつーとこれ『死神のノート』の展開だろ？ 何でここでファンタジー大決戦やんないといけないんだよ。映画とかにしたら絶対大コケするって。どこの湖だよ」

「安い話でいいじゃないか。人の人生なんてB級でも楽しめれば万々歳のはずさ」

「言ってくれるねえ……」

B級でもいい。自分が言うのとサイトが言うのとでは重みが違うのだらうと、A s e l i aは何となく感じた。今までの人生で自分は何か胸を張って言えることをしただらうか…… いや、ない。でも自分だけじゃない、他の奴らも同じ。大概の奴は無いはずだ。

自慢話なんてものは人聞きを良くするための脚色の塊。成功の秘訣なんてものはその最たる例だ。人のためじゃない、自分のために自分自身が自分の心に向けて堂々と胸を張って語れることをどれだけの人がやれたのだらう。

B級でも楽しめれば…… 綺麗な話じゃなくていい、情けなくて

もいい。自分が心から笑って語れる事ならばそれでいい。聞いてくれる人がいなくても、全く寂しい思いはしない。

（『現実』もそんなんだったらいいんだろうけどさ……）

血糊を拭わぬまま、サイトとAseliaは剣を構える。彼らには町を襲わんとする怪物たちの眼がはつきりと見えた。



ほぼ同時刻。

前方のファイターの部隊（10人にも満たないが）から100mほど後方に立つ部隊も、その疲労がピークに達していた。別に後ろから隠れてちまちまやってるわけじゃない。むしろ直に殺りあってますよ。敵は上からも来るんだから。前衛より幾分かマシって程度。

敵の波が止まったかと思うと、今度は人間達の声でてんやわんや。

「矢はもう無いの！？ 誰か一般の人でもいいから持って来てー！」

「こっちも重傷の人がいますー」

「いてーよー こっちも早く魔法で治してくれよー！」

「逃げ遅れただけの一般市民の癖に骨折程度の怪我でウダウダ言っ

てんじゃねー！ とつと町の病院に行けっつーの！」

俺が前線に立ってからどのくらいの時間が過ぎただろうか。なぜか持つてる時計を見る限り少なくとも2時間…… サッカーで一試合丸々全力疾走したかの如き疲労具合。現実でやったことないけど。勇敢にも俺達のサポートに立ちあがってくれた一般市民が15人。自らの命を賭して町を守ろうとした彼らの勇気には惜しみない賛辞を送りたい。現実にもこんな人達がいると思うと、世の中も捨てたもんじゃないと思う。

その一方で逃げ遅れた市民がその約5倍。しかも揃いも揃ってモンスターピーポー。火事場泥棒っぽい奴も交じってるし。これだから現実って奴は。あー焼き殺してえ。だが今はその体力すら惜しい。

「敵さんは　まだ来たりするんですか？」

「知りませんよ。でもこちらもギルドの方から次々に人が送られて、少しずつですが数も揃ってきてます。ちよつとはマシになって来るかも」

俺達が怪物の群れを食い止めながら、物資や人員の補給などギルドから派遣された人達が後方支援してくれている。冒険者も多く駆り出されているが、どこまでが精神がトリップした人達なのかは分からない。とりあえずレベルが低いのでよくやられている。

他の町にも連絡が渡ったらしいから、外にいる掲示板メンバーも駆けつけてくれることだろう。こっちのメンバーには死者は出ていないみたいだし、もう少し踏ん張りたいところ。

つつても、俺もにいにいさんも既に足ガクガクじゃないですか。この状態で敵さんに来られたらどうすっぺ。くろね子さんは矢が無

いとか言っであちこち回ってるし。×ぽんさんは負傷者の治療で大忙しだし。サイトさんとA s e l i aさんも最前線にずっと立って、生きているのが不思議なくらいだし。他にも味方はいるけどみんなどこも大体そんな感じ。みんな高レベルのプレイヤーなのでそう簡単にはやられたりしないが、流石に2時間近くの戦闘は肉体以上で精神的にも堪えているだろう。いや、実際俺が堪えてます。早く援軍来てー！

「敵第四波！ 来たぞー！」

ああもう最悪。イナゴの大群がこっからでもよく見える。

「ソーサラーの方々ー！ 一旦前衛を下がらせて広範囲の魔法をー！」

簡単に言うな！ こっちはロクに水分補給すらさせて貰えず、立つのがやっとだったのによ。こんな瘦躯の少女を酷使して貴様らの良心は1ナノも痛まないのか？

「……いや、今度のは速い！ 魔法の前に一旦防壁だ！」

前衛の人達がここからでも表情がはつきりと見える位置まで下がると、すぐさま俺の視界いっぱい光の障壁が広がる。そして遅れて前方から来る火弾、氷弾、雷弾e t c…とにかく色んな属性の攻撃。それら全ては障壁の前に弾かれる。流石は仲間内で防壁全一と呼ばれるテルミさんのレジスタンスフィールドだ。とっても丈夫。

「解除10秒前ー！」

障壁解除までの時間も段々短くなって来ている。テルミさんもお

疲れの様だ。

「3、2、1……！」

ここで思わぬ障壁の副次効果が表れた。障壁は横には広いが高さはせいぜい40m程度。魔物達は無闇に破壊しようとせず、壁を乗り越えて攻めこもうと一斉に高度を上げたのだ。無駄な消耗を抑えたつもりだろうが……自分達から固まってくれるのは好都合だ！

「うっし……！ ファイヤーウォールッ！」

体力はともかく溜めは十分！ 俺の放った業火の波が敵の先陣を例外無く飲み込む。……が、当然の如く耐性を持った敵が、炎の渦から飛び出してくる。

「アイシクルテンペスト！」

たまたまなところが多分にあるが数段構えの作戦。続けてにいいさんの魔法。名前の通り氷柱の嵐がこちらに突っ込んできたモンスターの翼を挟み取る。よし！ ナイス、いい感じ！ ここから更にバランスを崩したモンスターの急所目掛けてアーチャー達の一斉射撃が……あんまし飛んでこない！

「くろね子さああん！？」

「だから矢が少ないんだってば……！」

何でこっちのアーチャーはこんなに冷遇、というか無駄に現実的なのでしょうか。矢が無いとほんと無能。そりゃゲーム中で何百本も持ってるのもどうかと思うけどさ。

「とにかく後は各人で各個撃破！ 味方に攻撃しないように！」

ああ、また乱戦ですか。これがさっきからしんどいのなんの。しかも今度の敵は空中での挙動が速い奴らばかり。となると必然的に俺らソーサラーの出番が増えるわけじゃないですかー！ 向こうのそれを分かってるのか、やたらこっちに向かって来るし！ ファイヤーウォールは間に合わない、っと！

「フレイムレーザーピッドッ！ ちくしょー！」

とりあえず翼を狙う！ 動きを鈍らせる！ それ以上やろうとすると多分体力持たない！ 後はファイターさん達に一任します！

結構適当な狙いでレーザーを撃つても、もれなく命中するくらいにモンスターの数が膨れ上がっていた。幸い戦闘力自体は低めのようなので、長期戦に持ちこめば…… ってそれが一番嫌なパターンだよ。片腕で顔に吹き上がった汗をぬぐいながら、とにかくウィザードロッドを振り回す。

こんなことがいつまで続くんだとまたもや気が遠くなった瞬間、今度は肩に鋭い衝撃が走る。自分の頭が働いた時には既に体は地面から離れていた。

「うえっ！？ って！」

事に気づいた時には既に遅し、ハーピーの両足の爪が俺の両肩をがっちり掴み、俺の体を空の旅へと御招待。振りほどこうにも爪が深々と肩の肉に食い込んでいるため、腕に力が入らない、というか曲がらない！ 仲間も事態に気づいたのはいいが、遠くから狙おうにもハーピーが自由自在に空をぐるぐる回ってくれるためにロクに狙いが付けられない。

つーか酔う！ 俺ジェットコースター弱えのに！ 怖いとかそんなじゃなくてとにかく酔うんだよ！ 船とか激しい乗り物全般駄目なんだって！ 何とかしてー！

「フレイムレーザー！」

そんな最中にいーいさんの声が聞こえて来たかと思うと、頭の上から悲鳴が上がり、急に俺の左腕の感覚が無くなる。さらに視界が反転し、上から地面が近づいてくる。

「……っと！ セーフ！」

タイミング良くテルミさんの柔らかい防壁にキャッチされ、晴れて俺の体は自由になった。隣には石畳に直に落下して潰れたハーピーの死体。……うん、自由になったのはいいけど、またですか？

「誰か！ シエルさんの腕拾って！」

何だよ！「腕拾って」って！？ これほど非現実的なこの状況を端的に言い表せる言葉は無いんじゃ。おまけにまたもや都合良く、俺の頭の中から「痛い」という単語がすっぱり抜け落ちてるみたいだし。でももう勘弁してください。腕ポロリはこれで2回目なんですよ？ 助けて貰った以上文句は言えないけど！

「あった！」

向かって左からサイトさんの声が聞こえる。彼は上空にいるモンスターと応戦しながら、素早く身を屈め、地面に落ちていた俺の腕を拾いランナーを刺すかのようにこちらへ投げつける。ああ、哀れ俺の腕。

そして回復役の×ぽんさんがそれをキャッチし、素早く俺の左肩の切断面に当てる。

「悪いがこっちを優先する！」

テルミさんも近づいて来て、俺達の周りに障壁を張ってくれる。つて、それだと他の人が無防備になるんじゃない？

「今ソーサラーを失うのは不味い」

「……すみません」

「もっと別の奴が謝るべきなんだろうけどな！」

×ぽんさんの回復魔法で少しずつ左腕の感覚が戻って来る。幸いにいいさんのフレイムレーザーは俺の腕を綺麗に溶断してくれたので、出血も少なく傷口の修復も早いみたいだ。どこらへんが『幸い』なのか自分でもよく分かんが。

「腕はどうだ？ 動かせそうか？」

「はい、指もなんとかこのとお……？」

顔を上げた瞬間、俺の視線の先を一閃が走る。形状からアーチャーの放った矢かと思ったが…… 向きが、おかしい。右上から、左下。撃ち下すような狙い。右は町側…… 援軍？

「サイトオオオオーツ！？」

周囲にAseliaさんの絶叫が響き渡った。

40話 唐突に死闘、でした（後書き）

中二っぽい言い回しってネタにばかりされてるけど、いざ自分が考えるとかなり難しいですね（汗）。

41話 混戦なんて勘弁してください（前書き）

戦闘シーンってどうしてもこんなに長くなるんだろう……

41話 混戦なんて勘弁してください

「おいしいっ！ 糞アーチャー！ 誰が撃ちやがったあっ!？」

上空に無数のモンスターが飛び回り、各々が自分の戦場で必死になっている中で、ただ一人Aseiliaさんだけが異色の絶叫を上げ続けている。

「どうした！ サイトがどうしたんだ!？」

「撃たれたんだよっ！ 回復早く来てくれよ!」

撃たれた？ しかもアーチャーって!？ まさか……

×ぼんさんがちらりとこちらを見る。俺が左腕を勢い良くかざして見せると、彼は軽く頷き前衛の二人がいる激戦区へと走り出す。……てて、正直左腕はずっと痺れたような感じなんだが。振り回しでもしたら、また千切れてしまいそうだ。だが今は……

「……っ!？」

目の横をまた風が切ったかと思うと今度は障壁への衝突音が響く。

「な、何……!？」

「お前は気にせずいいから行け!」

状況が呑み込めずにこちらを振り向く×ぼんさんをテルミさんが

急かす。テルミさんが先を見越して彼の背後に障壁を張っていたので大事には至らなかった。しかし、今の光は完全に背を向けた×ぽんさんに向けて撃たれたもの……と、いうことは……！くそっ！俺もあっちに向かうか！

「って、お前まで行くのかよ！」

「固まったほうが守り易いでしょ!？」

俺はAseiliaさん達の上空を取り囲んでいる鳥モンスター共をフレイムレーザーで一薙ぎし、テルミさんと共に×ぽんさんの跡を追う。さらに後ろから割を食ったにいさんと、くろね子さんが慌てた様子で追ってくる。

Aseiliaさんが小さめのモンスターの死骸で遮蔽物を作っており、俺達も銃弾から身を隠すかのように壁の後ろに飛び込む。

「さっき、アーチャーがどうの言っていたけど私じゃないよ!？」

矢が無くてさっきから全然撃ててないんだから!」

「サイトくんは!？　だいじょ……ぶ……」

Aseiliaさんが苦々しい顔をしながら真っ赤な一本の矢を握りしめていた。さらに一足先に辿り着いた×ぽんさんの険しい顔を見る限り、状態がかなり芳しくないよう、だが。地面は真っ赤っか。モンスターの血だと思いたいけど……そうはいかない、か。

「心臓は……ギリギリ逸れているのか？」

サイトさんの左肩の先から鎖骨までを円の直径として挟れたように穴が開いており、まるで戦艦の大砲がその部分だけを吹っ飛ばし

たかのよう。あの光の軌跡を見た限りでは矢のようであったが、この世界の冒険者達的能力を考えるとなんら不思議は無い。

とにかく×ぽんさんが必死にヒーリングをかけ、何とか命を繋ぎとめている。まともな人間の精神ならとっくに気を失っているだろう。この状態で助かるなんて気すら起こらない。それでもサイトさんは虚ろな目になりながらも、呼吸を荒げている。

さらに折り重なるようにして人間の悲鳴が上がった。テルミさんから防御専門のプリーストの防御障壁で、遠くからの攻撃はある程度防げると思っていた人達。そんな彼らの後方から次々にあの光の筋が襲いかかる。掲示板のメンバーが他にやられたのかは分からない。ただ、まだレベル低い冒険者は次々に襲いかかる矢に四肢を？がれ、かろうじて生き残った者も動けなくなった所をモンスター達のエサにされている。

「何なんだよ、これ……」

「矢は町の方角、もっと後ろの方から飛んできますね…… しかも上から下に、撃ち下ろすようにです」

「ってーことは……！」

俺の話を聞いてこの場のほぼ全員が事を理解したのだろう。

……昨日の奴。

みんなの言葉が止まる。にいにいさんところね子さんの顔が青ざめる。体力をすり減らして魔法を使っている×ぽんさんとテルミさんは一層険しい表情になる。Aseliaさんは……顔は紅潮し、歯を噛み締めながら握りこぶしを作って、震えていた。

この半径数m程度の空間だけに起こるわずかの間の沈黙。

「ふ」

一人、沈黙を破り立ち上がる。

「ふ、ざ、けんなああーっ!!」

A s e l i aさん、だった。自分で作ったモンスターの土嚢を駆け上がり、町の方角に向かって怒声をあげる。すぐにまた風を切る音が聞こえたかと思うと、彼の体はこちらに向かって吹っ飛ばされ、俺とにいにいさんの上に落ちてくる。

「ぐ……!! ちくしょ……!!」

「バリア張る身になってくれよ……!!」

姿を晒した途端、これか。幸い障壁のおかげでA s e l i aさんに大した怪我はなかったが、テルミさんもかなり疲れているようで、向こうの矢の威力を完全に抑えられなくなっている。

「なん、で、俺達がよ…… 人助けやってんだろ……? いま……」

A s e l i aさんは俺達の上にのしかかったまま起き上がろうともせず、ただ呆然とそうつぶやいていた。俺が何とか彼の体を起こして、その体重から（女性の体なので大して重くはないのだが、こっちも少女の体だからきつい）逃れる。

「げはっ! がっ!」

後ろから治療中のサイトさんが血痰を出す音。再び周りが無言になる。そして隣で大きく息が吐かれたかと思うと、急に肩を掴まれた。

「おい、シエル。あとにいいい」

A s e l i aさん、痛いです。少女の柔肩をそんな強く掴まんといてください。

「さっきので矢の飛んでくる大体の方角が分かった。二人でありつたけの攻撃魔法をそこに叩き込んでくれ」

彼の表情は前髪に隠れてよく見えない。が、まあ大体想像つきます。

「うす。少しお待ちを」

「え？ ちょっと！ 相手は多分……」

俺達と同じ境遇の人間、ですか？ にいいさん。いや、でも、無理ですよ。もう流石に我慢出来ませんわ。こんなやられっぱなしじゃ、ね。

「い、い、か、ら、な？ とつとと、ぶっ殺してくれ。頼む、ぞ？」

もはや一種の顔芸に近いA s e l i aさんの鬼面を近くから見せつけられ、にいいさんは口をぱくぱくさせながら言葉を詰まらせている。うん、鬼気迫る表情ってのはまさしくこのことを指すのだろう。こんなもの滅多に拝めないだろう。現代社会ってほんと平和だわ。

「本当にいいんですか？ 状況が状況とはいえ下手すれば人殺しになりますよ？」

横からくろね子さんがおそるおそる俺に尋ねる。

人殺し、か。不思議と何だか今更のような気もする。そういえば俺も人を殺るには十分すぎる力を持ちながら、まだ人間には誰も手をかけていないんだよな。俺だけじゃなくてみんなもそう。こちらに精神トリップした人の大抵が多分そう。ぶっちゃけ人殺しって、結構な人が死ぬ前に一度やってみたって思っている節があるだろう。でも、ほとんどの人は誰もやらない。なぜ？ だって本当にやったら自分の人生が終わるから。現実には法がある。では、現実では無いこちらの世界なら？

「仮にもこっちは人の命守るために体張ってんだよ！ それを後ろから狙い撃ちしようなんざまともな人間のやることじゃねえ！ キ○ガイだよ！ そんな奴らの命なんて考えてどうすんだ！」

Aseliaさんが女性の声帯をぼろぼろにしながら訴える。…その言葉を返せる者はその場にはいなかった。

「とりあえず……俺はやりますよ。こうでもしないと、こっちの命も危ない」

俺はウィザードロッドを町の方に構えて精神を集中する。

危ない。そう、危険なのだ。このままでは。

「でもAseliaさん……先にそっちで周りのモンスターを何とかしてくれませんか？ 何だか物凄く囲まれているんですけど」

さつきから妙に暗いな、とか思ってたら、テルミさんの障壁の上に大量のモンスターが張り付いていた。檻の中にいる獲物を狙うかのごとく、障壁を爪でひっかきながら舌舐めずりしている。

「ちよいとキツイが…… あと動けるのはくろね子くらいか？」

「私はあまり戦力には……」

どうやら矢は既に無いっぽいな、アーチャーなのに。先刻から弓の先端に取り付けられている刃で応戦していたっぽい。ゲームとかではよく見るけど凄く戦いにくそうだな。

「とりあえずソーサラー二人が魔法を撃って、そしてサイトも復帰したら何とかなる！ それまで目いっぱい時間稼ぐぞ！」

「そんじゃ障壁を更に縮めるぞ。お二人とも死ななくてくれよ」

返事を待たぬまま防御障壁の効果範囲がさらに狭められ、二人の体がむき出しになる。くろね子さんが涙目になっていたが…… 御武運を。

「魔法撃つ時は合図くれ。そんな時に障壁も一部解除する」

隣のいにいさんも首をふるふると振り、体を町の方へと向ける。

「シエルさんは何を使うの？」

「一応ファイヤーウォールを……」

あまり遠くの敵には向かないが、その分範囲を狭めて威力を上げ

れば……

「昼間に新しい魔法を覚えたって言ってなかった？ あれはどのようなの？」

「……あれは設置式の魔法だったみたいで」

俺とにいにいさんは属性を分けて魔法を習得している。俺は炎魔法一本で。にいにいさんは氷とか雷の魔法も使える。フレイムレーザーは初期の魔法なので彼女も使えるのだが。偏ってはいるものの、実際に威力も新魔法のキャパも俺の方が高い。

話は戻るが、俺が日中に覚えたばかりの新魔法、その名も『プロミネンスマイン』。

名前からして嫌な予感がしていたが、案の定地雷であった。足元に味方以外には不可視の地雷を設置し、その上を使用者以外が通過した時、起爆する。ゲーム中でも試しに使ってみたのだが使いにくいなのなんの。威力は半端ないが、元々後衛のソーサラーの立ち位置にどうやって相手をおびき寄せるかが問題なわけで。空を飛んでいる敵にも発動するのがせめてもの救いか。まだ誰も覚えている者がいなかったようで、期せずして俺が先駆者となり攻略掲示板に書き込む羽目になったのだ。

まあつまるところ、今の状況では全く使えません。

「じゃあ、さっきと同じく二段構えの攻撃にしましょう」

「了解です」

前衛の二人も奮闘しているがあまり時間は無い。ここは一気に決める！

「テルミさん！」

「おう！」

町側の防壁が一部解かれ、俺はモンスターの土嚢を駆け上る。流石にその一瞬で狙いを付けて撃てまい！　そしてこっちはそれ程狙いを正確に付ける必要も無い！

「ファイヤーウォー……！」

……る！？

最後の一字を言いかけた途端、魔法を瞬時に解除して体を後ろに倒していた。こんな時だけ鋭く働く自分の反射神経を恨めしく思う。

「し、シエルさん！？」

「撃たれたんですか！？」

当然、俺の体に傷などない。自らの意思で後ろに倒れたのだから。

「くそ、人が……」

「人？」

「人がいるんです！　それも何十人も！　しかも冒険者じゃない、モブ市民です！」

本物かどうかはともかく武器は持っていなかった。それらしい装備でも無かった、老若男女。そんな人間が何十人もA s e l i aさんが指定した場所にいた。その後すぐにチラ見した時はいなかったのに！ それから……俺達は身を隠して……バリア解除で、二人を前の敵へ……それから、俺達二人で詠唱……その間の時間は、……結構ある。

「町からの増援じゃ？」

「さつきからずっと矢が飛んで来てますよ、その大半が俺の障壁に」

申し訳程度にモンスターにも当たってはいるが……ノーコンというわけではないだろう。本当に当てたいなら空の敵を狙うだろうし。後ろには逃げ遅れた人、俺達を支援してくれている一般市民や冒険者ギルドの人がいる。彼らには戦闘の邪魔にならないように隠れているように言っているはずだが。……盾にされたか？

「攻撃はッ！？ どうしたんだシエルッ！？」

満身創痍になりながらA s e l i aさんが怒鳴る。くろね子さんはしゃべる余裕も無いみたい。事情を話すが、彼はそんなクソ市民なんぞ巻き込んでも構わないと言うだけであった。

「……もう一度やる？」

「いや、今のでこちらの手がばれたかも。むしろ最初から読まれていたのか……」

もし、あの時躊躇なく撃っておけば……そんな後悔が俺の脳裏をよぎる。このままだと間違いなくジリ貧。モンスターの残りの数

は分からない。倒しても倒しても湧いてくる。だが、後ろの敵はおそらく人質持ち……このまま背中に銃を付きつけられながら、力尽きるまで目の前のモンスターと戦い続けるしかないのか？これじゃあ、まるで剣奴だ。

後悔の後に来た気の遠くなるような絶望に負け、俺は目を伏せていた。

「モンスターが!？」

にいにいさんの声でふと我に帰る。ありったけの最悪の状況を考えていた俺の視界に飛び込んできたのは……目に突き刺さるような眩しさの夕焼けでだった。

41話 混戦なんて勘弁してください(後書き)

そろそろまた登場人物まとめたいなあ。

42話 やはり殺り合うしか

「モンスターが引いていく……?」

さっきまで空を覆い尽くしていたモンスター達が一斉に散り、町から離れ去っていく。誰もが更なる絶望を予期していただけに、その場にいた全員がただ茫然とその様子を見つめていた。

「食い残しが多かったけど、第四波終了ってか……?」

Aseiliaさんが剣を地面のモンスターの死骸に突き刺し、その場にへたりこむ。くろね子さんも無言のまま、ふらふらの足取りでこちらに寄って来て仰向けに倒れ込んだ。傷はそんなにないようだから大丈夫っと。

ぐるりと回りの様子を見る限り、前線にいた者の中で立っている人間は誰一人いない。後ろから矢が狙って来るというのものもあるが、みなそれ以上に疲れ果てている。ひとまずは凌げたが、次はいつ襲って来るのであろうか。誰も口にはしなかったが、その表情に不安がありありと表れている。

夕日が沈んで辺りに闇が落ちた事も手伝い、その焦燥感が増す一方であった。

「……いや、つか、結構遅くね?」

後ろの敵のせいで灯りも点けられずにボーっとしている中、Aseiliaさんが思い出したかのように突っ込みを入れる。にいにいさんも気が付いたかのように手持ちの時計を見る。

「さっきの敵襲からもう30分以上は経ってるけど……」

30分経っても体の疲れが全く取れないのは勘弁してほしいが、流石に今までと比べて長すぎる。ようやく打ち止めか？ でもここから動くわけにもいかないしなあ。そんな中で周囲に誰か（俺以外）の腹の虫が鳴り響く。

「もしかして……向こうは食事中とか？」

「いや、人間食ってたじゃん」

あの光景を冷静に思い出すと軽く嘔吐感を覚えるが、それ以上に腹が減った。食い物なんて誰も持って来てないだろうし。そもそも俺達を支援してくれていた勇敢な市民達はどうしたんだ。もう30分以上も全く音沙汰ないとは。……後ろにあんなのがいるし、既にやられちゃったか？

「灯り、だ……」

そのかすれた小さな声に全員の表情が覚める。

「大丈夫か！？ サイト！」

「何とか…… ×ぼん、助かった……」

「医者のお持ちが何となく分かった気がしたよ」

サイトさんも無事だったか、こいつはよかった。だが、しばらく戦えるような状態じゃなさそうだな。ああ、今度は×ぼんさんもへたりこんじゃったし。

「いや、そういえば灯りって？」

「あ……！ 見えますよ！ A s e l i aさん！」

先程のモンスターの来た方角から、小さい光の点が5、6……いや、10個以上はあるか。しかも、少しずつ大きくなってきている。

「近づいて来ているな……」

A s e l i aさんが片膝になり再び剣を握る。俺も一応戦闘態勢に入る。

灯りの高さからして、相手は陸上を進んで来ているな。少なくとも空にはいない。

周りに静かな緊張感が走る。

「……い！」

ん、声？ しかもこれは……

「おーい！ だれ、か、いるかあー！？」

俺達は顔を見合わせる。

「生き残っている奴らはいるかあー！？ いたら返事しろー！！」

思わず声を上げそうになった俺を、隣からA s e l i aさんが押さえる。

「え？ ちょっと、もしかして味方じゃ？」

「いや、だとしたら、何であっち側から来るんだよ？」

そういえば。何故よりによって町の方からじゃなくてモンスターの来る方角からなのだろう。

「そこに誰がいるのか!？」

うおっまぶしっ！ 結局あっさり見つかったし。

「おっ！ サイト達か？ 無事だったか！」

どうやら俺達を知っている、っていうか掲示板メンバーの人達ですか。

「ああ…… タミにグンジョーか……助かった……」

松明の逆光が下がり、二人の姿が目映る。ファイターのタミさんに、アーチャーのグンジョーさん。ああ、そんな名前、仲間の名簿でちらっと見かけた気がする。俺は直接話したこと無いけど、流石にサイトさんは顔が効くんだな。

「話には聞いていたが、死屍累々だなこりゃ…… こんなに暗いと声出さないと怖くてやってらんねーよ」

タミさんは足元のモンスターの死骸を踏みつけながら冗談めいた口調で言う。

「援軍はありがたいが……ちょっと遅すぎるぜ……」

いつものペースを取り戻したA s e l i aさんが皮肉を言うと、二人は少しむっとした表情になる。

「いやいや、俺達だって大変だったんだぞ」

「こっちもついさっきまでモンスターと殺り合っていたからな。つか、モンスターの群れを止めたのは俺達なんだからな。感謝しろよ？」

どういふことかというと、北の町にいた彼らも事情を聞くとすぐにこちらに駆け付けたらしい。だが、町の北門は逃げ惑う市民達の大津波でとても前に進める状態では無かった。仕方ないので町の外の森を大きくぐるっと時計回りして町の東部に向かったらしいのだ。

「ちょうどドンパチしている所が見えたから、俺達もすぐに向かうとしたんだ。そしたら……」

「森を抜けた所に冒険者ギルドの人が何人かいてな。戦況を聞こうとしたら、別の事頼まれちゃってさ」

「別の事？」

「モンスターの出所を直接止めて欲しいってさ。いやーあん時はびっくりしたぜ」

なるほど。普段ダンジョンから出られないはずのモンスター達が、こんな人の住む町まで進出してくるのは本来あり得ない状況だ。この人達は吹き出してきたモンスターは後回しにして、その根元を叩いていたってことか。

「部隊を分けるのは賭けだったみたいだけど、まあ何とかなったよ
うでさ」

「だけど、事が済んでもあんまし笑ってもいられなくてよ」

そりゃ俺達がこんだけ酷い目にあってるんだから、と思った。そして、同じことをAseiliaさんも言った。

だが、グンジョーさんは急に真面目な顔つきになる。

「このモンスターの大量発生の原因……どうやら人為的なものみたいだぜ」

「出所のサーレー山…… そこのモンスター封印のための施設と監視所が『冒険者』に襲撃されたらしいみたいでな。そこを何とか俺達が奪還したんだが」

……ああ。そうですか。

話が見事に繋がった。

「なぜ、人間の仕業だと分かったかというところは何か聖なる封印がなされていて、元々モンスターが絶対に近づけないようになって
いるらしくて、その上だな……」

「もういい。事情はよくつつく、わかった！」

ああ、Aseiliaさん。折角のアバターの美貌が青筋で台無しです。つかこれが人間の青筋って奴か。初めて見た。とりあえず俺達も他の生き残りを探しながら、この二人にこちらの事情も話す。幸いにして、いや奇跡とも言えるべきかもしれない。俺達掲示板メン

バーには死者が出なかった。死にかけた人や負傷者は腐るほどいるが。

「おいおい！ それじゃ町の向こうに敵がいるってことかあ！？
先に言ってくれよ！」

タミさん、それ今更っす。

「でもさっきから矢が飛んできている気配はないな。こんだけ目立つ灯りを点けているのに」

「流石に向こうも撤退したのかな……？」

掲示板メンバー全員と合流し、その他のレベルの低い冒険者の生き残りも回収する。これで、ひとまず危機は取り去ることができただろうか。俺達は一応警戒しつつも、疲れた体を引きずりながら町を中心へ戻ることにした。

……灯り一つ無い静まり返った町並み。モンスターの脅威は過ぎ去ったものの、この場所へ帰って来たものは誰一人としていない。今晚は夜風がやけに冷たい気がした。

「おい……」

先頭を歩いていたA seliaさんが足を止める。彼の横まで向かうと、彼は顎で前を差して少し前進し松明を高く掲げた。

「……っ！」

「うえっ……！」

「ひ、どい……！」

道の真ん中にあるのは壊された馬車。馬は当然の如く首から上が無い。そしてその周りにあるのは……無数の人間の死体。死因は多種多様。撲殺、刺殺、惨殺、焼殺、絞殺etc……

人間の腐敗臭ってかなり酷いって現実で聞いたばかりな気がするが、そんなの全然感じられない。先程の戦闘で完全に嗅覚が麻痺しているのかも。

「この服装って……冒険者ギルドの奴じゃないか？」

「道理で町からの援軍が来なかったわけだ……」

モンスターにやられた……わけでもなさそうだな。この人達も多少なりとも戦えるのだ。町を襲ったモンスターだって数が多すぎただけで、一匹当たりの強さはそれ程でもない。しかし、周囲にはモンスターの死骸は全く見当たらない。殺ったのは人間だろうな……やっぱ。

「ギルドからの援軍をせき止め、自分達が解放したモンスターと共に俺達を挟み打ち……か」

まだ足取りのおぼつかないサイトさんが遺体の状況を眺めながら一人言のように言う。

しかし、可能性としては十分。いや、十二分。あのモンスターの大量の襲撃は、始めから俺達掲示板メンバーを始末するためのものだったのだろうか。しかし、そのために何の関係もない市民やギルドの人達を巻き添えにするなんて……

――モラルや信条なんて、一度箍が外れれば案外脆いものさ。もしも無関係な奴を殺すことに慣れてしまったら、いや自分の中で正当化させちまったら――

「でも、これで同時にはつきりした事もある」

サイトさんが冷静な口調で言う。こちらに来てからネガティブ気味だった、今までの話し方とは明らかに違っていた。

「あいつらは正面からの勝負では俺達に勝つ自信がないんだ。だから闇討ち、それもやり難くなったと見ると、今度は大掛かりな仕掛けを張って一掃しようとする……殺害するのは基本的に現実での悪人限定だったんで多少なりとも良心があると思ったが……そろそろ、手段を選べなくなってきたいるのかもしれないな」

彼の表情は怒っているようにも、笑っているようにも見える。

「向こうも焦ってるんじゃないのか？　もしかしたら」

彼のこの一言は俺達の恐怖心に大きく響いた。これまで下手、後手に回ることしか出来なかった、いや、心のどこかでそんなバランスが働いていた俺達の思考回路。慎重論、保守的、安全策、内側に向かおうとする心を真っ向から否定する。

それを聞いたA s e l i aさんも不敵に笑う。

「……やるか？」

「ああ、ここまで来たらこの際、この現象の黒幕が誰だとか、原因

が何だとかはもういい。少なくとも、ここ数日の騒動を起こしているのは俺達と同じ人間のはずなんだ」

そうだ、守ってばかりじゃどうしようもないんだ。自分達の身だけでなく、現実の人間と命がリンクしている市民達も危険に晒すことになる。下手すりゃモブキャラの方の俺も巻き込まれる可能性があるんだしな。そいつが死んだらどうなるか分からんが、穏やかなものではないだろう。この世界のルール（？）上は。

他の仲間も顔つきが変わっていた。あの地獄を体験したのだ。どんなに大人しい人でも、争いを好まない人でも、いい加減に堪忍袋の緒が切れたのだろう。

もう、放置してはおけない。現実で裁けないのなら、こちらの世界で処罰する。

気が付くと周囲の家々には明かりが灯り始めていた。中心街は少しづつだが人が戻って来たようだ。俺達の活躍でこの近辺のモンスターの被害はほとんどない様子。何とか惨劇は東部だけで食い止めることが出来たみたいだ。

そして俺達は無言のまま、明りの煌々と輝く冒険者ギルド本部に到着する。

ゲームのキャラまんまのギルドのお偉いさん達が俺らを迎え、労ってくれた。町全体の危機を救ったのだから当然っちゃ当然だ。更に飲まず食わずで戦っていた俺達に炊き出しを用意してくれていたみたいで、しばらくの間俺達は心を休めることに集中する。

俺も床にへたりこみながら柑橘ジュースで一杯やっていると、目の前を精悍な顔をしたサイトさんが通り過ぎる。……死の淵から生還した人間ってああも変わるものなのかな。

「マスター……少しいいですか？」

彼が捕まえて話しかけたのはギルドマスター。その名の通りこのゲーム中の冒険者ギルドの中で一番偉い人。普段は飄々とした老人だが、幾多の修羅場を乗り越えて来た凄みも時折見せる人だ（ゲーム公式サイトのキャラ説明より）。というかゲーム中でも中々拝めない人だった気がするが。状況が状況だしなあ。

「一つ、提案があるのですが」

42話 やはり殺り合うしか（後書き）

これにてこの話の起承転結の「転」の部分は終了です。

【番外編3】 クライマックス近いつてのに

・終盤戦に突入したので、もはやネタバレに近い登場人物まとめ。
これからのシナリオにあまり影響ないくらいの設定を晒します（笑）

【登場人物】

（攻略掲示板メンバー）

・シエル （高瀬悠二）

職業…ソーサラー（♀）

（中の人）：主人公（♂）。18歳。横浜の大学の工学部一年生。
彼女いない歴〃年齢。

ぼさぼさの黒髪短髪。視力両目0.2。色弱。

・サイト （斉藤崇）

職業…ファイター

（中の人）：23歳（♂）。東京の某大学（Aラン）に通う大学院生。専攻は物理学。

院に進学して間もなく仲のよかった教授が倒れ、性格の悪い准教授が台頭。

准教授の教え子のポスドクからもいじめ抜かれて、自主休学中。

・Aselia （基山聡）

職業…ファイター（♀）

（中の人）…23歳（♂）。フリーターという名のニート。

某駅弁大学（理学部、専攻は地学）を卒業したが就活に失敗し無職。

×ぽん（海田俊樹）

職業…プリースト（♂）

（中の人）…22歳（♂）。専門学校を卒業後とある会社に就職するが、

ブラック過ぎて3ヶ月で退職。現在求職中。

・にいにい（広田麻美）

職業…ソーサラー（♀）

（中の人）…20歳（♀）。専門学校生。身長165cm、体重85kg。彼氏いない歴11年。

・くろね子（島宮羽子）

職業…アーチャー（♀）

（中の人）…19歳（♀）。短大生（教育学）。現実では軽くメンヘラ気味。

元々賞金目的でゲームを始めていた人。

・テルミット（下田昌徳）

職業…プリースト（♂）

（中の人）…25歳（♂）。メンバーの中では珍しく一応社会人。ある意味凄い人。

・グンジョー (上谷剛志)
職業…アーチャー (♂)
(中の人) : 23歳 (♂)。某大学の大学院生 (日本史専攻)。ある意味現実逃避中。

・タミ (富山健人)
職業…ファイター (♂)
(中の人) : 26歳 (♂)。絶賛ニート中。夕風とはリア友。

・夕風 (渡辺裕也)
職業…プリースト (♀)
(中の人) : 25歳 (♂)。攻略サイトの管理人。アフィリエイトで稼ごうと画策している人。
ゲームの中にトリップしてこそいないが、半信半疑でタミ達に手を貸している。

(その他のプレイヤー)
・Gilly (?)
職業…シーフ (♂)
(中の人) : ネタバレ回避のために禁則事項。

・YASU (田辺康友)

職業…ファイター（♂）

（中の人）…24歳（♂）。彼もなんとまともな社会人。ちなみに犯人ではありません。

・ミノル（赤星稔）

職業…クリエイター（♂）

（中の人）…21歳（♂）。フリーター。彼はまともにアルバイトしている方…だと思う。

（死亡者）

・如月由真（伊藤弘樹）

職業…アーチャー（♀）

（中の人）…享年19歳（♂）。主人公と同じ大学に通っていた友人。現実での死因は脳梗塞。

・Pon太（白岩由貴子）

職業…ファイター（♂）

（中の人）…享年33歳（♀）。小学生の息子が一人いる。夫は某新聞社の報道副部長だった。

現実での死因は心臓発作。

・れんちえふ（伴隆之）

職業…プリースト（♂）

（中の人）…享年28歳（♂）。小説家を志していた。あと、くろ

ね子に片思いしていた。

現実での死因は心筋梗塞

【番外編3】 クライマックス近いつてのに（後書き）

メインキャラは意外と死んでない！

ここまで書いて気づきました。まあいいか。

各人の装備とかスキルとか細かく書こうとしたけど無理でした……
ほとんど使わない設定を長々とは書けないよ！（涙）

43話 そんなこともあったような

淀んだ光―

……朝、か。現実の。

こっちの方もロクでもない世界なんだけどなあ。

民主主義であるはずの国家。

動かしているのはほんの一握りの人間。

でも、大半の人はそれを望んでいるんだ。

だって、面倒くさいから。

楽して生きたい。気苦労なく生きたい。

そのために今を、頑張る。

倒れない程度に。

ズルしている人間は沢山いる。

割を食っている人間だって沢山いる。

どこまで行っても不公平がある。

時には裁かれるべき人間が笑い、そうでない人間が涙を飲む。

そんな時だけ正義感ってやつが働いてしまう。

悪い輩をぶっ倒す。

それは誰もが持っている願望だ。

所謂ヒロイックな妄想っていうか。

でも大半の人は妄想に終わる。

現実では損するばかりだからね。

でも、損しなかったら？

安心、安全に人を裁けたら？

……そんな能力を手にしたら。

人は変わるんだろうな。

良くも、悪くも。

これから相手にするのはそんな奴らだ。

だが、その時、俺は彼らに何て言ってやるのだろうか？

もはや謝る云々で済む問題ではなくなってきた。

おそらく向こうは殺す勢いでなければ倒せないだろう。

その行為にどれだけの大義があるのか？

何の変哲もない自分と、同じくその他大勢の人間の命。

これらの命は奴らのある種の覚悟より重いのだろうか？

だらだらと平凡に生きるより――

業を背負う覚悟で行動する――

どちらが？

俺にはまだ自身が無い。

それが正しいとかどうかより、

ただ、死にたくないからってしか、はっきりとした動機が無い。

奴らのやっている行為は、俺達の頭の片隅にも確かにあった願望なのだ。

これをただ頭ごなしに否定して、やっつける。

その先に残るものは何だろう？

何も変わらない世の中。

良くも、そして悪くも。

……答えが欲しい。

格好良く、後味良く終わらせるための口上を。

自分自身へ向けての。

◇ ◇ ◇ ◇

「ええー ということなの……」

修羅場をくぐり抜け、現実世界に6度目の帰還。疲れた。ほんと疲れた。今まで寝てたはずなのにこの体の疲労感は一切何なんだ。あれを毎晩とかほんと勘弁してほしい。もう朝11時を過ぎ、日も高く昇っているというのに体が重くて仕方ない。俺はベッドから這うようにもそもそと机に向かいパソコンを立ち上げた。

とりあえずは新しい掲示板が出来たらしいのでその確認。昨日の騒動で生き残ったメンバーはみんな無事で、さらにサイトさんが先頭に立ってこれからの対策についても話し合われている。あの人もとうとう本気になってるっぽいな。

しかし、早くもどうやって奴らに対抗するかで話が煮詰まっている。それもそのはず、俺達を襲って来た奴らはその姿形すら分からないのだ。これまでに判明している事はファイター、アーチャー、ソーサラーがそれぞれ一人以上は確実にいるってことくらいか。こちらから討って出るにしても、どうやって敵を見つけ出せばいいの

やら。

サイト「そこをまず何とかしよう。まずは奴らの正体、詳しい数、居場所を洗い出すところから始める。昨日ギルドの偉い人と協力を取りつけた。向こうの人達も犯人探しを全面的にバックアップしてくれるらしい」

そいつは凄いな。しかも多くがゲームの中のキャラクターだから、死ぬ云々はあまり気にしないでいいわけか。酷い話ではあるが心強い。

サイト「詳しいことは今晚向こうの世界に行ってからにしよう。昼間はキャラクターのレベルアップに努めたほうがいい」

元々仲間内でも最強クラスだった人だけど、昨日の一件でとうとうキレたらしいな。A s e l i aさん曰く「アイツは頭もかなりいい」らしいから、本気を出したというのなら非常に頼もしい存在だ。つーことで掲示板はログだけ残して早々に解散。

早速ゲームの公式を見てみたら……この有り様。

「『特殊クエスト達成者が早くも決定!』……だって?」

あー、あの賞金一千万とかいうやつ? そんなこともあったな、そーいや。

こちらら最近それどころじゃなかったから、スルーしまくってたが。単にあの現象へ多くの人を巻き込むための釣りのようなものだと思っていただけ…… 思わぬ展開だ。

ん？　しかし、それだとプレイヤーは激減するんじゃないのか？
今のゲーム登録者数は3万ちょっと。その多くは賞金目当てで始めた奴らばかりだ。その賞金云々の話が出てから今日で一週間。期限はちょうど来週だったはずだから、まだその半分しか経っていないわけだ。ヒントっぽいを出したり、経験値アップキャンペーンとか散々なことをやっていて、いきなり打ち止め？　一体何のこっちゃ。

とりあえず麦茶を飲んで頭を冷やそう。あと冷蔵庫に朝食っぽいのは……魚肉ソーセージくらいか。飯は基本的に学食頼みだから仕方なし。日曜は昼しか開いてないから、今日は帰りにスーパーにも寄らんな。あーあ、しかもソーセージは賞味期限切れてるし。…大丈夫だ、加工食品の上未開封だし。問題なからう。

軽く日常に戻って、再び思考モードへ。

んーと、俺含めて大半の人はこの騒動の黒幕はゲームの製作者だと思っていた。それが最も自然だし、色々と辻褄が合うからね。方法や動機は良く分からない。方法はスルー推奨として、問題は動機の方だ。

考えうる動機として、向こうの世界で何かをして欲しいってのがまず一つ。でも、世界を救うとか言う類は違うだろうな。あっちの世界は魔王の復活で危機に瀕しているとかそんな切羽詰まったものじゃないし。モンスターはいるものの町の方はごくごく平和だ。第一世界を救ってほしいなら何か一言言うはずだろう。

となると、次に考えられるのは現実混乱を起こして欲しいってことか。ちょうど今の状況だな。現状ではこれが一番可能性高いと思っていたんだが、この一件で相手側の考えが益々分からなくなっ

てきた。混乱を起こして欲しいのなら何故人の取り込みを止めるんだ？ 最初はあれだけ人の誘致に熱心だった癖に。わからん。

今確実に言えることは、新規の精神トリップ者はほぼ考えなくていいということ。味方も増えないが敵も増えないだろう。レベルも低いから戦力としてもあまり考えなくていい。とりあえずは今いる人間の中での戦いになりそうだ。

そして最後に考えられる可能性が、この現象が人為的なものでないということ。所謂バグって言う奴。そういったラノベも結構あるからありうる話ではあるが……それだったら一番平和的に終わらせられるんだろうけど。今殺しをやっている奴らを止めれば済む話だし。人間の黒幕がいたとしたら一難去って、って感じだもんな。

で？ 賞金獲得者は……「クレッセント」？ 聞いた事無い人だな。少なくともうちのメンバーじゃない。まあ、その他の人間も沢山いるだろうし。俺達を襲ってきている奴らの一員かもしれない。もしかしたら製作側が適当にでっち上げたキャラかもしれないし。頭の片隅に入れて置く程度に留めよう。

……学食は昼2時まで開いている筈だし、今から軽く数時間程レベル上げでもやっておくか。備えておくことに越したことはない。新しい魔法ももっと何か便利そうなのが欲しいな。

まるちー「あーシエルさん、おひさー」

うわぁ、これまた本当に懐かしい人が来たよ（番外3でもスルーされてるし）。それだけここ数日が濃すぎたというわけか。

まるちー「今日は休日だからやっとログイン出来たんだけど、YASUさんやPon太さんがいないのも珍しいな。つか全体的に人が減ったような」

シエル「やっぱり賞金獲得者が決まったというのもあるんでしょうね」

この人にPon太さんのことは…… 伝えない方がいいかな？ レベルも最後に見た時から全然上がってないようだし、このまま何も知らない方がいいだろう。

まるちー「そうそう、ちょうどさっきその賞金獲得した人見たんだよ！」

シエル「クレッセントさんって言う人ですか？」

まるちー「うん。滅茶苦茶質問攻めにあってたよ」

実在したのか。このゲームは他プレイヤーとの名前の重複が出来ないようになってるし、複数のアカウント所持もほぼ不可能。作れるキャラも今のところ一人のみだ。

シエル「今どこにいるかわかりますか？」

まるちー「いや、もう一時間以上も前の話だから」

駄目か。凄く気になるんだが。

シエル「じゃあ特徴とか覚えてます？」

まるちー「女のファイターってくらいか？　アバターは色白の金髪で装備はシルバーメイルってとこかなあ」

ううむ。そんなの沢山いそうだしなあ。

シエル「レベルはどのくらいでした？」

まるちー「そうだ、レベルがたったの25だったんだよ。周りの人がみんな悔しがっててさ」

え……？　違う？　取り込まれた人じゃない？

まるちー「シエルさんだってレベル43もあるのに……本当に運と時間があれば誰でもゲット出来たんだな。まあ、ヤラセかもしれないけどさ」

シエル「本当にその人が賞金獲得者なんですか？」

俺は先程のことを忘れてつい疑ってしまう。

まるちー「本当っぽかったよ。オープンチャットでずっと話してたしさ。その『A・R・クリスタル』とやらも見せて貰えたから」

本当……か？　製作者が作った架空のプレイヤーだという可能性もまだ捨てきれないが。

まるちー「やっぱりちょっと悔しいか？　賞金目当てでないとはいえ、そんだけやりこんでたんならさ」

シエル「まあ、少しは。いや、結構かも」

事情を知らない人には軽く冗談で返しておこう。

まるちー「でも、性根悪い奴はまだ諦めてないみたいでさ。そいつを必死にクエストに誘ってんだ」

シエル「何ですか？」

まるちー「このゲーム、死亡表示の時はその人のアイテムパくれるだろ？ プレイヤーキラーやろうとしてるの見え見えでさ」

シエル「あぁー」

まるちー「まあ本人もその所分かってるようでさ。ちゃんと断ってたよ」

シエル「そりゃそうですよ。いくら何でも物騒すぎます」

まるちー「いや、周りの奴が言うには元々そういう事前提になってるっばいぜ。その『A・R・クリスタル』のアイテム説明がまた笑えてさ。一定のモンスターを倒し続けないと持ち主の元を離れる、だって」

シエル「マジですか……」

まるちー「金持ちになるのも考えものだな。多分こんなに早く見つかったのも、俺達にデスゲームでもやらせるつもりじゃないのか？

運営マジ鬼畜（笑）」

当然その人はプレイヤーキラーを恐れて、今までの仲間同士でダ

ンジョンに挑むだろう。それだけでも気が気でないだろうに。そういや、他人になり済ませるアイテムがあったな。これを想定してのものか？ ……いや、今はそれよりもっと簡単に相手を潰せる方法があるんだ。流石に金目当てであんなことをして欲しくないものだが。

それよりも妙だ。製作者が黒幕だとしたら何故今更そんなことをするんだ？ 金目当てで殺人してねってことか？ これに引っかかる奴は短絡的過ぎやしないだろうか。ゲームの中では別として。

解からない。

無駄に増えた疑問が再び俺の頭を悩ませる。

43話 そんなこともあったような（後書き）

おとなしい回でした。

しかし話が進むにつれてあらすじを変えたくなくなってくる……

44話 前哨戦だけど洒落になってません(前書き)

最近調子がいい時に一気に書く
↓連続投稿ってのが多いですね

44話 前哨戦だけど洒落になってません

「んん……？」

ほったからひんやりとした感触。

これでもう何回目だって感じなのですぐに意識を切り替える。

「お目覚めですか？ シエルさん」

ここはいつものモナドの酒場。そういえば俺がこの世界に来る時はいつもここで目覚めている気がする。ま、そんなこと今更か。そして今日は目の前にゲーム世界のまるちーさん。

「いや、最近どうも眠くて……疲れているんですかね？」

「何やらそちらも色々大変そうですね。先日のモンスターの
大群の時も先頭で戦ってたんでしょう？」

あれ？ そういう設定は引き継いでるの？

「そういえばまるちーさんはあの時どこにいたんですか？」

「私もちゃんと言いましたよ。最前線からは離れていたのだから
のも無理はないでしょうけど……」

まるちーさんは苦笑いする。こんな細腕の少女に前線を任せた事を、少し複雑に思っているのだろうか。俺だったら思う。しかし、こっちの方のまるちーさんが死んだらどうなるんだろう。中の方は

間違はなく飛ばされてるにしても、精神の入っていないこのキャラが死んだ時は？　それだったらもっと死人増えているかな？

「しかし最近には本当に物騒になりましたね……　Pon太さんは殺害されるし、その犯人がYASUさんだって言うじゃないですか。私も最初は耳を疑いましたよ」

「あ、それも知ってるんですか……」

「ギルドでは有名な話ですよ。でもシエルさんがYASUさんを擁護しているってことを聞いて……感動しましたよ。真犯人、捕まえるつもりなんですよ？」

まるちーさんは俺をまるでヒーロー（この場合はヒロイン）の如く羨望の眼差しで覗く。

「はい、捕まえることは出来なくても彼が無実だと言う事は証明したいです」

「いやゝ　その歳で！　女の子なのに！　格好いいなあゝ！　……はあ」

何だかそんな顔されると、こっちも心が痛くなってきたな。ちよつとこの体を濫用し過ぎたか。

「でも、申し訳ないですがまるちーさんの手は借りられません。今回はギルド内部に裏切り者がいるかもってことで、お……私らの中でもかなりピリピリしてますから」

「まあ、足手まといにしかない事は承知しています。……でも

協力してほしい時はいつでも言ってください」

まるちーさんは力強く自分の胸を叩く。大人の体面を守るのって難しそうだ。

「ありがとうございます。それでは、私はこれから……」

「ええ、分かってます。お氣をつけて」

……さて、行くとするか。

人気の少ない昼の酒場を出ると、眩しい日差しに出迎えられる。しかし、人々の顔は重々しい。皆俺の姿を遠目にじろじろと見ており、こちらが視線を合わせようとするすぐに顔を逸らす。軽く見渡してみたが、冒険者の姿はほとんどない。昼間はクエストをやっているとはいえ、この少なさは異常だ。ま、外に出てもこの扱いなら当然だわな。まあ、これはこれでいいか。堂々と道の真ん中を歩こう。このほうが安全だしな。

……あ、やっぱ前言撤回。危険だわこれ。

モーセの奇跡の如く人の流れが裂けて行き、前方からこちらの姿が丸見えだ。例のアーチャーにいつ撃たれてもおかしくないぞ。加えて以前、チャック全開で町を歩いていた時の事を思い出す。あれは恥ずかしいってもんじゃなかった。いかなあ、危険な上にトラウマの再来。やっぱ影を歩こう。道の真ん中を闊歩するってDQNとか色々痛い人のやることだわ、やっぱ。

「シエルさん？　ちょうどよかった」

後ろから爽やかかつ若々しい声で呼び止められる。声の主は、サイト……さん。

「サイトさん……？　どうしてこんなところに？」

「ああ、ギルドに寄っていたんだ。今から宿屋に戻るところだよ」

「単独行動は危険ですよ？　こっちに来たばかりだしとしても」

「それが結構大丈夫になったんだ」

サイトさんはこちらに近寄り小声で話す。

「まだ気づいてはいないだろうけど、町の人達に紛れてギルドの人達が見張ってくれている。そして、そういう情報も流している。奴らも迂闊に手は出せないだろうさ」

「へえ……」

「まあ警戒しとくのにこしたことはないけどね。早く宿屋に戻ろう」

実は結構なところ不安だったんだ。ここでこの人と合流出来たのは心強い……

俺達は出来るだけ人通りの多い通りを選んで宿屋に向かうようにしていた。最短距離でこそはないがそれが一番安全だからだ。だが、宿屋まで後500メートルくらいとなってからのここからの通りは少し事情が違う。

「……ん？ シエルさん？ そっちの通りは危険だ、こっちの方が人が多い」

「いや、そっちだと開け過ぎているんです。相手には例のアーチャーがいる。プリーストの人がいない今、そっちを歩くのはかえって危険です」

俺が選んだのは横幅5メートル程度の細い通り。ここには金持ちの人が住んでいるのか高い壁が続いており、さらに突き当たりの見通しも良い。それでいて通る人もいないわけではない。敵の攻撃を警戒するのであればこっちの方が安全……俺はそう思った。

「あそこの角を曲がれば宿屋の通りに着くはずです」

「なるほど」

同意を貰えたようで、俺達はその道を通り何事も無く再び開けた通りに入る。通りにいた人々は路地から出た俺達を見た瞬間そくさとその場を離れる。だが、一部そうでない者もいた。

「門番か……彼らは流石にそこを動くわけにはいかないからね」

そう、細い道から出ると再び金持ちの屋敷らしき家がそこにあったのだ。そしてその門の前には、屈強な男が2人。いや、中にもう一人見えるな。彼らは俺達の事を鋭い目つきで睨みつけるかのように見ていた。

「サイトさん……一つ尋ねたいことがあるんですが……」

「どうしたんだ？」

「あの、波動の式って何て言いましたっけ……あのシ、シュ……シヤイニング……じゃなかった……」

「何で今になってそんなことを!？」

「こっちに来てから『波動』って単語を聞いてずっとモヤモヤしてたんです! 確かサイトさん、理系の大学生でしたよね?」

「あ、ああ。だけど……ええっと、VⅡなんちゃらって奴だっけ?」

「い、いえ! 違います! ちゃんとした名前のつく奴! シ! ?
あ、いやスだっけ? とにかくサ行から始まるもの! !」

「え、ええっと……習ったような記憶もあるけど。使わなかったからなあ……俺、生物系だから」

「し、シ…… シュ、シュレ? そうだ! シュレディンガー方程式!」

「ああ、そういうのもあったな。すっかり忘れてたよ…… って今はそれどころじゃ!」

「いやー思い出せてスッキリです」

気が付くと前の門番二人がこちらの事を凄い目つきで見ている。中からも何人か人が出てきたようだし。大騒ぎしたせいで遠くからの人の視線もちらほら。

「シエルさん、早く行こう」

うん、これは確かに結構恥ずかしいな。俺も顔を見られないように帽子で前を隠す。

「はい……生物系ってシュレディンガーとか全然使わないんですね……」

「ああ、久しぶりに聞いた言葉だよ」

そして、俺は振り向きざまにファイヤーウォールを放った。

「……ん、な、わけねえだろおーっ!!」

溜めは十分とは言えないが、広範囲を焼く必要はない。人一人、『表面』でも焼ければ十分！俺の後ろにいた人間は火だるまになりその場をよろめく。当然の如く周囲は大パニックになり、後ろの門番たちも戦闘態勢に入るのがもう音だけで分かる。だが、俺は敢えてその門番たちに近づく。

「御安心を。俺は冒険者ギルドに登録しているソーサラー、シエルです。一般人をあまり巻き込みたくないんで……ほら、アイツを見てくだ」

事情を説明する言葉を言い終える前に、凄まじい殺気のようなものを感じて俺は思わず右方に飛び込んだ。微かな呻き声が聞こえたと思ったら、俺の近くにいた門番二人の上半身と下半身が綺麗に分

断されていた。周囲の悲鳴が更に大きくなる。

「……つく！ 手段くらい選べよ！」

目の前に立っている男は左手で顔を隠しながらも、憎悪の表情がもう分かりだった。だが、サイトさんでないことは間違いない。白銀の鎧に身を包み、神秘的な輝きを持つ銀髪の男……って、あれ？ 前にも見たことがあるような。右手に握られた何だか凄い魔力を感じる長剣には赤黒い血液が垂れている。

「……言つとくけど、偽物だってことは最初に会った時から気づいていたからな？ さっきの質問はあんたの知力を測るためのものさ。しかし、シュレディンガーの波動方程式を知らないようじゃ、文系もしくは高校生以下か？」

嘘だけど。これは確証を得るためのもの。人からかなり頭がいいって言われているくらいの大学生が、理系だと言い張り、あれだけヒントを言ってもシュレディンガーが出て来ないなんてありえないからだ。生物系だろうと大学一年で習う程度の単語だ。今更だが俺の従兄が生物系なのよね。

まあ一応、初めから疑っていたのは本当なんだが。あの人が単独行動なんてするはずないし、人の死にあれだけ敏感に反応してたのに、見張りがいるから心配しなくて大丈夫なんて言葉が出るはずもない。

「貴様……！！！」

うわ、すっごい怒ってる。

「いいのか？ これだけ人の目のある所で。もう既に2人殺っちま

っているから今更か？」

構わず目の前の男はこちらに突っ込んで来る。俺は軽く後ろに下がりがつつ、フレイムレーザーラピッドで応戦。ひとまずは距離を取る！

「効かんっ！」

うそ、そんなのあり？ レーザーは尽く銀の鎧に弾かれ、こちらの足元に飛んでくる！

「……ってえ？」

今度は下段から斬り上げられた剣をまたもや俺は間一髪でかわす。体の回転ですぐに体勢を整えられたが、男は今度はにやにや笑いだしてこちらに剣を向けた。

「どうした？ さっきの余裕は？ 俺の正体を格好良く見破ったまではないがそこから先を考えていなかったようだな」

まったく、どうせ宿屋に辿りつく前に俺を始末しようって魂胆だったくせに。本物のサイトさんがいるだろうから変装は長く保たないはずだしな。隙を作る、人の目がありかつ魔法を安全に叩きこむだけのスペースがある、周りに強そうな人がいる、こんな状況を作るのにこっちは必死に頭絞ってたんだ。

「その変装はアサシンスーツって奴か。Pon太さんの時もそれを使ったんだな？」

「答える必要はない！」

再び男は剣を構えて向かって来る。

「ち……！ ファイヤーウォール！」

「効かないって！」

男は余裕の面持ちで剣で炎を尻ぎ払う。少なくともあの鎧がある以上、こちらの魔法は効かない。露出している顔を狙えば倒せるかもしれないが、向こうもそんな隙を与えてくれないだろう。周りに人間がいるのなら少しは躊躇してくれると思ったが、思い通りにはいかないようだ。なら、ここで取るべき行動は一つ！

「死っ……！ んっ！？」

おそらく男は一瞬泡を食ったことだろう。炎の壁の先にいるはずの、恐怖の表情に満ちた俺の姿がないことを。それもそのはず。俺はファイヤーウォールを撃って、前に突っ込んだ。魔法が効かない事は分かり切っているが、目くらましくらいにはなる。奴が自信たっぷりに炎を斬り裂いた時、俺は奴の足元をそそくさと駆けていたのだ。この小柄な少女の体も幸いした。正直、まさか炎を斬って来るとは思わなかったので、切っ先が少し体をかすめちゃったけど。

「ちっ！ このっ！」

だが、向こうもすぐに気づいたようで、こちらが振り向いた瞬間視線が合ってしまう。この体じゃ普通に逃げてもすぐに追いつかれるか……。それに出来るだけ周囲の人を巻き込みたくない。とりあえずは今来た道を戻ろう。出来るだけ人通りを少なく……。ああ、でもその先はどうしよう。

「逃がすか！」

男が剣を地面に叩きつけながら斬り上げると、その衝撃波が凄まじい音を立てながら俺の背後に襲いかかって来る。あー サイトさんやA s e l i aさんも使ってましたね、ゲーム中で！ 俺は自分の足を信じて全力疾走し、角を曲がり飛ぶ。わずか一拍遅れて、レンガの壁の碎け散る音が体全体に流れて来た。

「つてえ……」

軽く足を擦りむいた程度だが、このまま走り続けるのは少し酷だな。次は、どうする？ 相手はそのまま、この角を追って来るか。それとも先回りして来るか。いやいや、家を乗り越えて来るか……家ごと今の衝撃波でふっ飛ばしてきたらお終いだな。だが確実に言えるのは…… 今の俺の姿は相手に見えていない。ならば……！

俺は数歩下がりが角側に向かって魔法陣を描く（念じれば勝手に手が動く）。そして少し離れて今度は反対側。そして俺の足元。もちろん上を注意しながら。

ープロミネンスマイン。

使いづらくはあるが、威力は折り紙つきのはずだ。あの鎧に対してどれだけ喰らわせられるかは分からないが、足止めくらいにはなるだろう。敵は…… まだ来ないか。この調子だと先回りか？ いやいや、上から来る可能性だってある。もしかしたら中を突き進んで来たりして。……とにかく一か八かの賭けだ。

……心臓が、跳ね上がりそうだ。命を掛けた戦いは何度もやって来ているがどうにも慣れない。慣れっこない。俺はやはりただの一般人だということか。頭だけは働くようになってるが、それにどうも体が付いていかないようだ。そりゃこのいたいけな（略）。

カツ…… カツ……

足音！？ 俺が逃げて来た方角からだ。それにしてはゆっくりだ。余裕？ いや、あれだけ喰わされといてそれはないだろう。ともかく相手がそちら側から来る事は…… いやいや、もしかして囹かもとにかく、足音の聞こえる方向を重点的に全方位に気をつける！

カツ…… カツ…… カツ…… カツ……

足音がだんだん近づいて来る。そして――

「ほう、待ち構えていたのか」

最後に奴は瞬時に角側に身を現した。俺はわざとらしく魔法を撃つポーズを取り、それが間に合わなかったことに少し焦りを覚えている感じの表情をする。

「それとも先回りするのを見越してやり過ぎつもりだったのか」

奴はこちらに踏み出す。……よし、もっとこい。こちらもビビっているかのように後ずさりする。軽くフレイムレーザーを撃ってみ

たり。もちろんわざと外れるようにね。

「だが、そんな子供だましに引っかかる……！」

男は俺の体まであと10mという所で、剣を振りかぶる。そして地面を蹴り……！

「お前だ！」

俺は地雷の爆風を凌ぐために、体を屈める！

………！

………！

………

あれ？

跳んで………来ない！？

「アッハハハハハ！」

その場から全く動いていない男は急に甲高い声で笑いだす。そして自らの剣先でマインの起爆範囲ギリギリの地面をちょんちょんと小突いた。

「ここかぁ！？ この辺に何か仕掛けんだらお！？ 分かって

るんだよお！ ソーサラーの設置技といえば……プロミネンスマインだったっけかあ？ それを喰らうと危なかったかもなあ！？」

あ………！
ば………！

「それとお前の足元とその後ろ10m先にも仕掛けてるな？ 誰がそんな子供だましに引っかかるってんだ」

な、何で………！？ どこから覗かれてた！？ この辺に鏡のようなものは無いはずだし………！ 只でさえ見通しも悪いのに………！

「それとお前、さっきはシュレなんとかの方程式とやらを自慢げに語ってたがよ………」

男は横に跳躍して、家の壁に飛び乗る。そして起爆範囲をかわして………射程距離へ。

「自分しか知らないと思ってる知識を自慢たつぷりに話す奴ってのが一番知恵遅れのカキなんだよっ！ んなもん社会に出りゃあ関係ねえ！」

シュレディンガーは常識だろうが！ 理系大学生なら知らない方が恥ずかしいっての！

俺は思わず後ろに飛びのくが、無理な体勢で飛んだため、着地できずに尻もちをつく。

「おっと危ない。もう少しで起爆範囲だったな」

男はわざとらしく剣を摩る。そして先程と同じように横の壁に飛

び乗りマインの起爆範囲をかわした。……つか、空中通っても起爆する事まで知ってんかよ。

「はは、あの掲示板もこういう時には役に立つな」

……見てやがったか。完全な墓穴。まさか自分の書いた情報が仇になるとは……！

「もう策は尽きたようだな……」

男の表情が歪み、一層怪しい物になる。

あ、ヤバイ。これ、ヤバいって。

こいつ、本当に殺る顔、だ。

男がゆっくり剣を振り上げる。

駄目だ。応戦しないと。少しでも。時間を。

あ、蛇に睨まれた蛙ってこんな状態……？

「ヒャアッ！」

男の振り下ろす剣がやけにスローモーションに思えた。

あ、死ぬ。終わった。

人が死ぬ寸前、こんなにもあっさりした感情になるなんて。いや、そういう死に方は寧ろ勘弁してほしかった。

でも、もう、

遅い。

ガキインッ！

耳の奥に強烈な金属音が入って来る。そして体が浮かぶ感覚。あ、これ幽体離脱？

……でもない？

辺りは……煙？

……つか、目え痛え！

「じっとしてろよ！」

不意に別の男の声が近くから聞こえて来る。
これは……この声は！

俺の体が動いている？ 宙に浮いている？ いや、誰かに抱えられている！

「くっそ……！ この煙は……？ ゴホッ！ アルク！ 追え！
ゴホッゴホッ！」

さっきの男の声が微かに聞こえる。追え……アルク？

俺は赤ん坊のように抱えられたまま、身を任せる。目もさっきの煙が染みて開けられないし。どのくらいの時間そんな状態だったのか分からないが、やがて頬に風が当たらなくなったかと思うと、尻

から地面に叩きつけられたような衝撃が伝わる。

「てて……」

「まったく、危ないところだったな」

催涙作用もあるっぽい煙に晒されたせいで、視界は涙で滲みまくっていた。目の前にいる男の姿はぼんやりとだが、はっきりと分かる。

「Gillyさん……!」

「まあ、これでお互い探す手間が省けたわけだ」

44話 前哨戦だけど洒落になってません(後書き)

とりあえずは決まった！

（・・・）

45話 信頼という名の賭けを（前書き）

自分でもこの更新速度は不安になってくる（色々な意味で）

45話 信頼という名の賭けを

町の裏路地から再び移動し、Gillyさんに案内された場所は小さな居酒屋だった。

「さて…… ここなら大丈夫だろう」

「大丈夫なんですか？」

「ああ、この居酒屋は冒険者は全くと言っていいほど利用しない。完全に一般市民用だからな」

たしかに奥まった道の途中にある、ある意味で隠れ家的（笑）なひなびた店だ。大半が木製造りの店内で、座席もカウンター6席に2人用のテーブルが2つあるのみ。つい外見からじゃ店ってことすら分らない。他の客が俺達の事をじろじろと見ているが、Gillyさんは気にするな、とだけ言った。

注文を取りに来た老いぼれた店主から武器を預からせて欲しいと頼まれたので、とりあえずウィザードロッドを渡す。ぶっちゃけこれ無くても魔法は撃てるんだが、一応周りの人はそれで安心してくれたようだ。Gillyさんは割と常連みたいだし、俺も少女の身なりだからってのもあるのだろう。多分。

「さて、ようやくお前の所も色々やる気になってくれたみたいだな」

「その分だと、あんましこちらの説明の必要はないですね」

「ああ、現状では正しい判断だと思う。こっちの世界で凄い力を持つていたとしても中身は所詮素人……同じ条件なら数を揃えた方が

勝つのが道理だ」

うーむ、こちらの判断はGillyさんのお墨付きを貰えたか。

「ただ、油断はしないようにな。お前らはただ戦いに勝つことだけが目的で無いはずだ」

「えっと……」

「かつ犠牲を出さないこと、だろ？」

珍しい。いや、この人の事をよく知っているわけじゃないんだけど。たしかに数で押し切れれば、敵には勝利することが出来るだろう。だが、こちらの犠牲を全く出さない事となったら話は別。追い詰められた側はどんな手段を取って来るか分からない。……さっきのよう。

「Gillyさんからアサシンスーツの話聞いていたおかげで命拾いしたようなもんですよ。おかげで相手が完璧な変装をして近づいて来るっていう想定が頭の中にあった」

逆にYASUさんを犯人でないと信じていられるのもそのためだ。

「数を相手にするには頭を相手の人数分以上働かせなくちゃいけない。だが今までの話を聞く限り、敵さん方にはそこまで優秀といえる奴はいなさそうだ」

「え？」

「もしも俺だったらもっと上手くやってるってことだ。現に互いの

素性も分からない奴が集まってるんだろ？　だったらもっと疑心暗鬼を掻き立てるような手段に出るけどな」

疑心暗鬼。

集団で行動するに当たってこれほど怖いものは無い。ちっぽけな疑惑から、やがては内部崩壊まで引き起こす。まるで蟻がダムを破壊するかの如く。最も恐れるべきはずの『武器』。

今になって考えれば敵も最善の策を取って来ているわけではないのだ。寧ろ稚拙さが目立つ。れんちえふさんの殺害だって、脅しのつもりだったはずが町中の人の警戒を招いてしまい、返って闇討ちをやり難くしている。そう考えるとPon太さんの件も、突発的な殺害……。その可能性が濃厚に出て来る。そう、あの時点で彼女を殺す理由なんて無かったはずだ。あの場を逃げ出した彼女達が掲示板メンバーに入ると確定していた訳でも無し。アサシンスーツだって数に限りがあるはずだ。内部崩壊を狙うなら、俺達掲示板メンバーの誰かに変装した方が圧倒的に効率がいいはず。

にもかかわらず、Pon太さんを殺害したのは……。そう、彼女が現実でマスコミと繋がっていると知ったから。その情報を聞いたのは宿屋に帰ってからだとYASUさんが言っていたし、それを聞いて急遽YASUさんに化けた、というのならどうか。だからあんな風にアリバイ云々を考慮せずに完璧な変装のみのトリックしか使えなかった。敵は内部にもいる、そう印象付けたかったのだろうが……。YASUさんはあっさりと捕まってしまった。

これで彼が容疑者から外れ、俺以外彼のことをほとんど知らないメンバー達は幸運にも内部の心配をほとんどしなくて済んだ。多分それを受けて俺達を力づくで一気に始末しようとしたのが、昨日の

モンスターの大群だろう。だが、別動隊の予想外の働きによってその目論見も失敗に終わった。そして逆に、少なくともその戦いに参加した者は信用できると、俺達の信頼は深まってしまいう羽目に。だから、今度はサイトさんに変装して俺を殺害しよう……

……何だ？ 繋がる。相手の力を『侮る』と、話が面白いくらいに繋がるぞ！

「過剰なリスクの想定がかえって逆効果であるように…… 相手方を大きく捉え過ぎると見えなくなる事だってあるってことさ」

警戒することに越したことは無いけどな、と最後に付け加えると、Gillyさんは運ばれてきたビールのようなものをぐいっと口に入れる。

「見えない敵ってのはそれだけで恐怖だ。だが、おそらく敵さんの武器は『それだけ』。ただ、お前達がそれに対して過剰反応していた節があったのさ。だが、それさえ突破すれば、自ずと光明が見えて来る。お前さん達のリーダーはそれに気づいたのかもな」

サイトさんのことを言っているのだろうか。彼も言っていたな。

「奴らは焦ってるんじゃないのか？」と。彼は本気で死の痛みを味わったことで、恐怖心を克服したのかもしれない。どこぞやのスタンド使いの如く。そう、全ての闇の根底にあるのは、恐怖。それさえ無くせば……

「俺からのアドバイスはここまでだ。後は自分たちで頑張れよ」

「って、そこまでなんですか？」

「当たり前だ、俺は戦闘に関しては全く役に立たん」

ここまで説得力のない謙遜も珍しい。

「さて、ここからが俺の本題だ」

「かなり重要な話って言っていましたね。今度はどんなネタですか？」

「いや……簡単に言うとな俺の『頼み』でもある」

頼み？ 何だか今日は色々珍しいぞ？

「このゲームのプレイヤーに何人かのデバッガーが紛れている事は知ってるな？」

え？ 知ってるな？ って。まだ、こっちは疑惑の段階なんですけど……でもこの人が言うのだからそうなのだろう。ああ、やっぱりこの人の言う事は無条件に信用しちゃってるな俺。つかGillさんは違うのか？ 寧ろそれが少し意外。

「はい、まあ……それが何か？」

「先日その一人とコンタクトを取ることが出来た。もちろんこっちの世界でな」

「ええ！？ それってつまり……」

この現象の事が……分かる？

「だがただのバイトらしくてな。そいつが言うには少なくともデバ

ツグのバイトにはこんなこと知らされてない、だと」

そう、なのか？　でもそれだとまだ社員は知っている可能性がある
るんだろうけど……

「だが、ちょうどそいつ自身は会社に泊まり込みしているようだな。
俺が頼みこんでこのゲームやその会社の事を色々調べて貰ったわけ
だ。半分ハッキング紛いの事だからかなり洩られたけどな」

「それで？　何か分かったんですか!？」

「ほとんど何も分からなかった……それが回答だな」

……え？

「そいつ自身はプログラミングに関しては素人だし、それに例の賞
金のキャンペーンもどうやら本当臭いらしい。そして製作スタッフ
も根っからのゲーム好きで、このゲームにはかなり力を入れている
ってことくらいか」

「えー それじゃあ振り出しに……」

「店主、悪いが書くものを貰えるか？」

Gillyさんは唐突にそう言うのと、年老いた店主も小さく答え、
裏紙を何枚かとボールペン（この際だから文明の利器には突っ込ま
ない）を渡してくれた。そこへGillyさんが何やら書き込み俺
に無言で渡す。それを俺は恐る恐る覗きこむ。

『だが、ただ一人、会社の社員でこの世界に来ている奴がいる。そ

いつは例のキャンペーンが始まってほどなくして姿を消したらしい。始めはてっきり死んだものかと思っていたが、奴の住所を調べたところ死体なんて見つかっていないうえ、御丁寧に家を引き払っているときている。そしてIPを変えながらちよくちよくゲームにログインしている。しかも会社のコンピュータからではそいつの履歴は見れないらしい。おそらく違法アクセスを続けながら、色々データを改竄しているんだろうな。アルバイトが会社のパソコンに外部からハッキングを仕掛けて初めて気づいたことだ』

おいっ！ これっ、て……！

Gillyさんの顔を見て声が出そうになるが、彼は口の前に人差し指を一本立てるだけ。

さらに紙に文を書き俺に渡す。

『コイツを見つけ出して吐かせれば、製作者が黒幕であるかどうかを知ることが出来る。今の時点でよからぬ事をやっているのはほとんど明白だけだな。そこでだ、もしかしたらお前さんらの相手にそいつがいるかもしれん。だが、出来れば可能な限りそいつは生かして捕えてくれ。おそらくギルドの干渉もあるだろうが、それも避けて俺の前に連れて来て欲しい』

そういうことか！ 奴らとの戦いにおいて不安だった事がある。それはこの戦いが終わってもこの騒動は消えないと言う事。だが、事の真相に近づくことが出来れば……！

俺は前を向いてうんうんと頷き…… そして目の前の人物の顔を見て…… 固まる。

事の…… 真相……？

黒幕……

「……」

「どうした？ シエル？」

「Gillyさん…… 失礼を承知で尋ねます」

「……何だ？」

「いや、書きます」

裏紙をペンを取り、俺は書き込む。先程のGillyさんの文面に関する小さな疑問を。

少し心が震えた。恐怖で。だが俺は、俺自身の……

「ほう……」

Gillyさんが声を洩らす。先程からの真面目な表情が消え、逆に笑みがこぼれていた。

「その答えは……」

そして、返答を、書く。俺に渡す。

「ッー！」

思わず顔が苦くなってしまった。嫌な予感、クリーンヒット。

『製作者を「俺の前に連れて来て欲しい」っていうことに関してですが、それだとGillyさんはみんなの前に姿を現すんですか？他の仲間に会わせてもいいということですね？』

『いや、出来ればお前と犯人だけで来てくれ』

「これはいくら何でも説明欲しいですよ……俺だけで連れ出すって普通に難しそうだし」

「……お前も馬鹿じゃない、か」

「俺が尋ねなかったらどうするつもりだったんですか？まさか（犯人を）横からかつさう、みたいなことをするつもりとかだったんじゃない……」

Gillyさんは頭を抱え何も答えない。まさか凶星？

「事情さえ分かれば尋問することは俺達でも出来ます。出来るんです。だけど、おそらくあなたはそれを一人でやろうとしている。俺にも黙って。その理由を教えてください」

「……」

Gillyさんは答えない。いや、俺の更なる追撃を敢えて待っているかのようにも見えるような。上等だ。なら、乗ってやろうじゃないか。

「Gillyさん……俺は普通の大学生です。何も特徴の無い、本

当に地味な。俺と同じような人間は探せば星の数ほどいる……けど、あなたは、その、普通じゃない」

「……」

「Gillyさん、あなたは一体何者なんですか？」

散々考えた挙句、捻りだした質問は、とても安直だった。

ただ、一点の曇りも無い素直な疑問。

それを、ぶつけてみる。

「答えてくれないと、俺も協力できません。例えば……あなたがその、ゲームのデバッガーだという可能性だって、まだ俺の中では捨て切れてない」

実際のところ今までの行動からしても、ただのゲーム会社の社員とかではないことは分かっている。が、ここは敢えて譲らない。相手側の譲歩を待つのみ。

店内に沈黙が流れる事数十分。俺はGillyさんの顔を美少女の真剣かつ、つぶらな瞳でじっと見続ける。他の客も何事かこちらをじっと見ている。

「……参ったなこりゃ」

流石のGillyさんもうとうとう根負けしたようで、顔を伏せながらも、どこか嬉しそうな口元を覗かせる。

「正直、結構使える駒だと思ってたんだけどな……」

「俺は人間っすよ、一応」

「一応とか言うな、立派な人間だ。ちゃんと自分の頭で物事を判断できる、な」

Gillyさんは酒の御替りを店主に頼む。

「お前も飲むか？」

「未成年っす。現実でも」

「はは、ゆとり教育はどうかと思っていたが、ちゃんと育つ奴もいるんだな」

「単に酒が飲めないだけです…… 飲み会も苦手だし」

俺は例の如く柑橘ジュースを頼む。店主が無駄に気を使って同じジョッキに入れて運んで来てくれたのが何とも。Gillyさんが杯を掲げる。俺も合わせる。

『乾杯』

杯を重ね、お互いグイッと。

……いや、ジュースだからってイッキは無理だって。この体だし。一度に半分も飲めねーよ。つかこれだけ飲んで糖分の摂取量は大丈夫なのか？ 氷も入って無いしさ。

「はぁー ……さて、どうしたらこの俺の事を信用してもらえるかな、まずは」

「みんなの前に姿を晒すのが手っ取り早いと思うんですが…… 頑なにそうしないのは何故です？」

「そりゃあな…… 初めに言っておくが、俺は自分の正体を明かせない。明かすことが出来ない。その理由は…… 多分お前が実際に聞いたら分かると思う」

なーんじゃそりゃ。

「多分聞いたら一生後悔するぞ？ その自信はある。そうだな…… お前のこれからの人生にプライバシーというものが無くなると思っ
つていい」

「どんだけヤバいんすか!？」

「具体的に言うと、お前はこの先一生監視付きで過ごしていく羽目になるということだ。俺の正体を知ることとは、この事件に俺達の組織が絡んでいるということを知ることになる。となるとこっちとしても見逃せないわけだな。お前の安全も含めて、身柄を確保しなきゃならん」

何だよそれ!？ 組織とかおい! どういう脅迫だよ!？ いや、最初に会ったときから只者ではないと思ってたけどさ。行き過ぎだつての! ここまで来ると!

「つーか既にヤバいんじゃないんですか? 既に監視の対象にされている事も……」

「……ギリギリの線だ。今のところはな。このまま大人しく事態が

収まればお前達には一切手を出すつもりはない。もちろんこの事件を口外しないようには頼むがな」

まあ誰も信じてくれないとは思うけど。信じられたら信じられたで、俺達にも殺人の疑惑がかかることだしな。

「でも、何かここまで来るとG i l l yさんが黒幕じゃないかと思えますって、普通」

「……今の内にはつきり言っておくが、その逆だ」

逆？ この場合の逆って……
するとG i l l yさんは何やらスラスラとまた紙に書き始める。

「ん」

「はい」

『明日あたり時間あるか？ 出来れば直接会って話をしたい』

………！？！？！？！？！？

な……え……！？ マジッすか？ つーか大丈夫なの？

「直接で……！ 『向こう』で！？」

「もちろんこれもギリギリの範疇で収めるつもりだ。お前の信用を得るにはこれが手っ取り速そうだと思ったんでな」

いやー そりゃこの匿名の世界の中、現実の姿を晒してくれるのなら、ここまでの情報公開は無いだろうけど。それは俺も同じな訳で…… 信用したいのは向こうも一緒、なんだろうか。いや、彼もそれだけ覚悟を決めているのだろうか。一種の賭け。彼自身も本当に俺が信用できる人物か直接見て確かめようというわけ、か？

「……」

熟考の末、俺は○とだけ書いて返す。

もういい、ここまで来たのなら行けるだけ行ってやろう。

どちらにせよ、危険なのは変わらないのだ。

そしてG i l l yさんが再び何かを書いて渡す。こんな筆談が続く。

『俺は関東にいる。お前はどこに住んでいる？ アバウトでいい』

『俺も関東です』

『よし、東京はすぐにでも来れるか？』

『すぐにつてわけにはいかないですが、一応は半日以内で行ける距離です』

これは一応自分なりに気を使ってみた。俺は横浜在住で東京には

ぶっちゃけかなり近いのだが、住んでいる位置を特定されなくなつたのだ。無駄な努力かも、だけど。

『なら、お台場のクアアイナに午後1時半集合でどうだ?』

お台場か…… 早起きは期待できないがそのくらいなら問題なく行けるな。

っーかクアアイナって何だ?

『ハンバーガーショップだよ』

そらまたマイナーな……まあマックよりは目星をつけやすいだろう。

「決定、だな」

「はい……」

「まさかこんな羽目になるとはな…… お前はもうちょっと頭悪い奴だと思ってたんだよな」

うわ、ひでえよ、Gillyさん。

「でもまあ、ここまで来たら一蓮托生だ。今夜は親睦を深める意味で飲み明かすか!」

「え!?! あ、そーいや、まだサイトさん達と合流していない……」

やべえ、今更思い出した。俺が姿見せなかったらかなり心配するんじゃないか!?

「外はまだ奴らがうろついてるかもしれん…… それにこの隠れ家も知られたくないしな…… 今夜はここでゆっくりして行け」

Gillyさんの言う通り、かもしれない。そもそもここが町のどこかも分からない。自分が今いる位置も知らないで宿屋に向かうとか危険過ぎるな、流石に。

「大丈夫だ、次回はまたいつもの所からスタートする。その時に会いに行けばいいだろう」

……あーそうか、この人掲示板の生存報告までは知らないんだな。まあ、言う必要もないか。

信頼とはある種の駆け引きだ。その人に僅かな疑念が生じた時点で、それは信頼では無くなる。人を信頼すると言う事は、疑うと言う事を捨てなければならぬのだ。人を信じるという事は甘っちょろい言葉でも何でもなく、突き詰めたら賭け事にもなる。

多分このまま足掻いても、事の真相にはいつまでたっても辿りつけない。おそらくこの人だって、俺の協力が無いと都合が悪いのだろう。だから、自分の身を晒すというリスクを負わざるを得なかったのではないか？ 俺はそう考える。故に、思い切って彼を信じてみるとうしよう。裏切られたら……まあ、その時だな。いやいや、早くも疑ってどうするよ俺。

……Gillyさん酒強えーなー 何杯飲む気だ。

45話 信頼という名の賭けを（後書き）

誰をどこまで信じていいのか判らないこの社会に対する、私なりの答えの一つを出してみました。

人を信じてばっかりだと騙されるけど、疑ってばかりだと前に進めない。

バランス感覚なんて生易しい言葉ではなく、思い切ってこいつはギャンブルだ！と捉えれば少しは前に進みやすく……ならないかなあ（笑）

良い事を言う時も覚悟が必要だ（キリッ！）

46話 意外や意外（前書き）

えっちなネタは出来るだけ自重しない方向で。

46話 意外や意外

現実に帰還した俺を待っていたのは、案の定仲間達からの心配と非難の嵐。

彼らにどれだけ事を伝えようか迷っていたが、とりあえずGillyさんの事を除いた一部始終を話す。謎の剣士にいたいけな魔女っ娘が襲われた事は向こうでも話題になっていたみたい。

サイト「プレイヤーキラー用のアサシンスーツ……そんな物まで使ってくるか」

Aselia「話をまとめると、白銀の鎧を着た銀髪の男ファイターか。そして鎧は魔法を弾くからソーサラーは要注意ってわけだな」

×ぽん「そいつの名前とかは？」

シエル「ファイターの方は分かりません。でもあの場にはおそらくもう一人いた。俺が逃げる時に『アルク、追え！』ってその男が言っていたんです」

Aselia「アルクか。そんなアイテムとか用語も無いしな。名前の情報はありがたいぜ」

サイト「そいつの姿は見なかったのか？」

シエル「いえ、全く。あの場には他に人の気配もありませんでしたし。でも、明らかに別の誰かが俺の行動を監視していたみたいです」

A s e l i a 「例のアーチャーじゃないのか？」

サイト「それだと矢で狙った方が手っ取り早い」

くろね子「町の方でも特にアーチャーの警戒のされようは半端じゃないですよ。ずっと見られている上、遠くから石投げつけられますもん」

しかしだからこそ、弓を使わずに警戒に徹していた可能性も……

「うゝゝゝん」

朝起きてからずっと仲間たちとのチャットが続いていたので、いい加減に目を休めたい。椅子に寄っかかり、大きく背を伸ばすと机の上の時計に目がいく。

午前11時ちよい過ぎ…… そろそろ準備するかな……

シエル「すみません。俺はこれから用事があるので。話はまた今夜にしましょう」

サイト「ああ、一応アサシンスーツ対策に相言葉を決めておいてくれ。俺達の分も後でここに載せておくから」

相言葉ね……歯車って言ったらジェットシュウマイって返すみたいな感じでいいのかな。何かみんなからクソワロタとかいうレスが返って来てるけど、まあこれで良しと。

さて服は何を着ていくか。別にデートとかいうわけでもないんだけど。やっぱこういう真面目な話をする場だから、軽く身だしなみ

を整えとかんと。うわー 俺の服って改めて見ると揃いも揃って皺だらけだな。ファッションとか全く興味ないけど、だらしなさや不潔感を相手に与えるのは不味い。アイロンだけでもかけていこう。……うん、こんなもんでいいかな。あとは消臭スプレーで完成つと。

家から横浜駅までチャリでかつ飛ばし、お台場への直通バスに乗り込む。大学生は夏休みとはいえ、世間一般は平日の月曜日。酷い渋滞も特に無く、バスは快調に進む。窓の外に流れて来る住宅街やビル街、街ゆく人をぼんやりと見ながら、俺は今回の騒動について想いをはらせていた。本当にとんだ騒動に巻き込まれたもんだと。現実では裁けない人間を、異世界から裁く。そのための力を唐突に持たされる。しかも複数の人間が。実際にその力を行使した人がある、もう既に何百人という俗に言う悪人が裁かれている。……それは良い事だ。俺はそう思う。奴らにも言うてやれる。お前らのやった事は犯罪だけど……良い事でもあるんだ。

でも、この窓の外の景色を見てみると……思ってたほど世の中は変わっていない。

あいつらは何のために殺人を犯したのだろう。自らの私利私欲もあったのかもしれない。……けど、少しでも、ほんの僅かでも、この世の中を良くしたいって願望もきつとあったはずだ。

だが、世の中は変わらない。この国の人間の多くは、あの連続病死事件を単なるエンターテインメントとしか見ていない。もしも実際に殺人の実行犯が捕まっても「あーあ」くらいにしか思わないだろう。被害者も加害者も他人事。自分は関係ない。そこまで悪い事していいんだから、あいつらに比べたら……って感じで。裁かれるのは悪い人間なんだろ？ だから自分達は安全だ。その他大勢だから安全だ。いつもは自らの個性や人より上抜けた能力を望むくせに、そういう時だけ善良で平凡な一般市民になろうとする。ま、俺も当

事者じゃなかったらそんな風だったかも。

あいつらもそれが分かっているのかもしれない。大量殺人なんてまともな精神の持ち主には出来っこない所業だ。ボタン一つで撃てるミサイルでその惨状を見ないまま何千人もの人間を殺すとかならともかく、一人ひとり手作業で殺さなければならぬ。

一体今までどれだけの断末魔が奴らの耳に届いたのだろうか。もう、そんな物が聞こえなくなるほど、精神がイカれてしまっているのか。俺達を直接殺そうとしている時点でもう御察しくささいってところかな。

携帯でニュースを見ても、政治家の病死は一段落しているみたいで、今の流行りは凶悪少年犯罪者や新興宗教団体の幹部など、か。それでも最盛期の半分近くになっている。悪人なんて探せば腐るほどいるだろうに。本当にもう余裕が無いんだろうな。

お台場の到着を告げるアナウンスが流れる。

2度ほど来た事はあるのだが、どうもここの空気は俺に合わない気がするな。しかし、問題はこれから会う人だ。多分彼は俺達とは比較にならないほど今回の事件について何かを掴んでいる。自分の身を晒しまでして、どこまで教えて貰えるかは分からないが。

そんなことを考えているうちにK U A、A I N Aお台場店に到着。

うーむ、ハンバーガーなんぞマックかロツテかせいぜいモスクラいにしか行ったことないからな。学生には少しお高いが、メニューを見る限りかなり本格的っぽいぞ。

今日はまだ昼飯食っていないだけに、口中から唾が出て来る。店の中もランチタイムのピークが過ぎたせいか、客は4、5人しかおらず、店員も一息ついているという感じである。

しかし、店の前で待ち合わせとしたのはいいが、俺は肝心のGillyさんの容姿を全く知らない。互いに身なりの特徴とかも言っていなかったしな。この時間帯に店の前をうろうろしておけば簡単に見つかると思うてるんだろうけど。

そーいや、現実のGillyさんってどんな人なんだろう……

あれだけネットゲをやりこんでいる時点で容姿云々の期待はあまりしない方がいいんだろうけどさ。考えてみれば歳はおろか、性別だって分からない。いや、組織とかゆとり教育云々とか言っていたから、間違いなく俺よりかは年上だろうか？

ここでラノベとかだったら、実は暇を持て余したお嬢様でしたーとか、IQぶっちぎりの幼女でしたーとかあるんだろうなあ。はは……はあー。止めよう。何だか段々虚しくなってきた。凄い人であるんだろうけど流石にそんな都合の良い展開は……

「あの……もし……」

え……？

こ、こ、これは！？ この甘さは？

女性の声！？

「は、はい！？」

俺の脳内に淡い期待が湧き上がり、声を半分裏返らせつつも、後ろを振り向く。

「あ、あの……まさかとは思うんですけど……あなたがシエルさん……でしょうか？」

「あ……！」

こ……これは……！

ま、まさか……！

160cmにも満たない小柄で華奢な容姿。染めた形跡が見られない、艶のあるなめらかな黒髪。それを際立たせるのは白いレースのカチューシャ。幼さを感じさせるつぶらな瞳に、少しふっくらとした張りのある頬。そして彼女の体を包むのは、まるで天使の羽根の如く重力に逆らう浮遊感を演出する全身フリフリの白いドレス。簡単に言うとかスロリ服！

これが……まさか……そんな……

あーその自信なさそうに左手を柔らく握ったのを口元に当てながら、上目使いにこちらを見る仕草……た、たまんねえ！ つーかすげえ！ 某黄金の指を持つAV男優が言ってたけど、男って本当に惚れた女に対しては勃たないんだな！

これは完全に俺のハートにズギュウーン！ですよ！ いやブッピガン！か？ ともかく、こうも俺の好みにクリティカルヒットしたおにゃの子は初めてだ。いやいや決してゴスロリ少女が好きだとかそう言ったものではなくてですね。惚れた女がたまたまゴスロリ少女だったわけでした。決して、決して、私はそのような道に外れた紳士という名の変態ではなく、あくまでもアブでないノーマルな性癖をですね……！

「や、やっぱり、違いますよね……！　ご、ごめんなさい！」

俺がしばらく彼女に見惚れて何も言えないでいると、少女はとっつても気まずそうに頭を下げ、その場を離れようとする。

「ああー！？　いやいや、ちょっと待って！」

必死に、必死に止める俺。頑張れ俺。

「え……？」

「あーいや、その、ええーつとですね」

何故だ。何故言葉が出ないんだ俺。どんだけ女性に免疫ないんだ。完全に童貞丸出しじゃないか。おかしいよ、向こうの世界では美人さん相手にふつうに立ち回ってたじゃん。幼女の体も散々堪能したから、女の体の扱いにも慣れてる筈だろ！？

俺は軽く深呼吸し、頭を落ち着かせる。何で話すだけでこんなことせにゃならんのだ。

あーもう、いいよ。どうせ、これから沢山おしゃべり出来るんだろうし。後で挽回だ。

「あなたがGillyさんですか？」

「……え？」

現状で出せる可能な限りのいい声で俺はクールかつダンディっぽく少女に問いかける。少女はそれを聞くとしばらくの間、目をぱち

くりさせながらこちらの顔を見つめる。ああーもう、可愛いなあ。
まさか三次元に惚れる日が来ようとは。

「ギ……りー？ 私はマリーですけど……」

……

……

不意に、俺の頭の中に般若心経が流れる。

「え、いや、あの、そんな、え？」

「マリーさん！ こちらです！」

新たな声が聞こえて来た方角には……今度は黒ゴスロリ服の女性
が。ああ、しかもこっちはそんなに可愛い。いかつくて、太っ
てて、あと、あと（略）。

「すみません！ やっぱり人違いだったようです！」

少女はビデオテープの早送りの様な声を上げながら、深々と頭を
下げ、可愛くない方のゴスロリ服の女の元へ足早に向かって行く。

「探したよー 真璃^{マリー}さん」

「ごめんなさい紫恵^{シエル}瑠さん……私ったら本当に方向音痴で……」

そのまま二人のゴスロリ娘はお台場の街並みへと消えて行った。

.....

.....

うん、えーっと……原宿駅前やってほしいな、そういうことは。いや、ビッグサイトも近いし今日は何かイベントでもあるのか？ 帰りにちよっと寄ってみるかな。

しかし……あのマリーちゃんって子はほんと可愛かったな……凄く痛そうだけど、光るものが。いや既に光りまくってます。あれ？ でも、もしかしてもうフラグ無い？ これで終了？

ここでラノベとかだったたら人違いでだったとしても、それが縁で仲良くおしゃべりして交流を深めて段々いい雰囲気になったりして……らぶえっち……

現実残酷だ。三次元はやはり厳しい。

「はぁ…… ま、まあ、あれがGillyさんなわけないか……」

「当たり前だ」

今度は先程の反動もあってやたらと野太く聞こえる声が後ろから響いて来る。うん、やっぱりそうだな。男だな、普通。これが現実。圧倒的現実。

「ええと、Gillyさんで、す……か？」

「お前がシエルか。今度は本物のようだな」

振り向いてその人物の姿を見た瞬間、俺は別の意味で固まる。

「え……？ Gillyさん……ですよね？」

「そうだって言ってるだろう」

ああ……8月も終わりとはいえまだまだ暑いですからね……ア
ロハシャツに短パン、サンダル、それにグラサン。別に全然変な格
好じゃないですよ。寧ろこの店にぴったりのファッションじゃない
ですか、H A H A H A。

でも、突っ込みたいのはそこじゃないんです。あんた自身。まさ
か予想の斜め上。

190は近いタップに、俺より6回りほど広い肩幅。筋骨隆々と
いう言葉がぴったんこ当てはまるその体に、真っ黒な皮膚、おまけ
にスキンヘッド。

つーかむしろ日本人じゃない。黒人？

誰の目から見てもそうだと認識できるほど、完っ壁な外人であっ
た。

46話 意外や意外（後書き）

実はこの20分ほど前に、同じ場所でGillyとゴスロリの方の
紫恵瑠シエルが似たようなやり取りをしていたのはまた別の話。

47話 ようやく話の元を知りました

「このゲームは日本限定だからな。外人がやっていたのは少し意外だったか？」

少しどころじゃないっす。遙か斜め上っす。それにしても凄く日本語ペラペラだな。まるで吹き替えの声優が裏にいるかのようだ。

「詳しい事は中で話そうぜ。昼飯はまだだろう？ 奢ってやるぞ」

「あ、どうも……」

Gillyさんの勧めるがままに俺達はクアアイナの中へと入る。店の中は何ともハワイアンな雰囲気。というかGillyさんの格好が自然すぎる。他の客もカップルに女性グループ3人。ハンバーガーショップなのに女性向けとはこれいかに。

「Gillyはよく来られるんですか？ この店」

「ああ、他の所は性に合わなくてな。ほれ、好きな物頼んでいいんだぞ？」

そうやって彼が指差したメニューを見ると、何やらアボカドバーガーなる物がプッシュされていたので、あまり考えずそのセットにする。

「んじゃ俺はベーコンバーガーのセットに……あと、ローストターキーのサンドを」

……セツトだけでも結構な量な気がするが、この体格だと自然な光景に見えるから不思議だ。むしろこの人、生身の方が向こうの世界の姿より強いんじゃないのか？ 余裕で人の骨へし折れそうなくらいの腕してるし。女性客の多い店だとしても、外人が一人混ざればまるで向こうが場違いだといわんばかりの空気になる……気がする。これで俺のような人種の男が二人だとまた違った雰囲気になっただろう。凄く周りの視線が痛そう。

話の話なので他の客達から少し離れた席に座る。ハンバーガーも出来あがり、まずは本題の前に腹ごしらえと二人してかぶりつく。……うーん、美味しい。普段食ってるハンバーガーのようなジャンキーさが全く感じられない。

「やはりハンバーガーはここにのに限る」

こだわる大人だなあ、Gillyさん。でも食うの早えよ。周りの客たちも最初はこちらをちらちら見て来たけど、すぐに自分たちの会話に戻っているし。これも外人効果ってやつか。

「さて、お前にはどこから話してやろうかな」

そして早くもベーコンバーガーを食い終わったGillyさんが、セツトのポテトをつまみながら話を切り出す。こちらが普段食べ慣れていない巨大なハンバーガーを食うのに悪戦苦闘している姿などお構いなしかの如く。

「Gillyさんの組織とかは怖いからあまり突っ込まないとして……とりあえず、あなたが本当は一体どこまでこの事件について知っているのか教えてくれませんか？」

彼の素性はともかくとして、まずは情報を引き出すことから始めなければ。組織ぐるみでこの事件を扱っているとなれば少なくとも単なる一プレイヤーよりは何か掴んでいる筈だ。

「ん、そーだな……　まずはお前が本気で調べれば見つかるくらいの話から始めるか」

Gillyさんは口直しにコーラを飲んで軽く一息吐く。

「今回の現象……　いや、正しくは大勢の人間が朝眠ったまま病死する連続変死事件と呼んだ方がいいかな。これは今に始まった事ではない」

「今までに同じ事が……　前例があるってことですか!？」

Gillyさんは顎だけで返事をする。

「もちろん日本では初めてだ。だがこれまでにフランス、イギリス、ドイツ、ロシア、アメリカ……　世界8ヶ国で似たような事が起きている」

「ま、本当ですか!？」

インターネットで海外のニュースは良く見るけど、そんな出来事全く見た事聞いた事も無い。いくら何でも総理大臣とか、有名人が死んだらもつと大騒ぎになってもいいはずだが。

「まあお前が知らないのも無理はないさ。ほとんどの国は民間人に多数の死者が出ただけに留まっている。この国のような特定の個人を標的とした殺人はあまり起こっていない」

だが、それだけ変死者が出たならもつとニュースに…… あ、なるわけないか。政界人や有名人が大量に死なない限りは伝える価値はないんだし。この国と同じ死因は病死だとすると、国内のニュースでは取り上げられても海外の人が興味を持つような内容でも無い。大勢の人間が脳梗塞や心臓発作で死んだってニュースなんて、『みなさん健康管理には気をつけましょう』で片づけられるもんな。

「その事件は今でも海外で起こり続けているんですか？」

「いや、止まっている。今はこの国だけだ」

止まっている？　それが日本に来るっている事は…… 伝播？

「事の発端はイギリスで起こった。国内の各地の若者が次々に死んでいき、それに続いて市民も朝眠ったまま病死する事件って感じでな。向こうでも不自然すぎるとちよつとした騒ぎになったが、この騒動が起こってから2週間と少し…… それはピタリと止んだ」

「それ以降似たような事は？」

「一切起こっていない。老人や病人予備軍ならともかく、健康な若者が次々と死んでいくことなんてな」

ってことは……この現象は『止まる』ものなのか？

「次に事が起こったのはその1週間後のフランスだ。市民が朝眠ったまま次々に死んでいくので何事かと思っていたら、案の定その前日に若者が大量に同じ死因で病死していた」

「……」

「そしてまた1週間ほどで止み、その4日後今度は別の国で同様の事件が起こっている」

な、なんじゃそりゃ……

「これが連続変死事件の起こりさ。一部オカルトマニアでは結構話題になっているらしいんだがな。当初は原因なんて突き止めようもなかった。いや、突き止める必要性も感じられなかった」

「でも、Gillyさん達は違うんですね？ 今回の件を『追っている』という事は、既にこれらの事件は何が関与しているか分かっているという事…… ですよ？」

Gillyさんは軽く頷く。

「実はウチのお偉いさんも数人くらい同様に死にしまったからな。コレが人為的に引き起こされているものだったらたまったもんじゃない。だから一応対策本部が作られたのさ。……ま、最初は4、5人ほどの窓際族の寄せ集めだったんだけどな」

窓際族ってまた日本的な…… この人の組織とやらも結構ノルマとかがあったりするのだろうか。やり口から考えても正義の組織とは思えないが、きっとそれなりに大変なのだろう。

「そこでまずは殺された人物の共通点を洗ったんだが、それが全然でな。いきなりのお手上げ状態。もう少し絞ってみようと、事件の

始まりに殺された若者達に重点を置いてみたんだが……」

「まさか……それが、ゲーム？」

気が付くとGillyさんはサンドイッチも平らげていた。ずっと話していたと思っていたのに、この人はいつの間に食ってたんだろう。

「そう、当時のネット上に気になる噂が流れていてな」

「……ゲームの中に入ったとか？」

「その通り。当初は子供じみた冗談だと別に気にしてなかったんだけどな。だが、実際に殺された若者達のパソコンの履歴を調べてみると、共通して死ぬ前日まで同じオンラインゲームに接続していたことがわかった。とりあえず、そのゲームを作った会社のコンピューターや社員を尋問して洗いざらい吐かせたが、何の手がかりを得ることが出来なかった」

「ゲーム会社の人達は何も知らないと？」

「さあ、それもどうかな。真相は分からないままだ。しかし焦点を絞ってみると、各国で起きている事件もあれよあれよと繋がってしまったんだ」

全てゲーム関連…… 誰もが死ぬ前に同じネットゲームをやっている……

「Gillyさん、そのゲームってもしかして……」

「いや、違う。国ごとに全然別のゲームなんだ。アクションにFPS、戦略シュミレーションとジャンルは特に関係ない。ただし、どれも決まって共通点があった」

1. 新作のオンライン（多人数プレイ）ゲームであること。

2. クローズド（人数限定）であること。

3. 何らかの期間が定められている事（キャンペーン、テストプレイなど）

「そんなのいくらでも当てはまるんじゃないですか？ 日本でさえゴロゴロしているのに、ましてや世界規模じゃ」

「最後に4つ目、タイトルに『神』とか『支配者』を暗示させるような言葉が入っている。アカシックドミネーターに至ってはそのまままだな」

マジですか。

「世界中のオンラインゲームの動向を監視するのは骨だったがな。ちょうど日本にそういったものが出ると聞き、向かってみたら……このザマだ。」

Gillyさんは自嘲気味に手の平を上げて笑う。

「実は俺も初めはこんな推理なんか全然信用してなくて、体のいいゲーム休暇気分でこの国に来たんだが。……まあ、これで何かいい

情報でも得られれば、出世レースに参加できるから御の字ではある」

「いやいや命の危険もあるんですよ。何でそんなに余裕なのよ。」

「じゃあまとめると…… Gillyさん達は元々ゲームが原因で大量死が起こっているということだけを知っていて、それがどういう仕組みなのかは全く分からない状態なんですね？」

「ああ、それを調べるのが仕事だ。逃亡した社員を連れて来て欲しいってのも、ゲーム製作者がこの事件にどれだけ関与しているのかを聞き出すためだ。製作者が関与していなくても、出資者とかソフト提供とか色々関連する連中をある程度焙り出せるからな」

さらにそれは一般人にはあまり知られたくない、と。どうもきな臭そうな空気が漂ってくるけど、彼の意図は大体理解出来た。

「それともう一つ質問です」

「何だ？」

「俺とかを使ってゲームの中から調べさせるより、現実世界からその組織の人達を回した方がいいんじゃないんですか？ 逃亡した社員だって……」

「んー それでもいいんだけどな。人員とコストもかかるし、この国は何かとうるさいから。なるべく表沙汰にはしたくないんだ。お前だって自分が殺人犯に疑われるのも嫌だろ？」

「いやいや、人の命がかかっているのに人員とかコストの話されて

も……」

Gillyさんは最後のポテトを口に放り込み、コーラを飲み干す。

「ああ、一応言っておくけどな。俺達はこの国の人間が何人死のうが別に知ったこっちゃない。一連の事件の詳細さえ分かればいい。だからお前らのグループにも参加しない。プレイヤー同士の争いに関与するなんてまっぴら御免だ。死にたくないのは俺も同じだけだな」

「……」

「不満か？」

「当然です」

「気持ちとは分かんなくてもないが勘違いするなよ？　こんなことになった根本の原因はともかく、殺人を犯しているのはお前らの国の人間だ。日本人の一般プレイヤーだ。俺に責任取れとか、助けろとか言われても困る。自分達で起こした問題くらい自分達で何とかしろ」

やっぱり、この人は甘くなかった。

「まあでも、少なくとも協力者であるお前の命くらいはちゃんと助けてやるよ。そこら辺はギブアンドテイクだ。これが世の中つてもんだぜ、学生さん」

「……肝に銘じときます」

とりあえず敵ではない、か。

敵の敵。限りなく味方に近い敵の敵って認識でいいのだろうか。

「俺の事情はこんなもんなんだが、今のお前らはまた別の問題も抱えているだろ？ それに関しては、こちらが正しい情報を与えてやる」

そう言うとGillyさんは、どこからともなく白い紙を取り出して俺の前に差し出す。

「これは？」

「お前にやるよ。まあ見てみなって」

クリップで止められているA4サイズの紙をめくると、なにやらいかにもExcelで作った感じの表のような物が目に入る。えっと、『漆黒の君 Lv 67 ♂ ファイター』……

「昨日の時点でのレベル30以上のプレイヤーのリストだ。高レベル順から並べてある。デバツガーのアルバイトの奴に作ってもらった。人数はかなり多いが、これから同じプレイヤーを警戒するんだったら何かと参考になるだろ」

うおおい…… 三百人は軽く超えてるなあ。ありがたくはあるが向こうの世界には持ち込めないし、全部覚えるのも大変そうだ。

「ああ、それと死んだ人間も勘定に入れてある。誰が死んだかはログイン履歴を見れば大体分かるんだろうけど、流石にそこまでは調べられなかったてさ」

本当だ、伊藤（如月）やPon太さん、れんちえふさんの名前も

まだ残っている。となると実質の人数はもっと減るか。普通にモンスターにやられて死んだ人も結構いそうだし。

上位勢には掲示板メンバーの人達も結構見かけるから、他の高レベル勢に注意ってところか？ だけど、仲間内で一番レベルの高いサイトさんでも4位か……その上に3人も。中身はパンピーだろうし、実戦になると分からないけど。レベル30台が半分以上を占めているため、俺も半分より上ではある。

職業は基本戦闘の四職がほとんど。たまにモノ好きな人も見かけるけど。G i l l yさんとか。シーフでレベル30以上はこの人だけ。あとはクリエイターのミノル？ 以前の煙幕花火とか作っていたのはこの人臭いな。あとは……アルケミストのアルクエイド。型月厨乙って感じだな。しかしこいつ吸血鬼じゃなかったか？ 俺も人の事言えんが。

……ん？ 待てよ。アルク？

「おい、どうした？」

「……殺人グループの一人、発見っす。このアルケミストのアルクエイドって奴。G i l l yさんに助けられた時、あのファイターが『追え！アルク！』って叫んでたし、おそろくは」

「ほー 俺は聞きとれなかったんだけどな。なるほど、注意しておこう。しかしアルケミストか……何を使って来るか分からんな。今度デバッガーの奴に聞いておくよ」

「お願いします」

これは思わぬ収穫だ。となると例のアーチャーとかは……この『雨宮ロキ Lv52』。高レベルの奴と考えると、こいつ辺りが怪しい。昨日のファイターは……最悪この『漆黒の君』か？全然漆黒じゃなかったけど。ココロが闇（病み）属性なのだろうか？ともかくこれは帰って仲間に伝えてやらねば。

「思ってたよりも役立ててもらえそうで何よりだ。それと例の社員は『アレックス』という名前だ。職業はファイターでアバターは男な」

アレックス…… あったあった。レベルは38か、それほど高い方じゃないな。

「了解です。俺の役目はこの社員をGillyさんの前に連れて来る事、ただこれだけでいいんですね？」

「そうだ、それだけでいい。もし何か聞き出せたら、原因が何だとか黒幕が誰だったとかは教えてやれるよ」

「それで話が解決できればいいですけどねー……」

俺はわざと嫌味っぽく言ってみる。向こうがギブアンドテイクと言うのなら仕方ない。

「それと一応言っておくが……」

「この事は他言無用、ですか」

「よく分かってるな」

Gillyさんは最後に口元だけで笑ってみせる。

ふと気が付くと周りの客は既にいなくなっていて、店の中の客は俺達だけになっていた。

「大丈夫だ。誰にも聞かれちゃいない」

警戒どうも。

……今日の話はここまでみたいだな。俺とGillyさんは席を立ち、店を出る。

「Gillyさん、最後にお聞きしたいんですが」

「何だ？」

「この事件、本当に『止まる』んでしょうか？」

Gillyさんの話ではせいぜい2週間程度で死亡者がいなくなると聞いたが、それでも不安はぬぐえない。ゲームをやっている人間が全員死んだとかもないだろうし。

「いつも通りだったら、そのうち自然に止むだろうさ。保証は出来んがな」

「そうですか……」

「次に起こらないようにするのが俺達の仕事だ」

そう言ってGillyさんは反対方向に去っていく。彼は気づいているのかどうか分らないけど、この日本で名前が言えない組織ってのはかなり怪しまれるんですよ。どこの国でも同じだろうけど。きつとよからぬ事も多分に考えているのだろう。……今は彼を味方につける他ないが。

そんな事よりもまずは目の前の問題か。向こうの世界で殺人グループに対抗できるように、シエルのレベル上げをせねば。いや、その前にちよつとビッグサイトの方にも寄りたいかも。折角来たんだし。マリーちゃんもう一回見たい。

47話 ようやく話の元を知りました（後書き）

なんやかんやで間が開いてしまったけど今年最後の更新です。
会話の多い回を書くのは苦手だなあ。

48話 とうもろこしと

今ではもう慣れっこの異世界トリップ。

今更だけど、もうちょっとエフェクトとかつけられないかなあ。寝ている時に気が付いたら異世界って感じでは今一つ雰囲気が出ないし。冗談は置くにしても、この妙にルールじみたものがあるのが割と厄介なのである。いつものスタート地点である酒場を一步外に出れば既に危険領域。宿までは走っても20分以上はかかる。この間は一時も油断することは出来ない。昨日の件もあるし、酒場の外は見張られてると思っていいかも。

「……と、いうわけでまるちーさん。何か良い方法はないですか？」

外に出たら即襲われた。何とかして安全にこの周辺から脱出することは出来ないだろうか。目の前の仲間に簡単な事情を話し、一緒に知恵を絞る。

「んー 変装は難しいんですね。シエルさんは小柄で逆に分かり易いですから」

この少女の体がここに来て裏目に出る。おこちゃま体型の冒険者なんて、そうはいないだろうしな。向こうも特に気を付けていることだろう。

「秘密の通路とかあればよいのですが…… 後は、何か荷物に紛れて外に出るとか？」

あんまり時間もかけてられないし、後者を採用。

酒場のマスターにお願いし、急遽生ごみと共に袋を用意してもらう。

ごみの回収は朝にやるらしいのだが、酒場の店員に変装したまるちーさんがうっかりごみを出し忘れ、慌てて集積所まで向かっているという無駄な設定を作り作戦開始。

「宿屋に近づいたらそこで合図しますので、素早く降りてくださいね」

まるちーさんが引く台車には、俺の入った袋と共に生ごみが二袋。半透明の袋しか駄目だということで、俺の入る袋にも表面に紙類と生ごみを少々混ぜている。宿に着いたらまずは風呂だな。ついでに久々にこの体を堪能したい。Gillyさんの話が本当ならば、この現象は期間限定らしいしな。こんな時にだって？ 知るか！ 戦場の真っ只中でラブシーンをかますカポーに比べたら全然マシだよ（多分）。

くだらん話とはかく、さあ出発。



で、

「なんじゃこりゃあ〜〜！？」

敵の襲撃に合うことなく無事に宿屋に着いたというのに、思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。いや、目の前の事態を正確に述べると、そもそもあるべき場所に宿屋がない。そこのあるのは焼け崩れた瓦礫のみ。一体どういうことなの……

「おっす」

瓦礫の山の上ではA s e l i aさん、×ぼんさん、にいにいさん御一行が何やら作業をしていた。俺は迷わず瓦礫を指差したが、彼らは別段驚いた様子を見せない。

「昼間言わなかったっけ？」

「昨日焼けちゃったんだよ。あ、味方で死人は出てないから大丈夫。一般人は何人か死んじゃったけど」

この人達も段々あっさりとしてきてるなあ。もう今更、火くらいで驚かないってか。

「燃えたって…… 放火ですか？」

「十割がたそうだろうな。先に気が付いて宿を飛び出した客が、片っ端から矢とかフレイムレーザーで撃たれてたし」

「実はこの宿とギルド本部が地下で繋がってて、俺達はそこから脱出したんだ」

「サイトくんがギルドマスターから教えて貰ったんだって」

それはまた御都合主義的な展開でよかったですね。しかし敵さんも、やり方が滅茶苦茶過ぎないか？ モンスターの大群を呼び寄せるわ、俺達が集会所代わりになっている宿を燃やすわ。やっтерことは完全にテロリストじゃないか。なんか死のノートもこんな感じだったような気がする。人殺しを第一の手段とする世直しなんて、結局行き着く先はそこなんですかねえ。

ちなみに今では、ギルド本部の一室が俺達の集合場所らしい。知り合いのメンバーではサイトさんやタミさんらがギルドの人達と今後の対策を話し合ってるんだと。その間この人達は何をしているのかというと……

「瓦礫から宿屋の主人の金庫を堀り出してくれなんて…… またこんな少女の細腕に無茶をさせる……」

「文句言うなー これも住民の信用を得るための奉仕活動の一環だー」

俺は軍手をはめ、せっせと焼跡の瓦礫を除く作業を手伝わされる。実際にギルドマスターのお爺さんが奮闘してくれているおかげで、少なくとも俺達は街の人に信用されているらしい。そして今では俺達を違う意味で見張ってくれているんだと。

「……だけど信用を得るのも大変ですね。社会でもこんなもんなんでしょうか」

「んにゃ、どうしようもない奴が上につくと分からないよ。現実社会の世知辛さよりはマシさ」

×ぼんさんがやたら重みのある一言を返す。

とはいえこれはこれで大変だ。宿の周りには警備員とテルミさんがいるので、作業自体は安心して行えはするんだが。この作業が終わったら、今度は先日モンスターの大群にやられた町東部の復興も手伝えだ。少女使いが荒い事この上ない。

「おー！ あった、これだ！ 重いぞー！」

お宝はA s e l i aさんが掘り当てたようで、俺もそれを引き上げる作業を手伝う。数人がかりで金庫を引きずり出し、宿屋の主人に全力でお礼を言われ、（異世界換算の）午前中の作業はこれにて終了。うーむ、こんなことやっていいのでしょうか（自分の事を棚に上げて）。

「大丈夫だって、敵さん対策の方はサイト達に任せれば。ぶっちゃけ、俺達はそれまでやること無いからこんな事させられてるんだぜ？」

「もう迂闊にみんなから離れられないもんねー。考える作業は他の人に任せて、私らは肉体労働ってわけ。役割分担をきちっとやるだけだよ」

そうっすか……　せめて俺は肉体労働以外の方が良かったですけど……

昨日G i l l yさんから得た情報もこの人達に教えたいところだけど、ここじゃまだ場所も人数も悪いか。G i l l yさんに迷惑かけると後が怖いから、話もどこまでみんな話そうか少し悩む。

「どうしたシエル？ さっきから妙に落ち着いてないけど」

「あー…… みんなに教えたいことがあるんですけど……」

「もしかして昼間に言っていた以外の敵さんの情報か？」

「はい、実は……」

俺は三人の耳元に小声で、上位プレイヤー名簿の事を話す。

「マジか。そいつはすげえな。敵を更に割り出せそうだな」

「でも、記憶力に限界があるから、さっき酒場で書いてきた分しかありません。掲示板メンバーを抜いて、上位数十人くらいがやつとでした」

俺は先にあらかじめ酒場で書いておいたメモ用紙をみんなに渡す。

「うへっ、一位はレベル67もいつてんのか。サイトでも……四位くらいか？」

「ゲーム上の戦闘力は『何げなく』戦う時にモロに違いが響いて来ますからね…… この上位三人が敵であって欲しくはないですね」

皆も興味深々でそのリストを見ている。役に立てたようで何より。

「しかし、こんなのどうやって手に入れたんだ？」

「えっと……」

「もしかして例のGillyって人？」

「……はい」

A seliaさん鋭いよ。全くばれないようにするのは無理だと思ってたから良いけどさ。

「信用、出来んのかねえ……」

「昨日奴らに襲われた俺を助けてくれたのも彼ですし、少なくとも敵の敵なのは確実です。彼も奴らがいると迷惑だから俺達に退治してほしいって」

本当の事半分、出まかせ半分。これが意外と疑われない。俺は何とかして、少し悪くなりかけた場の雰囲気を利用してみる。

最初に反応を見せたのはA seliaさんだ。

「……ま、そう言う事にしといてやるか。敵に回るんなら容赦しないって伝えとけよ」

皮肉交じりだが、どこか安心したような顔だ。まあそもそも、たった一人のシーフがこのメンバーに勝てる策も見込みも無いでしょうけどね。

話が一段落つき、撤収準備に取り掛かろうとすると、今度はギルドの武装した職員が慌てた様子でこちらに駆けよって来た。

「あなた達と話がしたいという冒険者が来られたのですが、どうしますか？ 交戦の意思は全く見られません……」

俺達と話がしたい？ 一体誰なんだろう。一応他の人の様子を見てみたが、みんな揃ってやれやれといった表情になっていた。

「またかよ。どうせ俺達の仲間に加えてくれてタチだろう？」

「え、ええ……」

前例あんのか。集会襲撃事件が三日前、モンスター放出事件が二日前に起こったばかりだし、他に取り込まれた人も相当怖い思いしてんだろなあ。

「どうするんですか？」

「どうするもなにも『お断りします』、だよ。今新たにメンバーを加えても、また身内同士で変な探り合いとかになるからな」

今のメンバーは先日の死闘を共に生き抜いた人達だから信用できる、と。みんなで一斉に互いの疑念というものを捨てて、生まれた結束。『当克蘭はどなたでもウェルカム』みたいに、性善説唱えているような生ぬるい団体じゃないんですよってか。

「それもそうっすね。その人には気の毒ですけど」

「よし、そうと決まれば美女三人でお断りのダンスでも……ん？ あいつどっかで見えたような……」

アイツってどいつ？ あの職員に取り押さえられているあの人？
俺は見覚えがないけど。

「あっ！ な、なあ、あんたら今大勢でチーム組んで殺人犯をぶっ

潰そうとしてんだろ？ お、俺も仲間に加えてくれよう！」

男は職員二人に腕を押さえられながら、必死な形相で訴えている。
あー えーっと…… でもどこかで聞いた事ある声だぞ。顔は知らないけど、声は知っている。そんな人は……

「思い出した！ この人この前の集会で、れんちえふさんにいちゃもんつけてた人じゃん！」

にいにいさんの一言でその場の全員が手をポンと叩く。

「あー いたなあそんな奴」

「だったら、なおさら駄目じゃん。ここは丁重にお断りします」

「あ、あの時のことは謝るからさあ！ 俺だって怖かったんだよ！まさか本当に人が死んで、殺して回っている奴がいるなんて思ってもみなかったんだ！ この前のモンスターの大量だつて……！」

男は既に涙交じりの声になっている。なんとゆーか……憐れ、無様だ。

「あの時のことを水に流すとしても、あなたを仲間に加えることは出来ません。信用できないので。申し訳ないですが自分の身は自分で守ってください」

×ぼんさんも毅然とした態度で応じる。やや心苦しいがそれも仕方あるまい。内部崩壊は最も避けるべきなのだから。

「まあ、犯人グループを倒せば安全になるのでそれまでの辛抱です

よ」

思わずフォローを入れようとして気休めみたいな事を言ってしまったが、焼け石に水滴。男の体は小刻みに震え続けていた。

「そうだ。いい方法があるぜ。ギルドの地下牢、あそこに頼んで入れて貰ったらどうだ？　そこなら安全だと思うぜ」

「そんな……！」

A seliaさんは冗談っぽく言うが、何気に名案である。環境はともかく安全面では中々のものではないだろうか。

「つーわけで、ギルドの職員さんお願いします。こいつを牢にぶち込んでいてください」

「ええ〜？　でもこの方は何の罪も犯してないですし……」

「人命保護だよ、ほ、ご。ギルドマスターのじーさんも言えば納得してくれるって。俺達が殺人犯をぶっ倒した後釈放すりゃ何の問題も無い」

A seliaさんの強気な発言と同時に、ギルドの職員が更に後から来て四人がかりで男をどこぞへと連れて行く。何の抵抗も出来ぬまま装備を取り上げられた男は、憐れにもしばらくの間、獄中生活を送ることになるのだろう。俺達はその様子をただ黙って眺めていた。

「いかん、少し後味悪いな」

「今更!？」

A s e l i aさんにもまだ少し良心が残っていたようだ。

「でもこの方法って、結構流行るんじゃないのか? 一応安全っちゃ安全だし」

「囚人に紛れて犯人グループが入るかもしれませんけどね……」

「げ、だったら下手にぶち込まない方がよかったかな」

しかし牢屋かぁ。そこが安全なら俺も入りたいよ、正直。Y A S Uさんとかの話聞くと向こうは向こうで大変そうだけど。……ん? でもそういうえば、夢に入る時の再スタート地点って、最後にいた場所に関わらずいつも固定だよな。牢屋に入っている場合そこんところどうなんだ? また別のスタート地点からリスポン? ここに来てまた一つ変な疑問が増えてしまった。

「おい、シエル。とっとと次の場所行くぞ」

……みんなにも言った方がいいのかな。ま、機会がある人に調べて貰えば……

「そうだ、みんな」

「すみません! あなた達が掲示板メンバーの方々ですか!？」

っておい、空気読め。そして誰だこの声の主は。先程のいちゃも

ん男とは逆方向から走って来たらしい男。早速警備の人に取り囲まれている。息も酷く上がっており、抵抗の様子も見られない。見た所フアイターか。装備的にもまだレベルはあまり高くない。

「何の御用でしょうか？」

「あ、あんた達の仲間に会わせてくれ…… ギルドマスターとも繋がっているんだろ……？ もう嫌だ…… こんなこりごりだ……」

男の顔の上には息を上がらせていることによる赤みと、恐怖（？）みたいなことから来る青みが交じって妙な色が出来上がっていた。

「えーっと、また仲間にして欲しいって奴ですか？」

「そんな奴は片っ端から牢にぶち込もうかって話になってたんだけど」

俺達の毅然を通り越して酷く冷淡な対応にも、男は強く首を振るのみであった。そして少し息を整えてから、再び話し始める。

「違う…… 俺はあんたらにあいつらをぶっ倒して欲しい…… 情報ならいくらでもやる……」

「あいつらって殺人をやって回っている奴らのことですか？」

男は首を縦に振る。

「お前の持っている情報ってどんなもんなんだよ」

「殺人を犯している奴の名前、構成、そして奴らが根城にしている

場所だ……！」

え？　ちょ。マジ？

「は、は？　マジか？　何でそんな事……」

「昨日まで……　手を組んでいた……　でも……　もう沢山だ……
！　あいつらは滅茶苦茶だ……！　大義も糞もない……！」

俺達は顔を見合わせる。A s e l i aさんの表情がやや固くなり
見下ろすように言った。

「あんたも……殺人に関与していたのか？」

「俺が殺したのは……」

………

………

凶悪犯罪者が12名。政治家、官僚が8名。その他悪い話の絶え
ない有名人を4人ほど。

「めっちゃくちゃ殺りまくってんじゃねーか！」

「弁解にもならないと思うが、一応全員悪人とされるような奴らだ
……！　そんな奴らしか殺すつもりはなかったんだ……」

「いや、でも殺人は殺人でしょ」

「こんな力を手にして調子に乗ってしまった罰なら甘んじて受ける……でも、その前にあいつらを何とかしてくれ！ あれは本当にただの狂った集団だ！」

男は悲痛な声を絞り出す。彼の腕を押さえているギルドの人がこちらに目くばせをしてきたが、×ぽんさんはゆっくり首を横に振る。

「この人の言うことが本当なら、牢の前に先にサイト君達の所に連れて行ったほうがいいでしょう」

「知ってるだけの情報を吐いてもらわないとな」

ギルドの人が男を解放する。掴まれていたのは腕だけだったのだが、それを離れた途端彼はへなへなとその場にへたりこむ。

「大丈夫かあんた？」

「命からがら逃げて来たんだ……奴らは容赦なく殺しにかかるから……」

彼が座り込んだのは疲れのピークなのか、それともこちらに合流出来た安心感からか。

「そう長くも休んでいられないですよ。それと、名前は何て言うんですか？」

「ゲーム中のキャラはアレックス……」

へ？

「アレックス、さんね…… まあいいや。奴らがいつ口封じに襲って来るかも分からんし、とっととギルドに戻りましょう」

「え？ あ、アレックスさん？」

「どうしたの？ シエルさん」

「い、いや、何でも…… 向こうで聞けば済む話かな……」

い、言えねえ……！ こんなタイミングでかよ……！

この時点で身分を明かさないということはこの人自身も言いたくないんだろうし。それはこっちとしてもいいんだけど。むしろ犯人グループにいたのに、わざわざ寝返ってくれるなんて都合のいい事には違いないんだ。だがしかし、どのタイミングで連れ出すべきか…… Gillyさん、あんたの注文やっぱ難しいっす！

48話 こうもあっさりと(後書き)

自分で書いていて文章のテンポに違和感を感じる。何でだろう。

49話 決断の時です

漆黒の君 ファイター L V 67

アルクエイド アルケミスト L V 58

クロイツ プリースト L V 54

雨宮ロキ アーチャー L V 52

バドランド ソーサラー L V 51

シン ファイター L V 45

マガマギ ファイター L V 41

かおりん☆ ソーサラー L V 34

R U I アーチャー L V 32

◇ ◇ ◇ ◇

「これで全員か？」

「俺が把握している分は」

レベル30台クラスの奴らは全く記憶にないが、上位の奴は俺が

とったメモとも一致していた。アルクエイド、雨宮ロキは俺の予想が的中。しかし漆黒の君は出来れば敵でないことを祈っていた筆頭である。

「では次はこいつらの容姿を……」

まるで警察の取り調べさながらの光景だ。数十人規模が楽々入れるギルド本部の会議室はしんと静まり返り、ギルドの尋問官とアレックスさんのやり取りが静かに響いていた。その様子を俺達掲示板メンバーは黙って見つめる。

「よかったのう、サイト君」

右手の方で飄々とした老人の声が聞こえる。ギルドマスターの爺さんちーっす。この世界の人々に俺達の事情を話しても到底納得してくれるとは思えないが、そこはサイトさん達が頑張って説明して理解してもらったらしい。本当にお疲れさまでした。

「これでおとり捜査とかはしなくて済みそうですが……敵も思ったより強敵です」

え？ そんな物騒なことを考えていたの？ よかったーアレックスさんが出頭して来て。

「こちらには数の利があるから最終的には負けはせんだろうが、これだけの相手を犠牲者0で確保するのは難しいじゃろうな」

Gillyyさんと同じような事を言うギルドマスター。しかし、それが最重要課題なのは肯定せざるをえない。漫画のように上手くいくかどうか分からないし。

「何かいい案はあるかの？」

「理想案に過ぎないものばかりですよ。出来れば真っ向勝負は避けたいところですけどね」

策……ねえ。ああ、駄目だ。俺の頭じゃ思いつかん。自分の事ならともかく、人の命まで預かるなんて責任が重すぎるっての。ここはデキる人に任せた方が得策だな。俺は俺のやるべき事を……どうやってアレックスさんを連れ出すかどうかを考えておこう。死罪をまぬがれる可能性が出てきたとはいえ、20人以上もの人間を殺害している彼の独房入りは絶対に避けられない。連れ出せる隙はほんの僅かだな。

連れ出すのが無理にしても、Gillyさんと会わせる時間はなんとか確保したい。だが、四六時中監視の目が入っている中でそんな事が可能なのか。とりあえずギルドの役所に彼宛てのメールは送っておいたが…… 彼がいつ気づくかにもよる。

「……特に性格がヤバいのが雨宮ロキって奴だ。先日の広場での襲撃もコイツの独断で行われた。殺人も全体の3〜4割はコイツじゃないのかな？ 他にも婦女暴行とかもやりまくってる。とにかく中身が子供…… いや、ガキだな。子供と大人の悪いところを寄せ集めたような性格だ」

事情聴取が犯人グループの人物像の話となると周りのみんなの表情が一斉に固くなる。そう、このアーチャーには散々な目に会わせられたのだ。特にサイトさんにいたっては殺されかけたしな。

「この漆黒の君という人物は？」

「リーダー格……ではある。実際に一番強いし、下の奴らも怖くて逆らえない雰囲気が出ている。でも、完全にこっちの世界の自分に陶醉しきっている感じで、逆に足を引っ張りがちな雨宮のことをうっとおしく思っている節はある」

やっぱり悪人同士の相性の問題もあるのか。何とか利用出来ないかな。

「クロイツ、バドランドは普通に性格悪いけど、何事も漆黒についていけば大丈夫って思ってる気がする。シンとマガマギは、まだマシな方だ。悪人に対する裁きのつもりで動いている。かおりん☆とRUIは後から入って来た奴だが、こいつらも悪人殺しを楽しんでいる。あまり強くないが、雨宮について性格が悪い。なんかもう、色々頭が足りてない。先日の方のモンスター襲撃の主犯格はこの三人だしな。さらに昨日に至っては……」

「至っては？」

アレックスは吐き捨てるように言う。

「俺達の世界で賞金が貰える『A・R・クリスタル』ってアイテムがあるだろ？　その持ち主を殺害して、クリスタルを奪いやがった」

自己満とはいえ世直しですらなく、完全に私利私欲の犯行。

「あいつらにとっては人殺しはちよつとしたお遊びなんだ。悪人だから殺すのではなく、悪人だったら殺してもいいって感覚なんだ。後先をまるで考えていない」

「いや、お前も人の事言えないけど……」

前の方で聞いていたタミさんが冷静な突っ込みを入れる。

「それは十分承知している。でも、殺人を犯しているって感覚は忘れないでいた。自分のエゴかもしれないけど、世の中のためを思っ
てやって来たつもりなんだ。でも、あいつらは違う。人殺し、いや
力による蹂躪そのものを楽しんでやがる。当初は強攻策をとろうと
しなかったお前すらを疎むのはそのためだ」

分別のつかない幼稚園児にミサイルの発射スイッチ持たせた感じ
なのかな。ともかく、この人の憔悴した表情を見ると、普段の付き
合ひも気が気でなかったんだらうとつい同情してしまう。

「あ、ちょっと質問いいですか？」

アレックスに比較的近い位置にいるくろね子さんが手を上げた。

「さっき『A・R・クリスタル』の持ち主を殺害したって言ってま
したけど、たしか獲得者のクレセントさんってまだレベルが30
以下でこっちには来てないんですね？ でも、事実その人は今朝
からログインしてなくて権利放棄の状態になっていると…… 本人
の精神がトリップしていなくても、使用キャラを殺害したらプレイ
ヤーも死んでしまうんですか？」

あ、いい質問。これは俺も気になっていた事だ。何せプレイヤー
自体は腐るほどいるからな。低レベルの人間が脱落したとか気にも
留めないだろうし。まるちーさんのこともあるしな。

だが、返ってきたのは意外な言葉。

「それは…… 分からない。俺も知らないんだ。多分殺した本人かも知らないだろう」

「ええ!？　じゃあなんで、わざわざ殺害したんですか？」

「『自分らと同じようにゲームをしてお金持ちになったのがムカツクから』だ、そうだ」

そ、そんな理由で……？　本当に教育を受けた日本人なのかよ……

「再びクリスタル探しが再開されたことで、また自分達にも賞金獲得のチャンスが巡って来たって喜んでいたよ。……もう、まともに話の通じる相手じゃないんだ」

ひ、ひでえ……　俺含め掲示板メンバー全員がドン引きしている。

「俺、この三人なら躊躇なく殺せるかも。正真正銘のクズじゃねーか。救えねえ……」

A s e l i aさんが隣で呟く。いつもだったら、まーたこの人はと心の中で突っ込みを入れる所だが、今回ばかりは同意せざるをえない。俺達に対してやってきた事含めて、どんな環境で育てられればそんな思考回路が生まれるんだと問いただしたくなる。

「そもそも本当に賞金が出るのか分からないのに……」

「いや、賞金の話は本当　……らしいんだが」

ん？　おい、賞金一千万って本当の話かよ。社員さんがそう言うのならそうなのか？

となると、この世界に俺達を引きずり込んだ理由がますます解らなくなってくるな。

「なるほど…… 大体の人となりは分かった。それでは最後にこのアルクエイドという人物はどんな感じだ？ アルケミストなんて珍しい職業についているが」

「ああ、そいつは…… 動機は俺と大体同じ…… だと思う。直接的な殺人はほとんどやってないはずだ。だが、戦闘以外では最も気を付けるべき相手だ」

「戦闘以外？」

「こいつは主に偵察担当だ。ホムンクルスっていう妖精みたいなのを飛ばして、ターゲットの監視や搜索とかを行う。この中では縁の下が存在だな」

ホムンクルス…… 要は小型偵察機みたいなもんか。それだと昨日のマインが見破られたのも合点がいく。恐らく上空から俺の行動を見張って、その情報をあの剣士に伝えていたんだろう。

……つーか、ここにも来てんじゃないだろうーな？

「奴らから逃げ出す時、アイツの気を逸らすのに一番苦労したよ。それとプリーストの防壁に引っかかるみたいだから、この部屋には入れないようになっていいるはず。そこは安心してくれ」

「コイツの戦闘能力とか分かりますか？」

「戦ってるとこ見たこと無いから何とも…… 戦闘向きではないは

ずだが」

社員だから本当は知ってるくせに。知り過ぎてても怪しまれると思つての発言か？ まあ、実際四職業以外は戦闘はてんで駄目だしな。厄介なサポート要員と思つておこう。

話が一段落すると部屋の中にはぱんぱんと手を叩く音が鳴り響き、全員がその方向へ注目する。皆の視線の先には、こんな状態でも穏やかな表情のギルドマスターがいた。

「はい、皆さん注目。そのアレックスくんの話が本当ならば、一刻も早く奴らを止めなければならん。私達の町に多大な被害と不安を与え、君達の世界にも少なからず悪影響を及ぼしていると聞く。よつて、無抵抗のまま逮捕出来たとしても死罪はまぬがれないじやろう」

アレックスさんの目が見開かれる。自分のやったことを後悔しているとはいえ、流石に処刑が決まるとなると精神的に来るものがあるんだろう。

それを察してかギルドマスターが彼の肩を軽く叩く。

「アレックスくんの処分は彼らを全員検挙した後、決めるとしよう。それまでは独房に入ってもらふとする。物事が穩便に片付けば少しは罪も軽くなろう。……皆の者も異論はないな？」

異論を唱える者は…… いない。みんなもうアレックスという弱々しい個人には興味がないのだらう。とにかく今は目先のクソツタレ野郎共を潰すという事だけ。

「よろしい。おそらく彼らもこの冒険者ギルドに登録しているので

あろうが…… たった今除名処分が下された。そして、今この部屋にいる君たち冒険者に以下9名の殺害許可を与える」

ぶっ殺してもオーケー。いや、もう殺っちゃってくださいってところか。

みんなも元々そのつもりだったんだろうけど、改めて提示されると中々凄いくだな。

雰囲気も出る。

「ま、あくまでも許可じゃ。現場の裁量は君たちに任せるとしよう。穏便に済ませられたらそれが一番ええ。若いモンが無駄に命を散らさんようにな」

当然。俺達は自分が死にたくない故に結束したメンバーだ。

夢も、目標も、大それた大義もない。自分の身の安全が最優先。故に手を組む。

「事の発端はこんな滅茶苦茶なトリップ現象だけ…… こんな凄惨な事件の原因が俺達と同じ世界にいる人間にあるというのならば、まずはそれを解決するのが先だ」

我らが通称攻略掲示板メンバー計29名。

リーダーはタミさん。サブリーダーはテルミさん。

そしてエース兼ブレインのサイトさん。

俺？ 下っ端でいいよ別に。

「ギルド公認の悪人退治だっ！ 気合入れて行くぞおっ！」

『おおっ！！』

士気は最高の状態だ。みんな元の世界では結構駄目な部類に入る人種なんだろうけど、こんな漫画みたいな展開には燃え上がらずにはいられないんだろうな。

「んじゃ！　まずは作戦会議！　相手も何だかんだで相当の強者だ！　何とかして味方に犠牲者を一人も出さずにメていきたい！」

うーん。

メンバー全員が一斉に頭を悩ませる。

「じゃあ、まずは現役〇〇大院生のサイトくん、何か良い意見はない？」

サイトさんってそんなにハイスpekだったんですか。何か失礼しました。

「……さっきも言ったけど、犠牲を抑えるなら真っ向勝負は避けた方がいいと思う。単純な物量はこちらが三倍とはいえ、それでも完全に勝利することは難しい」

相手の漆黒の君は全プレイヤートップのレベルだもんな。事情聴取のメモを見せて貰ったけど、やっぱり昨日の剣士の方でした。頭脳はともかくこちらの攻撃は全く通っていなかったし、まともにやり合うのはきつそうだ。

「三倍でもまだ人数的に厳しいのか」

「そこで、だ。俺が今考えているのが……」

.....

.....

.....

はへ？

「は、発想が単純過ぎないか？」

「うーん、いい……けど。シンプルイズベストだけど！」

確かに安全策、ではある。格好はつかないだろうけど。

「でもこの作戦は、奴らが全員揃っていないと意味が無い。そしてその一番の障害となるのが偵察要因のアルケミストの存在だ」

「あゝ 規模が大きいから読まれちゃう？」

「コイツを何とかごまかさないとな……」

サイトさんの作戦は確かにありっちゃありだ。これなら何とかなりそうだと思うってしまう。もし、俺が相手側の立場になったとすれば確実に戦意無くす。こちらの準備が整う前に相手側を一旦騙す必要があるか。注意を上手く引き付けられれば……

「相手方にどれだけ頭の周る奴がいるかにもよるな……」

「あー 少なくとも漆黒の君はあんま頭良くないと思います」

知識で負けるとすぐに社会云々の話を持ち出すのは患者の証（b

y 高瀬悠一Ⅱシエル）

「いや、問題はアルクエイドの頭なんだ。コイツを何とかしないと
ことには……」

相手を騙すためには…… 味方から？ いや、ここで味方騙して
どーするよ。

「騙されてみる…… 一度相手の罠にかかってみるか……」

「え？ それは危険なんじゃ」

「要は死ななければいい。そのギリギリの時まで時間を稼げれば……
： 殺人犯のアジト候補が載ってる地図がありましたよね？ それ
貸してください」

何やら熱心に地図周辺の地形を確認するサイトさん。

「向こうも物量では負けると分かっているはずだから、真っ向勝負
は避けたいはず…… だから闇討ちなんか走る。こちらから攻め
ることを知ったら…… 何かしらの策、罠を仕掛けてくる可能性が
高いということだ。これを上手く逆手にとれば……」

サイトさんは何やらぶつぶつ言いながら、地図に色々書きこんで
行く。それはもうほとんど落書きに近い形で、何と書いているのか
さっぱり解読できない。

しばらくの間悩みあぐねると、何か閃いたかのようにその場を立
ち上がる。

「さっきに加えて……
らう事になるんですが」

みんなに少し不利な真っ向勝負をしても

49話 決断の時です（後書き）

戦略を考えるのはほんと難しい。

サイトくんの学歴は実在の大学名を入れようと思ったんですが、踏みとどまりました（笑）。

一応偏差値のとても高い大学という設定ですので、好きな単語をお入れください。

50話 いつ死ぬかもしれぬ前に（前書き）

現実がお留守じゃないのかい？（泣）
久々に3000字切りました。

50話 いつ死ぬかもしれぬ前に

俺は柄にもなく机に向かって遺書を書いていた。

一応この連続怪死事件の知っている限りの全容（Gillyさん
に教えてもらった事含め）と、俺の死後の処理について書いている。
俺の他にやっている人もいるだろうから、ほんの気休め程度にしか
ならないが。

結局作戦決行は今晚となった。犠牲者を増やさないだけでなく、
相手に対策を取らせる暇を与えないようにするためだ。今夜で決ま
る。今朝は親にも電話して、明日一日俺の電話が無かったら、俺は
死んだものと思ってくれと伝えた。酷く心配されたが、事情を言っ
たところで信じて貰える話ではない。

よし、遺書はこんなもんか。枕元に置いて……と。自殺するわけ
でもないのに不思議な感覚だ。午前の作業はこれにて終了。学食で
飯食ってから今夜の決戦に向けてのレベル上げというこう。

ん？ 電話だ。公衆電話から？

『よう、俺だ』

「ちょ、Gillyさん……！ 何で俺の電話番号知ってるんです
か！？」

『お前の携帯電話を覗いただけだぜ？ 隙だらけだったからな』

いつの間に…… やっぱ怖えよこの人！ 現実でもシーフですか

？ あんななりで。

『まあそんな話は置いといてだ。社員のアレックスが見つかったんだってな』

「メールは見てくれましたか。事実上、出頭みたいなもんですよ。殺人犯グループについての情報は沢山貰えましたけど、しばらくギルドの独房入りになるそうです」

『連れ出すのは難しいか…… 何とか話だけでも聞ければな』

独房に潜入でもするか？ 俺は無理なので本職のあなたに全てお任せで。

「それと気になるのが、あっちの世界って一度出ると再スタートはまたいつもの所からでしょ？ それだったら簡単に脱獄出来たりするんじゃないんですか？」

『さあな、俺は知らん。お前の方が詳しい知り合いがいるんじゃないのか？』

あ、そうか……。 YASUさん忘れてた。あの後どうなったんだろう。ゲーム中でも見かけないし。これから探してみるか。

『とにかく、今晚は俺もギルドの中にいる。でもやり取りはメールでやろう』

「了解っす。あ、それとGillyさん」

『何だ？』

「……俺の住所とかもばれてます？」

『だから番号覗いただけだって。気になるなら機種変したらどうだ』
ひっでえ。こちらら裏組織のお世話に何かなりたくねえよ。

『まあこっちが知りたい事が分かったら、お前から手を引くさ。そんなに気にすんなよ』

「うす……」

黒幕とか…… 早く逮捕されてくれないかな……

……飯食いに行こう。



今日の定食はカレーだ。でも正直カレーって外で食うもんじゃな
いと思う。野菜とかの具がゴロゴロ入った奴が好きなのに、外食の
奴はそれが皆無だからだ。

「よう、高瀬」

こんなぼっちを気にかけてくれてありがとう、内山くん。

「ニュース見たか？ だんだん有名人の死亡者が減ってきているらしいな」

「へえ……今朝は何人くらい？」

「話題に上ったのはたった十数人ってとこだよ。でも、今度は一般人の死亡者が急増しているみたいだぜ？ ほら、この前だって一日で二百人以上眠ったまま死んだって言うじゃないか」

この前…… モンスターの襲撃事件か。寧ろあれで二百人程度で済めば御の字だよ。

「まったく、世界にはまだ凶悪犯罪者がいるってのに…… どうせならそっちの方を先にやって欲しいもんだよ。……ああ、犯人がいるんだったらな？」

悪いね内山。この事件、日本にいる人限定なんだ。世界規模だったらもっと変わってるんだろうけど。Gillyさんの言う通り、伝播するものだったらこれほど迷惑なものはない。

「なんか最近は死ぬのが悪人ばかりじゃなくなってるし……」

「元々悪人を殺すことが目的じゃなかったりしてな」

殺人犯グループのことを言っただけだったけど、俺の発言に対して内山は目を丸くする。

「なるほど、一連の事件は何かのカモフラージュの可能性もある、と？ 中々面白い推理だな」

あ、いや、そういうつもりで言っただけじゃ。……まあいいか。

取り巻きの女の子たちも来たようだし、俺は空気を読んでその場を離れる。ああいう風なリア充は焼き殺したくなるくらい恨めしいが、かと言ってそうなれなかった責任は俺にもあるんだし。

現実はどうしようもなくくだらない。なのに離れたくないと思うのは何故だろう？

もう少し現実で生きてみたい。絶望するのはそれからいいか。



家に帰ってパソコンを立ち上げ、ゲームを起動。今夜に向けての念入りの準備を行う。

スキルポイントは全て炎属性の魔法にふろう。ゲーム上では苦勞するかもしれないが、ここまできれば、器用貧乏よりも極端に能力を偏らせた方がかえって有利な気がしてきた。

おおー 新スキル『メテオフレア』か。

溜め時間こそ長いが、強力な広範囲攻撃魔法…… いいね。

加えて『イグナイトスファイア』。

体の周りに強力な熱エネルギーをもった球体を発生させる、か。これは近距離&防御用か？ これはこれでありがたい。

最後は『プロミネンスマイン？』。

これは……うん。無印マインより強いと思っっているのかな？

技説明は…… あ、へえ、ちょっと面白そう。

掲示板に情報は…… 載っていない。

敵側のソーサラーのバドランドは先日の時点でレベル51。一般的なプレイヤーと同じように魔法属性をバランスよく振り分けているのだったら、これらの高レベルの炎属性魔法は覚えていないだろう。先日の失敗もあるし、わざわざここに情報を書き込む事もないか。

新魔法3つをひっさげ、早速レベル上げだ。掲示板メンバー総出で高レベルのダンジョンに挑む。死ぬのはゲーム中だけにしたい。

メテオフレア！ ……おお、強い強い。

イグナイトスファイアッ！ ……後衛狙いのモンスターに効果的だ。返り討ちに出来る。

プロミネンスマイン？ッ！ ……地味だ。つか全然踏んでくれねえ。

そんなこんなで、午後6時。シエルちゃんのレベルは44に。

ここでいったん休止。晩飯を食いに学食へ。

誰とも出くわさず夕食完。真っ直ぐ家に帰り再びゲーム再開。どれだけ駄目なんだよ俺の生活。

だけどログインしてすぐにYASUさん発見。

シエル「YASUさん！ お聞きしたいことが！」

YASU「何でしょうか？」

シエル「向こうの世界ではずっと独房に入っただけですか？」

YASU「そうです。最近は退屈だけで慣れてきましたけど」

……本当に向こうの世界のルールが分からん。こちらにとって都合はいいが。

ギルドの中にそのままリスボンとか出来ないものか。

YASU「それが何か？」

シエル「こちらにとっては重要なことなんです。それとYASUさんももう少しの辛抱ですから」

YASU「あそこから解放されるんですか？」

シエル「新犯人が逮捕されれば何とかなと思います。そっちの方も目星がついているので。でも今の段階ではまだ牢屋の中が安全です」

YASU「向こうの事はシエルさん達にお任せするしかありませんね……」

シエル「任せといてください。必ずなんとかしますから」

格好いいこと言ってYASUさんと別れ、再び夜の部へ。

終了時刻は夜中の3時。ギリギリまで粘るとする。
シエルのレベル……ついに50の大台へ！

だがその途端猛烈な睡魔が俺を襲う。

もう……限界だ……寝る……

いよいよ決戦の舞台へ。

何かやり忘れた事は…… 死ぬ前の準備…… アイテムと装備は
ちゃんと整えたか……

全て……おーるおーけー。

下手したらこれで最後になるかもしれない夜に一人思うこと。

もう、このゲーム……楽しめてねーや。

50話 いつ死ぬかもしれぬ前に（後書き）

生命活動とは全く関係ないから楽しめるってものありますよね。
物書きだってそうです。

仕事にしたら楽しめる自信ない。

51話 怖いくらいに鮮やかです（前書き）

今更ながら補足。

リスポン（Respawn）＝再発生の意味でFPSとかだと、一度死んだ後に再スタートすると言う意味で使われる言葉です。本作でも死んでこそいませんが、毎度毎度異世界を行ったり来たりしているので、この言葉を使わせてもらっています。

51話 怖いくらいに鮮やかです

そして決戦の地へ。

格好良く言ったつもりだけど、やっぱりリスポン地点はいつもの酒場。

そして今日は出前に紛れて、冒険者ギルド本部の前に到着。これでひとまずは安心だ。

……なにやら入り口で人が長蛇の列を作っているな。何やってんだろ？

「合言葉をどうぞ。『ソース』」

「……男の子」

「はい、こちらへどうぞ。次の方、合言葉は？ 『サイダー』」

「おばあちゃん」

「はい、こちらへ。次の方、『赤いワインナー』」

「ら、ライス……？」

「……こちらへ。身体検査を受けてからお通りください」

……本当に何やってんだ。

「あ、おーい。シエルさん」

にいにいさんだ。何だか物凄く助かった気がする。

「何やってるんですかあれ？」

「みんなギルド本部の中にいた方が安全って考えているみたいだね。ああやって振り分けているところだって」

「あんまし意味無いんじゃないですか？ 分かる人には分かる合言葉だと思っし……」

「うん、特に意味はないみたい。でも正解した人は現実の意識がトリップしているって分かるから、別口に分けられているみたいだよ」

無駄な作業にも思えるが…… まあ説明のしやすさとか？

「じゃあ俺達も今からこの列に並ぶんですか？」

「いや、私らはあっち。裏口から入れるよ」

犯人警戒のためとはいえ、事前連絡も無しにそんなことやられてもなあ。

……あ、何か看板が立ってる。

『殺人犯退治に参加される方は裏手に回ってください↓』

……大丈夫なのかよこんなん。緊張感に欠ける。

看板の指示通りに歩いて行くと建物の裏口が見えて来る。そこには何人もの屈強な兵士が並んでおり、しかも何分かおきに交代するといった厳重さ。分かり易いくらいに本命だ。

ここでは中に一人ずつ通されるみたいだ。にいにいさんが先に入り、ほどなくして俺の番が回って来る。中に入るとすぐさま鉄格子に直面。右手には分厚そうなガラス戸越しに、これまたギルドのお役人っぽい女性が座っている。

「合言葉代わりに今から質問をします」

「はい」

「殺人犯グループのメンバーの名前を覚えている限り答えてください」

良く考えられてるなあ。

幸いにして俺の記憶力の調子は良く、全問正解で通される。親切にも昨日とは別の会議室までの道のりを張り紙が示してくれており、何の問題も無くメンバーの元に到着。

今のところの集合率は八割くらいか。各々が今日の決戦に向けて、装備の確認や精神統一を行っている。部屋の壇上ではメンバーのリーダー格の3人が何やら打ち合わせをやっている模様。

「あれ？　そういえば、A s e l i aさんまだ来てませんね？」

「本当だ。いつもならすぐに飛んでくるのに」

まだ全員揃ってないし、もう少し待ってみようということになっ

だが、28人目が来た辺りから段々不安になり始める。それから更に20分くらいして流石にそろそろ誰かが探しに行こうかと雰囲気になった時、廊下からどたと足音がしたと思ったら、部屋の扉が勢いよく開け放たれる。

「ちくしょう！ 場所変えるなら連絡くらいしろよな！」

「……誰？」

声でAseliaさんとは分かるけど。いつもの白銀の鎧を着込んだ彼（体は彼女）とは違って、装備は上から下までまですべて黒なものに変えられていた。本人は気合入れて新しい装備にしたつもりだろうが、それがかえって仇になったみたいだ。

「ずつつつと、昨日の会議室で待ってたんだぞ。人は来るけどこのメンバーが全然来ないから、受付に問い合わせに言ったけど、忙しいからってまともに取り合ってくれねーし」

「あー 多分、あの看板立てる前に中に入っちゃったんだな。すまんすまん」

「待たされるだけならいいけど、男どもが身体検査だとか言って、鎧脱がせたうえに、人の体べったべた触ってくるしよ…… マジで前座代わりに斬り殺そうかと思ったぞ」

そりゃ、今のあんたは絶世の美人さんだし。男の性なら仕方ない……かな？

斬り殺されても文句は言えないが。

彼はすっかり御立腹のようだが、これでひとまずは安心。タミさ

んの号令で皆が着席する。この部屋は昨日の会議室とは違って、どちらかと言うと視聴覚室に近い。

部屋が暗くなり、壇上にスクリーンが映し出される。ここでの変な突っ込みは野暮ってもんだ。そして指示棒を持ったサイトさんが今回の作戦の説明を始めた。

「昨日はみんなに詳しい内容を教える事は出来なかったから、ここで改めて今回の作戦を説明させてもらう。まず、これがこの世界全体の地図だ。アレックスさんの証言によると、犯人グループはアジトというか溜まり場を3ヶ所ほど持っているらしい」

世界地図に3つの○が表示される。それぞれが適度な距離で離れており、二つは町の中だが、もう一つは町から離れて山の中にある。

「思いつきりこの町にもアジトがあるじゃねーか」

A s e l i aさんの言葉に、サイトさんも軽く頷く。

「ああ、この町での犯行は主にここを根城にして行っていたんだろう。アレックスさんも普段はほとんどここに集まっていたと証言している」

映像が一部切り替わり、アジトと思われる一軒家の写真が映る。

「でも、今回はここは叩かない。付近には一般市民も多く住んでいるからだ。下手に戦闘を行うと町に被害が出る。俺の昨日の案もここでは使いづらいしな」

再び映像が切り替わり、同様にこの町の北に位置する町のアジトらしき建物が映し出される。

「こっちのアジトも同じ理由だ。混み合った市街地戦は出来るだけ避けたい」

と、なると……

今度はこの町の北西、山奥のアジトらしき小屋の映像が映し出される。小屋の周りは割と開けているが、さらにその外側は薄暗い林が広がっている。

「今回叩くのはここだ。この場所で決着をつける」

確かにここなら町や市民に余計な被害を出すことはない……が。

「でも、どうやって犯人グループを全員ここに追い込むんだ？」

俺と同じ疑問の声が上がる。でもサイトさんはその所もちゃんと考えてあるといった感じだ。表情に自信が表れている。

「町にある二つのアジトから追い出してやればいい。奴らがこの山奥のアジトに集まらざるをえない状態にするんだ」

「追い出すって……どうやって？」

「だからあんな看板を立てたんじゃないか」

殺人犯退治が云々って奴？ あえて自分達の動きを教えることで、相手に警戒心を持たせる効果を狙っているのだろうか。

「それだけじゃない、今朝からあのアジトの前の通りは何でか知ら

ないけど、やたらギルド側の警備が嚴重になってさ。おまけに何をやるのかは分からないが、あのアジトの前に大量の火薬が運ばれている」

「……追い出すってそういうことか。でも火薬は本末転倒じゃないのか？」

「大丈夫、ほとんどが偽物だよ。昨晚ギルドマスターに頼んでこれだけの準備を仕込んでもらった。もちろん、北の町でも同様」

「でも、それで都合良く山奥のアジトに集まってくれるかな？」

スクリーンが再び世界地図に切り替わり、この町と北の町を除いた全ての町に×印が記入されている。

「この町以外の全住民に（この世界換算での）朝10時以降の外出禁止令と冒険者の退去命令を出している。もちろんこの事はこの町の人々には知らせていない。さらに町の門の警備も強化して冒険者には念入りの身体検査を行わせている。よって、他の町への出入りはまず不可能」

そこまでやるか……

「加えてアレックスさんの証言で、少なくとも漆黒の君と雨宮ロキはこの町にリスポンしていることが明らかになっている。特に漆黒の君は仲間内で頼られているらしくてね、みんなまず最初は絶対にこの町に集まって来るらしいんだ」

そこまで分かっているからこそこの大掛かりな作戦か。この町に一度集め、町に長く入られないような状況を作りだす。アレック

スさんの裏切りもそろそろバレている事だろうし、それに加えて殺人犯退治の看板にもうお前らのアジトは分かっているぜの動き。すると相手は焦って町を出て行き、外のアジトで作戦会議でも開かざるをえない……。もの凄く上手くいってこんな感じか？

「そんなに都合よく進むかなあ……。町の中のどこかの民家に逃げ込まれたらそこで終わりなんじゃ……」

「この町の人全員が互いを互いが見張っている状態だ。町の至る所に注意喚起の張り紙も張ってあるしね。さらに一時間おきに隣の家を確認を行い合うように義務づけている。さらに重要なのはこの山奥のアジト。実はアレックスさん本人は行った事が無いらしい。酒の席で聞いた情報なんだってさ。昨晚ギルドの人に夜通しでこのアジトの搜索をやってもらったんだ。よって向こうもこのアジトの場所はまだ知られてないと思っている可能性が非常に高い」

何この『一晩でやってくれました』的な展開。有り余る物量があるからこそ、完全にコストと労力を度外視した作戦だ。昨日の直接対決の際の案といい、色々やり過ぎてる気がする。

「向こうにはそこまで頭の回る人間はいないようだし、シエルさんの話だと漆黒の君もそこまでらしいからね。でも、向こうのメンバーの多くは彼を頼りにしている。恐怖交じりにね。だから彼に無理に意見を言う者はいないはず。彼が山奥のアジトに行こうと言ったら、その場では逆らえないはずだ」

俺の話持ち出されちゃったよ。大丈夫かなあ、色々ど。

「何度も繰り返すようだけどこの作戦は穴がある。いや、穴だらけと言ってもいい。相手方が町に残るならば市街地戦になるだろう。」

その時はその時なんだが」

「じゃあ、何でわざわざこんな大掛かりな事を？」

その時、部屋のドアがノックされる。若いギルドの役人の男が部屋に入ってきて、はつらつとした表情で敬礼した。

「一人、網にかかりました！」

「本当か！？ 当たればラッキーなくらいに思っていたけどやってみるもんだな！」

前の3人は大喜びしている。その他の俺含め残り26人は何が起こったのかさっぱりといった感じだ。すると、サイトさんがAseliaさんに視線を合わせる。

「Aselia…… 入り口の合言葉には答えられたか？」

「犯人グループの名前じゃなくて、男↓キンピラゴボウって奴？」

Aseliaさんも結構なコドグラ―（※孤独のグ〇メの大ファーン）なんだな。

「ああ、その様子だと答えられたみたいだな」

「あれって何の意味があったんだ？ 答えても答えられなくても身体検査されるみたいだし…… あっ！ 網ってそういうことか！」

彼の言葉で俺も要領を得る。

「そうだ、合言葉さえ言えばギルドの内部に潜入出来るとでも思ったんだろうな」

「案の定アサシンスーツで変装していましたよ。しかし、あらかじめ武器さえ奪っておけばこっちのものです。8人がかりで取り押さえてやりました」

若い男はしてやったりという顔でニヤリと笑う。よくよく見ると頬の所に痣もある。実に輝かしい漢の勲章だ。

「身体検査をやる事そのものが目的だったんだな？ わざと身内外の人間でも分かる合言葉にして、見事誘い込んで釣り上げたわけだ」

「御名答。まあ直接対決の際に説明しやすいように、人を振り分けるのが本来の目的だったんだけど…… 思いの他上手く引かなかったよ」

やるう。裏口の合言葉だって、犯人グループの一員なら言うのを戸惑ってしまうしな。これで残りは8人になったわけだ。

「で、誰だ？ 捕まった奴は？」

「マガマギという女です。ファイターの」

マガマギ…… 確かあの中ではレベル低い方だったな。流石に大物とはいかないか。

「よっしゃ、当人はここに連れて来れるかい？」

「はい、ただ今」

ほどなくして、手足を手錠で繋がれた黒髪のポニーヘアの女性が連れて来られる。鎧のような装備の類いも全て取り外されており、その顔はまさしく恐怖に歪んでいる以外の言葉が見つからない。それと彼女も顔が痣だらけだ。8人がかりだったらしい仕方ないね。さらに隣には、ギルドマスターの爺さんもついて来ていた。

「さーて、マガマギさん。あんたにも色々話してもらおうかねえ？」

マガマギは目を見開いて、必死に訴えて来る。

「ち、違う！ 俺は悪人しか殺ってねーよ！ お前らを襲った奴といい、町にモンスターを放った奴といい、みんな雨宮ロキって奴がやってんだ！」

まーた糞アーチャーの名前が。どんだけ仲間内でも嫌われてんだ。それと、この人も中身は男っぽいな。

「似たような事をお前らの仲間から聞いたんだが？」

「やっぱり……アレックスの奴は寝返ったのか？」

「そんないいもんじゃねーよ。あくまでも出頭扱いさ。今は牢屋にぶち込まれてるし、どちらにせよ処刑されることには変わりねーしな」

タミさんが邪悪な笑みで一部事をオーバーに言くと、マガマギは益々体を強張らせる。

「や、やめてくれえ……！ お、お願いだから命だけは助けて……」

！」

マガマギは涙交じりの声で命乞いをする。……人間ってこうなると、本当に無様だなあ。

そしてまたギルドマスターの爺さんが彼女の肩を優しく叩く。うん、なんかデジャブ。

「お嬢さん、君がここに入ろうとしたのは君個人の判断かね？」

「ち、違う！ 奴らに命令されて来たんだ！ 奴らにはどうやっても叶いっこないし、逆らって殺された奴も知ってるからよお！」

マガマギは顔を上げて必死の形相で訴える。

「すると他の仲間も今君がこの建物にいると知っている？」

「あ、ああ！」

「要は俺達の動向を探りに来たんだろう？ 今朝からホムンクルスの対策もしているしな」

「そ、そうだ！ いつもはアルクがホムンクルスを使って偵察をやっているんだが、今日に限ってギルドが滅茶苦茶嚴重に警戒されて……！ 殺人犯退治とかいう看板も立ち上げられてるし、絶対お前らが動くと思ったから、仲間内でレベルの低い俺が見に行かされたんだ！」

おうおう、これはまたペラペラとしゃべってくれるなあ。

「君よりレベル低い奴が二人もいるようだけど？」

「か、かおりんとRUIって奴は雨宮に取り入ってるから……こないだは何の事情も知らない『A・R・クリスタル』の獲得者も殺しやがったし、今日もまた……」

その話もう聞いた。しかし、この三人はフルボッコ確定だな。情状酌量の余地が無い。さらに彼は弁解を続けようとしたがギルドマスターがそれを遮る。

「まあまあ。あんたは私利私欲以外の目的だったのかもしれんが、事情を知らないわしらや、殺された当人、遺族、友人にとっては殺しは殺しでしかない。それ相応の罰は背負ってもらうよ」

マガマギは啜り泣いたまま顔を上げられずにいる。

「じゃが……今ならまだ、いくらか罪を償うことが出来る。のう、サイト君？」

「はい、彼を今利用しない手はありません」

サイトさんの目は対照的に輝いている。なんか社会の縮図を見せられたような気がするが、今はサイトさんが味方で、マガマギは敵だ。本当によかった。マジでよかった。

「今、他の仲間はどこにいる？ 連絡手段は？」

「ま、町はずれの民宿だ……今は全員ではないが……」

「そこには誰がいる？」

「し、漆黒と雨宮とアルク……」

「よし、その三人がいれば十分だ！ 民宿だから電話はあるよな？」

「あ、ああ……」

サイトさん絶好調だなあ。流石は高学歴。ノったら強い。

「で？ 結局どうするんだ？」

「こいつに電話させて、残り全員を山奥のアジトへと誘導してやる。そして昨日の策で一網打尽にしてやればいい。一人少ないし、ちょっとは楽になるぞ」

早速、そのための適当な言い文句を考えるとする。

とりあえず、町の中は警戒が厳重すぎて危険だから、山奥のアジトに集まったほうが良さそうだと言う事。そして山奥のアジトの場所はまだ判明していないため、日が落ちる前に一部の冒険者がアジトの搜索を行うらしいとの事。搜索人数は10人ほど。また、町の門が昼過ぎには閉まるため移動は出来るだけ早めに……

「こんなもんかな」

「10人か……敵は乗ってくれるかな？」

「しっかり作戦を練って、待ち伏せていれば2人の差なんてどうってことないと油断してくれるだろう。向こうだって俺達のことを潰したがってるしな」

この作戦において一番都合が悪いのは、皆で散り散りに逃げられ

てしまう事。この世界も結構広いし、一度本気で雲隠れされてしま
うと、搜索が更に困難かつ危険になるからだ。相手を一網打尽にす
るためには一度全員を終結させる必要がある。

すなわち、相手の対抗心を刺激して真っ向から挑む（ように見せ
る）必要がある。

「で？ 『最初の』 10人は誰が行くんだ？ 一番危険なんだろう？」

アルクに発見されるための最初の10人。サイトさん、A s e l
i aさん、テルミさん、タミさん、グンジョーさんの5人は確定。
後はプリーストやソーサラーからやる気のありそうな奴を適当にと。

「うう、みんなには悪いけど最初は嫌だな……」

思わず隣でいいにいさんが漏らす。情けない話だが、俺も同感。
このメンバーは待ち伏せしている敵の初撃を一手に引き受けるのだ。
最終的に全員で戦うとはいえ、この中に入るのは危険すぎる。

結局希望者が出なかったので、後でくじ引きで決めるという形に
なった。

どうか当たりませんように。

51話 怖いくらいに鮮やかです（後書き）

これと次の話を合わせて51話にする予定だったんですが……
調子に乗り過ぎましたorz

52話 出撃前に

「よし、マガマガ。もう落ち着いたか？」

「あ、ああ。上手くいったら本当に死刑とか拷問にはならないんだな……？」

「上手くいったらな。いい演技を期待してるよ」

精神安定剤を飲まれたせい、少し足元がふらつきながらもマガギは大分落ち着いてきたように見える。まあ中の人は一般人なんだろうし、仲間を売ることに迷いは無さそうだ。

電話を用意し、相手方の音声が届くように別の部屋に外部スピーカーを接続。窓ガラス越しにその都度指示を送る。まるでラジオの収録のようだな。

「よし、3、2、1、スタツ！」

さて、問題の民宿へコール。すぐに聞き覚えのある低い声が出て来る。

間違いない、出て来たのは先日の剣士だ。つまりは漆黒の君。

『マガマガか？ 不要意に電話なんてかけるな！ 盗聴でもされていたら……』

「だ、大丈夫だ。周りにはうるさいし聞こえはしないよ。中の奴らも合言葉を言えた奴はみんな信用しきってるみたいだしな」

ちなみに彼の周りにはガヤ（周りの騒音担当）のエキストラがいるのです。

『チッ！ 本当に大丈夫なんだろう？ それで？ 何か解ったか？』

「ああ、良い知らせと悪い知らせだ」

『何だ？』

うーん、ここは『悪い方から頼む』って答えるのがクールだろうに。

やっぱ分かってないなあ。

「奴らは俺達の搜索に躍起になっている。どうやらアレックスの奴も裏切ったようだ。そのせいで俺達のたまり場がばれたようだしな」

『そうか……早めに引き上げて正解だったな』

「それとこの町の門も午後過ぎには閉めるみたいだ。今日はこの町中を徹底的に洗って来るみたいだぞ」

『こんなに広い町だ。あまり動く事は出来ないが、そう簡単には見つからないさ』

「だが、そこで朗報だ。アレックスの奴、山奥にアジトがあるのを知ってはいたが、詳しい場所までは分からないみたいだ。そこで掲示板メンバーの連中が何人か搜索に向かって来るらしいぜ」

『本当か。詳しい人数は分かるか？』

「さっき何か集まって話してたのを聞いていたんだが、10人くらいだったかな……」

『10人か…… メンバーの顔は分かるか？』

ここでサイトさんがカンペを上げて指示を送る。

「まず知った顔だと……サイトとテルミットって奴だな」

『サイトは向こうでは一番レベルが高いし、テルミットは防壁に特化している厄介な奴だ。探索メンバーなら妥当な所だな。他には……タミとかはいるか？ 金髪の男のファイターだ』

サイトさんがはっとした顔になり、カンペに新しい指示を書いて上げる。

「いや、そいつはいなかった。おそらく町の搜索に回るんだろうな」

『ふむ、そうか……』

少し笑みの籠ったような声が聞こえる。

サイトさんナイス判断。こっちの主力を固め過ぎるとかえって怪しまれるってわけか。

戦力を適度に割いているって思わせるのが重要だ。

『そうだ、シエルって奴はいるか？ 背の低い小娘のソーサラーだ』

げ………！

しかも隣でサイトさんが迷わず何か書いてカンペ上げてるし！

「あ、ああ。三角帽被ってる女の子ならいたが……」

『ふ、ふふ……こいつはいい！』

おいしい……めっちゃ喜んでるよこの人！

「先発メンバーの御指名です」

「……御愁傷さまあゝ」

隣でにやけるAseliaさんと、手を合わせるにいい子さん。

『ちょうど良かった、そいつには借りがある。それに、このまま逃げ回っても状況は良くならないしな。ここでメンバーの戦力を削いでおく必要がある』

「返り討ちにするつもりか？ 確かにあんたは強いが大丈夫なのか？」

『ふん、色々と準備しておけば問題はない。中身はただの一般人だ』

その言葉、そっくりあんたに返してやるよ。……って言えたらなー

「じゃあ俺も合流したほうがいいかな？」

『お前はそこにいろ。そこで暴れ回って攪乱してくれてもいいんだがな』

「いや、それは流石に……」

『だろうな。今日は合流しなくていい。くれぐれもヘマなんかするんじゃないぞ?』

もうしてますけど。

「ああ、もちろんだ」

そこで電話が切れる。マガマギは大きく息を吐き、急に力が抜けたようにその場にへたり込んでしまった。

「これで……どうだ?」

「まあまあの出来かな? 罪が軽くなるのは作戦が成功してからだ」

マガマギはそのまま目を瞑って動かなくなってしまった。抵抗の意思はもうなさそうだしここはギルドの役人さん達に任せても大丈夫か。

「でも、やっぱり最後の決め手はシエルだったと思うんだよな」

「うん、同感」

だからってね、ひでえよあんたら。人事だと思って。あの時に恨みを買ったのが今になっていい結果をもたらしましたね。……ってやかましいわ。

「でも、向こうは本当に引っかかってくれますかね?」

「多少は疑うかもしれない。でも向こうには強力なレーダーがあるんだろう？ 捕まった2人の話ではかなり頼りにしているみたいだからね。そいつの目さえ欺いてやれば」

便利な物に頼り過ぎると、思考力が落ちるって話なのかね。

そして敵に教えた通りタミさんは先発メンバーから外れ、代わりに俺が確定。残りのメンバーのくじ引きでも、にいにいさんと×ぼんさんはちゃっかり外れるという始末。

……出撃は三時間後。それまでギルド本部の中で昼飯や心の準備を整えろだと。

俺にとっての心の準備なんてこの体を使ったG行為くらいしかないが、公共の施設であるこの建物の中では完全に一人になれる空間などあるわけない。仕方ないというか、思い出したようにG i l l yさんへ連絡を送りに行くとする。

冒険者ギルド本部のロビーは騒然となっていた。いつもの10倍は人が多い。これで俺達も何か手伝うぜって心意気の奴らが少しでもいればよかったのだが、その大半は避難所代わりに来たやつらばかり。この町で一番大きい宿屋が焼失したというのもあるが、これは何とも情けない。入口の方を見ると、なにやら大荷物を抱えたおっさんや若者が何やら喚いている。

……どうやら、今日一日は一般人の立ち入りを禁止しているにも関わらず、安全な所に避難させてくれと訴えているようだ。いるいる、現実にもこんなやつ。みんなで生きるための協調を捨ててまで自分の身を守ろうとする奴は、今日のサイトさんの策にも使えない。本来はこういう奴らをもっと処分するべきだろうに。

「よう、シエル。首尾はどうだ？」

……こっちにもおいおい。

「Gillyさん……メールでやり取りするんじゃないんですか？」

「こっちに来た途端この騒ぎだからな。思わず声かけちゃった。……前の方で女と警備員がもみくちゃやっていたが、何かあったのか？」

「それは多分殺人犯ですよ。入口の合言葉は変装して入ってこようとする奴を引っかける罠だったんです」

「なるほど。俺も合言葉が分からなかったんだが、普通にボディチェックを受けただけで通してもらえたしな。下手に侵入しようとしてないでよかったよ」

俺が少し周りを気にしようとしたが、Gillyさんはそれを制する。こんな状況じゃ隠れてこそそ話していた方がかえって怪しまれるとのことだ。周囲も適度に人の会話でうるさいし、ここは堂々と話す事にする。

「どういうわけか、この世界で捕まったらリスボン地点も牢屋になるっぽいですよ。ですから、アレックスさんは多分まだ地下の牢にいます」

「それはそいつにも100%当てはまるのか？」

「それはさっぱり……一度確認したほうがいいでしょうか？」

「ああ、確認だけでいい。出来れば独房の場所も聞いてくれ」

当然のことながら受付も長蛇の列が出来ていた。俺達も大人しく並ぶ事になり、40分後、ようやくアレックスさんの存在の確認と場所の特定に成功する。

「地下6階の重犯罪者房か…… 監視の目が厳しそうだな」

面会も出来ないか尋ねてみたが、ギルドマスターや他の仲間の立ち会いも必要だとのこと。これにはGillyさんがNGを出す。

「こればかりは仕方ないか。ここからは俺一人で何とかするでしょう。……お前らも今から動くんだろ？」

「はい。詳しい話は出来ませんが、とにかく大掛かりな作戦です。でも、もしかしたら、その分監視の目が緩くなっているかもしれないかもしれません」

それを聞いてGillyさんも口を緩める。相変わらず、概要は全く言っていないのに、こちらの考えを全て読んでいるかのようだ。

「……なるほど、こっちの世界に来た奴ら全てに釘を刺そうってわけか。単純だが効果的ではある」

サイトさん達が何故わざわざこんな壮大な作戦を持ちかけたのか。この作戦の根底にあるのは、何も力技で敵を倒すことではない。

『相手の戦意を奪う事』。これが今回の作戦の真の目的だ。

ここで言う『相手』とは何も例の8人だけでは無い。Gillyさんの言う通り、この世界に精神トリップしてきた全ての人に、もちろん俺達掲示板メンバー全員に向けての言葉でもある。

こちらの世界に来て殺人を犯したのは例のグループだけではない。実際Gillyさんだって1人殺している。殺犯人はあいつらだけじゃない。おそらくちょっとしたヒーロー、選ばれし者の感覚で人を殺そうと考える奴は、他にもいるだろうし、これから先また増えて行くであろう。それは現実と同じ。まさに堂々巡り、果てはいたちごっここの如く。

現実の規範やルールそして自分自身の能力、限界といった束縛が外れたこの世界。だからこそ新たに前例と言う名の『縛り』を作る。法や倫理、思想などではなく『歴史』を。こうすりゃこうなるという、この世界での物理法則の如き『原則』を。

思い留まらせる。

まだ現実世界の自分を意識しているのであれば。

「特にジャパニーズには効果的だろうな」

「はい、アメリカンだったら、また分からないんでしょうけど」

なにはともあれ、今日は何としても犯人グループを一網打尽にしなければならぬ。この先、被害者も加害者も出さないようにするために。

「……でもやっぱ怖いっすねー。自分も死ぬかもしれないんで。情けない話ですけど」

「最後まで生き残るのは、勇気とか恐怖とかそんな曖昧なもの飛び越えて、ただがむしやりに自分が死なない方法を模索し続けている

奴だ。お前らには必要ない台詞かもしれんがな」

Gillyさんはそう言いながら道具袋の中から何やら色々取り出し、俺に差し出す。

「ほらよ、持って行け。俺からの差し入れだ」

「これは……煙幕花火ですか！ こいつは助かります！」

さらに彼は五芒星のついたネックレスと、鍋のふたサイズの鏡のような物を取り出した。

「こいつはミスティクレスト、魔法の溜め時間を短く出来るらしい。こっちの鏡のようなものは魔法攻撃を完璧に反射出来る。だが、強度は無いから強い衝撃は与えないように、だと」

「前に言っていたクリエイターの方ですね？ 多分ミノルって人でしょう？」

「ああ、そいつもこっちでは表に出られないから、お前らに頑張ってほしいだとさ」

2つとも攻略掲示板でも見たこと無い代物だし、こいつは思わぬ差し入れだ。早速ミスティクレストを首に装着。この鏡は……今の俺にはちと重いな。強度も無いようだし、いざって時に使用するでしょう。

「そんじゃ、今日が互いに正念場だ。上手くやろうぜ」

「はい。……あ、そうだ。アレックスさんの件についてですが……」

「大丈夫だ、聞き出した事はちゃんとお前にも教えてやる」

「全部じゃないんでしょけどね」

「内容次第だな」

俺達は互いに苦笑いする。未だにこんな関係だが……ま、いいだろう。

俺はGillyさんと別れた後、すぐに館内放送でサイトさんに呼び出される。

先発隊メンバーの最後の打ち合わせのためだ。気休めにもならなيدだろうが、そこで回復アイテムも大量に渡される。

「門が閉まる30分前、犯人グループと思わしき一行が町を出たそうだ。人を入れ替えながら尾行させたが、そいつらは案の定北西の山に向かっていているらしい」

ここまでは上手く行ってる……か。

「数が少し合わないのが気になるが……そこは様子見だ。とにかく、出撃は定刻通り。俺達先発隊は、犯人らがこちらを網にかけようと準備を始めた所に敢えて突っ込む。そして俺達が門を出ると同時に後発隊が町の反対側の門からこっそり出て、ただちに馬車に乗って移動。俺達の突入のおよそ30分後に突入。ここからが本格的な戦いになる」

つまり最初の30分は俺達10人だけでなんとか時間を稼がないといけない。もちろん死人なんてもってのほか。30分という時間

が長いのか短いのか良く分からんが、今までの18年の人生の中で最も長い30分になることだろう。……この台詞、一度でいいから言ってみたかったのだ。でも全然格好つかねえ。

相手の構成はファイター2人、アーチャー2人、ソーサラー2人、でもってプリーストとアルケミストが一人ずつ。

戦闘要員と比較して、回復・防御要因のプリーストが1人と少ない。突くのならそこだ。戦いの場合は林の中。定石なら相手は分散して待ち構えているだろう。それに対してこちらは徹底的に固まる。一人でも食えれば御の字だ。基本は時間稼ぎなので、防御主体の立ち回り。とにかくこちらは思わぬ敵の襲撃、そしてその数に面喰らう……そんなシチュエーションだと相手に思わせる。敵の足を止めたらまずは作戦成功だ。

「みんな……俺の作戦……いや、作戦なんて呼べるもんじゃないけど、こんなものに参加してくれてありがとう。だから絶対に死なないでほしい。目覚めが悪くなるし」

出撃10分前。俺達の先発隊メンバーの前に立ち、サイトさんが感謝の言葉を言う。

「俺達は四、言わば人柱だ。だけどここで生き残れたら現実でも、何物にも得難い自信になる気がするんだ。これで生き残れたら俺はゼミの連中に……」

「やめろってサイト！ それ死亡フラグだから！ ストップ！ それ以上は無し！」

折角の真面目な雰囲気があるA s e l i aさんの茶々によって台無しになり、その場は爆笑に包まれた。

「とりあえず顔が利くサイトとシエルが狙われ役になるとしてだな…… いざとなったらいつら+テルミさんを中心になんとか粘ってもらう事にしよう」

「あーあ、俺プリーストなんて選ばなきゃよかったー」

多分この作戦では最も責任重大なテルミさんが不満の声を洩らす。それと俺を勝手に囷の勘定に入れないでくれ。狙われてはいるだろうけど。

「畜生！ もうここまで来たら雰囲気も糞もねーな！ とつとつ行くぞ！」

『おらっしゃー！』

とうとうサイトさんもヤケになり、俺達はギルドを出発して町を出た。悲壮な雰囲気を出すと相手にばれるのでこれはこれでいいのだろうが。誰もが己の中の恐怖を隠すために、テンションが上がって続いていた。生きるか死ぬかの30分。これが最後の戦いになればいい。

53話 弱者たちの争い

ノツイミカーラの町を出て、小走り気味に進んで30分ほど。その間は何も無く、ただ俺たちは今から戦う相手をどうフルボッコにしてやろうか、「ぼくのかんがえたりそうてきなてんかい」を言い合いながらただひたすらに進んでいた。だが決戦の舞台を実際に目の当たりにすると、各々の頭の中の恐怖と緊張感が漏れだし、次第に口数が減っていく。

「ここに奴らのアジトがあるのか……」

「もしかしたら、既にアルクって奴に見つかってるかもな」

「とにかく、ここに何人か来ているかもしれない。みんな、くれぐれも油断するなよ」

もちろんこれらの台詞はアルクに見つかっている事を前提に言っている。つか見つけてもらわないと作戦が台無しだ。単に気づいてないならこちらから奇襲を掛ければいい話なんだけど。

俺達は防壁を張ったテルミさんとサイトさんを先頭に、隊列を整えて山の中へと入って行く。この山にはモンスターは出ないらしいので、その所は一安心。寧ろモンスターが出ると、向こうがアジトとして使えないだろうしな。

整備された林道のような物は無く、俺達は予想以上に生い茂った下草を掻き分けながら進んでいた。途中で人が踏み荒らしたような道も見つけたが、敢えて気づかない振りをしてスルー。本当にちょうど今アジトを探している最中だという振りを続ける。

「本当にこんな所に人が来てんのか？」

「わからん、アレックスさんの情報だと本当に滅多に使わないらしい所だから、利便性はあまりないんだろが……　もしかしたら洞窟のような所かもしれないっていたけどな」

嘘の会話の続けつつも、俺達はわざと遠回りを続けながら、草を掻き分ける。

「……いたっ！」

歩いていると突然Aseliaさんが足を抱えてしゃがみこむ。
俺達もすぐさま臨戦態勢に入り、周囲の警戒を行う。

「大丈夫か？　どうした？」

「あ、いや、少し足をくじいただけだよ」

悪い悪いと彼は姿勢を戻すも、その顔は先程とは比較にならないほどの真剣味が隠せずにいた。もちろん足をくじいたと言うのは嘘。これは彼の合図だ。おそらくホームンクルスのようなものを捉えたのだろう。実物を見た事は無いが、アレックスさんやマガギの証言では光る小さな妖精みたいな感じだという。この鬱蒼とした林の中では、隙間から差し込んで来る木漏れ日のせいで、逆に空を飛ぶ光る物体は見つけにくいと感じていたのだが。

なにはともあれ、これはこれで一応予定通り。敵がこちらに気づいたのであれば、これから先はより警戒を強めないといけない。そこでここからは敵のアジトの方面に進路を取る。適当に進む振りをしつつも、じわじわと相手に近づいていく。増援が来るまでの時間を稼ぎつつも敵を森の中に散らせない。絶妙なタイミングが必要に

なつて来る。

「……」

サイトさんが無言で左手で後頭部を掻きだす。これは敵が近くにいるのサイン。後ろを掻くと言う事は…… 敵は後ろにいる！ 多分俺達が通り過ぎるのを待って後ろに回りこんだってところか？
……次は俺の番だ。頼みますよ、テルミさん。

「あっ！」

「今度は何だよ」

「すみません、服に草が引つ掛かって。ええいくそ……！ あ、俺のことは気にせずに、先進んでください。すぐに追いつきますんで」

俺がしゃがみこみ、みんなは怪訝な顔をしながらも前へ進もうとする。全員の顔が前方へ向き、数歩ほど歩みを進めた…… その時！

「でっ……！！」

浅いが、首筋に何か刺さる感覚！ やっぱり狙って来たか！

「敵襲っ！」

「シエル大丈夫か！？ 位置は！？」

俺はすぐさま左の方を指差し、そちらへ向かって味方のアーチャーとソーサラーの一斉攻撃が始まる。

「全方向にも気を配れ！」

「すまん、大丈夫か？ 防壁が少し遅れた」

テルミさんが広域防壁を張りながら俺に近寄ってくる。傷は大したことは無いが、一応プリーストの回復魔法をしっかりとかけておく。俺の足元には……矢。これまでの手口といい、雨宮って奴ものだろうか。

「もっと後ろにいたと思ったんだが」

「複数いるのかもしれませんが。とりあえず、ここを！」

「おう、みんな！ 一旦離れるぞ！」

離れる、と言っても実際は敵のアジトへ向かって直進。問題はここからだ。

「あっ！ 見えたぜ！ 小屋だ！」

俺達は敵のアジトの周りの開けた庭に飛び出す。アジトである小屋はキャンプ場で見かけるロッジ程度の大きさだが、庭は25mプールがすっぽり入りそうなくらいに広々としている。今の時刻はこの世界で言う所の昼3時くらいであろうか。太陽が周りの木に隠れ、大きな影が出来ていた。

「みんな！ 大丈夫か！？」

「くっそ…… 森の中で待ち伏せされてたなんて。でも、この人数

だったら……」

「……その人数なら……何なんだ？」

ぎい、と何かが軋むような音が聞こえた瞬間、笑みを含んだ男の低い声はその場に響き渡った。場所は……小屋の上？

「くく…… こうも上手いくとは……」

その男は銀色の髪を優雅にたなびかせながら、余裕の面持ちでこちらを見下ろす。

「あ、あれが……！」

アカシックドミネーターのトッププレイヤー……漆黒の君。直接対峙するのは2度目だが、やはりその威圧感とは半端ない。青白く光る剣を構えながら、ねずみ取りにかかった獲物を眺めるようにその口元には邪悪な笑みが浮かんでいる。

さらに小屋の後ろから人が続々と出て来る。1、2、3……4。4人？ いや、さっき襲ってきた連中を含めたら、さらに2人。大当たりだ。だが、後一人いる筈だが……

「ふん、アレックスから色々聞き出したと思うが、そちらの情報は全てこちらに筒抜けだったんだよ。アルク対策をしたつもりだろうが、もう少し身内の人間にも気を配っておくべきだったな！」

「……まさか、ギルド内部に……！」

な、なんだってー！？（棒）でも、漆黒の君の顔は自信たっぷり

りだ。上手い具合に引つかかってくれているみたいだな。

「まさかここに全メンバーが揃っているとは思ってもよらなかっただろう。町の人間を上手く味方につけたようだが、その物量に安心しきって戦力を分散させたのが仇になったな！」

ああ、なんかもう清々しい。やっぱ頭はあんまよくねーわこの人。

「思わぬ収穫だったのはこっちも同じだ！　ここでお前らを倒せば、殺人事件は止まる！」

サイトさんがヒーローっぽく相手を威嚇するが、それに対して漆黒の君は目を見開いて笑う。

「お前は馬鹿か？　巷の殺人事件を全て俺達のせいにするつもりだったのか？　だとしたら本当にお笑い草だ！」

彼は切っ先をサイトさんの顔へと向けた。

「教えてやろうか？　この世界で行われているゲームプレイヤーによる殺人事件だがな。今ここにいる俺達が関わったのはほんの半分……　いや、それすらもいっていないんだよ！」

「……半分もいくのなら十分だ。それにお前らは特に悪質なのが多い。殺人を防ごうとする俺達を襲ったり、町にモンスターを放し、の無差別殺人。単なる殺しよりタチが悪い」

「つか半分きるのかどうかも怪しいし、何百人規模で殺したでしょうが、あんたら。」

「何だよタチが悪いって！ 理由があろうが、無差別だろうが、殺しは殺しだし、殺された人は殺された人、殺された遺族もそれで納得がいくわけがないだろうが！」

な、何だ……こいつ？ 笑ったかと思えば急に激高したりして…… この前もそうだ、感情の振れ幅が大きすぎる。イコールかなり性格的にヤバくないか？

「お前の意見ももっともだろうが、それは殺しをやった人間が言う台詞じゃないだろ！」

おお、サイトさんは相変わらずの正論。漆黒の君は齒を噛み締め一瞬剣を構えたが、すぐに気付いたかのように再び笑みを浮かべてこちらを見下ろす。……本当に何なんだこの人。

「ひひ、じゃあ聞くがよ。殺しをやっていない人間がやる事が絶対に正しいのかよ？ 人殺しさえしていなけりゃその人間は正しくて人を殺してしまったら何事も間違いになる。そうだったのか？」

「誰もそんな極論は言っていないだろ……」

テルミさんが少し呆れたかのように返す。確かに頭の悪い意見だとは思うけど。

「じゃあ、何で貴様らのような例外を除いて、こっちの世界に来た奴らはみんな殺しをやりたがるんだ？ どうしてだと思う？」

論点があっちゃこっちゃ飛ぶなあ…… でも俺達は敢えてそれに合わせる。時間稼ぐにはこっちの方が都合がいいからな。もちろん周囲の警戒も怠らずに。

「それは人それぞれじゃないのか？ 自分の立場を勘違いして行動に走ったと言う奴もいるし、興味本位の奴だっているだろうし」

「そうだ…… この世界は邪魔な奴を消せるんだ。言っておくが政治家や有名人を殺すのは雨宮やアレックスみたいなガキがやることだ。もしも真っ当な大人ならまず最初に誰を殺すと思う……？」

アレックスさんは大人だろうし、あんたらも真っ当とは言えんだろうに…… しかし、大人が最初に殺す人間といえば……

「……自分に直接危害を加える人間か？」

「イエス。ニュースに載るような政治家や有名人や犯罪者なんぞ、いくら殺しても自分の人生には何の影響もない。少し社会を知ればそれが嫌でも解かるだろう？ だからみんな選挙なんかに行かないんだよ。個人にとっての悪人、始末するべき存在はまた一般の個人でしかない」

漆黒の君は益々饒舌になり話を続けた。

「マスコミが騒いで報道している裏で、一体何人もの人間が同じ原因で死んでいると思う？ 証拠も一切残らない。いや、殺しだということすら分らない。殺す人間、殺される人間も様々だ。外部から捜査のしようもない。つまりは、らくらく完全犯罪システム。『こんな物を利用しない手があるか』、お前らの数倍はそう思っている奴らがいるだろうよ。……いや、実際にいるからこそ、今のような事態になっているんだぜ？」

男はこちらをあざ笑うかのように、言葉を返す暇を与えぬままし

やべり続ける。……自己陶醉の激しいヤローって聞いてたけどその通りだったな。

「(サイト……!)」

「(言わせとけ……)」

「(いや、林の中に3つの人影が確認できた。向こうは挟み打ちのつもりらしいぜ)」

「逃げる算段か? こんな状態で良くもそんな考えが浮かぶものだ」

瞬間、俺達の背後から再び激しい衝突音が聞こえて来る。

「撃ってきた!?!」

「雨宮アツ! 誰がもう撃てと言ったあつ!」

意外にも怒号を飛ばしたのは漆黒の君だった。すぐに攻撃は止み、林の中に静寂が戻る。今はテルミさんの防壁がちょうど俺達を包んでいる状態だから、そう簡単には不意を取られないはずだが……目の前のコイツが向かって来るとちょっと分からないな。

「ふん。あんな奴が他にもこっちの世界に来るという可能性は考えもしないのか?」

「……お前の味方じゃないのかよ?」

「どうかな」

雨宮ロキ……どんだけ仲間内でも（略）。しかしリーダー格の漆黒の君でもこうだと言うのだから、相当手を焼いているようだな。

「それとお前らには最後にもう一つ尋ねておきたいことがある。俺達を始末して、仮に殺人が表に出なくなったとして……それから一体どうするつもりだったんだ？」

「……この現象を止める方法を見つけるつもりだった。今はゲーム製作者に問い詰めるくらいしか案は出ていないというのは認める」

サイトさんの答えに、さらに漆黒の君は肩をすくめる。

「その製作者に問い詰めることすらも出来ていないというのが現状なんだろう？ あーそうそう、確かお前らのお仲間でゲームを止めさせようとして、実際に逮捕された奴もいたよなあ？ どうしてだと思うよ？ あの日何があったか知ってるか？」

「何が言いたい？」

「お前らの他の『お仲間』が警察とゲーム会社にリークしたんだよ。IPアドレスを流し、そいつの住所を特定して見せしめのために逮捕させたってわけだ」

マジっすか。意外と情報通でもあるんだな。

「ゲームを止めさせたところで何になる？ この世界が存在した所でどれだけの不利益が生じる？ 自動車が毎年のように数千人規模の死亡事故を生み出しながら規制されないと同じく、このゲームも、世界も、存続を望むものが大多数なんだよ！ 何人ものプレイヤーがこっちの世界に来ていると思う！？」 お前らのような考えを

持った存在は何人いると思う!? 1と2割行けばいい方だ! 他の奴らはみんな、自分自身の思いのままに、新たな自分の体で元の世界とは比べ物にならないくらい『幸福』に過ごしているというのに!」

単にこの演説がやりたかったただけだろ、こいつ。その考えには致命的な欠陥があるのに気づいていないのだろうか。この作戦だってそれを見越してのものなのに。

「そんな考えを持った奴がお前らのお仲間にいるかもなあ? いや、今いる奴の中にもいられるかもしれないんだぜ? いつ寝返るかもしれない奴がよ! お前らの掲げるその綺麗事は誰も望んじやいない。ほんと、糞の価値にもならない、何かの問題を根本的に解決するでもない!」

漆黒の君は完全に悦に入っているようだった。俺達を言葉でも打ち負かしたかったのだろうか、それでこちらを論破したつもりなのだろうか。……まあ、いずれにしても、ここから言葉で説得するのは難しい。後は体で解らせるしかないかな。

「はあ…… 言いたいことはそれだけか? 連続殺人犯」

「……それしか返せないのか? そんな現実での価値観などこっちの世界では何の意味も持たないというのに」

仲間が一斉に武器を構える。そして敵も同じく。漆黒の君もようやくと言った感じで、彼の剣から神々しい虹色の光が発せられる。

「たかだが、2と3人多いところで所詮は烏合のしゅ……」

『大変だ漆黑！ 嵌められた！』

上空から男の慌てたような声が聞こえて来る。人間ではない。身長20cm程度の妖精みたいなもの。ホムンクルス……アルクか。なるほど、あんな風に伝えているんだな。テレパシーとかじゃなくて少し安心した。ん？ ということは、この中にはこいつはいない……

「なんだアルク……？」

「嵌められたって……？」

相手が少し焦ったかのように身構える、ついでに言うならこっちも少し焦っていた。

ちょっと予定より早いけど……大丈夫かな？

さらに慌てたように林の中から弓を持った男が飛び出し、漆黑の君の後ろに隠れて喚き散らす。

「アルク、何で敵に気づかなかったんだよ！？」

『この奴らも見張っている上に、あんな格好をされると、遠目に見たら気づかねえよ！』

さらに林の中で怒声と悲鳴が聞こえたと思うと、茂みの中から次々に人が現れる。

「タミ……！ その格好は……？」

なんと、全身に木々を張り着け（所謂ギリースーツ）、顔にも迷彩ペイントを施した面々。このファンタジーの世界観に似合わない、

現実の特殊部隊さながらの如く。

「思ったより平和そうじゃねーか。早く来て損したぜ」

「いや、早すぎだろ…… 10分以上は……」

「誰も怪我してねーし、敵さんの数も揃ってるし。これで結果オーライさ」

タミさんが右手を上げると、更に続々と人が小屋を取り囲むように姿を現す。そしてついでに手足を縛られ、猿ぐつわを巻かれた女性2人が放り投げられる。

「る、RUIとかおりんが……」

「……馬鹿が」

一度に全員で突入すると相手が恐れをなして逃げてしまう可能性がある。時間置いて残りのメンバーが突入する手はずになっていた。しかしここでも問題になるのがアルクが存在。証言によるとアルクが操れる偵察用のホムンクルスは4体まで。もしかしたら山の麓を常に見張り続けているかもしれない。なので、後発隊は周囲をして俺達の入った所とは遠く離れた所から突入する予定だった。そして俺達先発隊もアルクが黙って偵察出来ないくらいに、戦局を広げるつもりであった。それがなあ……

「へへ、この服はお前らにも内緒の秘蔵のアイデアだったんだが、ギリスーツ予定以上に早く到着しちゃってよ。いても経ってもいられなくなっ
て」

「……まあいいか。こつちも相手方のリーダーさんがおしゃべり好きで大助かりしていた所だ」

こちらのメンバー全員が残りの犯人グループに向けて一斉に戦闘態勢に入る。これには相手方も動揺を隠せず、すごすごと漆黒のそばに寄り添っていく。

「10人相手なら、待ち構えさえすれば8人でも何とかなると思っていたようだけど…… 29人ならどうだ？」

「おまけに2人減って残りは6人。戦力差は約5対1。まだやるつもりですかあ？」

計算通りとはいえ、形成は完全に逆転した。相手方のメンバー構成、おおよそのレベルも分かっている。そしてこの完全包囲。これなら……やれる。普通の人ならまず心が折れる。

「はっ……はは、いいのかあ！？ こんなところに主力を全部集めちゃまって！ 町にはまだ俺達の仲間が……」

アーチャーの男（多分雨宮）が苦し紛れにブラフを掛けようとするが、もちろん今の俺たちには通じない。

「マガマギなら既にギルドの地下牢にいるよ。もちろん、他にお仲間がいようとて同じ事。今のお前達の状況が、その場凌ぎの拙策で覆されることはまずありえない！」

止めを刺されたかのようにアーチャーの男は吃音する。

「自分たちの置かれている状況が理解出来たのなら、大人しく投降

することだ。今からでも出頭すれば、命だけは助かる」

8割がた死罪になることは見えているのだが、ここは敢えて優しい嘘を。絶望的な状況の中で出会う助け船という物は結構人の心を動かしたりするものだ。

ほらほら、既に約2名ほど手を上げちゃってるし。つーか雨宮、お前はあれだけやつといてまだ、投降すれば命が助かるなんて思ってたのか。おめでたい野郎だ。

「こいつらの甘い言葉にのってどうする」

漆黒の君の低い言葉が響き、手を上げた側の2人がより一層引き攣る。

「で、でも……あんたがいても流石にこの数じゃ……」

「特に雨宮。お前は一生この世界での人生を獄中で過ごすつもりか？ この世界にわざわざ来て。ようやく現世との繋がりも絶てたというのに」

……？ 何を言っている？ 現世との繋がりを絶つて…… ただの例えなのかもしれないが。

「……で、でも、あいつらには！」

「勝てない事はない」

漆黒の君は淡白に重く、冷たく、そう言った。
ナルシスト故の単なる強がりかもしれないが、先程とは打って変ったの物静かな言動に、俺達も警戒を強める。

「まだ……やるつもりか？　こんな状況でも。どんな勝算があるのか分からないけどさ」

「ふん、簡単な事だ」

漆黒の君は目を細めながら、自分を取り囲む相手の顔を一瞥する。

「お前らの中の1人でも……殺せば俺の勝ちだ。そうだろ？」

「……っ！」

彼は虹色に光る剣を下段に構え、こちらを挑発するように顎を上げて来る。

「来いよ。ヒーローのなりそこないどもが」

そして、矢も放たれる。

「うわっ！　……あぶねえ！」

「よりによって捕虜を狙って来たぞ！」

雨宮は半泣きの声で笑いながらこちらに弓を向ける。

「や、やってやる……　俺を殺そうとする奴なんか……　全部ぶっ殺してやる……！」

だーめだ。こいつは完全にトチ狂ってやがるな。でも漆黒の発破もあってか、他の連中も既に抵抗の意思を見せている。恐怖支配と

はいえリーダーであることには変わらない、か。

「どうします？ タミさん」

「一応ここまでは作戦の第2段階で予定通りなんだろう？ 約1名こ
っちの痛い所を突いて来る奴がいるが…… ま、気をつけながら受
けて立つしかないな！」

漆黒の君は一步も引く気は無いみたいだ。しばらく、こちらの様
子を窺うかのように睨みをきかせる。そして、その赤い瞳が素早く
瞬いた思った瞬間――

最後の戦いが始まった。

53話 弱者たちの争い（後書き）

ここまで書いて主人公が空気なことに気づく。
残り少ないぞ！ 頑張れ高瀬くん！（笑）

54話 完全包囲からの

モンスター1匹も住まわらない平和な山が突如として激しい戦場と化し、周囲に爆音が響き渡る。人畜無害な鳥や小動物達も己の身の危険を察してそそくさと山を退散していた。

「あっはっはっはっ！ 来るなよ！ 死ねっての！」

こちらの人数が多い分狙いは付けやすのだろうが…… いかんせん適当すぎないか？ 雨宮の矢は乱雑に撃たれ、こちらに飛んで来る物もあれば、地面に深く突き刺さる物、果ては天高く消えて行った物とその行く末は様々。威力はあるから油断できないが。

「シエル！ にいにい！ 援護を頼む！」

狂気じみてかえって近寄りがたくなっている彼の元に向かうのは Aseliaさんだ。相当嫌ってるみたいだからな。俺達も指示通りに適度な魔法で相手の連携を防ぎながら、彼の接近を助ける。

「お”ー？ おんなー？ 何で女が襲って来るんだよお？ これだから女はあ！ お前らは黙って股開いて、子供産んで育てりゃいいんだよお〜！」

あー気の毒なくらいに駄目だコイツ。色んな意味で早くなんとかしないと。足元もおぼついてないし、とっとと決めるが吉、か。

Aseliaさんが一旦下がり、俺とにいにいさんで2重のフアイヤーウォールを放つ。さらに、その後ろを追いかけるように再び彼が駆け出す。

「そんなもん、よけるまでもねー！ 俺の矢は炎すらも吹き飛ばすう！」

ここで来るのはおそらく風属性のスパイラルアローだろう。矢の周りに空気の回転を生み出し、矢に直撃しなくても周囲のモンスターを巻き込んで吹っ飛ばす技……だったと思う。

案の定、彼の目の前の炎の壁は矢の風で吹き飛ばされ、その矢はこちらに向かって飛んでくる。……が、この程度×ぼんさんの防壁でも処理可能。一切合切問題無し。

「あれ…… さっきのおんな……は？」

上だよ。

「おおーっ！っ！」

目くらましの2重のファイヤーウォールを放った後、Aselli aさんはその後ろを追いながらスパイラルアローが来るのを見越して射程圏外まで高くジャンプしただけ。いや、ほんとそれだけ。

上空からの一閃が雨宮の弓を叩き割り、無残にもその場に砕け散った。

「あ、ゆみ……おれの……あっ……！」

一瞬何が起こったのか理解できずにいたようだが、すぐに目の前に剣を構えた女性がいることと、そして自分が丸腰である事に気づいたようであった。

「ひ！ っ、ごめ……！」

「じゃかあしい」

雨宮が手を合わせた横を、無慈悲かつ慈悲深い A s e l i a さんのハイキックがすり抜け、そのまま奴の左頬にクリーンヒット。女性の体とはいえ高レベルのファイターの蹴りがまともに顔面に入っただ。その威力は推して知るべし。

こうして、今まで俺達を散々苦しめた超級下種アーチャー・雨宮ロキはあえなく御用となった。いや、もう、ほんとあっけなく。これなんて打ち切り漫画の展開？って感じに。

「糞アーチャー討ち取ったりい！」

その後続いて、クロイツ、バドランド、シンもあっさり倒される。シンに至っては雨宮がやられるとすぐに降参してきたし。発破を掛けられたといっても、結局は恐怖支配。その元から一定の距離を離れるとすぐに効力を失うものだ。

敵はこちらが想定していた以上に連携が取れていなかった。おそらく複数での真っ向勝負もやったことが無いのだろう。基本的に闇討ちだったからな。

こんな状態の上に圧倒的な物量差。勝敗は決していた……かに思えた。

「あとは、お前とアルクだけだな……」

「……」

漆黒の君。

こいつに関してはかなり手こずっているようであった。俺達からも頭一つ抜けたレベルの上に、見たこともない装備。先程からサイ

トさんら主力メンバー5人がかりで相手をしているようであつたが、傷一つ負っていないし、あまり疲れているようにも見えない。寧ろ相手をしている5人の方が消耗しているようにも見える。流石はトッププレイヤーと言ったところか。

「おい、さっきからアルクって奴の姿だけ見えないんだが。どこにいるんだ？」

「あの小屋の中が怪しいな」

戦いを終えた、周りの味方の何人かが小屋に近づこうとするが、すぐにサイトさんに止められる。

「罠の可能性もある。そこを調べるのはコイツを片づけてからでいい」

「でも、もしここにいなかったら、そいつをみすみす逃がすことになるんじゃない……」

サイトさんは息を落ち着かせながら首を横に振る。

「おそらくアルクはあまり戦闘能力を持たない。後回しでいい」

「それにコイツ、お前らが小屋を調べようとした時、少し笑いやがった」

タミさんもよく見ていた。と、なると、やっぱり少し危険か……味方は小屋から少し距離を置きつつも、あくまで完全包囲の陣形を作る。

つまりは実質29対1。誰もが勝ちを疑わないレベルであつた。

いくらゲーム内のキャラが強くても中身は一般人。必ずどこかで折れるはず……

「……仕方あるまい」

味方のほとんどを失ったにも関わらず、漆黒の君は冷静そのものだった。こいつのことだからいつキレ出すか分かんが。さらに剣を握り直したかと思うと、切っ先から赤白いオーラが伸びる。このやたらリーチの長い強力なオーラの刃のせいで、味方も間合いに入り込めず、決定打を与えられないでいたっぽい。

プリースト達がすぐに防壁を展開しようとするが、漆黒の君はこちらから視線を外す。そのオーラの刃の矛先は俺達でなかった。

「ふっ！」

剣の光の軌跡がその周囲を走り、思わず一瞬目が眩んでしまう。すぐさま体勢を立て直した俺達の目に飛び込んできたのは、面方向にスッパリと焼き切られた小屋の姿だった。

小屋の上部がそのまま斜めにずり落ち倒壊する。あの赤白いオーラは炎属性の物であつたらしく、家屋の材木に火が移っていた。

「何を……!？」

漆黒の君は何も答えずにただ笑みを浮かべながら、素早く剣を小屋の方に向けて地面に垂直に立てる。これが防御の姿勢と気付いた瞬間、俺の視界全体が真っ白になる。さらにコンマ遅れで鼓膜が破れそうなくらいの爆音が耳に響きわたった。

……やはり罠。

きっとあの小屋には大量の火薬でも仕込んでいたのだろう。元々はブービートラップとして使うのを自分で起動させたということか。

でも何で？ ……って、逃げるための攪乱に決まってるじゃないか！

これは不味い、あいつは？ 漆黒の君はどこだ？ 味方はプリースト全員の防壁で綺麗に守られているから、大して損害は無い。だが爆心地を囲んだせいで粉塵が中央に固まったまま治まらず、全く前が見えないときている。下手に防壁解除したら、粉塵の流れと共に逃げられるかもしれないし。どうすっぺ。

「誰か来てえ！」

ちょうど次の行動に迷っていた時にくろね子さんの悲鳴だ！ 漆黒の君に近い位置だし嫌な予感がしてならない。俺達はバリアの壁伝いに走り出し、現場へと急いだ。

「大丈夫ですかー！？」

って、滅茶苦茶粉塵舞ってるし！

「誰かテルミさんに回復アイテムを！ 私のじゃ足りない！」

くろね子さんが、せき込みながらテルミさんを担いでおり、すぐにそばの木に寝かせる。テルミさんは苦しそうな表情をしながらわき腹を抑えており、そこからは大量の血が流れていた。

「はい傷薬…… で、治るもんなのこれ……？」

「は、はやく……!」

テルミさんも多少は回復魔法が使えるはずだが、防壁を展開し続けていたせいでかなり消耗していたみたいだ。とにかく傷薬を急いで適当に塗り込むと、一応出血は止まったようだ。

「くそ…… 爆発の途端、真っ直ぐ俺に突っ込んできやがった……」

「そうだ! アイツも早く追わないと! 今3人で追いかけている戦ってるんだよ!」

やっぱり爆発と同時に逃げるつもりだったのか! しかも5人ばかりで倒せない相手を、回復役無しで3人(多分サイトさん、タミさん、グンジョーさん)で戦うのも危険すぎる。

「くそ、俺も追いかける! くろね子、あいつらはどっちへ向かった?」

「えっと、向こうの方だったと……」

「ああもう! 一緒に来てくれ! テルミさんは……シエル! お前に任せた!」

「ええっ!? 何で俺が!?!」

「どの道、お前の攻撃はアイツに通用しないんだろ? 捕まえた奴らに変な考え起こさないように見張つていてくれ。2人とも、とつとと行くぞ!」

増援たって、3人じゃ……

せめて×ぽんさんくらいは…… ああ、A s e l i aさん行っちゃった。

「……あ、大丈夫ですか？ テルミさん」

俺は手持ちの飲み薬の方の回復薬いわゆるポーションを彼に渡す。

「ああ、ありがとう…… 出来ればプリーストも連れてってやりたいが……」

「この防壁を一人解除させて向かってもらいましょうよ」

「もう遅いよ。今から追っても間に合うかどうか…… 後はあいつらを信じるしかない」

テルミさんは木に手をつきながらよろよろと立ち上がる。

「それに作戦の3段目がある。あともう少し時間を稼げば事は片付くはずだ」

決め手の3段目か…… 今になると初めからそれで行けばよかったんじゃないかと思うけど…… アルクの偵察をかなり意識してしまったからなあ。

「……そうだ！ アルクは？ 結局どこにいるんでしょうか？」

「合図を送ってきたということは、途中までは近くにいた。後発隊はアジトを囲むように来たはずだから、こっそり抜け出すのも難しいはずだ」

「じゃあ、完全に逃げ出されたか、まだこの中にいるか……」

「だとしたら、ただじゃ済まなそうだけどな」

爆発の起こった小屋の周辺の粉塵もようやく治まりかけていた。まだ危ないものが残っているかもしれないが、とにかくこっちは早く調べないと。

「おい！ 人だ！ 中に人がいるぞ！」

突然、防壁の包囲網の反対側の方から仲間の声が聞こえて来る。

「おいおい、本当に……」

「まだ生きていますかー!?」

直接見に生きたいけど、テルミさんから離れるわけには……

「防壁にぶつかってきたと思ったら、そのまま倒れたんだ！ 何か真っ黒焦げになってるぞ！」

他の味方もそちらの方角に向かって行く。

「もしかしたら味方が逃げ遅れたのかも……」

「それは考えたくはないけど、ここで一度人数を確認しよう。粉塵もだいぶ落ち着いてきたし、ここで一旦防壁を解除して……」

テルミさんがそう言い、俺が彼に肩を貸そうとしたその時であった。

「……誰だっ!？」

突然のテルミさんの怒号に思わず肩が跳ね上がる。彼の視線をそのまま追うと、僅かな粉塵に紛れて黒い人影が立っているのが確認できた。

「姿を現せ!」

だが、そいつの足元の地面が爆発したように跳ねあがり、こちらに向かって土が吹き飛んでくる。僅かにこちらがひるんだ隙に、奴は一目散に林の奥に駆けだしていた。

「アルクか!？ どちらにせよ敵だ!」

「くっそ! ここまで来て逃がすかよ!」

「あ、シエル! 一人で追うな! おい誰か! あいつに付いて行ってやってくれ!」

俺は全速力で奴の後を追う。そう、こいつは一番逃がしちゃダメなのだ。

サイトさんはさっき、戦闘力は無いから後回しでいいって言ってたけど（おそらく、罠を警戒するための文句だったのだろうが）、一度逃がすと捕まえるのが最も難しくなるのは間違いない。こいつなんだ。

こいつのホムンクルスと言う名のレーダーは、人と組んで最大の効果を発揮する。漆黒の君が言っていたように、今後より強い殺人願望を持った人間が現れるかもしれないんだ。今回の作戦が為った

としても、こいつの能力はいくらでも抜け道を作ることが出来る。
そんな気がしてならない。

絶対に逃がしては、いけない。

俺は元の世界よりも体力が無いであろう、この少女の体を無我夢
中で動かした。

そう、後ろを振り向く余裕すらなくくらいに。
視界はただ、目の前の男を捉え続けていた。

54話 完全包囲からの（後書き）

次回は3人称になります。

オール1人称で話を作るってやっぱり難しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9899w/>

アカシックドミネーター

2012年1月13日01時52分発行